仙台市文化財調査報告書第221集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(11)

——富沢遺跡第95～99・101次発掘調査報告書——

1997年3月

仙台市教育委員会

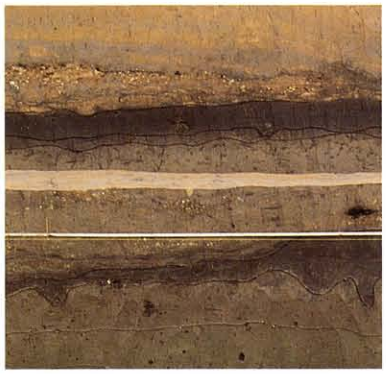
仙台市文化財調査報告書第221集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(11)

——富沢遺跡第95～99・101次発掘調査報告書——

1997年3月

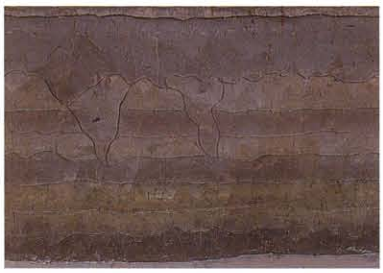
仙台市教育委員会

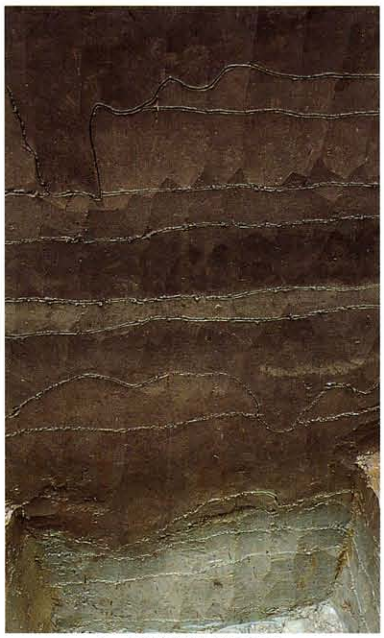


1．富沢遺跡第95次

2．富沢遺跡第101次

3．富沢遺跡第97次大畦畔断面





4．富沢遺跡第96次

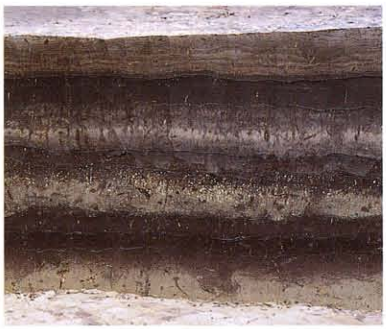
5．富沢遺跡第97次

6．富沢遺跡第98次

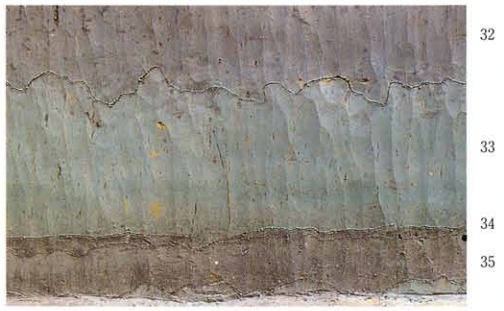
調査区遠景

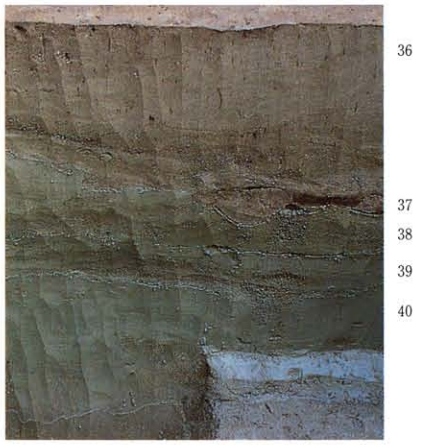
Ⅰ区西壁層序①

7．富沢遺跡第99次　　Ⅰ区西壁層序②



Ⅰ区東壁層序

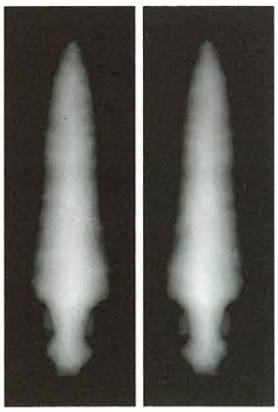




Ⅲ区東壁層序

13層出土石鏃

同レントゲン



（撮影：東北歴史資料館）

7．富沢遺跡第99次

序　　文

仙台市では、昭和57年に山口遺跡において初めて水田跡を検出しました。次いで、同年より開始した高速鉄道（仙台市営地下鉄）の試掘調査により、富沢地区においても広大な範囲に水田跡が存在することが確認され、翌年には「富沢水田遺跡」としてその範囲を登録しました（昭和62年に「富沢遺跡」に改称）。

富沢遺跡は、仙台市の南西部の富沢、泉崎、袋東、長町南等に広がる総面積約90haにも及ぶ水田跡を中心とした遺跡で、名取川と広瀬川に挟まれた沖積平野に立地しています。当遺跡は、昨年度に至るまで94次に渡る調査が各所で実施され、弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されています。このうち、弥生時代の水田跡は東北地方中部における稲作農耕の起源に迫る貴重な資料を提示し続けています。また、弥生時代の水田跡の下層からは縄文時代の遺構や遺物が確認され、さらにその下層からは約2万年前の最終氷河期の人間の生活の様子や自然環境そのものが生々しい状態で発見されています。

しかし、この富沢地区は昭和50年代の土地区画整理事業を契機として年を追う毎に開発が進み、とりわけ昭和63年の地下鉄の開業により、一層都市化が進んでいるところです。このような中にあって、平成8年度には富沢地区に所在する富沢遺跡において7件の発掘調査を実施しました。本報告書は、そのうち6件の調査成果をまとめたものであります。

先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、地底からのメッセージを後世に残し伝えていくことは私たちに課せられた責務と考えています。ここに報告する調査成果が、こうした意味で研究者のもならず、市民の皆様に広く活用され文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに本報告書刊行に際しましては多くの方々のご協力、ご助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序といたします。

平成9年3月

仙台市教育委員会

教育長　堀籠克彦

例　　言

1．本報告書は民間の受託事業・仙台市関連事業に関わる富沢遺跡第95次～99次・101次調査の調査報告書である。

2．本書の作成・編集は、五十嵐康洋、吉岡恭平が主に行い、各調査担当者と随時協議しながら行った。

3．本文の執筆担当は以下のとおりである。

第１章　　：五十嵐康洋

第２章第１節：我妻　仁

第２節：吉岡恭平

第３節：吉岡恭平

第４節：五十嵐康洋

第５節：佐藤　洋、五十嵐康洋

第６節：吉岡恭平

第３章　　：（株）古環境研究所

4．自然科学分析に関しては、（株）古環境研究所にお願いした。

5．発掘調査、本書の作成に関して、下記の方々・研究機関のご指導・ご助言を賜った。記して、感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）

須藤　隆、手塚　均、太田昭夫、斎野裕彦、中富　洋、荒川悌二、東北歴史資料館

6．本発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠している。

2．本文・図中で使用した方位は、全て真北で統一している。

3．図中の座標値は、平面座標系Ｘによる。

4．標高値は、海抜高（Ｔ．Ｐ）を示している。

5．遺構名の略号として以下のものを使用した。

ＳＢ：掘立柱建物跡、ＤＳ：溝跡、ＳＫ：土抗跡、ＳＸ：性格不明遺構、Ｐ：柱穴、小柱穴

6．遺物の登録には以下の略号を使用した。

Ａ：縄文土器、Ｂ：弥生土器、Ｃ：土師器（ロクロ不使用）、Ｄ：土師器（ロクロ使用）、Ｅ：須恵器

Ｉ：陶器、Ｊ：磁器、Ｋ：石製品、Ｌ：木製品、Ｎ：金属製品

7．土師器実測図内面のスクリントーンは、黒色処理を表している。

8．遺物観察表中の法量（　）の数値は、図上復元値を表している。

9．本文中の「擬似珪畔Ｂ」は、水田畦畔直下層（自然堆積層）上面に認められる畦畔上の高まりを示している（斎野他：1987）。

10．本文中での「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）は、現在、十和田ａ火山灰Ｔｏ－ａと同定されており、降下年代は915年初夏とされている（町田他：1981、1996）。

本文目次

第１章　富沢遺跡のあらまし …… 1

第２章　調査成果 …… 5
　第１節　富沢遺跡第95次調査 …… 5
　第２節　富沢遺跡第96次調査 ……27
　第３節　富沢遺跡第97次調査 ……35
　第４節　富沢遺跡第98次調査 ……59
　第５節　富沢遺跡第99次調査 ……71
　第６節　富沢遺跡第101次調査 ……131

第３章　分析・同定 ……135
　第１節　富沢遺跡第95次・96次・97次・98次・99次調査の火山分析 ……135
　第２節　富沢遺跡出土資料の放射性炭素年代測定 ……138
　第３節　富沢遺跡第95次・96次・97次・98次・99次調査のプラントオパール分析 ……139

挿図目次

第１図　周辺の遺跡 …… 2
第２図　富沢遺跡全体図 …… 3
（富沢遺跡第95次調査） …… 5
第１図　調査区位置図（１）　調査区位置図（２） …… 5
第２図　グリッド配置・調査状況平面図 …… 6
第３図　東壁・北壁・南壁断面図 …… 8
第４図　２層上面遺構平面図 …… 9
第５図　SB01・SB02 平面・断面図 ……10
第６図　SB03 平面・断面図 ……11
第７図　SD01 平面・断面図 ……11
第８図　SD01 出土遺物 ……12
第９図　小溝状遺構群平面図 ……12
第10図　SD02・03・04・05・06 平面・断面図 ……14
第11図　６層出土遺物 ……15
第12図　SD07 平面・断面図 ……16
第13図　SD08 平面・断面図 ……17
第14図　その他の出土遺物 ……18
（富沢遺跡第96次調査） ……27
第１図　調査区位置図（１）　調査区位置図（２）
　　調査区位置図（３） ……27
第２図　基本層序断面図 ……29
第３図　SX01・SD01 平面・断面図 ……30
第４図　24層樹木片 ……31
第５図　10層水田跡 ……31
第６図　出土遺物 ……32
（富沢遺跡第97次調査） ……35
第１図　調査区位置図（１） ……35
第２図　調査区位置図（２） ……35
第３図　調査区設定図 ……36
第４図　基本層序断面図 ……37
第５図　４層水田跡平面・断面図 ……39
第６図　5b 層水田跡平面・断面図 ……39
第７図　６層上面遺構平面図 ……41
第８図　7a 層水田跡平面・断面図 ……41
第９図　７層出土遺物 ……42
第10図　８層上面遺構平面・断面図 ……43
第11図　SX01 平面・断面図 ……43
第12図　16層遺物分布図 ……44
第13図　16層出土遺物（１） ……45
第14図　16層出土遺物（２） ……46
第15図　その他の遺物 ……46
第16図　97次周辺弥生桝形囲式期水田（1/2500） ……48
（富沢遺跡第98次調査） ……59
第１図　調査区位置図 ……59
第２図　調査区配置図・区画整理前の状況 ……59
第３図　基本層序土色註記 ……60
第４図　２層平面・断面図 ……61
第５図　３層平面図 ……62
第６図　５層平面・断面図 ……63
第７図　9a 層平面・断面図 ……64

第８図　出土遺物……65
（富沢遺跡第99次調査）……71
第１図　調査区位置図……71
第２図　調査区設定図……72
第３図　調査地付近の土地利用変遷図……74
第４図　昭和30年当時の特殊鋼敷地図……75
第５図　層序模式図……76
第６図　Ⅰ区基本層序……77
第７図　Ⅰ・Ⅱ区基本層序……79
第８図　Ⅲ区北壁基本層序・土層註記……81
第９図　Ⅲ区３層水田跡平面・断面図……83
第10図　Ⅱ区5a層水田跡……84
第11図　7a・８・11・12a層全体図……85
第12図　Ⅰ区7a・８層水田跡平面図……87
第13図　Ⅱ区7a層水田跡平面・断面図……89
第14図　Ⅲ区7a層水田跡平面・断面図……90
第15図　7a層水田跡出土遺物……91
第16図　Ⅱ区８層平面・断面図……92
第17図　Ⅲ区８層水田跡平面図……93
第18図　Ⅰ区SD01・02平面・断面図……94
第19図　11層上面溝跡平面・断面図……95
第20図　Ⅱ区SD08・09平面・断面図……98
第21図　Ⅰ区12・14層水田跡平面図……99
第22図　Ⅱ区12層水田跡平面・断面図……101
第23図　Ⅲ区12層水田跡平面・断面図……102
第24図　Ⅰ区12a・13層出土遺物平面図……104
第25図　12層出土遺物実測図……105
第26図　13層出土遺物実測図……106
第27図　14・16層全体図……107
第28図　Ⅲ区14層水田跡平面・断面図……108
第29図　Ⅰ区14層水田跡出土遺物平面図……109
第30図　SD10・11平面・断面図……110
第31図　SD12平面・断面図……111
第32図　14層出土遺物実測図①……112
第33図　Ⅰ区16層上面平面図……113
第34図　Ⅰ区SD13・14平面・断面図……115
第35図　35層出土遺物……117
第36図　31層出土遺物……117
第37図　１層他出土遺物①……118
第38図　１層他出土遺物②……119
（富沢遺跡101次調査）……131
第１図　調査区位置図（１）……131
第２図　調査区位置図（２）……131
第３図　調査区全体図……132
第４図　基本層序断面図（西壁）……132
第５図　SD01平面・断面図……132
（火山分析）……135
図１　95次東壁のプラント・オパール分析結果……144
図２　96次南壁のプラント・オパール分析結果……145
図３　97次Ａ地点のプラント・オパール分析結果……146
図４　97次Ｂ地点のプラント・オパール分析結果……147
図５　97次Ｃ地点のプラント・オパール分析結果……148
図６　97次Ｄ地点のプラント・オパール分析結果……149
図７　97次Ｅ地点のプラント・オパール分析結果……150
図８　98次調査のプラント・オパール分析結果……151
図９　99次調査のプラント・オパール分析結果……152
図10　99次Ⅲ区北壁のプラント・オパール分析結果……153

挿表目次

（富沢遺跡95次調査）……５
第１表　基本層序注記表……７
（富沢遺跡96次調査）……27
第１表　基本層序注記表……28
（富沢遺跡97次調査）……35
第１表　基本層序注記表……36
（富沢遺跡98次調査）……59
第１表　基本層序注記表……60
（富沢遺跡99次調査）……71
第１表　基本層序注記表……80
（富沢遺跡101次調査）……131
第１表　基本層序注記表……132
（分析・同定）……135
表１　富沢遺跡第95次・96次・97次・98次・99次調査の屈折率測定結果……137
表１　富沢遺跡第95次調査のプラント・オパール分析結果…142
表２　富沢遺跡第96次調査のプラント・オパール分析結果…142
表３　富沢遺跡第97次調査のプラント・オパール分析結果…142
表４　富沢遺跡第98次調査のプラント・オパール分析結果…143
表５　富沢遺跡99次調査のプラント・オパール分析結果……143

写真図版目次

（富沢遺跡第95次調査）……5
写真１　１．東壁断面……20
　　２．深掘東壁断面……20
　　３．深掘東壁最下部断面……20
　　４．調査区近景（北から）……20
写真２　１．建物跡全景（南から）……21
　　２．SB01　Ｐ８断面（西から）……21
　　３．SB01　Ｐ１断面（西から）……21
　　４．SB01　Ｐ３断面（西から）……21
　　５．SB01　Ｐ１根石……21
写真３　１．4a 層上面小溝状遺構群（南から）……22
　　２．4b 層上面シマ状遺構（南から）……22
　　３．4b 層牛足跡……22
　　４．4b 層牛足跡（３のひとつを掘り上げ）……22
写真４　１．６層 SD02～06 全景……23
　　２．8c 層 SD07 全景……23
　　３．9c 層 SD08 全景……23
写真５　１．SD01 断面（西壁）……24
　　２．SD02 断面（南から）……24
　　３．SD03 断面（南から）……24
　　４．SD07 断面（南から）……24
　　５．SX01 断面（南から）……24
写真６　１．12層 SX01 全景（南から）……25
　　２．13層小河川跡（南から）……25
　　３．完掘全景（南西から）……25
写真７　出土遺物……26
（富沢遺跡第96次調査）……27
写真１　１．南壁断面……33
　　２．調査区近景（西から）……33
　　３．SX01（南から）……33
　　４．SX01 断面（西壁）……33
　　５．３層下部地割れ状（南から）……33
　　６．SD01（南から）……33
写真２　１．10層水田跡（南から）……34
　　２．16層樹根痕（南から）……34
　　３．24層樹木片（南から）……34
　　４．出土遺物……34
（富沢遺跡第97次調査）……35
写真１　１．東壁断面（Ｎ８付近）……49
　　２．南壁断面（E21・22 付近）……49
　　３．深掘南壁断面……49
　　４．調査区近景（西から）……49
写真２　１．４層水田跡全景（西から）……50
　　２．４層水田跡西半（南から）……50
　　３．４層水田跡東半（南から）……50
写真３　１．5b 層水田跡畦畔確認状況（南から）……51
　　２．5b 層水田跡畦畔検出状況（南から）……51
　　３．5b 層水田跡東半（南から）……51
写真４　１．６層上面畦畔状遺構（南から）……52
　　２．7a 層水田跡畦畔検出状況（南から）……52
　　３．7a 層水田跡全景（東から）……52
写真５　１．7a 層水田跡西半（南東から）……53
　　２．7a 層水田跡西半（南から）……53
　　３．7a 層水田跡東半（南から）……53
写真６　１．８層 SD02・SX01（南から）……54
　　２．８層 SX01（北西から）……54
　　３．７層 SD01 断面（南から）……54
　　４．８層 SD03 断面（西から）……54
写真７　１．16層土器出土状況……55
　　２．16層石皿出土状況……55
　　３．深掘区全景（北東から）……55
写真８　１．４層水田跡畦畔２南壁断面……56
　　２．5b 層水田跡畦畔２東側南壁断面……56
　　３．7a 層水田跡畦畔１東壁断面……56
　　４．7a 層水田跡畦畔３南壁断面……56
　　５．7a 層水田跡畦畔４西側南壁断面……56
写真９　出土遺物（１）……57
写真10　出土遺物（２）……58
（富沢遺跡第98次調査）……59
写真１　１．9a 層水田跡検出状況確認（東より）……67
　　２．9a 層水田跡検出状況確認（東より）……67
　　３．22層腐植層全景（南より）……67
写真２　１．SD02 全景……68
　　２．３層水田跡検出状況（東より）……68
　　３．北壁１段目セクション①（南より）……68
　　４．北壁２段目セクション②（南より）……68
　　５．北壁腐植層（南より）……68
　　６．出土遺物……68
写真３　１．18層トミサワトウヒ（毬果）……69
　　２．18層グイマツ（毬果）……69
　　３．18層グイマツ（毬果＋枝）……69
　　４．22層グイマツ（枝＋毬果）……69
　　５．22層トミザワトウヒ（毬果）……69
　　６．24層トミザワトウヒ（毬果）……69
　　７．25層トミザワトウヒ（毬果）……69
（富沢遺跡第99次調査）……71
写真１　１．Ｉ区7a 層水田検出状況（南より）……122
　　２．Ｉ区 SD02 全景（東より）……122

3．Ⅰ区SD03完掘（東より）……122
4．Ⅰ区SD04・05完掘（東より）……122
5．Ⅰ区SD06完掘（東より）……122
6．Ⅰ区SD07完掘（東より）……122
7．Ⅰ区12層水田確認状況北部アップ（南より）…122
8．Ⅰ区12層水田検出（南より）……122
写真2　1．Ⅰ区12層土器出土状況（東より）……123
2．Ⅰ区北部土器出土状況（南より）……123
3．Ⅰ区13層石器出土状況（西より）……123
4．Ⅰ区14層水田確認状況（南より）……123
5．Ⅰ区14層水田北部アップ（南より）……123
6．Ⅰ区14層水田北部土器（東より）……123
7．Ⅰ区SD13・14擬似畦畔（南より）……123
8．Ⅰ区14層水田下の擬似畦畔（B）（南より）……123
写真3　1．Ⅰ区SD11全景（南東より）……124
2．Ⅰ区16層上面弥生土器（東より）……124
3．Ⅰ区SD13全景（東より）……124
4．Ⅰ区SD14全景（西より）……124
5．Ⅱ区SD08・09完掘（北より）……124
6．Ⅱ区12層水田確認（北より）……124
7．Ⅱ区12層水田全景（南より）……124
8．Ⅱ区13層出土遺物（東より）……124
写真4　1．Ⅱ区14層上面全景（南より）……125
2．Ⅱ区SD12全景（南より）……125
3．Ⅲ区2層水田跡検出状況（南より）……125
4．Ⅲ区2層水田跡土器遺物（北より）……125
5．Ⅲ区7層水田跡検出状況（南より）……125
6．Ⅲ区8層水田検出状況（南より）……125
7．Ⅲ区12層水田確認状況（南より）……125
8．Ⅲ区12層水田検出状況（南より）……125
写真5　1．Ⅲ区14層水田全景（南より）……126
2．Ⅱ区東壁セクション（西より）……126
3．Ⅰ区西壁セクション（東より）
C・D-2グリット付近……126
4．7a層水田上空より……126
5．Ⅲ区35層下部石器出土（東より）……126
6．Ⅲ区北壁セクション（南より）……126
7．Ⅰ区東壁セクション（西より）……126
8．7a層水田北西上空より……126
写真6　出土遺物（1）……127
写真7　出土遺物（2）……128
写真8　出土遺物（3）……129
写真9　出土遺物（4）……130
（富沢遺跡第101次調査）……131
写真1　西壁断面……133
写真2　SD01東壁断面（西から）……133

第１章　富沢遺跡のあらまし

富沢遺跡は仙台市の南東部に位置し、仙台市太白区長町南・富沢・泉崎等に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）の西側にあり、北西を丘陵、他を自然堤防で囲まれた背後湿地を中心に立地している。遺跡の総面積は約90haにも及ぶ。現在は土地区画整理事業により盛土がなされており、大部分は住宅地となっている。20年程前までは一帯は主に水田として利用されてきた。盛土以前の旧地形は北西から南東方向に緩やかに傾斜して下がっており、その標高は９～16mである。

昭和57年に山口遺跡において仙台市では初めて水田跡が検出されたが、その後、隣接する富沢地区においても高速鉄道に関わる試掘および本調査で、水田跡の存在が確認された。このため昭和58年に水田跡の存在が予測される後背湿地を地形的特徴とする一帯は「富沢水田遺跡」として登録された。その後、遺跡は居住域などの発見によって昭和62年には「富沢遺跡」と改称され、平成２年には北東部において遺跡範囲の拡大が行なわれている。また、それまで集落跡との性格付けがなされてきた泉崎浦遺跡においても水田跡が検出されたことで、平成３年にはその範囲をも富沢遺跡に包括して扱うことにした。

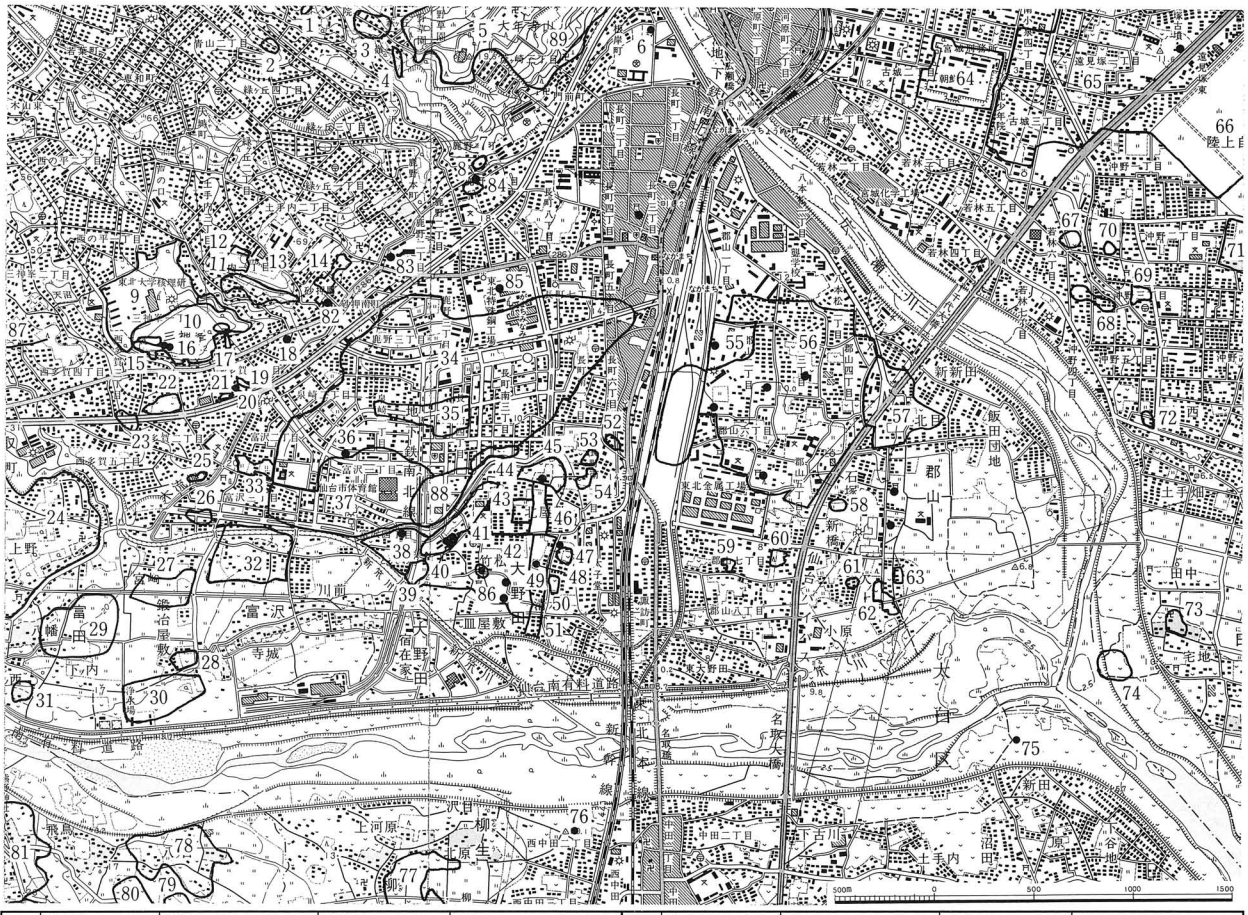
富沢遺跡では昨年度まで91次に及ぶ調査が実施されてきた。そしてこれまで多くの地点において上層からは弥生時代から近世までの各時代の水田跡が重層的に検出されている。また、弥生時代の水田跡のさらに下層においても、数地点において縄文時代の遺構や遺物が発見されている。

昭和63年には縄文時代の遺構面のさらに下層から、富沢遺跡では初めて後期旧石器時代の遺構・遺物が発見された。これは第30次調査での調査成果であるが、ここからはまた、樹木や植物化石、動物のフン、昆虫化石なども多数検出されており、人類の生活跡とそれをとりまく森林などの自然環境が共に発見されたことで、国内外の注目を集めている。その後の調査でもこの30次調査周辺の数地点において旧石器時代の樹木群が検出されており、こうした森林跡が富沢遺跡の北部を中心に広範に広がることがわかってきている。

山口遺跡は富沢遺跡の南に隣接し、名取川支流の旧笊川北岸の自然堤防上に立地している。遺跡面積は約25haであり、遺跡範囲の北部では、富沢遺跡から続く後背湿地部分をも含んでいる。主に縄文時代・奈良時代・平安時代の集落跡として登録されている遺跡である。これまで14次に渡る調査が実施されているが、その結果、自然堤防上部分では上記時代の住居跡などが、後背湿地部分では弥生時代から近世までの水田跡がそれぞれ検出されている。

なお、富沢いせきと山口遺跡の地形・地質および歴史的環境に関しては、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野他：1987）、富沢遺跡第30次調査報告書（太田他：1991）に詳しい記載があるので、それらを参照されたい。

次数	所　在　地	調査の原因	調　査　期　間	調査面積	調査概要（主な発見遺構）	調　査　員
95	泉崎１丁目21－８	寮建設	平成８年４月10日 ～６月14日	252㎡	建物跡・溝跡・畠跡	吉岡恭平・我妻　仁
96	長町南３丁目15－３	共同住宅建設	平成８年６月26日 ～８月７日	133㎡	溝跡	吉岡恭平・我妻　仁
97	泉崎１丁目20－２	共同住宅建設	平成８年９月５日 ～11月26日	240㎡	弥生・平安・中世の水田跡・溝跡	吉岡恭平・我妻　仁
98	長町７丁目211	テナントビル建設	平成８年６月19日 ～７月29日	102㎡	弥生・近世の水田跡	佐藤　洋・五十嵐康洋
99	長町７丁目401	道路建設	平成８年８月19日 ～12月18日	1.026㎡	弥生・古墳・平安～中世・近世の水田跡	佐藤　洋・五十嵐康洋 伊藤孝行
101	長町５丁目85－２	共同住宅建設	平成８年８月１日 ～８月２日	13㎡	溝跡・水田跡（断面観察）	吉岡恭平



No.	遺跡名	種別	立地	時代	No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	二ツ沢	散布地	丘陵斜面	縄文	45	元袋	集落・水田・畠・墓	自然堤防・後背湿地	弥生～近世
2	青山二丁目	散布地	丘陵斜面	奈良～平安	46	大野田	祭祀・集落・畠	自然堤防	縄文～平安
3	萩ケ丘B	散布地	丘陵斜面	縄文	47	北屋敷	散布地	自然堤防	奈良～平安
4	二ツ沢横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	48	王ノ壇古墳	円墳	自然堤防	古墳
5	茂ケ崎城跡	城館	丘陵	中世	49	王ノ壇	集落・屋敷・畠・墓	自然堤防	縄文～近世
6	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	50	長町清水	散布地	自然堤防	古墳
7	鹿野屋敷	散布地	丘陵斜面	古墳～平安	51	皿屋敷	集落・屋敷	自然堤防	奈良～中世
8	鹿野一丁目	散布地	丘陵麓	縄文～弥生・奈良～平安	52	長町六丁目	散布地	自然堤防	奈良～平安
9	芦ノ口	集落	丘陵	縄文～弥生・平安	53	長町南	散布地	自然堤防	奈良～平安
10	三神峯	集落	丘陵	縄文・平安	54	新田	散布地	自然堤防	奈良～平安
11	土手内横穴群	横穴墓	丘陵斜面	古墳	55	西台畑	墓	自然堤防	縄文～古墳
12	土手内	集落	丘陵	縄文～平安	56	郡山	官衙・集落・水田・畠	自然堤防・後背湿地	縄文～近世
13	土手内窯跡	窯	丘陵斜面	古墳～奈良	57	北目城跡	城館・集落・水田	自然堤防・後背湿地	縄文～近世
14	砂押屋敷	散布地	丘陵麓	奈良～平安	58	矢来	散布地	自然堤防	古墳～平安
15	富沢窯跡	窯	丘陵斜面	古墳～平安	59	的場	散布地	自然堤防	奈良～平安
16	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳	60	籠ノ瀬	散布地	自然堤防	古墳～平安
17	金山窯跡	窯	丘陵斜面	古墳	61	欠の上Ⅰ	水田	後背湿地	古墳～近世
18	金洗沢古墳	円墳	丘陵麓	古墳	62	欠の上Ⅱ	散布地	自然堤防	古墳～平安
19	裏町東	散布地	丘陵麓	平安	63	欠の上Ⅲ	散布地	自然堤防	古墳～平安
20	裏町古墳	前方後円墳	段丘	古墳	64	若林城跡	集落・城館・円墳	自然堤防	弥生～古墳・平安～近世
21	原東	散布地	丘陵麓	古墳～平安	65	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
22	原	散布地	段丘麓	弥生・古墳・平安	66	南小泉	集落・屋敷・畠・墓	自然堤防・後背湿地	縄文～近世
23	西台窯跡	窯	丘陵麓	奈良～平安？	67	砂押Ⅰ	散布地	自然堤防	古墳～平安
24	上野	集落	段丘	縄文・奈良～平安	68	砂押Ⅱ	散布地	自然堤防	古墳～平安
25	富沢上ノ台	散布地	自然堤防	縄文・平安	69	中棚西	散布地	自然堤防	弥生～平安
26	堀ノ内	散布地	自然堤防	古墳～平安	70	神棚	居館	自然堤防	奈良～平安
27	鍛冶屋敷A	集落・製鉄	自然堤防	縄文・奈良～平安	71	沖野城跡	城館	自然堤防・後背湿地	中世
28	鍛冶屋敷	散布地	自然堤防	縄文・奈良～平安	72	河原越	散布地	自然堤防	古墳～平安
29	南ノ東	散布地	自然堤防	弥生・平安	73	日辺館跡	城館	自然堤防	中世
30	六本松	集落	自然堤防	奈良～平安	74	日辺	散布地	自然堤防	古墳
31	富沢南西	散布地	自然堤防	奈良～平安	75	大塚山古墳	円墳	自然堤防	古墳
32	富沢遺跡	城館跡	自然堤防	中世	76	上古川	塚	自然堤防	近世以降
33	富沢清水	散布地	自然堤防	奈良～平安	77	柳生台畑	散布地	自然堤防	古墳～平安
34	富沢	埋没林・水田・畠・集落	後背湿地・微高地	旧石器～近世	78	八ツ口	散布地	自然湿地	奈良～中世
35	泉崎浦	集落・水田・墓	自然堤防・後背湿地	縄文～古墳・平安・近世	79	散布地	自然堤防	奈良～平安	
36	教塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	80	舞台上	散布地	自然堤防	奈良～平安
37	山口	集落・水田・畠	自然堤防・背後湿地	縄文～近世	81	熊野神宮社宿坊跡		沖積錐	中世
38	下ノ内	集落	自然堤防	縄文～中世	82	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳
39	伊古田	集落	自然堤防	縄文・古墳～平安	83	二塚古墳	前方後円墳	丘陵麓	古墳
40	五反田石棺墓	円墳	自然堤防	古墳	84	一塚古墳	円墳	丘陵麓	古墳
41	五反田古墳	円墳	自然堤防	古墳	85	金岡八幡古墳	円墳	微高地	古墳
42	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳	86	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
43	六反田	集落・水田・畠・墓	自然堤防・後背湿地	縄文～近世	87	杉土手		丘陵・段丘	近世
44	袋東	散布地	自然堤防	古墳・平安	88	下ノ内浦	集落・水田・畠・墓	自然堤防・後背湿地	縄文～近世

周辺の遺跡及び地名表（国土地理院1/25,000「仙台西南部」「仙台東南部」を複製・縮小）

X＝－197.5 km

X＝－198.0 km

Y＝＋3.0 km

Y＝＋3.5 km

Y＝＋4.0 km

Y＝＋4.5 km

1/6,000

第１図　富沢遺跡全体図（数字は調査区次数を赤丸は平成８年度の調査地点を示す）

第２章　調査成果

第１節　富沢遺跡第95次調査

１　調査に至る経緯

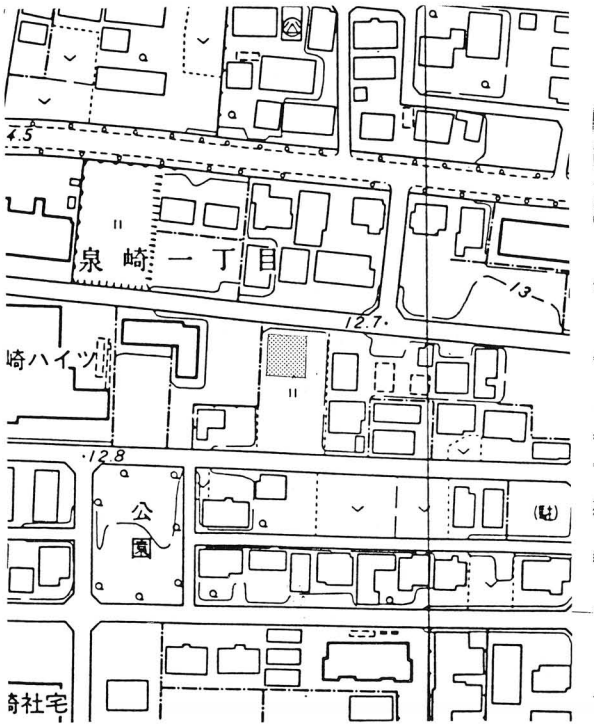
平成７年２月23日付けで、工藤　壽氏によりRC ６建寄宿舎建設の発掘届が提出されたが、当教育委員会では平成７年度の調査予定は既に決定していたため、平成８年度の発掘調査として受託することでご了解を得たものである。

平成８年２月26日、発掘調査の実施に先立ち申請者側と第１回目の協議を持った。内容は調査時期、期間、契約額、事前の準備事項などであり、以後も打ち合せを重ね契約を交わし、４月10日から調査を開始した。

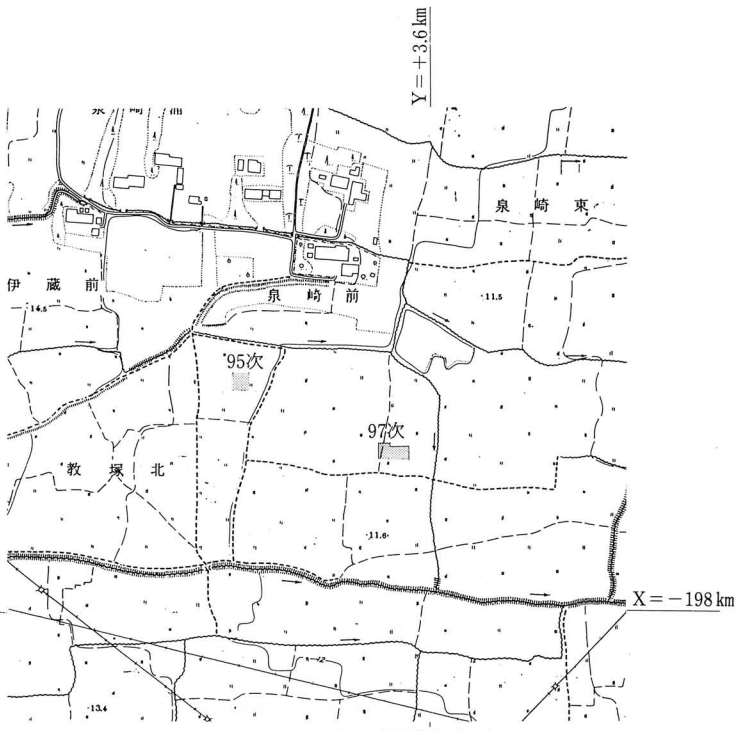
２　調査の方法

調査箇所は富沢遺跡の南西部に位置する。付近は数年前までは水田として利用されてきたが、現在は約0.7mの盛土がなされ、大半が住宅地となっている。区画整理以前の地形を第１図に示した。それによれば調査箇所付近の旧地形は周辺と比較すると、北西から南東にかけて傾斜している。

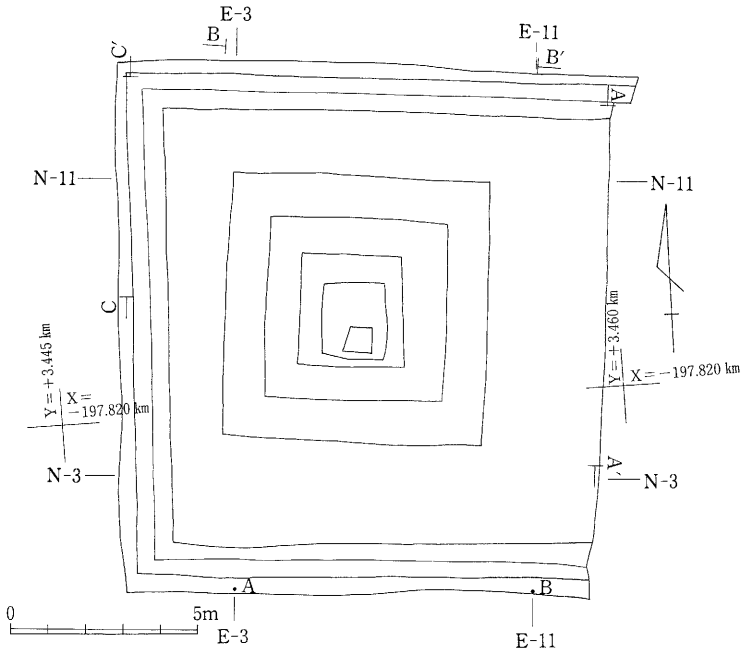
今回の調査対象面積は607㎡であるが、その中に南北14m、東西18m、面積252㎡の調査区を設定した。遺構の測量は杭Ａ、Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.824697km、Ｙ＝＋3.449255km、杭Ｂ：Ｘ＝－197.825304km、Ｙ＝＋3.457231km）。また、杭ＡＢ線上の杭Ａから西へ３mの地点を基点とし（Ｎ＝00、Ｅ＝00）、１m間隔で南北方向をＮ01～Ｎ11、東西方向をＥ01～Ｅ11で表記し、調査区内における各遺構などの位置関係を示した（杭Ａ：Ｎ00・Ｅ03杭Ｂ：Ｎ00・Ｅ11）。検出された遺構は、８m間隔に設けた基準杭を中心に水糸を１mメッシュに組み、それらを基準線として作図し、実測図の縮尺は１／20を基準とした。写真記録には35㎜カメラを２台使用し、モノクローム・カラーリバーサルの２種で撮影した。土壌サンプリングはプラントオパール分析用に２～12層、火山灰分析用に19層中で行った。調査は平成８年４月10日から調査員２名、スタッフ26名の体制で開始し、盛土および旧耕作土である１層



第１図　調査区位置図（１）



第１図　調査区位置図（２）



第2図　グリッド配置・調査状況平面図

は重機により除去したが、1層の直下に遺構の存在が予想されたため、そこから人力による調査を開始した。なお、調査区周囲には土層観察および排水路の側溝を設けた。12層中までは、調査区全面の精査を行ったが側溝断面により下層の状況を観察した結果、これより下層では自然堆積層が連続する状況が確認され、遺構の存在する可能性は低いと考えられた。したがって、これ以後の調査は、第30次調査（太田他：1991）などで検出されている森林跡を伴う旧石器時代の有無の確認を目的とすることとし、5月27日調査区を一辺7mに縮小して遺構の確認調査を実施した（最下面では0.8×0.7m）。深堀に関しては調査の安全性に配慮しながら、該当層までできる限り広い面積を確保して調査を行うこととした。6月12日深度5.2m（標高約6.8m）で25層の砂礫層を確認した段階で、これ以上の掘り下げは危険と判断されたため深堀を終了した。その後、最終的な土層観察と断面図の作成、写真撮影を行い、発掘調査の一切を終了したのは6月14日である。

3　基本層序

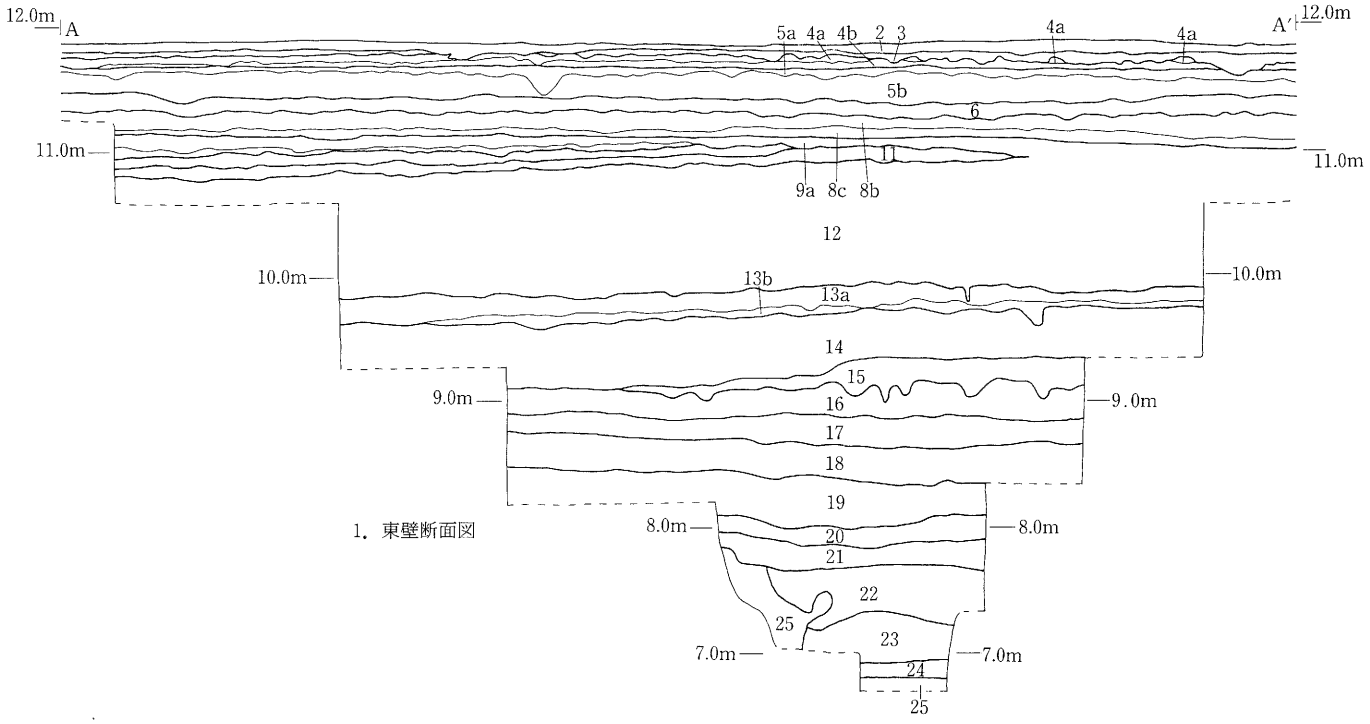
今回の調査では平均0.7mの盛土直下1層上面から約5.1mの掘り下げを行った。この間確認された層は大別で25層、細別で32層を整える。これらの層は、おおまかに1層から8b層までの砂・シルト、8c層から9b層までの粘土、10層以下の砂・砂質シルトに大別される。本調査区の層序は、砂および砂質シルトが主体となっており、粘土や泥炭質粘土が主体となることが多い他調査地点における層順と際立った違いが認められる。

1～3層はシルトおよびシルト質粘土で1層は旧耕作土、2・3層は中世以降の層で、3層は畑の耕作土の可能性がある。4a•4b層は平安時代の層と考えられる。4a層の下部から4b層の上部にかけては10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰のブロックが検出される。4b層は水田の耕作土の可能性が考えられる。5a•5b層は砂を主体とした風化凝灰岩粒を多量に含んだ層で、5b層は層厚10～26cmと比較的厚い層である。6層は黒褐色の砂質シルトで弥生土器を含み弥生時代と考えられる。7・8a・8b層は砂および砂質シルトである。7層は比較的西側に厚く堆積する。8a層は西側に部分的に、8b層は東側にやや厚く堆積している。8c層から9b層は粘性の強い粘土で、8c層はとくに粘性が強く下部には薄い黒色の有機物層を含んでいる。9c層から11層は砂•砂質シルトである。9c層は10層への漸移層で南東部を除くほぼ全域に堆積し、10層は北半に11層はほぼ全域に堆積している。12層から14層は黒色粘土質シルトの13a層（厚さ20cm前後）を挟んだ厚い砂層で、とくに12層は層厚が1mにも及ぶ。ともに部分的に有機物の堆積が見られ下部に砂礫層も含んでいる。グライ化は12層から漸次進行し19層以下から顕著となる。15層は粘性の強い黒色の粘土で下面には根の痕跡とみられる凹凸がある。16層はシルト質粘土で未分解の樹木片を含んでいる。この樹木片は粘土質シルトの17層にも見られる。18層から21層は砂質シルトである。18・19層には火山灰状のものが根の痕跡状に見られるが、18層のほうが顕著である。20層は濃い緑灰色部分が霜降り状にみられ、他層に比べやや硬くなっている。22層から25層は砂層で。23層はオリーブ黒色のシルト質粘土と細砂がラミナ状になり、

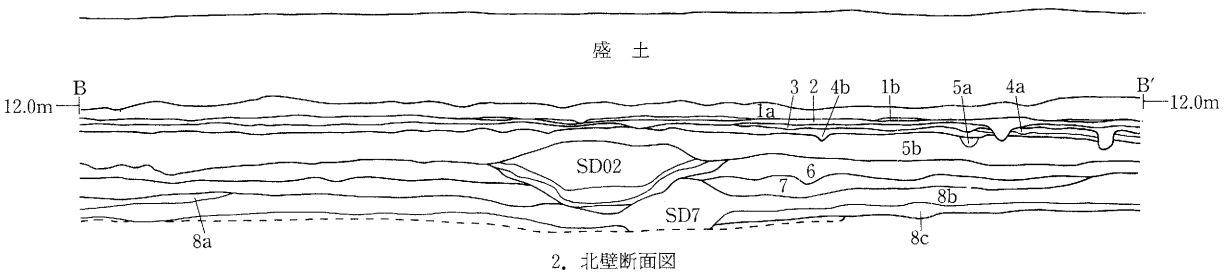
未分解の小樹木片や植物遺体を多く含んでいる。この層が30次調査での旧石器時代の層に相当する可能性が考えられたため、樹木片をサンプリングし放射性炭素年代測定を行っている。25層は砂礫層で粗砂を主体として径５㎝程度の礫を含んでいる。砂礫層は標高6.8～7.9mで約１mの高低差をもって検出されている。沖積地の基底と考えられる砂礫層は建設工事に先立って実施されたボーリング調査によって確認されているが、砂礫層上面の深度は盛り土上面から4.9mで推定標高は約７m前後であるので、25層が基底の砂礫層と考えられる。以上基本層序について記したが、本調査区は位置的に富沢遺跡第21次調査泉崎浦地区（渡辺：1986）や泉崎浦遺跡第３次調査（主浜：1988）と近接するため基本的な層序の比較が可能で類似している。

第１表　基本層序註記表

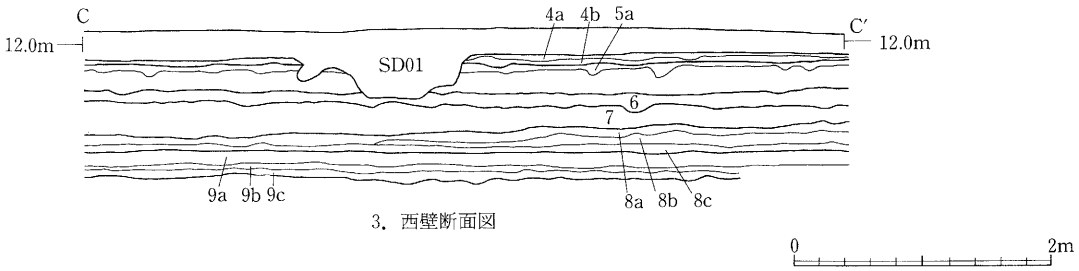
層序	土色	土性	粘性	しまり	層厚(cm)	備考
1	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	やや有	有		旧耕作土。下部に鉄分の集積あり。
2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト	無	有	2～10	
3	黒褐色 10YR3/2	シルト質粘土	無	有	4～6	
4a	灰黄褐色 10YR6/2	シルト	無	有	5～10	下部に灰白色火山灰を含む。
4b	灰黄褐色 10YR4/2	粘土質シルト	無	有	2～6	上面に火山灰を含む。
5a	黒褐色 10YR2/3	砂質シルト	無	有	2～11	径１～２cmの風化凝灰岩粒を多量に含む。
5b	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂	無	有	10～26	径１～２cmの風化凝灰岩粒を多量に含む。
6	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	無	有	10～16	遺物を若干含む。
7	褐色 10YR4/4	粗砂	無	有	10～20	
8a	暗灰黄色 2.5Y4/2	砂質シルト	やや有	無	1～10	両側に部分的に堆積する。
8b	オリーブ褐色 2.5Y4/4	砂			8～22	SD7の方向に厚く堆積する。
8c	暗灰黄色 2.5Y4/2	粘土	かなり有	無	4～12	下部に薄い黒色の有機物層を含む。
9a	黒褐色 10YR2/2	粘土	有	やや有	6～14	
9b	灰オリーブ 5Y4/2	粘土	有	無	1～6	
9c	暗オリーブ褐色 2.5Y3/3	砂質シルト	無	有	1～10	10層への漸移層。
10	灰オリーブ 7.5Y4/2	砂質シルト	やや有	有	2～20	凝灰岩粒を含む。
11	黒褐色 10YR2/3	シルト	無	有	2～12	
12	オリーブ灰色 2.5GY5/1	細砂～粗砂	無	有	80～100	下部に砂礫層。部分的に有機物の互層を含む。
13a	黒色 7/5YR1.7/1	粘土質シルト		無	6～26	
13b	オリーブ黒色 5Y3/1	砂	無	有	4～20	13ａ～14層への漸移層。
14	灰オリーブ色 7.5Y4/2	砂	無	有	26～52	下部に有機物の堆積層あり。砂礫層を含む。
15	黒色 2.5Y2/1	黒色粘土	有	無	1～34	
16	灰色 7.5Y4/1	シルト質粘土	有	無	12～30	径１～４cmの樹木片を含む。
17	灰色 10Y4/1	粘土質シルト	やや有	無	18～28	径１～４cmの樹木片を含む。
18	灰色 7.5Y4/1	砂質シルト	無	無	20～32	白色火山灰状のものを根の痕跡状に含む。
19	暗緑灰色 7.5GY4/1	砂質シルト	やや有	無	22～42	白色火山灰状のものを根の痕跡状に含むが18層よりも少ない。
20	暗緑灰色 5G4/1	砂質シルト	若干有	有	12～20	緑灰色部分がしもふり状に見える。他の層に比べ、ややかたい状態である。
21	暗オリーブ灰色 5GY4/1	細砂から砂質シルト		やや有	32～44	若干の有機物の層を含む。
23	オリーブ黒色 5Y3/1 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	シルト質粘土 細砂	やや有 やや有	無 無	16～60	自然堆積層。ラミナ状の互層。未分解の小樹木片、植物遺体を多く含む。
24	暗緑灰色 10G3/1	粗砂	無	無	10～14	
25	暗オリーブ灰色2/5GY4/1	砂礫	無	無		粗砂を基盤に径0.5～５cmの礫を含む。



1．東壁断面図



2．北壁断面図



3．西壁断面図

第3図　東壁・北壁・南壁断面図

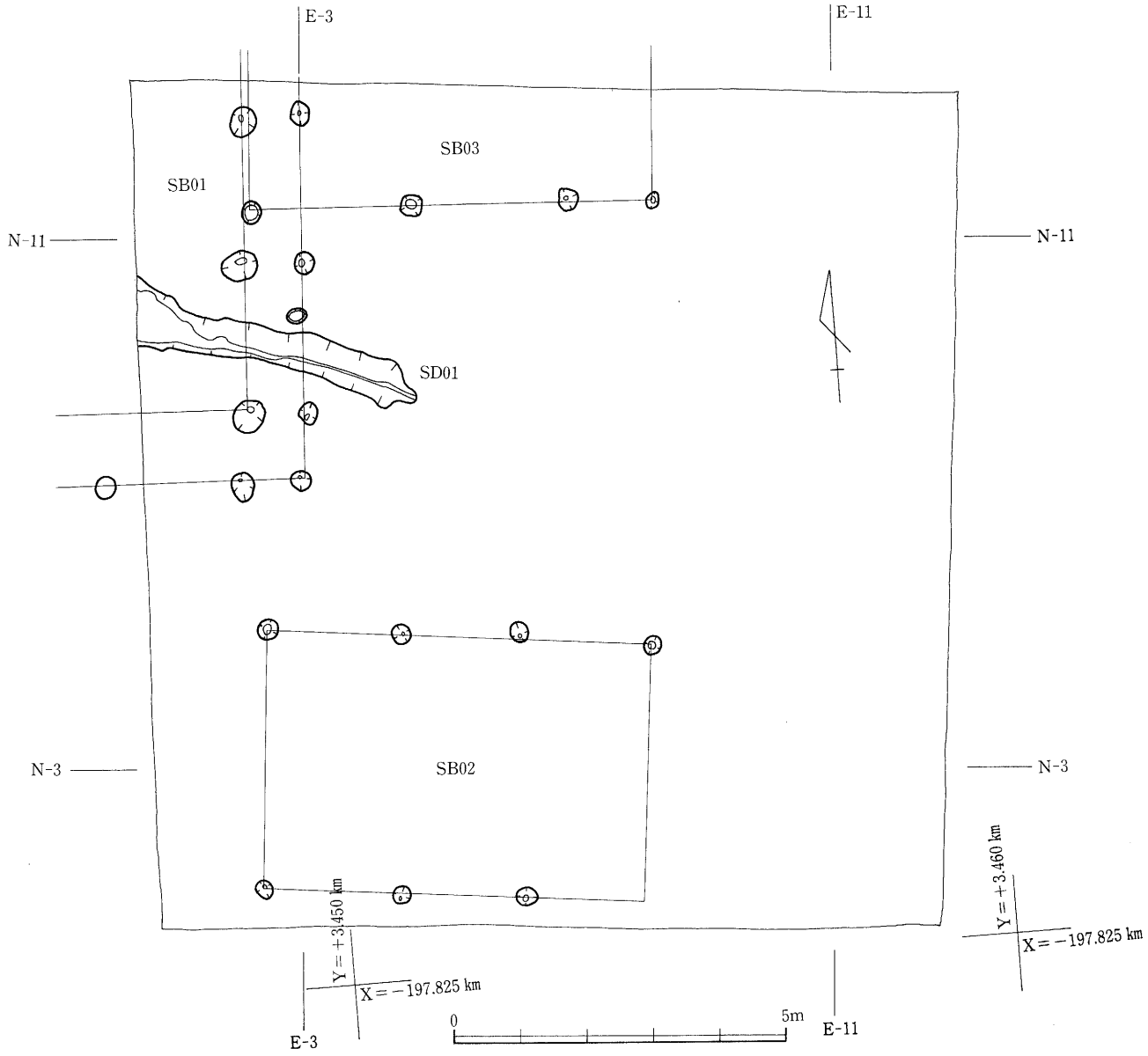
４　検出された遺構と遺物

（１）２層

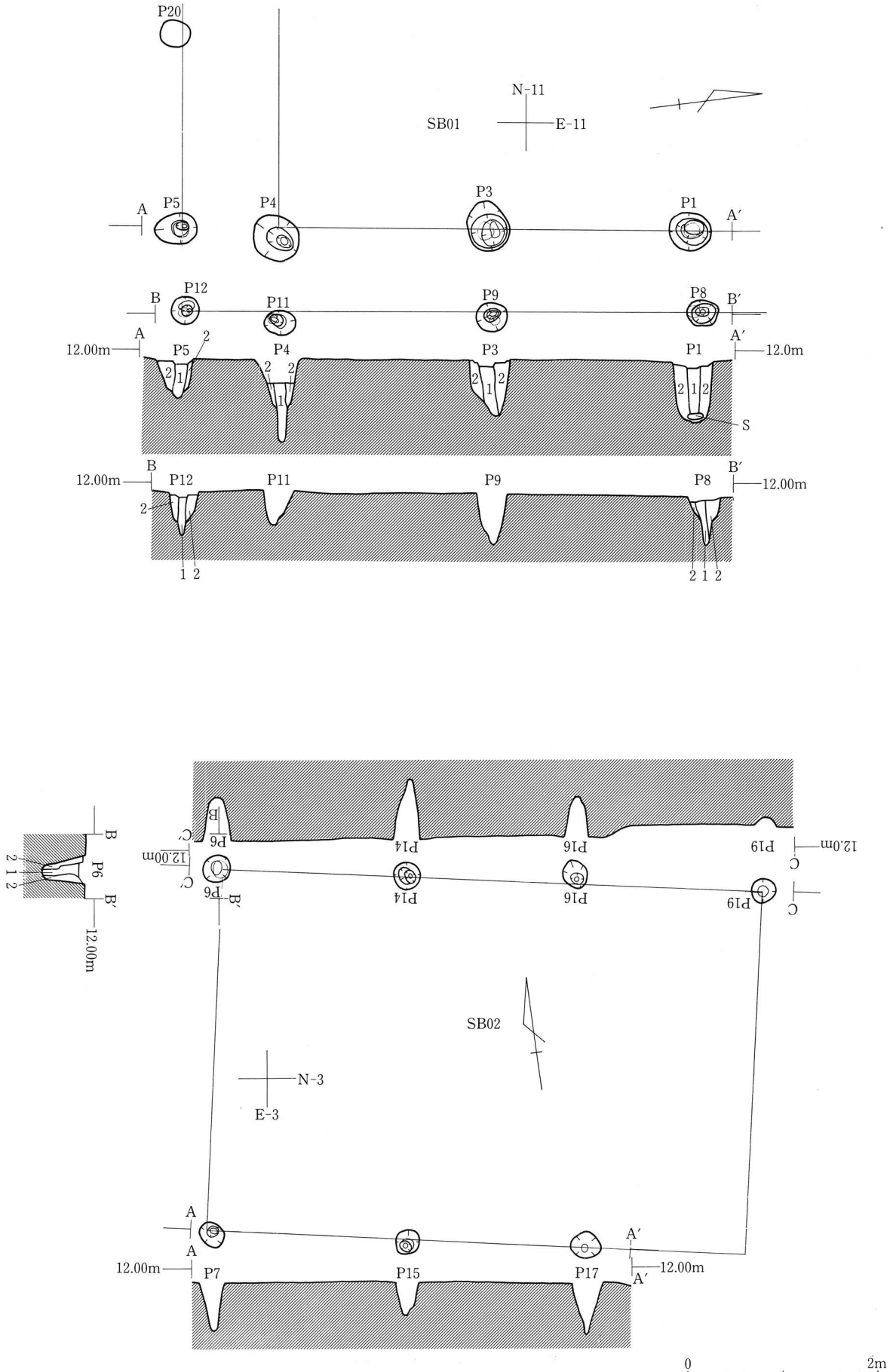
２層上面で掘立柱建物跡（SB）３棟が検出された。

SB01（第５図）

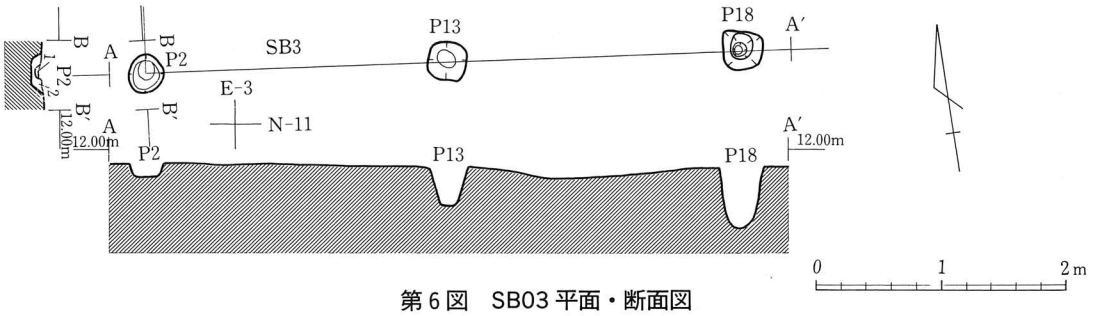
梁行２間以上（総長2.9m以上、柱間寸法90～205cm）、桁行３間以上（総長5.9m以上、柱間寸法100～225cm以上）の南北棟で梁・桁内側は身舎、同外側は廂あるいは縁と考えられる建物跡である。方向はＮ－４°－Ｗである。身舎の柱間は220cm前後、柱穴は45～54cmの不整円形で、柱痕跡は15～18cm程である。柱穴の深さは61～66cmで平均56cm程である。廂あるいは縁と考えられる柱穴は30～43cmの不整円形で、柱痕跡は９～17cmの円形である。柱穴の深さは39～55cmで平均46cm程である。身舎と廂あるいは縁との柱間は、梁行で90cm、桁行で103cmである。身舎の柱穴Ｐ1の底面からは径18cm程厚さ９cm程の根石と考えられる石が出土した。埋土は黒褐色砂質シルトである。なお、西端の柱穴Ｐ20は壁の崩壊によりプランのみの確認である。出土遺物はない。



第４図　２層上面遺構平面図



第5図　SB01・SB02 平面・断面図



第６図　SB03 平面・断面図

SB02（第５図）

梁行１間（総長3.8m、柱間寸法380cm）、桁行３間（総長5.8m、柱間寸法180～200cm）の東西棟の建物跡で方向はＮ－82°－Ｗである。柱穴は25～32cm程の円形で、柱痕跡は16cm程である。柱穴の深さは、11～66cmで平均44cm程である。埋土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物はない。

SB03（第６図）

Ｎ－87°－Ｗに延びる柱列を検出した。東西方向に３間分検出した。東西に柱穴が確認されないことから、北へ展開する建物跡と捉えた。検出した総長は6.0m程であり、柱間寸法は130～240cm程である。柱穴は28～37cm程の円形で、柱痕跡は13～15cm程である。柱穴の深さは12～50cmで平均32cm程である。埋土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物はない。

２層出土遺物

２層からは、磁器片１点、須恵器１点、土師器２点が出土しているが、いずれも細片で図示し得なかった。磁器は肥前産の白磁か染付の碗で江戸期のものである。

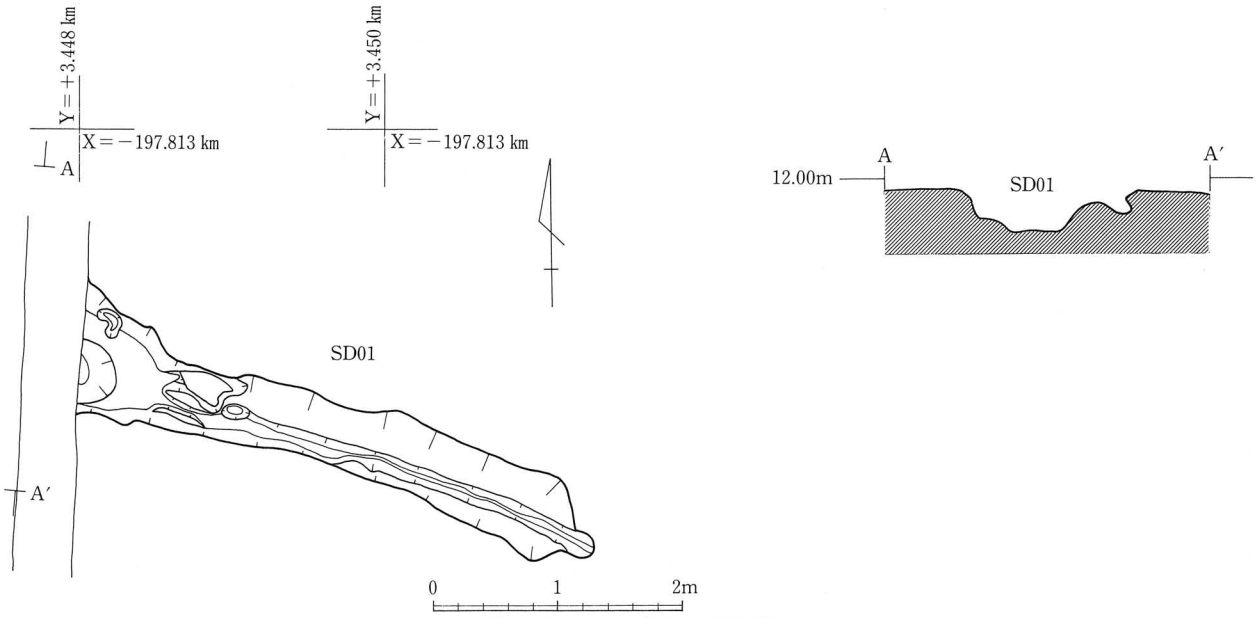
（２）４層

①4a 層

4a 層上面では溝跡（SD）１条、小溝状遺構群が検出された。上面はわずかに東方向に低くなっている。

SD01（第７図）

調査区の西半で確認された。検出されたのは一部で西部は調査区外に延びており、重複はない。直線的に走行しており、その方向はＮ－68°－Ｗである。検出長は4.3m程で上端幅0.58m前後、下端幅は0.15m前後、深さは４～35



第７図　SD01 平面・断面図

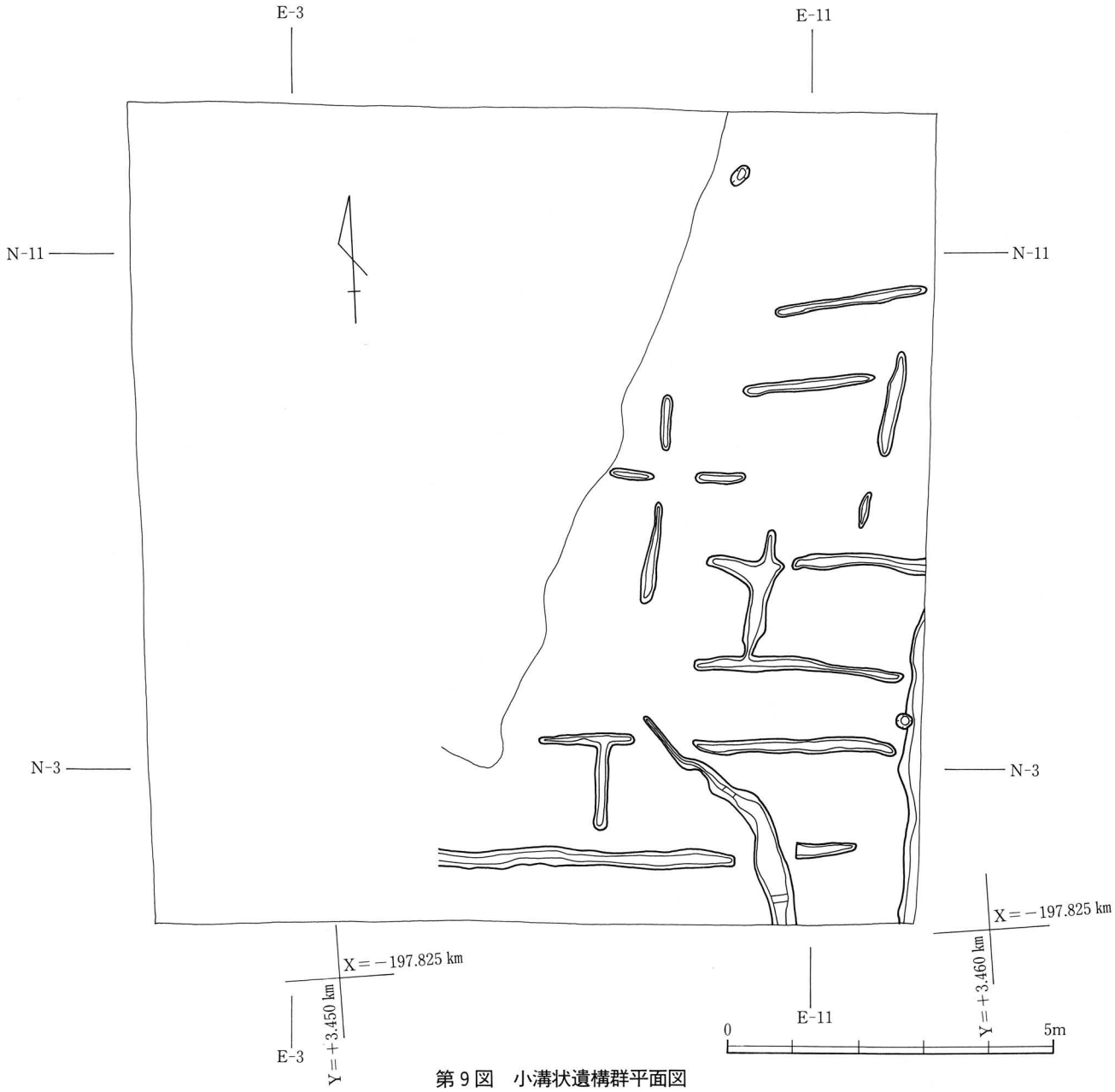
cmであり西半部で急に落ち込む。壁は南壁が底面から緩やかに立ち上がっているが、北壁は立上がりがやや急である。底面および壁面ともに一定せず、凹凸が顕著に認められる。底面の形状は2～3cmの細いくぼみを呈している。堆積土は粗砂層が主体である。土師器杯1点（第8図1）、赤焼き土器杯1点（第8図2）が出土している。

小溝状遺構群（第9図）

調査区の東半部で確認された。小溝状遺構群はSD01に切られている。方向は東西方向（N－86°－E、W－5°－Eのものとがあり、東西が7条、南北が4条検出された。小溝は幅15～35cmで平均が25cm程、深さは1～4cmで平均が2.5cm程である。溝の間隔は東西方向が1,2～1,8mで平均が1.46m程、南北方向が1.3～1.7mで平均が1.5m程で

図版番号	種　類	遺構・層位	内　面	外　面	残　存	法　量			写真図版	登録番号
						口径	底径	器高		
1	土師器　坏	SD001　堆積土	マメツ、黒色処理	ロクロナデ	口～体：1/6	(13.2)	－	－	7－5	D－1
2	赤焼土器　坏	SD01　堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	口：1/8	(9.9)	－	－	7－4	D－2

第8図　SD01出土遺物



第9図　小溝状遺構群平面図

ある。東西と南北の重複が見られ、数時期に分けられる可能性もあるが新旧関係は確認できなかった。溝の堆積土はどちらの方向も基本層３層で直下層のブロックを若干含むことから、この小溝状遺構群は３層の耕作により形成されたものと考えられる。出土遺物はない。

②4b 層

スジ状の灰白色火山灰（写真３－２）

東半部でスジ状に広がる灰白色火山灰と牛足跡を検出した。火山灰のスジは不定形に途切れながら伸びており、明確な溝状には確認されなかった。幅は数～10cm、厚さ数～５cm、間隔が20～50cmである。北側では南北方向で間隔がやや狭く、南側では東西方向で間隔が広い。牛の足跡は同じ面で不規則ながら多数検出された。形状は長幅12cm前後のＣ字・ハの字状である。これらは火山灰降下前にあった畠の畝間や牛足跡などの地表面の凹みに堆積したもの、降下後の耕作によるすき込みや牛の踏み込みによるものなどの可能性が考えられる。ただし、プラント・オパール分析から上層が耕作土と考えられることから、火山灰降下前の地表面は残存していない可能性が高いといえよう。

４層出土遺物

土師器２点（内黒坏１点、甕底部１点）が出土しているが、いずれも細片で図示し得なかった。

（３）６層

６層上面では、溝跡（ＳＤ）５条が検出されている。上面は全体的に見ると、南西側に高くなる傾きを示す。細かく見ると、南西部の高まりが最も高く、高低差10cm前後の段差を経てSD05に至りSD02･03を介在しながら北東へ徐々に傾斜している。傾斜の高低差は、南西部の高まりと北東端では28cm、南東端では37cmである。

SD02（第10図）

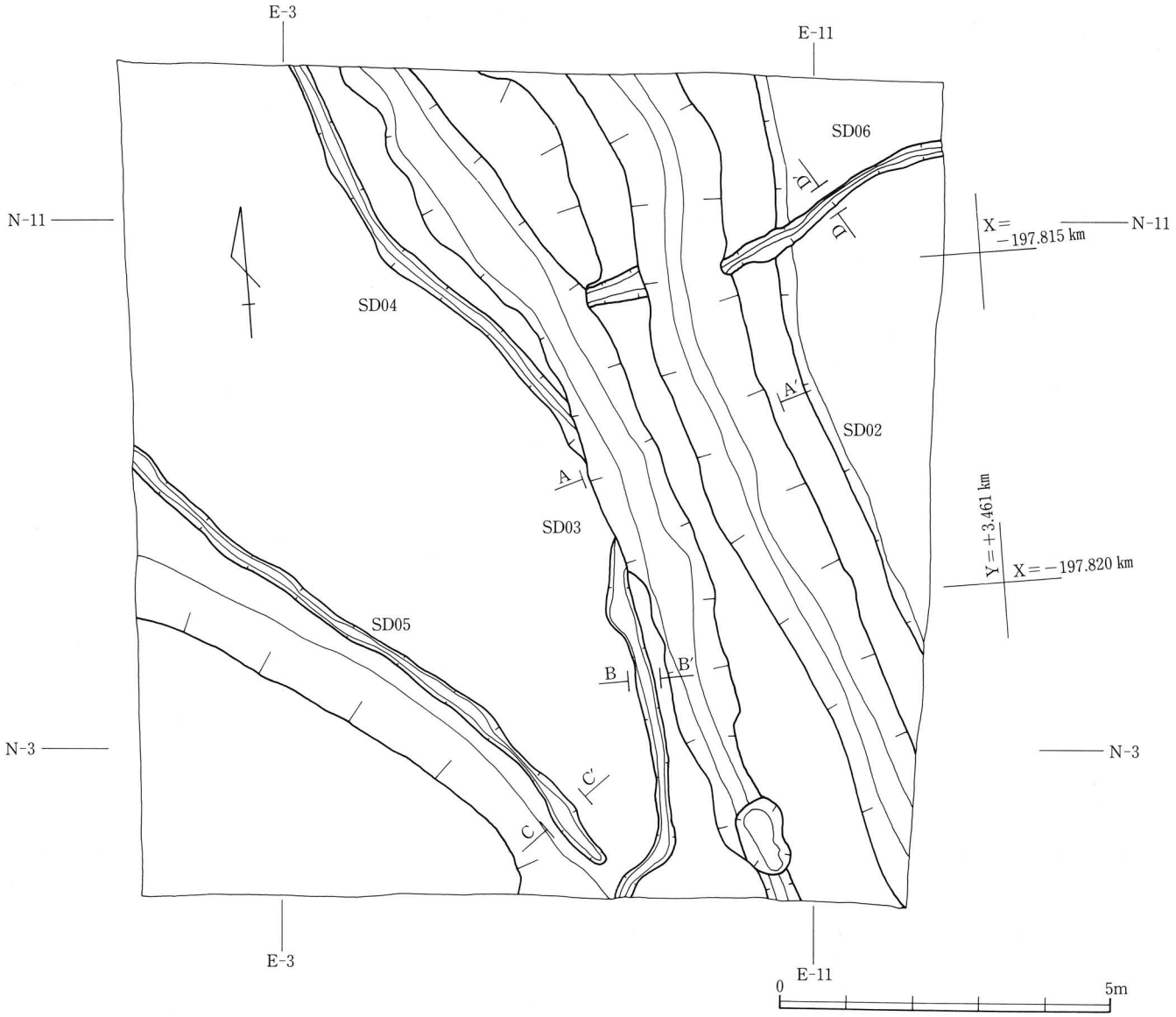
直線的に走行しており、その方向はＮ－19°－Ｗである。検出されたのは一部で北、南ともに調査区外に延びている。SD06と重複し、それより新しい。検出長は12.9m程で、上端幅は1.3m前後、下端幅は0.26m前後、深さは28cm程である。断面形は開いたＵ字形で、壁は底面からやや急に立上がり、外側に開く。堆積土は５層確認され、砂、砂質シルトを主体としている。最下層５層と１・２層の砂の間に基本層６層起源の３・４層が介在することから水流に２時期の変遷が考えられる。底面および壁面ともに一定していてほぼ直線的なことから、人工的な溝である可能性が高い。溝の東岸は低い土手状になっており、その規模は、上端幅が0.5～１m程、下端部が0.6～1.2cm程、高さが2.8cm程である。

SD03（第10図）

SD02の西側を平行するように直線的に走行している。その方向はＮ－17°－Ｗである。検出されたのは一部で北、南ともに調査区外に延びている。SD04･06と重複し、それらよりも新しい。検出長は14.1m程で、上端幅は1.05m前後、下端幅は0.47m前後、深さは２～９cm程である。断面形は浅いＵ字形で、壁が西壁が底面から緩やかに立ち上がるが、東壁は立ち上がりがやや急である。底面および断面ともに一定せず凹凸がある。南端の底面が落ち込み、土坑状になっている。この土坑状の落ち込みは、上端平面形が約1.1×0.6mの不整楕円形で、下端平面形は約0.9×0.4mの不整楕円形である。深さは14cm程で、底面および断面ともに凹凸が認められる。

SD04（第10図）

溝はSD03の西側を並行するがやや蛇行しながら走行している。検出されたのは一部で北、南ともに調査区外に延びている。途中SD03のほぼ中央付近で重複し、それより古い。方向は、SD03との重複地点から北半がＮ－32°－Ｗである。南半はＮ－4°－Ｗであり、南端で西へ屈曲する。検出長は14.4m程で、上端幅は0.33m前後、下端幅は0.17m前後、深さは４cm程である。壁は外側に開き断面形は舟底形である。底面はほぼ平坦で、やや西側に傾斜してい



第10図　SD02・03・04・05・06 平面・断面図

SD02　土層註記

層序	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐色　10YR5/2	砂	径1～5cmの礫を多量に含む。下部は凝灰岩のために全体に黄褐色にみえる。
2	灰黄褐色　10YR4/2	砂	1層に比べて礫をほとんど含まないが、下部に青灰色の径1～2cmの礫を若干含む。
3	黒色　10YR7/1	砂質シルト	やや粘性がある。
4	黒褐色　10YR2/2	砂質シルト	凝灰岩粒を含む。
5	灰黄褐色　10YR5/2	砂	吉灰色の礫を若干含む。

SD03　土層註記

層序	土　色	土　性	備　考
1	褐灰色　10YR4/1	砂	径2～5cmの礫を多量に含む。凝灰岩のために全体に黄褐色にみえる。

SD04　土層註記

層序	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐色　10YR5/2	砂	径0.5～1cmの小礫を含む。

SD05　土層註記

層序	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐色　10YR5/2	砂	径0.5～1cmの小礫を含む。

る。堆積土は砂が主体である。

SD05（第10図）

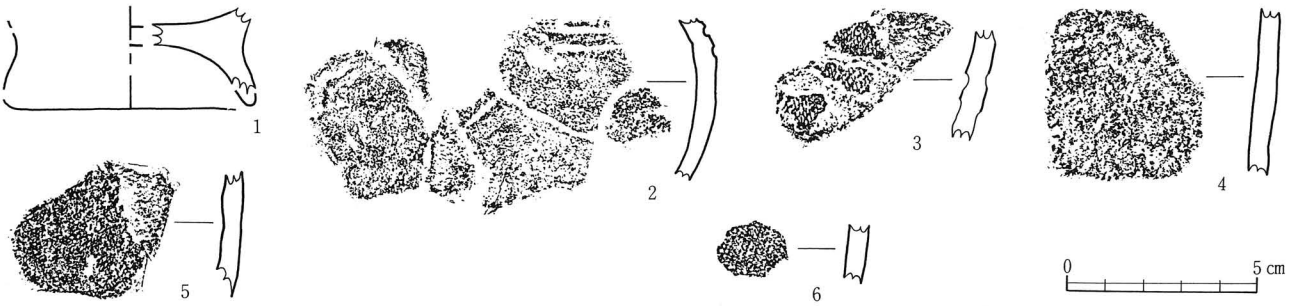
溝は調査区南西部の高まりのふもとを、ほぼ平行するように直線的に走行している。その方向はＮ－45°－Ｗである。検出されたのは一部で、北西側は調査区外に延びており重複はない。検出長は9.4m程で、上端幅は9.4m程で、上端幅は0.23m前後、下端幅は0.02～0.2m、深さは７cm程である。壁は東壁が底面から緩やかに立ち上がり、西壁は立ち上がりがやや急である。底面は平坦である。堆積土は砂が主体である。

SD06（第10図）

方向はＮ－72°－Ｅでほぼ直線的に走行している。検出されたのは一部で、東側は調査区外に延びており、SD02・03と重複し、それらより古い・検出長は6.2m程で上端幅が0.15～0.4m程、下端幅は0.04～0.2m程、深さは３cm程である。壁は外側に開き、断面形は舟底形、堆積土は砂が主体である。

６層出土遺物（第11図）

６層から弥生土器15点、素焼き土器12点出土した。うち６点を図示した。１は台部である。２は壷の体部で沈線が３条施文されている。３・５・６は細かい縄文ＬＲである。



図版番号	種　類	遺構・層位	内　面	外　面	残　存	法　量			写真図版	登録番号
						口径	底径	器高		
1	弥生土器　台部？	６層	ミガキ	ミガキ	台部：1/4	－	(6.6)	－	７－12	Ｂ－５
2	弥生土器　壷	６層	ミガキ	マメツ、沈線３条	体部片	－	－	－	７－８	Ｂ－１
3	弥生土器　甕？	６層	ナデ	縄文ＬＲ	体部片	－	－	－	７－10	Ｂ－４
4	弥生土器　甕？	６層	ミガキ	ほとんどマメツ、一部に縄文ＬＲ	体部片	－	－	－	７－11	Ｂ－３
5	弥生土器　甕？	６層	ミガキ	細い縄文ＬＲ	体部片	－	－	－	７－９	Ｂ－２
6	弥生土器　甕？	６層	ミガキ	細い縄文ＬＲ、５と同一	体部片	－	－	－	７－６	Ｂ－２

第11図　６層出土遺物

（４）8c 層

8c 層上面では溝跡１条が検出された。

SD07（第12図）

溝は直線的に走行しており、重複はない。検出されたのは一部で、北、南ともに調査区外に延びており、その方向はＮ－23°－Ｗである。検出された長さは13.1m程で、上端幅は2.2～5.0mで平均が3.3m程、下端幅は５～15cm、深さは７～20cmである。壁は底面から外側に広く聞き、断面形は緩やかなＶ字形を呈している。底面および断面は一定ではなく凹凸が顕著に認められる。溝は直線的ではあるが底面の著しい乱れがあることなどから、自然流路の可能性が高いと考えられる。堆積土は２層確認され、いずれも砂を主体とした。

（５）9c 層

9c 層上面では溝跡（１条）が検出された。

SD08（第13図）

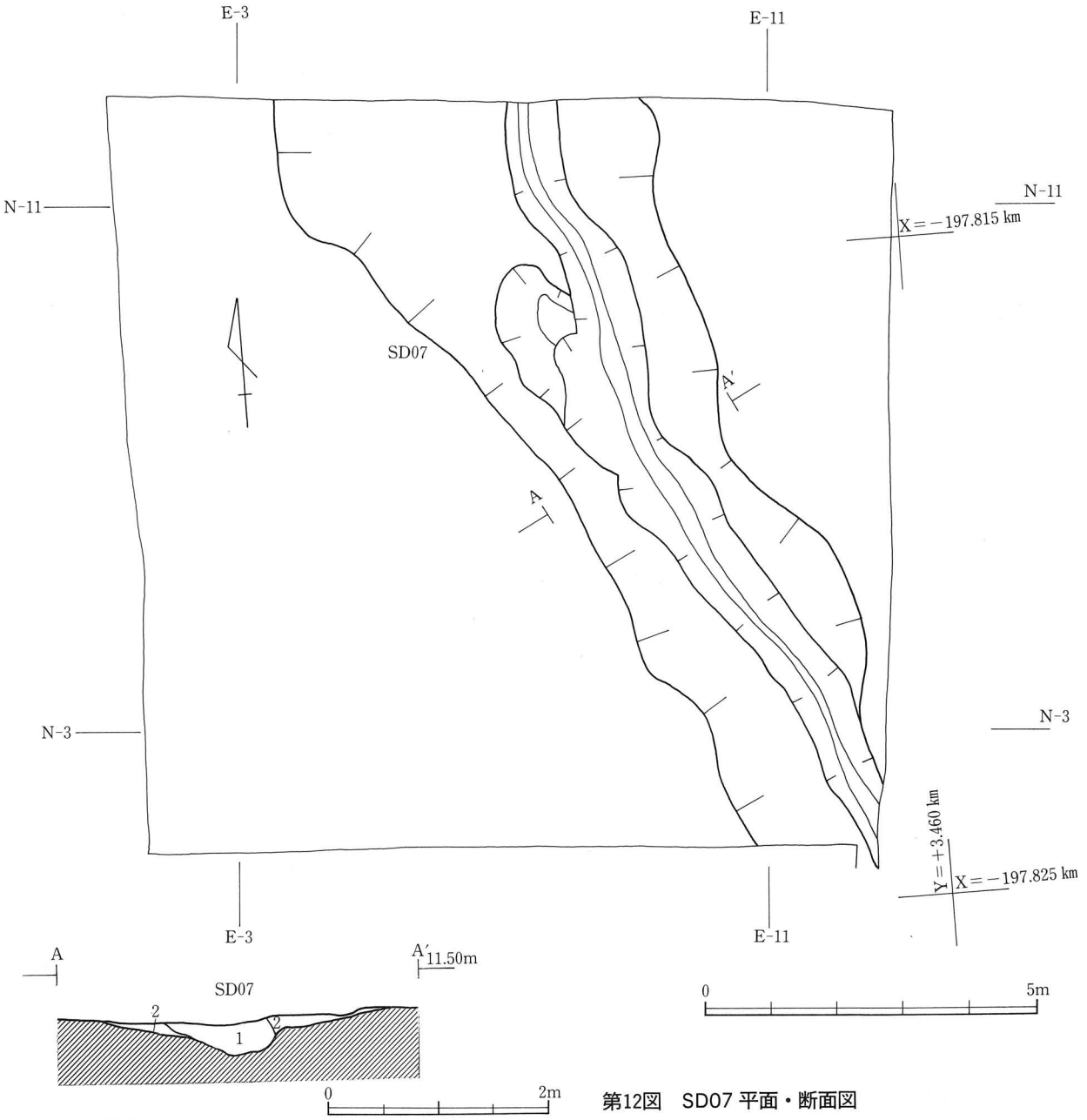
溝は直線的に走行しており、その方向はＮ－23°－Ｗである。上端の平面形は一定せず乱れており、北側では北東

方向に蛇行している。検出されたのは一部で北、南ともに調査区外に延びており、重複はない。確認された長さは13.1m程で、上端幅は2.5～4.2mで平均が3.2m程、下端幅は40～138cmで平均が101cm程、深さは34cm程である。断面形は外側に大きく開くU字形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面は比較的に平坦であるが、部分的に大きな落ち込みが見られる。中央付近の落ち込みの比較差は17～36cm、南端では14～39cmである。堆積土は３層確認され、粘土、粘土質シルト、砂質シルトで植物遺体を含んでいる。溝は上端の平面形の乱れなどから、自然流路の可能性が高いと考えられる。

（６）12層

SX01（写真５－５、６－１）

12層中で不整楕円形の落ち込みを検出した。規模は約1.5×２m、深さ30cmである。底面が凹凸であること、堆積土が基本層12層と13層を撹拌した状況であることなどから、樹根跡の可能性が考えられる。



第12図　SD07 平面・断面図

SD07　土層註記

層序	土　色	土　性	備　考
1	灰黄褐色　10YR4/2	砂	径１～２cmの小礫を中央に多く含む。中央部に酸化鉄を溝状に含む。
2	暗灰黄色　2.5Y5/2	細砂	小礫を若干含む。

（７）13層

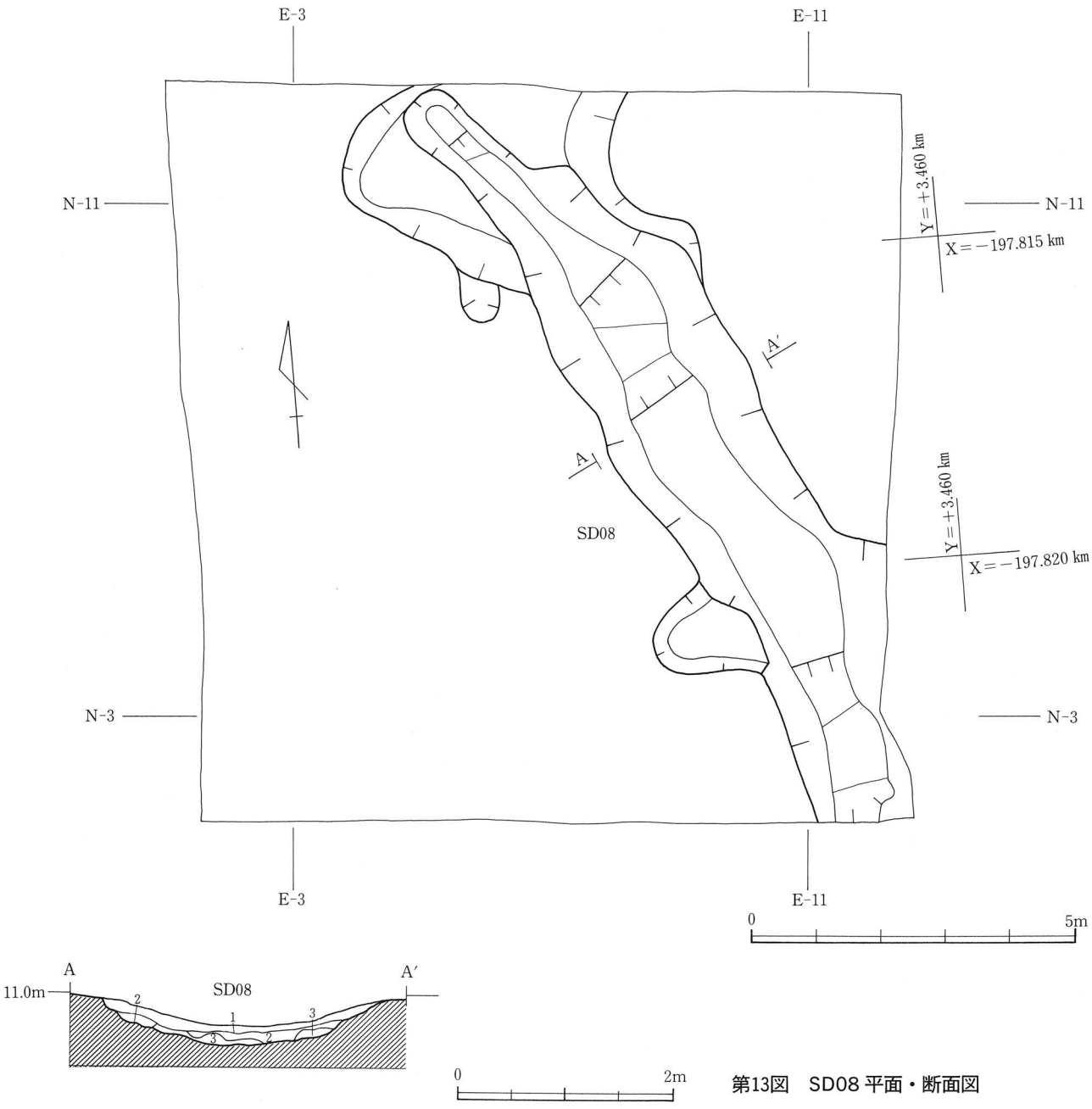
河川跡（写真６－２）

13層上面で河川跡を検出した。幅1.5m以上で、北からと東からの流路が深掘区南側で合流している。堆積土は12最下部である。尖頭器が１点（第14図５）出土した。石材は頁岩で全体に摩滅している。

（８）その他の遺物

１・２・３・７・12・15・18層から陶磁器、縄文土器・素焼き土器・石器が出土している。

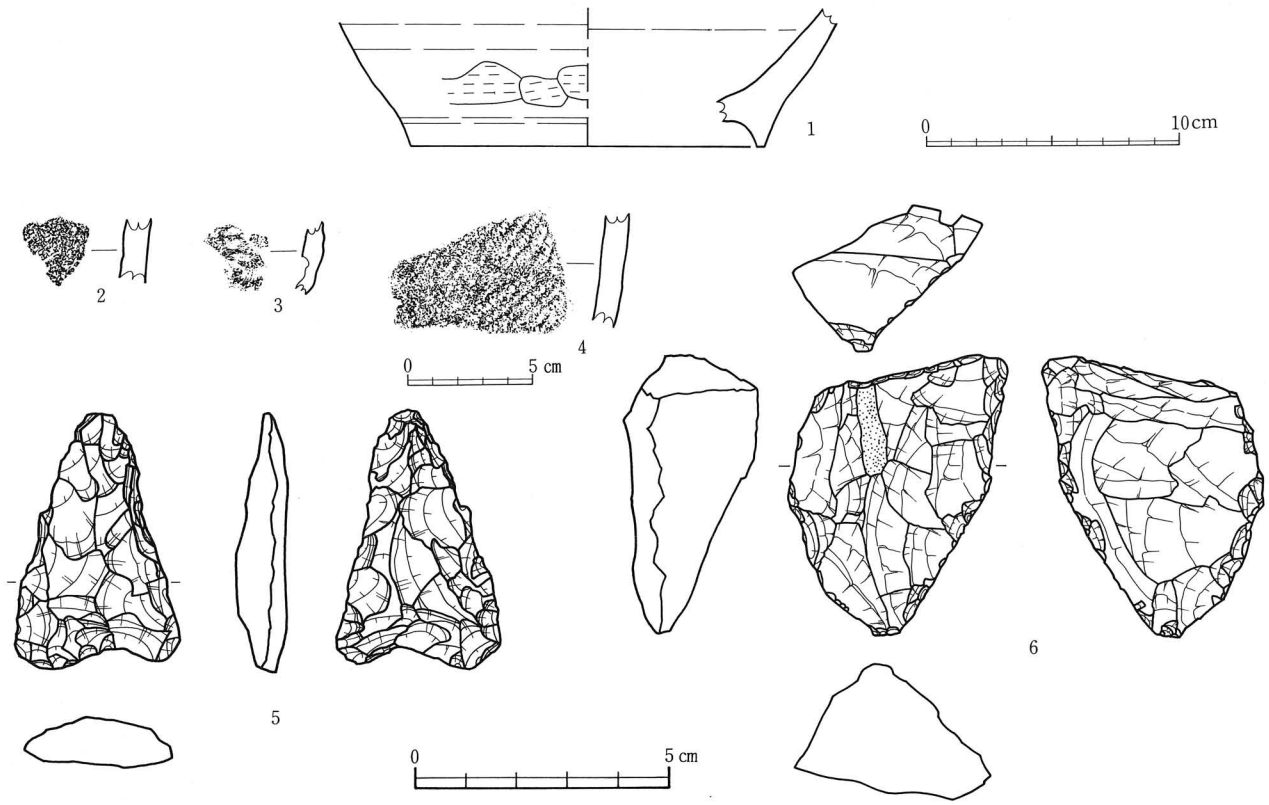
１層からは磁器１点、陶器４点出土している。磁器（写真７－２）は白磁の瓶で近世か近代である。陶器のうち



第13図　SD08 平面・断面図

SD08　土層註記

層序	土　色	土　性	備　考
1	黒色　10YR1.7/1	粘土	植物遺体を含む。
2	黒褐色　10YR2/2	粘土質シルト	薄い細砂層を互層に含む。植物遺体を含む。
3	黒褐色　10YR3/1	砂質シルト	底面となっている灰オリーブ色（5Y5/2）の細砂をブロック状に含む。



図版番号	種　別	遺構・層位	特　徴	産　地	年　代	残　存	法　量（cm） 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	陶器　鉢	3 層	内外面ロクロナデ、外面ヘラケズリ、内面マメツ	山茶碗窯系	13Ｃ前半	体～底：1/4	－	(13.8)	－	7－3	Ｉ－1

図版番号	種　類	遺構・層位	内　面	外　面	残　存	法　量（cm） 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	縄文土器　深鉢	7 層	ナデ、胎土に繊維を含む	ナデ	体部片	－	－	－	7－17	Ａ－1
3	縄文土器　深鉢	15層	ナデ、胎土に繊維を含む	縄文不明	底部付近	－	－	－	7－14	Ａ－3
4	縄文土器　深鉢	12層下部	ナデ、マメツ	縄文ＬＲ、マメツ	体部片	－	－	－	7－13	Ａ－2

図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	石　材	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
5	尖頭器	13層・河川跡		頁岩	12	5.19	3.26	1.05	7－15	Ｋ－2
6	尖頭器	18層	上部欠損、全体にマメツ	流紋岩	45	5.86	4.20	2.46	7－16	Ｋ－1

第14図　その他の出土遺物

１点は古瀬戸の天目茶碗（写真７－１）で中世、ほかは大堀相馬産で18･19Ｃのものである。２層からは磁器１点、須恵器１点。土師器２点が出土している。磁器は肥前の染め付け碗で近世のものである。ほかは細片である。３層からは陶器１点（第14－１図、写真７－３）で、山茶碗窯系の鉢で13Ｃ前半のものである。７層からは繊維を含む縄文土器の細片（同図２）が出土している。12層からは縄文土器細片２点（同図３・４）、尖頭器（同図６）、クルミ、トチノミが出土している。６は基部側で全体が摩滅している。石材は流紋岩の剝片が１点出土している。

5　遺構の所属年代とまとめ

（１）検出した遺構は、２層上面で掘立柱建物跡３棟、4a 層上面で溝跡１条、小溝状遺構群、4b 層上面で耕作痕、６層上面で溝跡５条、8c 層上面で溝跡１条、9c 層上面で溝跡１条、12層中で性格不明遺構１基、13層上面で小河川跡１条である。また、プラント・オパール分析より、２・３・4a・4b 層は稲の耕作層である可能性が高い。

（２）周辺調査区との対比

当調査区付近では、富沢遺跡第１・４・21・55・70・97次調査、泉崎浦遺跡第３・４次調査、教塚古墳などの調査が行われている。この付近は富沢遺跡の中でも扇状地性微高地にあたり、土砂の供給が盛んであるために層序が複雑である。このため前述調査間の層の細かな対応は困難であるが、西方約20ｍの近接した21次調査（渡辺：1986）

を対象として大まかな対応を試みた。その結果おおむね以下のように対応が可能であった。

95次	21次
3層	3
4a層	4a
4b層　上部に灰白色火山灰	4b
5a層	5
5b層　砂	6
6層	8・10

95次	21次
7層　細砂	11a
8a層	
8b層　砂	
8c層	11c・12
9a層	13・14
9b層	
9c層	

95次	21次
10層　砂	15・16
11層	17
12層　砂	18・19
13a層	20
13b層	20
14層	21

（3）2層上面で検出した掘立柱建物跡（SB01～03）に伴う明確な遺物は乏しく、この遺構に所属年代を決定することは難しいが、2層中から近世の磁器が出土していることから、近世以降と考えられる。

（4）4a層上面で検出された小溝状遺構群は3層の耕作により形成されたと判断された。3層からは13世紀前半の山茶碗窯系鉢が出土していることから時期は中世頃と考えられる。

近年近隣の下ノ内浦遺跡の調査で畠の畝状遺構の下位から小溝状遺構群が検出され、小溝状遺構群が畠跡の耕作痕であることが明確になった(佐藤甲：1993)。一方、プラント・オパール分析の結果では3層が最も高い値を出し、稲の耕作層である可能性が極めて高い。よって、3層において畠で稲作（陸稲栽培）が行われていた可能性が考えられよう。今後の課題としたい。

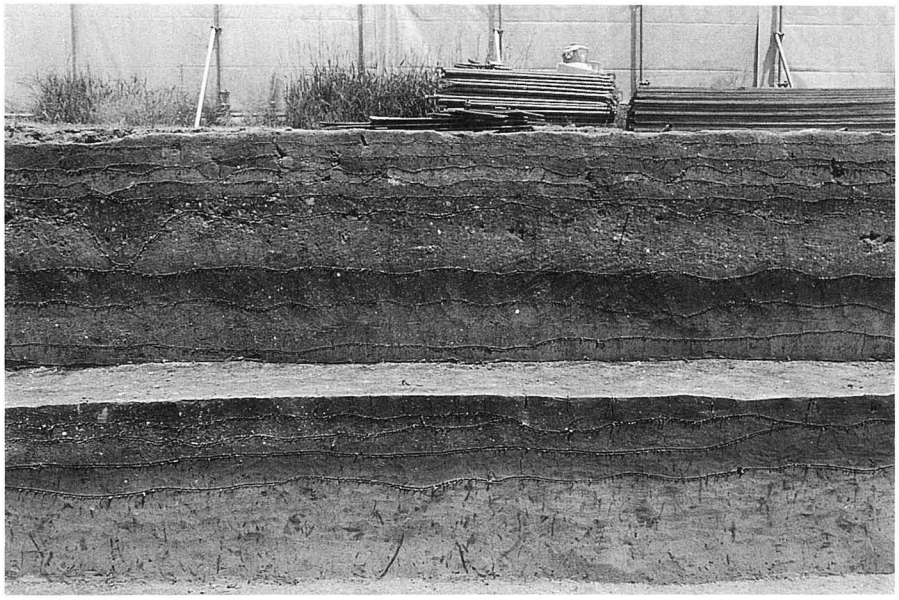
（5）4b層上面のスジ状の灰白色火山灰は、火山灰降下前の凹みへの堆積、あるいは降下後の耕作の影響などの可能性が考えられる、上層が耕作層のため前者の地表面は残存してない可能性が高いこと、畝間堆積の残存にしては形状が不整形であることなどから、火山灰降下後の耕作により形成された可能性が考えられるが、今後の類例をまって再考したい。いずれにせよ4a層の時期の上限、4b層の下限は10世紀前半に位置づけられよう。なお、同様のものは山口遺跡2次調査「シマ状遺構」（田中他：1984）、富沢遺跡35次調査（平間：1991）10層水田跡で確認されている。

（6）6層上面で検出されたSD02は、ほぼ直線的に走行し、壁の立ち上がりの状況などから人口的な溝の可能性が高い。6層からは低い値ながらプラント・オパールが検出されており、周辺で稲作が行われていた構成とが想定され、SD02は水田域の水路の性格が考えられる。時期は出土遺物から弥生時代に位置づけられる。

同時期の水路が近隣の1・8・55次においても検出されている。これらは連続するものと理解されている（佐藤甲：1990)。今次SD02は位置関係などから上記の水路に連続する可能性も考えられる。

（7）8c層検出SD07、09c層検出SD08は年代決定資料がない。12層下部の樹木片の14c年代（約4220年前、第3章参照）と6層の年代から縄文時代後期から弥生時代の間に位置づけられる。また、SD02・03・07・08は、ほぼ同じ位置で検出されている。このことからこの地点には自然の流路が形成しやすい地形であったことが考えられる。

（8）17層、23層の樹木片の14c年代測定も実施した。17層のものは約5000年前、23層のものは約7800年前という結果である（第3章参照)。



1．東壁断面

2．深掘東壁断面

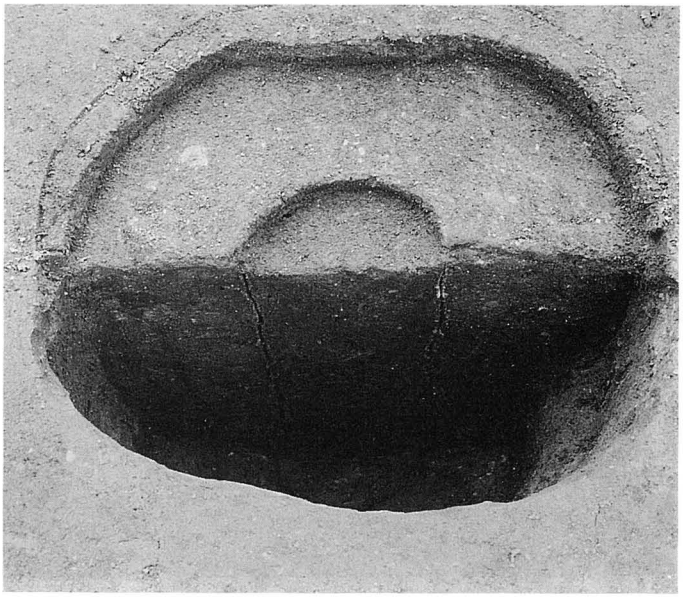
4．調査区近景（北から）

3．深掘東壁最下部断面

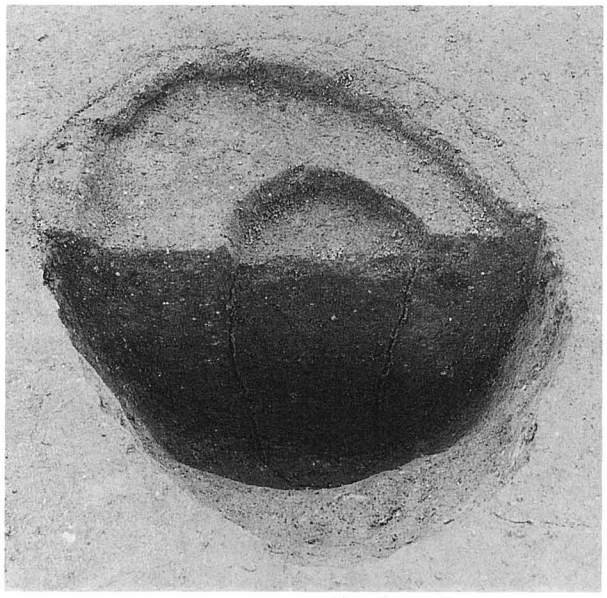
写真Ⅰ

1．建物跡全景（南から）

2．SB01　P8断面（西から）



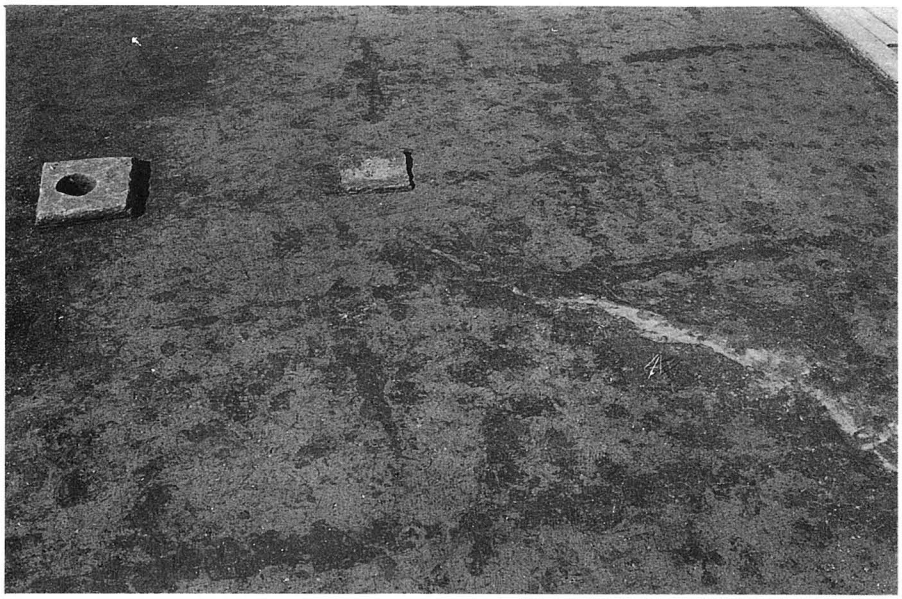
3．SB01　P1断面（西から）



4．SB01　P3断面（西から）

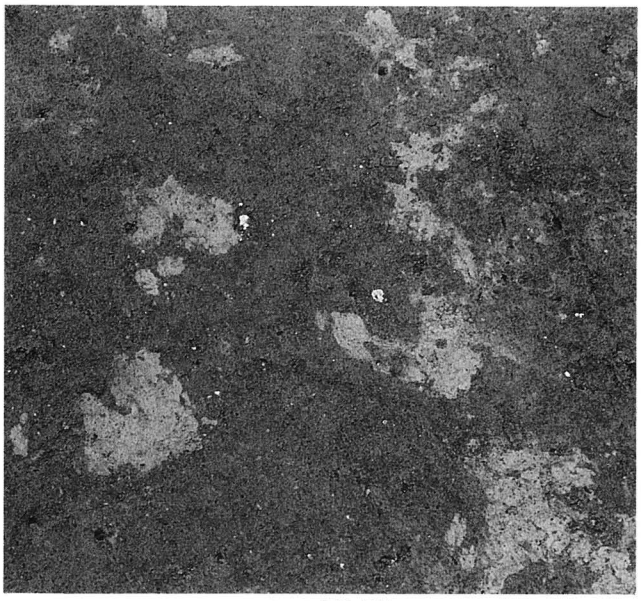
5．SB01　P1根石

写真2



1．4a層上面小溝状遺構群（南から）

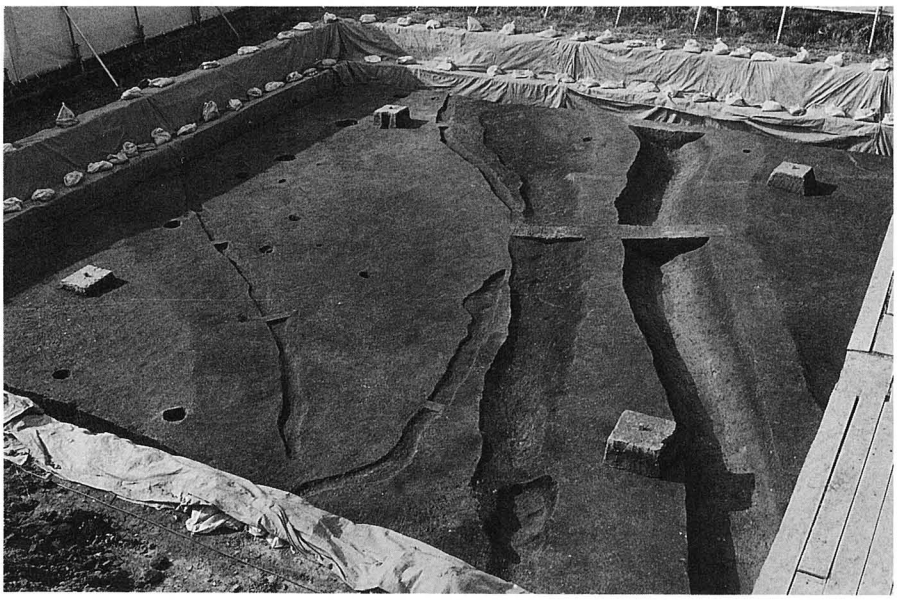
2．4b層上面シマ状遺構（南から）



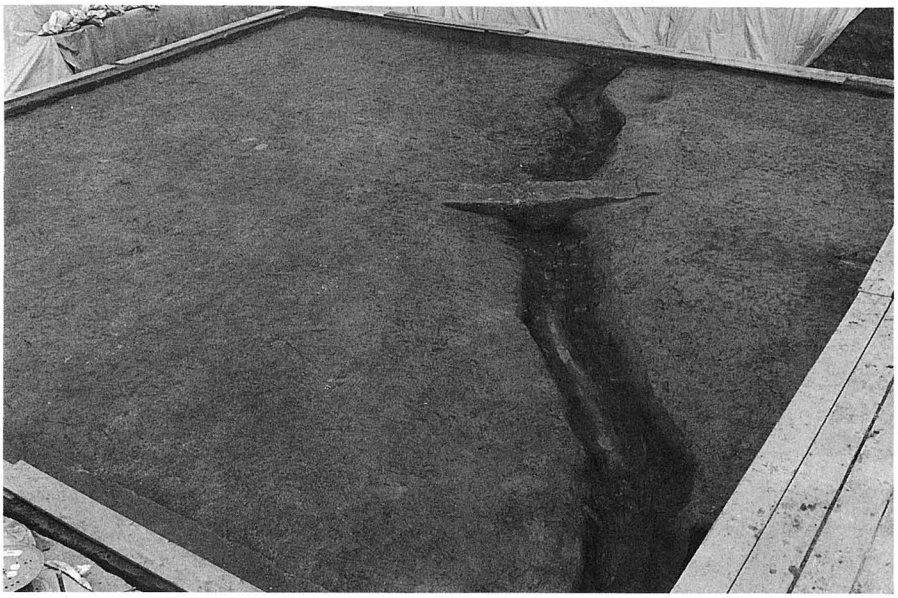
3．4b層牛足跡

4．4b層牛足跡（3のひとつを掘り上げ）

写真3



1．6層SD02～06全景

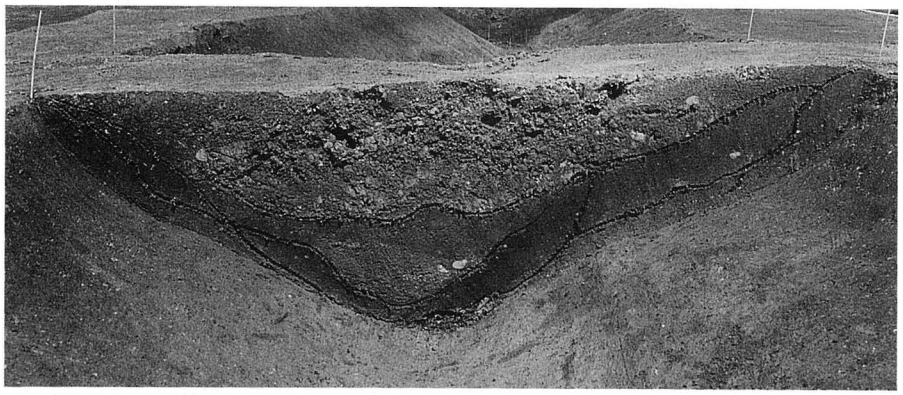


2．8c層SD07全景

3．9c層SD08全景

写真4

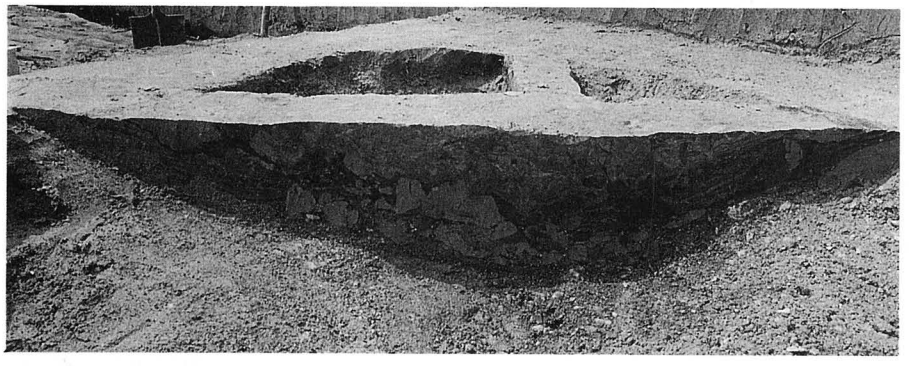
1．SD01断面（西壁）



2．SD02断面（南から）

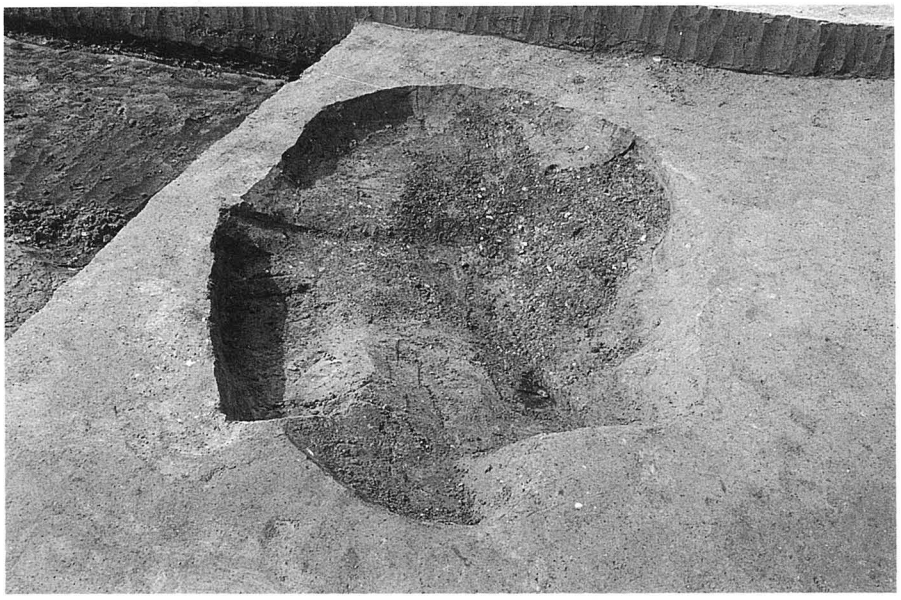
3．SD03断面（南から）

4．SD07断面（南から）



5．SX01断面（南から）

写真5



1．12層SX01全景（南から）

2．13層小河川跡（南から）

3．完掘全景（南西から）

写真6

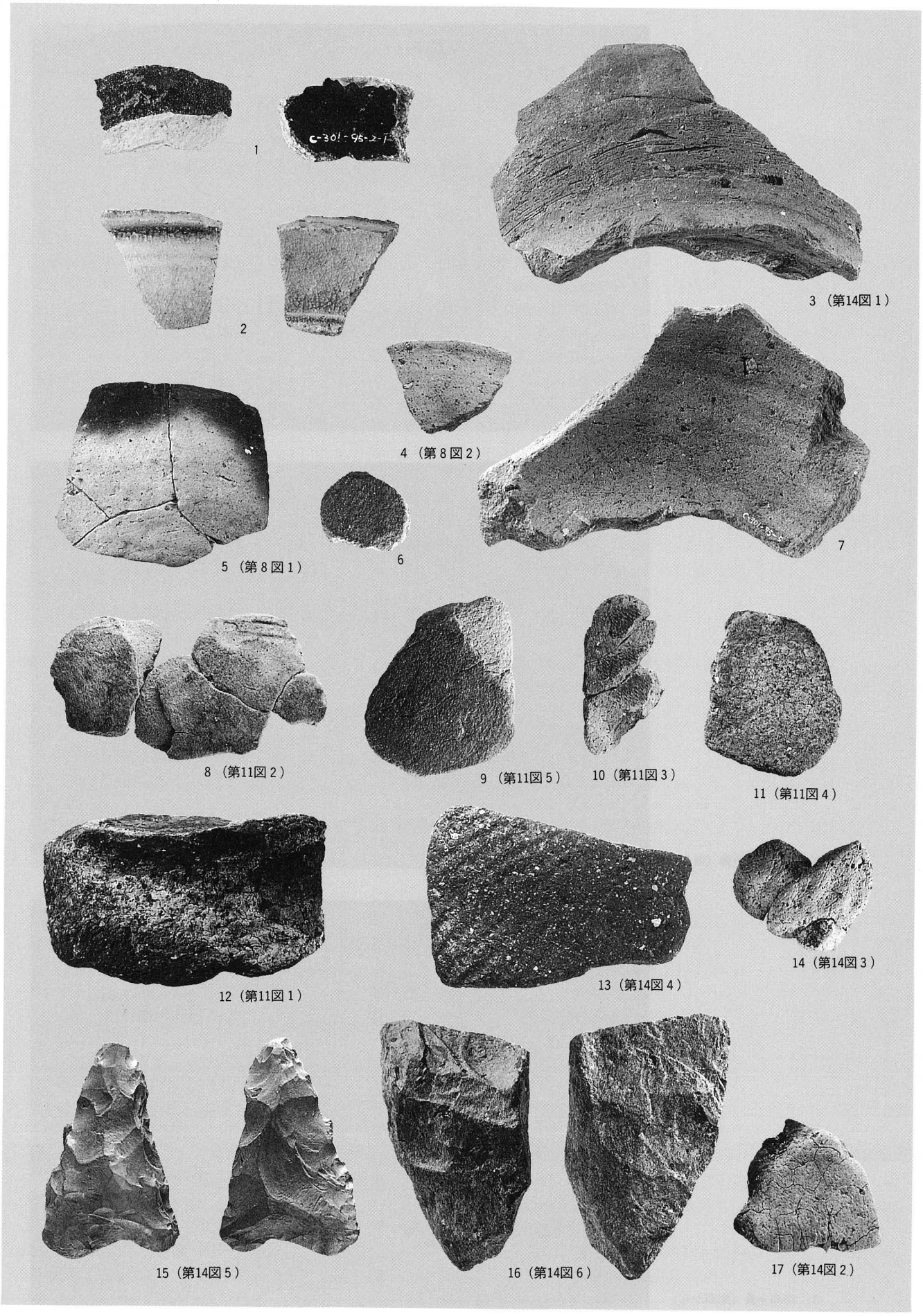

1
2
3（第14図1）
4（第8図2）
5（第8図1）
6
7
8（第11図2）
9（第11図5）
10（第11図3）
11（第11図4）
12（第11図1）
13（第14図4）
14（第14図3）
15（第14図5）
16（第14図6）
17（第14図2）

写真7　出土遺物

第２節　富沢遺跡第96次調査

１　調査に至る経緯

平成６年９月８日付けで庄子正一氏よりRC ６階建共同住宅建設の発掘届が提出されたが、当教育委員会では平成７年度の調査予定は決定していたため、平成８年度の発掘調査として受託することでご了解を得たものである。

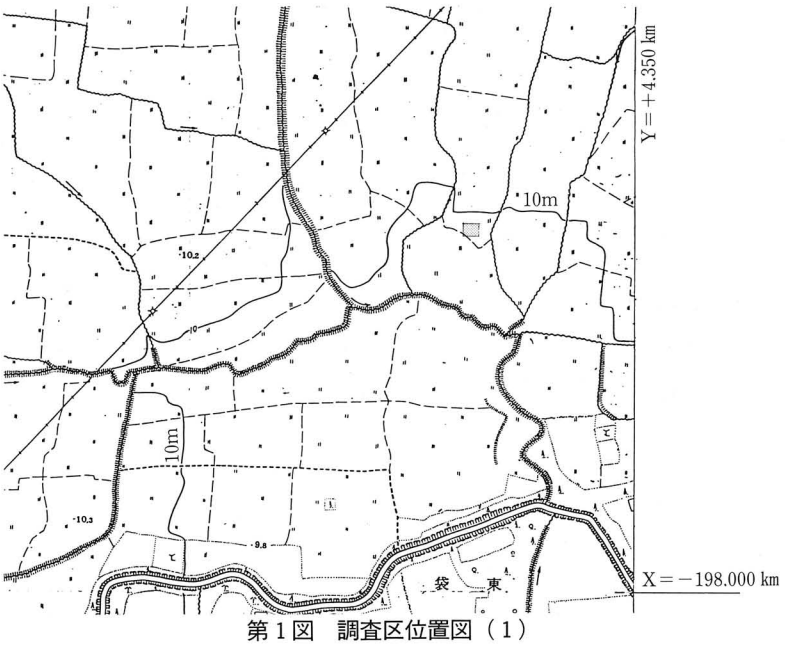
平成８年２月27日、発掘調査の実施に先立ち申請者側と第１回目の協議を待った。内容は調査時期、期間、契約額、事前の準備事項などであり、以後も打ち合せを重ね契約を交わし、６月26日から発掘調査を開始した。なお、同申請者からは同遺跡内別地点での発掘届が提出されていたが、同時に調査を行うことが効率的であることから協議の上、今次期間内に行うこととした（富沢遺跡101次）。

２　調査の方法

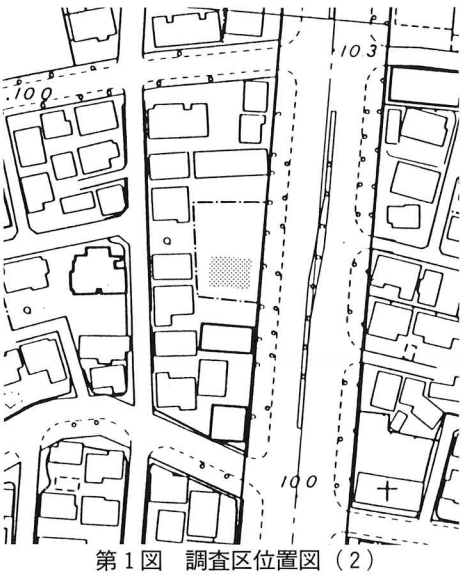
調査箇所は富沢遺跡の南東部に位置する。20年程前の区画整理以後は1.7～２ｍの盛土がなされしばらく畑地であったが、調査直前は駐車場として利用されていた。区画整理以前は旧字名宮田の水田であった。

今回の調査対象面積は315㎡である。その中に14×9.5ｍの調査区を設定した。遺構の実測は杭Ａ・Ｂを基準とした。基準杭の平面直角座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197717.769ｍ、Ｙ＝＋4212.488ｍ、杭Ｂ：Ｘ＝－197718.545ｍ、Ｙ＝＋4220.450ｍ）。また、杭Ａ（E4、N0）、杭Ｂ（E12、N0）とし、南北をN0～10、東西をE0～14で表記し、遺構の位置関係を示した。遺構の実測は平板測量で行い、縮尺1/50を基準とし、断面図は1/20とした。写真は95次と同様である。

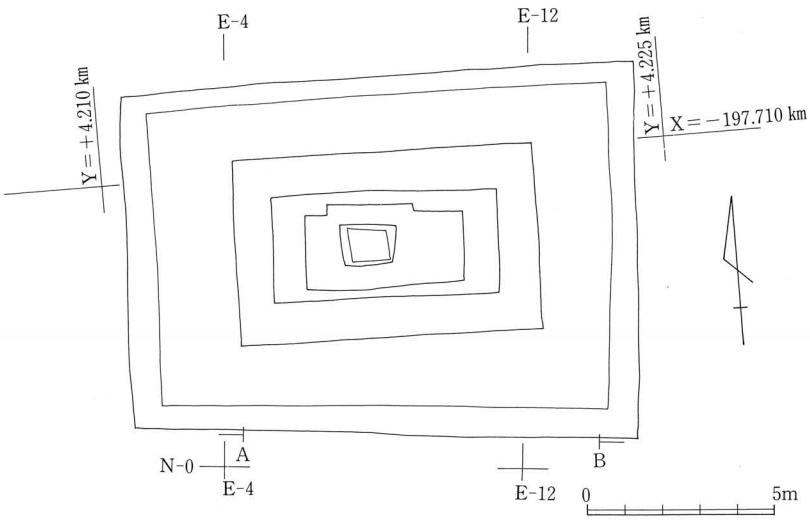
土壌サンプリングはプラント・オパール分



第１図　調査区位置図（１）



第１図　調査区位置図（２）



第１図　調査区全体図（３）

析用に２～12層、火山灰分析用に27層で実施した。

調査は６月26日に開始した。盛土および旧耕作土は重機により除去したが、以下の層は人力による調査とした。

全面調査は11層までで、以下は縄文時代、旧石器時代の層の確認を目的とした深掘（５×８ｍ）を行った。35層まで確認をしたが地表下約６ｍと深くなり、また調査区が１×１ｍと狭くなったため、以下は安全性を考慮し掘り下げを断念した。調査は８月７日に終了している。

３　基本層序

確認された層は大別で35層、細別で37層である。層序を大まかにみると１層が旧耕作土、２～11層が粘土層、12～15層が泥炭質粘土と粘土の互層、16層以下が粘土層となる。顕著なグライ化は32層以下である。

２～６層は粘性の強い粘土層で水田耕作土の可能性がある。２～３層は近代から近世と考えられるがそのほかは不明である。遺跡内の多くの各地点で確認される灰白色火山灰は認められない。

７層には酸化鉄の集積がみられるが上位のどの水田層の影響によるかは不明である。

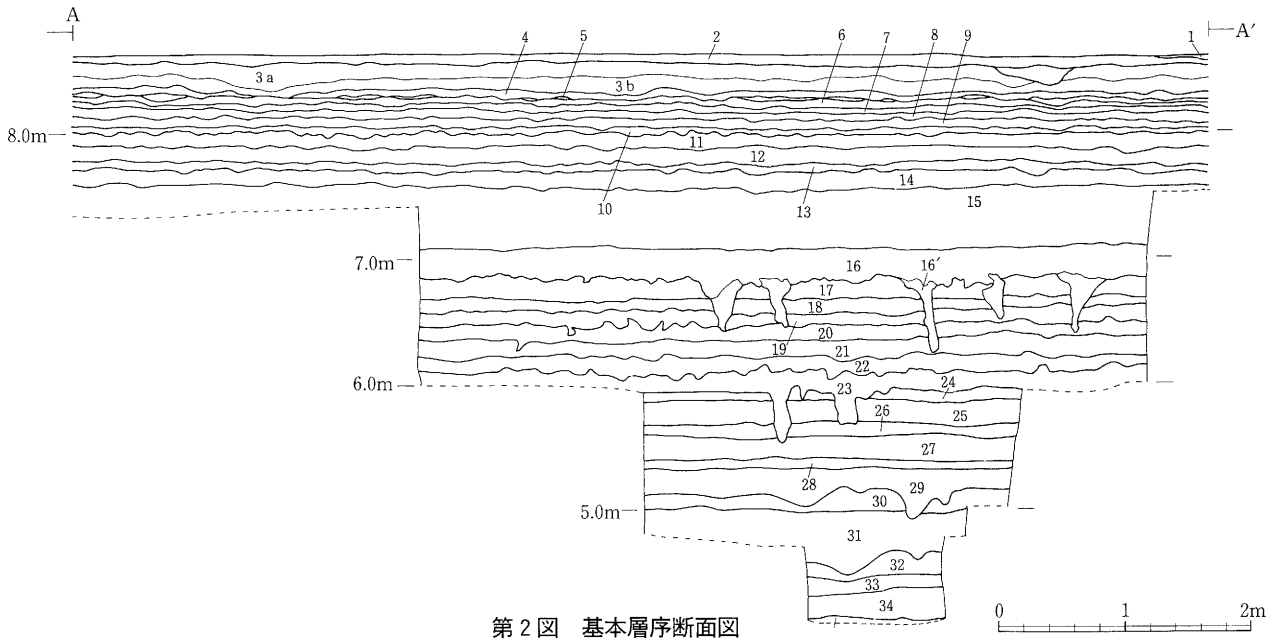
８・９層は縞状を呈する自然堆積層で、特に８層は中央に薄い黒色粘土層をはさんでいる。

10層は下面に起伏が認められ、水田耕作土の可能性が考えられる。

12～15層は泥炭質粘土と粘土が互層になる自然堆積層で合わせて80cm程の厚さになる。

第１表　基本層序注記表

層序	土　色	土　性	粘　性	しまり	層厚（cm）	備　考
1						１日耕作土。
2	暗オリーブ灰色　2.5GY4/1	粘土	あり	あり	4～10	酸化鉄・マンガンを斑状に含む。
3a	灰黄褐色　10YR4/2	粘土	あり	あり	7～20	酸化鉄・マンガンを２層より多く含む。上部に厚さ２cmの黄褐色粘土を部分的に含む。
3b	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土	あり	あり	6～15	酸化鉄・マンガンを斑状に含むが、マンガンが多い。3a 層よりやや明るい。
4	褐灰色　10YR4/1	粘土	あり	ややあり	3～8	酸化鉄・マンガンを斑状に含む。上部に厚さ１cm程の黄褐色粘土をわずかに含む。3b 層より黒味が強い。
5	にぶい黄橙色　10YR6/3	粘土	あり	ややあり	3～5	
6	灰黄褐色　10YR4/2	粘土	あり	ややあり	3～8	下面やや乱れる。
7	オリーブ灰色　2.5GY4/1	粘土	あり	なし	2～5	薄い黒色粘土層を上部に部分的に含む。
8	オリーブ灰色　5GY5/1	粘土	あり	ややあり	3～10	薄い黒色粘土層を中央にすじ状に含む。
9	オリーブ灰色　2.5GY5/1 褐灰色　10YR4/1 黒色	粘土 粘土 粘土			5～8	互層
10	灰色　5Y4/1	粘土	あり	ややあり	3～8	下面やや乱れる。水田耕作土？
11	緑灰色　7.5GY5/1	粘土	あり	なし	6～15	
12	暗灰黄色　2.5Y5/2 黄灰色　2.5Y5/1 黒色　10YR1.7/1	粘土 粘土 泥炭質粘土	あり あり あり	なし なし なし	10～15	互層。植物遺体を含む。
13	黄灰色　2.5Y4/1	粘土	あり	なし	5～10	植物遺体を含む。
14	黒色　10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	10～17	植物遺体を含む。
15	黄灰色　2.5Y4/1 黒色　10YR1.7/1	粘土 泥炭質粘土			50	互層。植物遺体を含む。
16	黒色　2.5Y2/1	粘土	あり	なし	20～30	植物遺体を含む。薄い黄褐色粘土層を上部に含む。下面乱れ、樹根を含む。
16′	黒褐色　2.5Y3/1	粘土	あり	なし		16・17層を部分的にブロック状に含む。
17	灰色　5Y4/1	粘土	あり	なし	10～20	植物遺体を少量含む。
18	黒褐色　2.5Y3/1	粘土	あり	なし	5～15	植物遺体を少量含む。
19	灰色　5Y4/1	粘土	あり	なし	6～15	凝灰岩粒（径１cm）を稀に含む。植物遺体を少量含む。
20	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	あり	なし	8～15	植物遺体を少量含む。
21	灰オリーブ色　7.5Y4/2	粘土	あり	なし	10～20	砂粒を少量含む。植物遺体を少量含む。
22	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	あり	なし	6～20	植物遺体を少量含む。
23	黒色　2.5Y2/1	粘土	あり	ややあり	10～20	植物遺体を少量含む。
24	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	あり	なし	6～10	植物遺体を少量含む。
25	オリーブ黒色　5Y2/2	粘土	あり	なし	20	植物遺体を少量含む。
26	灰色　5Y4/1	粘土	あり	ややあり	8～15	植物遺体を少量含む。
27	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	あり	ややあり	15～20	淡いピンク色の火山灰をブロック状態に含む。植物遺体を少量含む。
28	暗緑灰色　7.5GY4/1	粘土	あり	なし	5～10	植物遺体を少量含む。
29	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	あり	あり	15～30	植物遺体を少量含む。
30	暗オリーブ灰色　2.5GY4/1	粘土	あり	ややあり	10～20	植物遺体を少量含む。
31	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	あり	あり	30～50	植物遺体を少量含む。
32	緑灰色　7.5GY5/1	粘土	あり	ややあり	5～20	植物遺体を少量含む。
33	緑灰色　10GY5/1	粘土	あり	かなりあり	10～15	植物遺体を少量含む。
34	緑灰色　10GY6/1	粘土	ややあり	かなりあり	15～25	細砂を霜降り状に含む。
35	濃い緑灰色	粘土		かなりあり		非常に堅い層。オリーブ灰色と霜降り状になる。



第２図　基本層序断面図

16～31層は黒褐色系と灰色系とが交互になる粘土層で、16・23層の下面には根の痕跡状の落ち込みが見られる。27層には淡いピンク色の火山灰が小ブロック状にわずかに含まれている。この火山灰は、分析の結果（第３章）約5500年前の十和田中掫テフラの可能性が高いことが判明している。

32層以下はグライ化が顕著な緑灰色の層である。特に35層は非常に堅く、これが旧石器時代の腐植層の上位によくみられる固結粘土層（太田：1995）に相当する可能性があるが確証はない。

35層以下は安全性を考慮し掘り下げは断念したが、ボーリング棒によりさらに約１ｍ土層を確認した。以下80cmは緑灰色の砂と粘土層が続き、やや暗い層が厚さ５cmで確認されている。これが旧石器時代の腐植層であるかは不明である。基底礫層は不明である。

4　検出された遺構と遺物

（1）２層

性格不明遺構（SX）を１条検出した。

SX01（第３図　写真１－３・４）

調査区の北西隅で検出した。3b層上面で検出したが西壁断面より２層の遺構と判断した。検出長は3.7m、幅0.4～0.7m、底面0.1～0.2m、深さ56～93cmである。平面形は北から南へ曲がる溝状を呈するが、底面が細く蛇行し凹凸がある。壁の立ち上がりは凹凸がみられ不安定である。堆積土は３層で粘性が強く、締りがなく、特に３層はかなりべたつく軟弱な層である。溝や自然流路とは異なる自然の営能力によるものと考えられる。遺物は出土していない。

２層出土遺物

土師器２点、須恵器１点、陶器２点、磁器１点、素焼土器２点、古銭１点が出土している。土師器は細片で器種調整不明である。須恵器は甕の体部片（第６図１）で外面平行タタキである。陶器は擂鉢の体部片（同図２）で、すじ目に鉄化粧の痕跡が観察される。丹波産で17世紀前半と考えられる。古銭は寛永通寶の「文銭」（同図３）である。

（2）3層

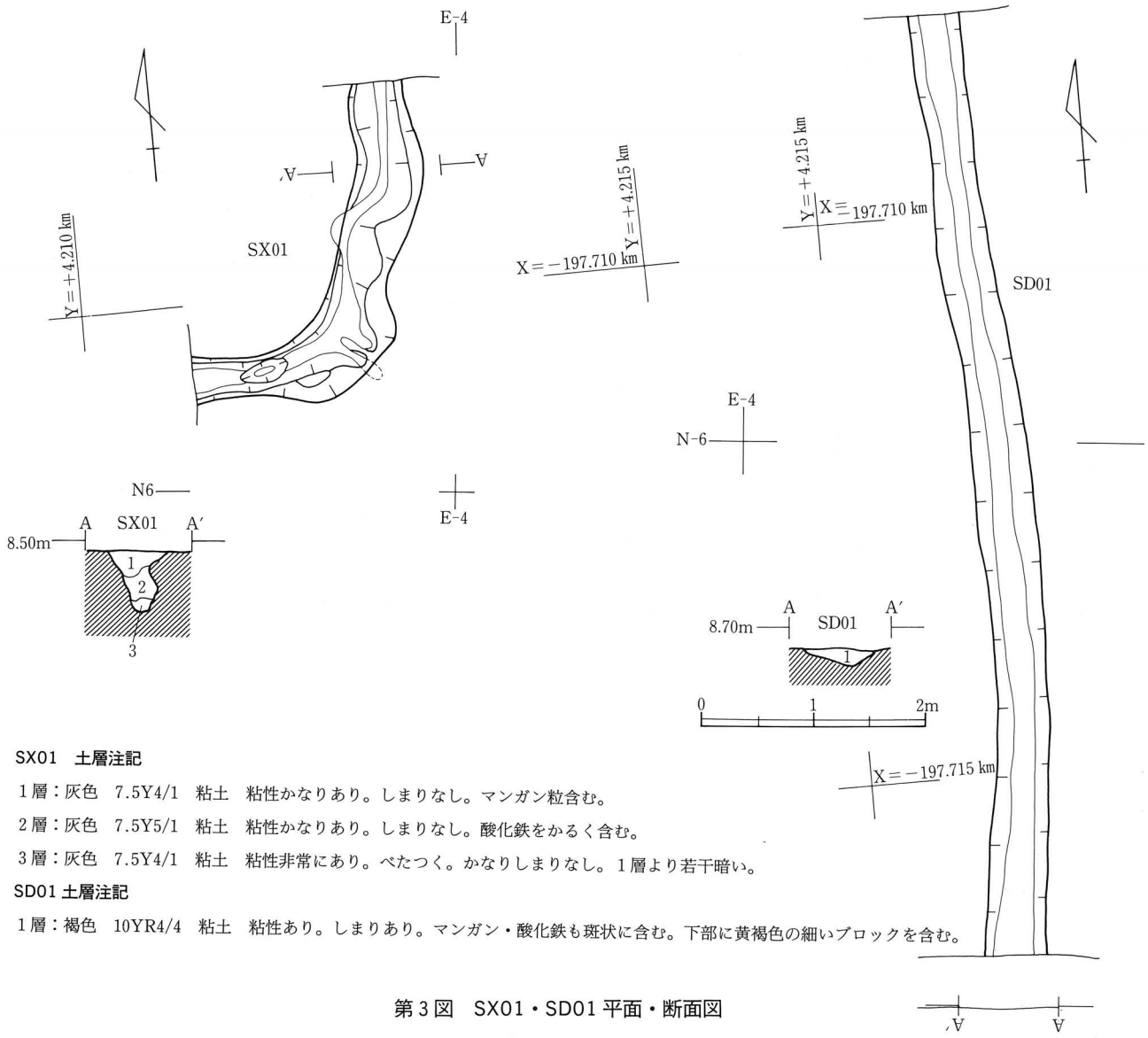
溝跡（SD）を1条検出した。

SD01（第3図）

調査区の中央やや西寄りで検出した。3b層上面で検出したが南壁断面より3a層上面の遺構と判断した。規模は検出長8.5m、上幅0.5m前後、下幅0.15～0.3m、深さ6～12cmである。方向はほぼ真北で直線的に伸びる。断面形はやや不整形な皿状を呈する。底面は平坦でほぼ水平である。堆積土は1層で出土遺物はない。

3層出土遺物

陶器2点、磁器2点が出土している。いずれも細片で図示していない。陶器は灰釉の碗で1点は瀬戸美濃産（写真2－1）で、1点は大堀相馬産でともに18世紀のものである。磁器は肥前産の急須の蓋（18～19世紀）と産地不明の色絵の碗（19世紀後半）である。



SX01　土層注記

1層：灰色　7.5Y4/1　粘土　粘性かなりあり。しまりなし。マンガン粒含む。

2層：灰色　7.5Y5/1　粘土　粘性かなりあり。しまりなし。酸化鉄をかるく含む。

3層：灰色　7.5Y4/1　粘土　粘性非常にあり。べたつく。かなりしまりなし。1層より若干暗い。

SD01 土層注記

1層：褐色　10YR4/4　粘土　粘性あり。しまりあり。マンガン・酸化鉄も斑状に含む。下部に黄褐色の細いブロックを含む。

第3図　SX01・SD01平面・断面図

（３）10層

10層水田跡（第５図）

調査区南側で10層を掘り下げ中に11層の帯状の伸びとして、凝似畦畔Ｂを２条（１・２）と区画①を検出した。

10層は下面に凹凸がみられ撹拌を受けた層相で水田耕作土壌を呈していること、11層が自然堆積層であること、プラントオパール分析で水田跡の可能性が指摘されていることなどから、前述の11層の帯状の伸びを10層水田跡が形成した擬似畦畔Ｂと判断した。

擬似畦畔１は方向が北西（Ｎ－55°－Ｗ）、検出長6.5m、幅0.2～0.35mである。２は方向が北東（Ｎ－43°－Ｅ）、検出長が３m、幅が0.15～0.3mである。

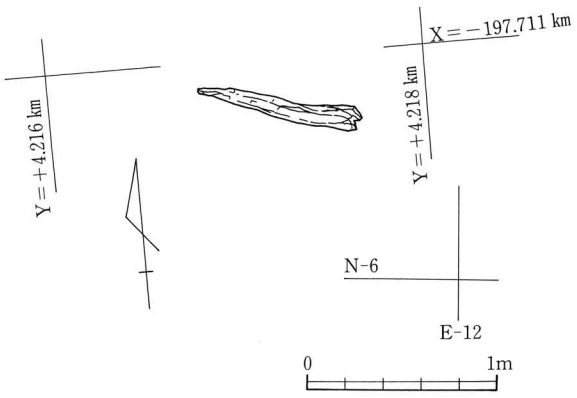
10層は灰色粘土層で全域に分布する。しかし、層厚が東半で５～10cmと西半よりやや厚く、下面の凹凸も東半が顕著であることから、境界線は不明だが耕作域は擬似畦畔の検出された東半部である可能性も考えられよう。

出土遺物はない。

（４）16層

樹根跡（写真２－３）

深掘区東半部の16層下部で小規模の根株を検出した。平根、根株は16～17層にかけて出土しているが、互いに連続した状態では検出できなかった。なお、17層上面では樹根状の16層の落込みを検出している。

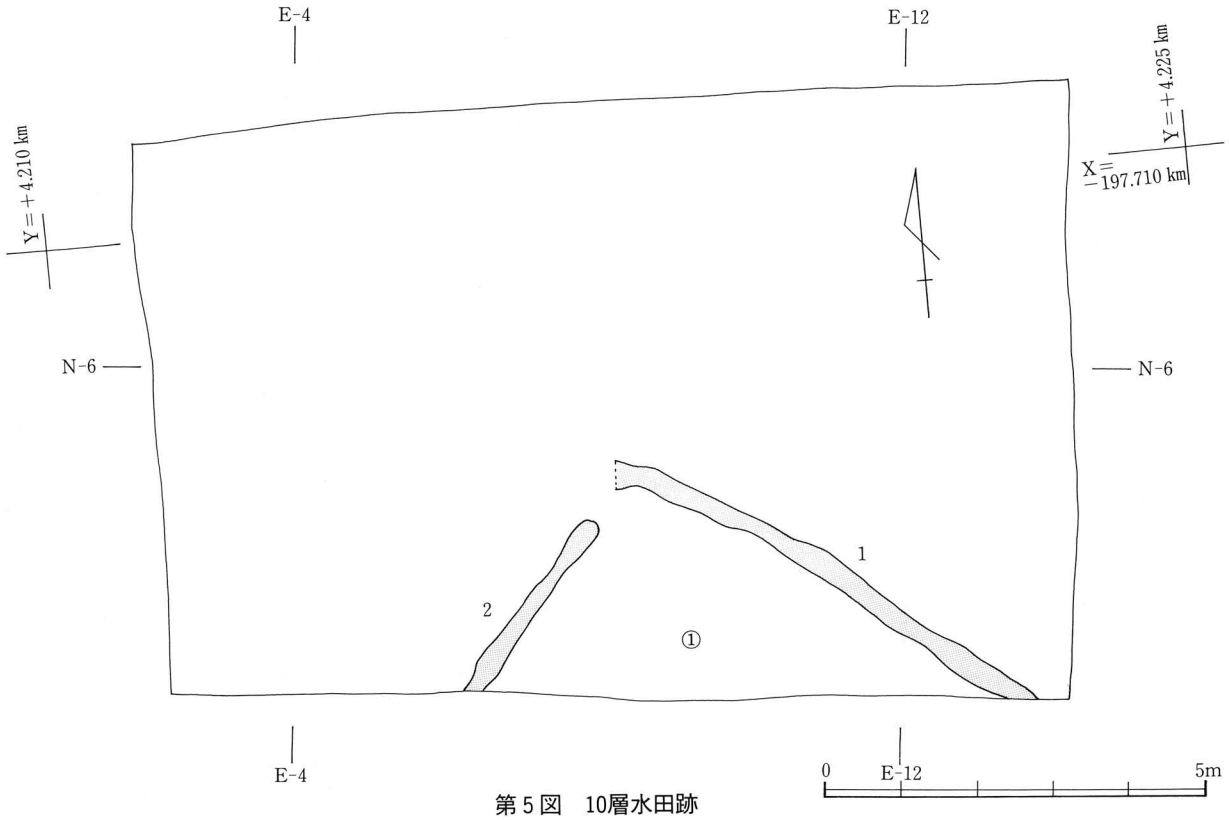


第４図　24層樹木片

（５）24層

樹木片（第４図）

24層中で長さ約90cm、径約10cmの樹木片を横位で検出した。



第５図　10層水田跡

一端が尖っているが加工されてはいない。

6　遺構の所属年代とまとめ

（1）検出した遺跡は、2層で性格不明の遺構（SX01）、3b層で溝1条（SD01）、10層水田跡である。また、2～6層は層相から水田土壌の可能性がある。

（2）周辺調査区との対比

今次調査区は富沢遺跡における北部A地区基本層序（佐藤甲：1991）に包括される。近接した調査として、41次（佐藤甲：1989）、49次第8地点（佐藤甲：1990）、64次（佐藤淳：1991）がある。それらとの層の対応関係は層相から以下のようになる。

今次	41次	49次－8地点	64次	北部A
5		5b	7	6
6		6b		8a
7	5	8b	8	8b
				9a（弥生：十三塚式期水田跡）
8	5	9b	8	9b
9	6	10a	8	10a
10	7			10b（弥生：水田跡）或いは10d（弥生：水田跡）
11	8	10e	9	10e
				11（弥生：桝形囲式期水田跡）
12	8	12a	10	12a
13	8	12b	10	12b
14	9	13	11	13

（3）SX01

2層上面で検出されたSX01は、不整形な形状や基本層を撹拌したような堆積土の状況から人工的なものではなく自然営力によるものと判断された。同様のものが87・89次等で確認されている。

（4）SD01

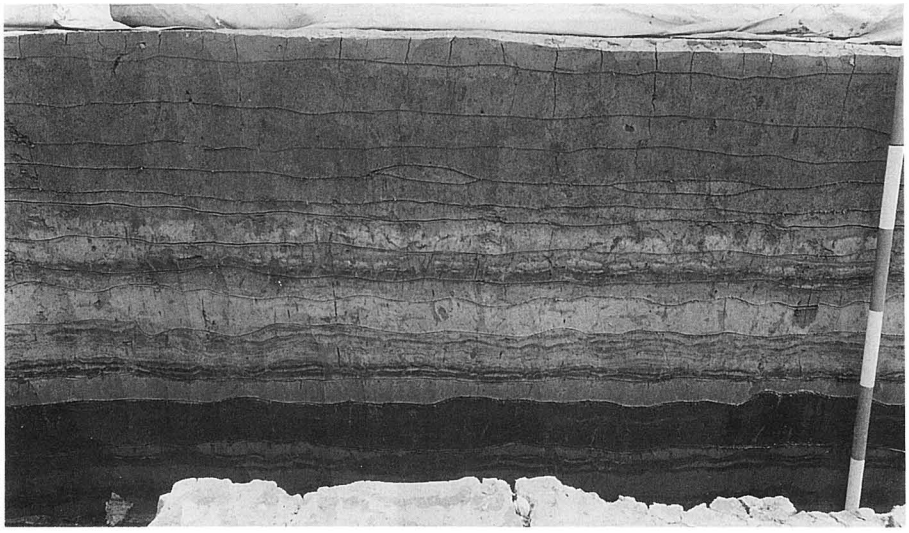
SD01からの出土遺物はないが、検出面の3層から19世紀後半の磁器が出土していることから近代以降のものと考えられる。南の隣接する41次調査においても南北の溝跡が検出されているが位置が不明のため対応は不可能である。

（5）10層水田跡

出土遺物はないが、北部A地区基本層序の10b或いは10d層に対応することから、弥生時代の桝形囲式期から十三塚式期にかけての時期に位置づけられよう。擬似畦畔が2条検出されたのみであるが、10b或いは10d層が西半で薄くなることから耕作域の境界が存在した可能性が考えられる。近辺における同時期の水田ないし水田耕作土は53次・83次でともに北部A地区基本層序の10d層である。

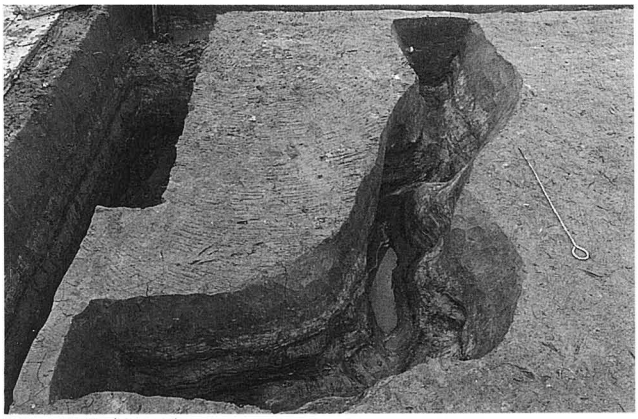
図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	残　存	写真図版	登録番号
1	須恵器　甕	2層	内面ナデ、外面平行タタキ	体部片	2－3	E－1
2	陶器　擂鉢	2層	すじ目に鉄化粧の痕跡、丹波産、17C前半	体部片	2－2	I－2
3	古銭	2層	寛永通寶「文銭」長さ2.5cm　厚さ1.14cm	約1/2	2－4	N－1

第6図　出土遺物

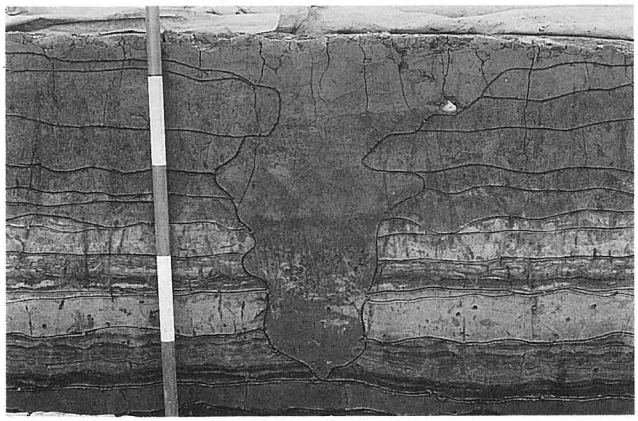


1．南壁断面

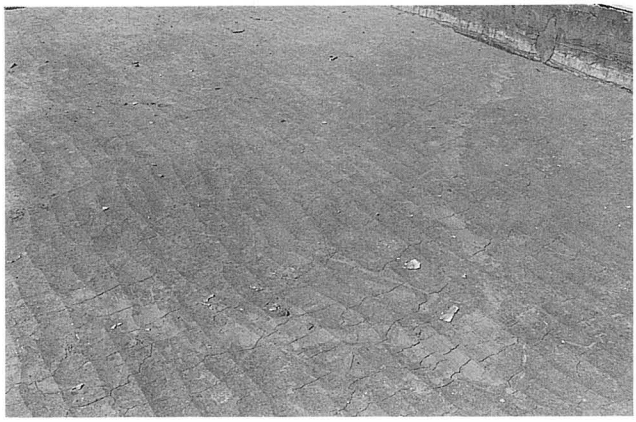
2．調査区近景（西から）



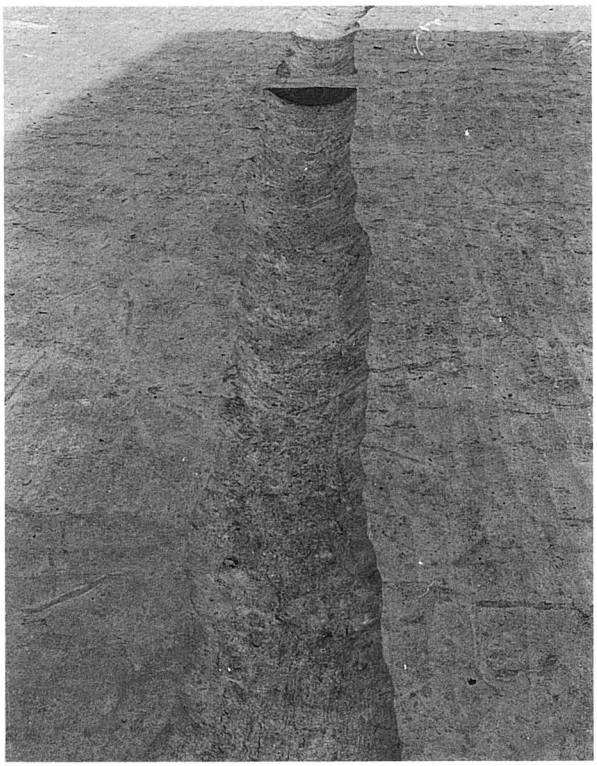
3．SX01（南から）



4．SX01断面（西壁）

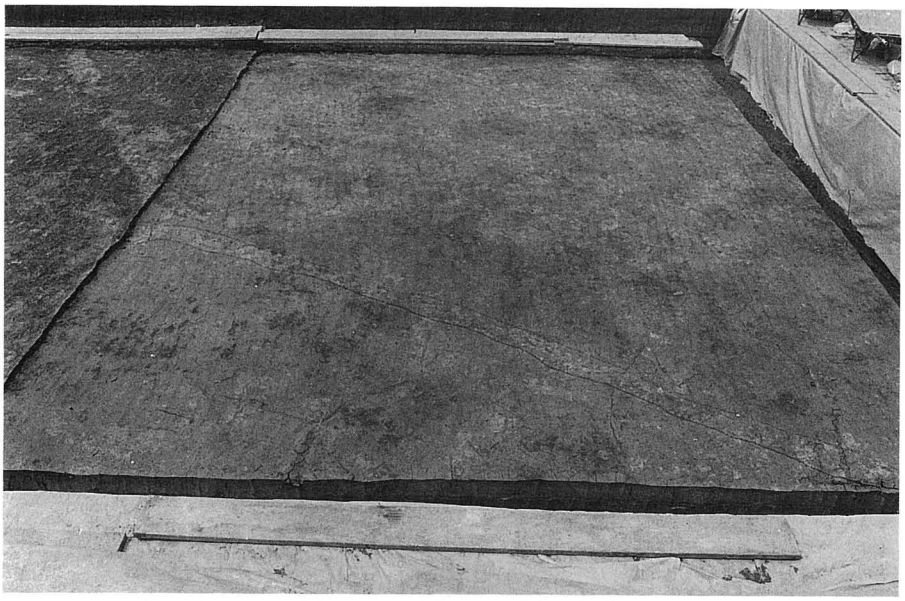


5．3層下部地割れ状（南から）



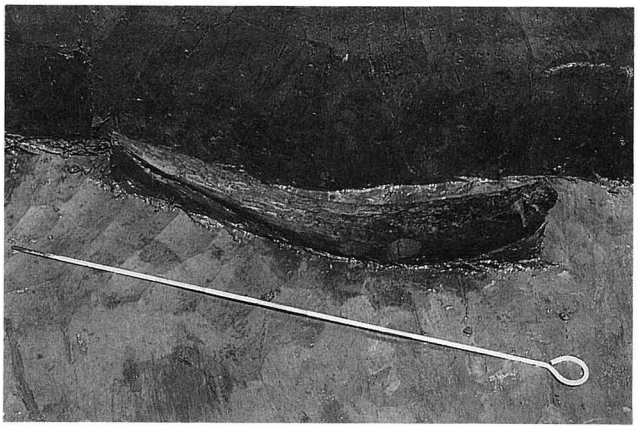
6．SD01（南から）

写真1

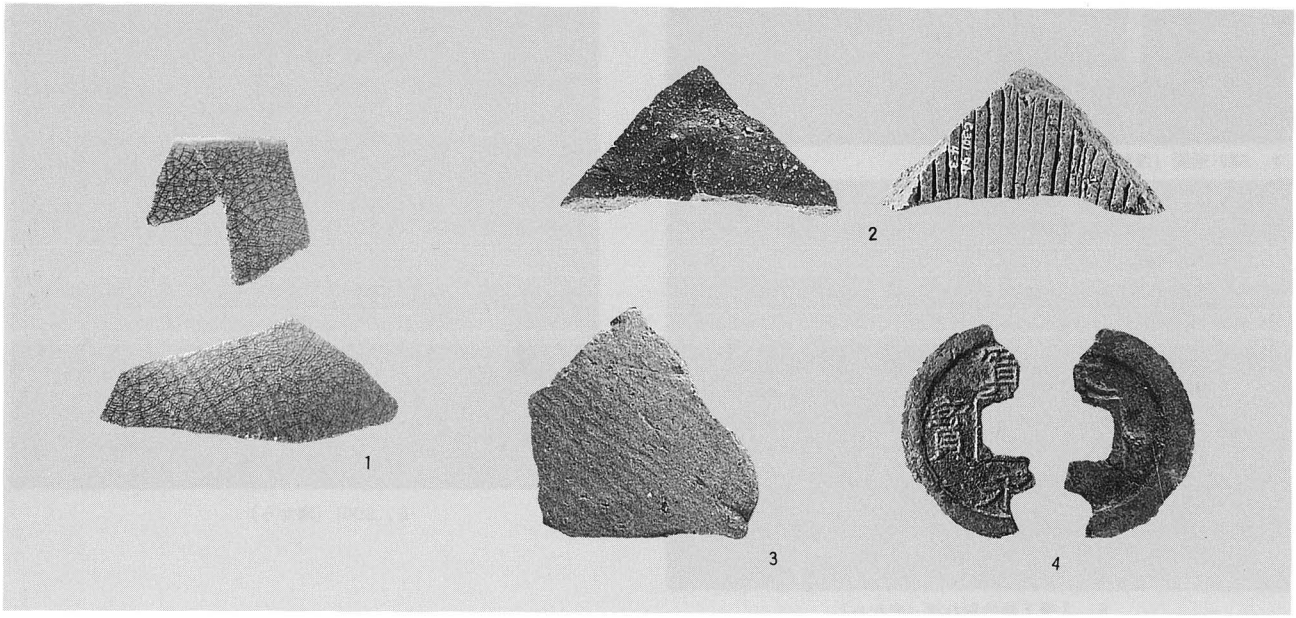


1．10層水田跡（南から）

2．16層樹根痕（南から）



3．24層樹木片（南から）



4．出土遺物

写真2

第３節　富沢遺跡第97次調査

１　調査に至る経緯

平成７年10月11日付けで、松浦　学氏よりRC ７階建共同住宅建設の発掘届が提出されたが、当教育委員会では７年度の調査は決定していたため、平成８年度の発掘調査として受託することでご了解を得たものである。

平成８年３月、発掘調査の実施に先立ち申請者側と第１回目の協議を持った。内容は調査時期、期間、契約額、事前の準備事項などであり、以後も打ち合せを重ね契約を交わし、９月５日から発掘調査を開始した。

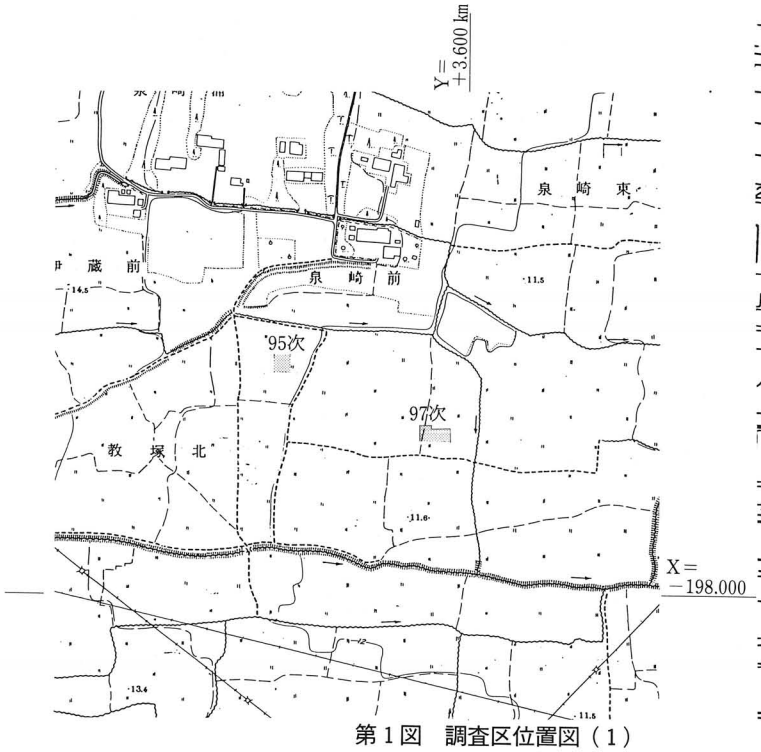
２　調査の方法

調査箇所は富沢遺跡のやや南西部にあたる。付近は20年ほど前に行われた区画整理以後は１～1.2mほどの盛土がなされ宅地や店舗等になっている。それ以前は水田として利用されており、調査箇所は泉崎の集落南側の等高線がややくぼむ谷の中央やや北よりに位置している（第１図）。旧字名では泉崎前にあたる。

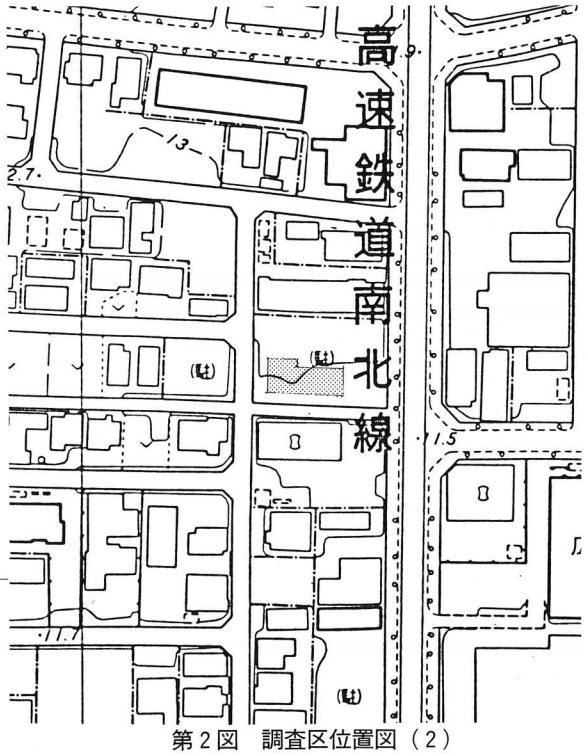
今回の調査対象面積は590㎡である。その中に東西25m、南北９～11m、面積240㎡の調査区を設定した。測量基準線は調査区南西隅外の任意の点を原点（Ｎ＝00、Ｅ＝00）として、南北方向をＮ01～13、東西方向をＥ01～27とした。遺跡内の正確な位置は調査地内の任意の２点Ａ（Ｘ＝－197863.026m、Ｙ＝＋3557.125m）、Ｂ（Ｘ＝－197869.745m、Ｙ＝＋3601.245m）の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し把握している。

遺構の実測、写真などは95次調査と同様である。土壌サンプリングは、プラント・オパール分析用に7a・b層を中心に５地点で計21点、火山灰分析用に15層で実施している。

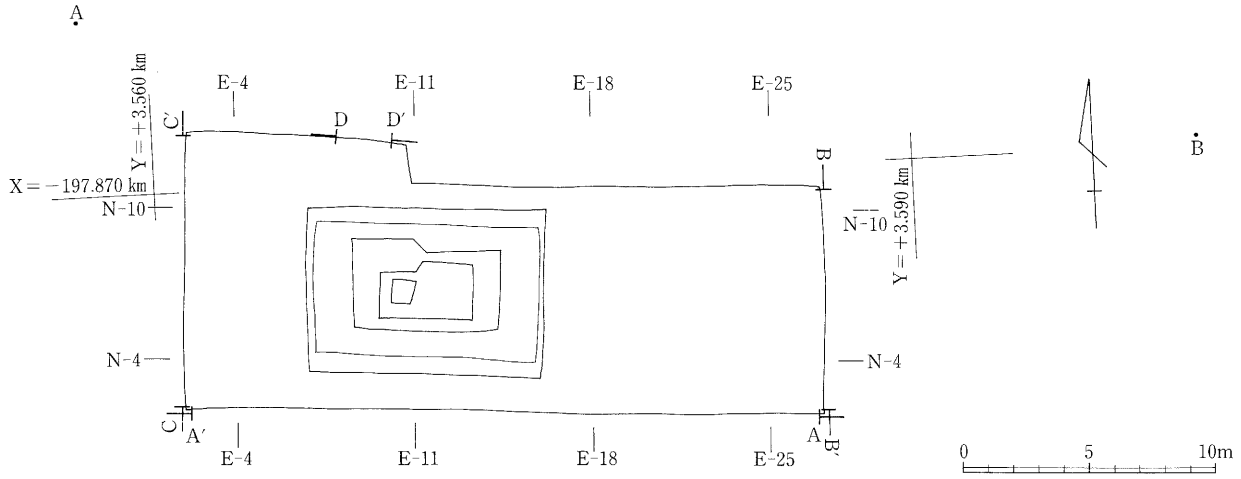
調査は平成８年９月５日から調査員２名、作業員21名の体制で開始した。盛土及び旧耕作土は重機により除去し、以下は人力により掘り下げた。なお、調査区周囲には土層観察および排水用の側溝を設けた。近世以降と考えられる２層の水田跡から弥生時代の水田耕作土を掘り上げた８層上面までは全面調査を実施した。８層以下は縄文・旧石器時代の層の確認を目的とし調査区を縮小した（５×９m）。深掘に関しては安全性を考慮し、該当層までできる限り広い面積を確保し行うこととした。16層で縄文時代早期末の遺物を含む層を検出した。さらに約1.5m掘り下げ（深度約５m）22層まで確認したが、湧水が激しく安全性を考慮し掘り下げを終了した。旧石器時代の層は確認されなかった。調査の一切を終了したのは11月26日である。



第１図　調査区位置図（１）



第２図　調査区位置図（２）



第3図　調査区設定図

3　基本層序

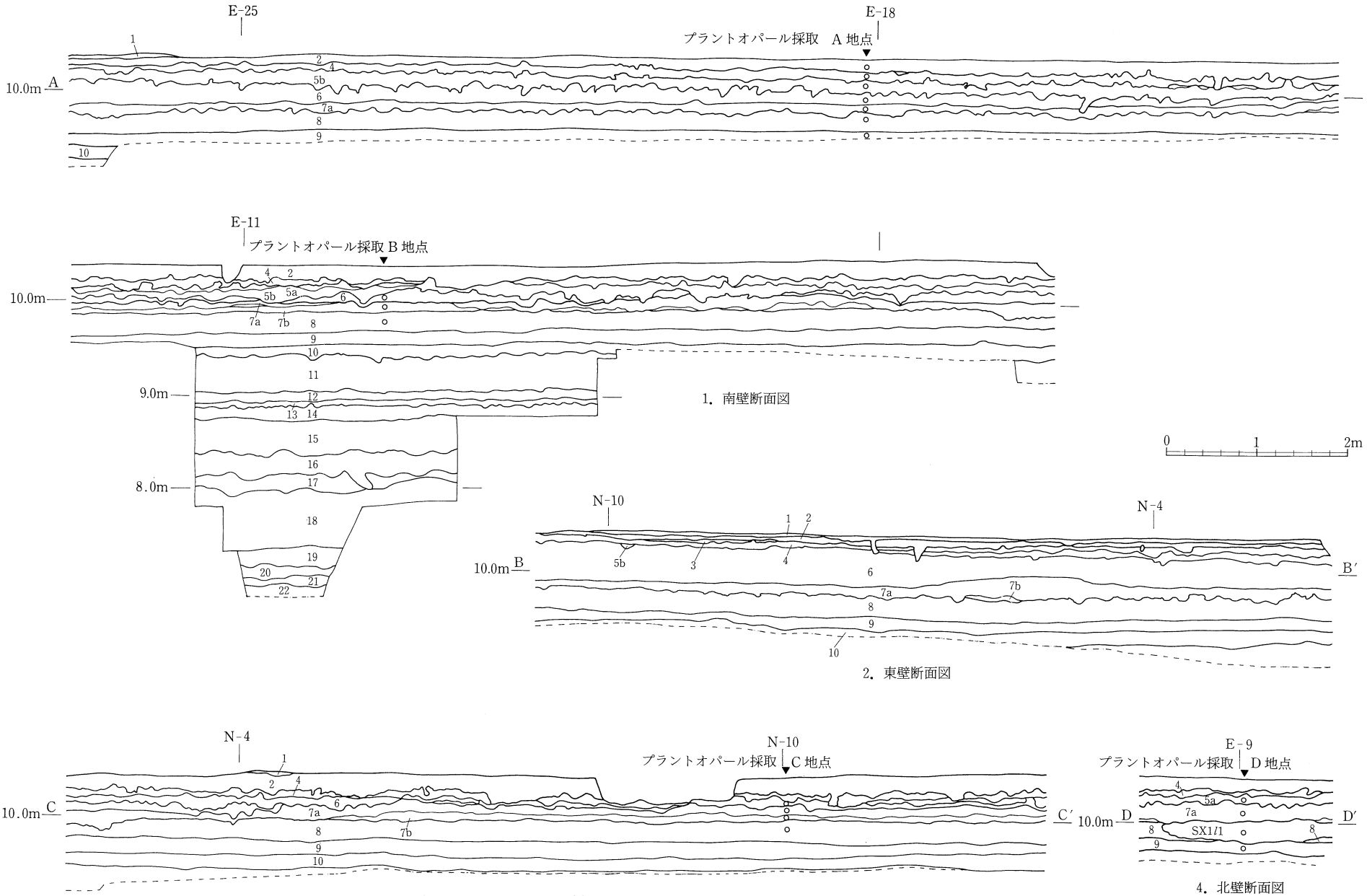
確認された層は大別で22層、細別で24層である。層序を大まかにみると1～5層がシルト・粘土層、6～12層が粘土や泥炭質粘土と粘土の互層を中心としたとした層、13層以下がシルト・粘土層となる。顕著なグライ化は15層以下である。

1層は旧水田耕作土、2～5層も水田耕作土と考えられる層である。これらの層には、下面の凹凸が著しなり、層の下部には直下に層を起源とするブロックが分布する、という水田耕作土に一般的な特徴が認められる。

2層は東側に薄く西側に厚くなるが、それは東側では2層上部が1層の耕作により影響を受けたためと考えられる。3層は東側に部分的に残存するのみである。4・5層は平安時代の水田耕作土と考えられる。4層中には10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰がごくわずかに小ブロックで含まれる。4層は東に厚く堆積する6層の砂

第1表　基本層序注記表

層序	土　色		土　性	粘　性	しまり	層厚(cm)	備　考
1	黒褐色	2.5Y3/1	砂質シルト	ややあり	ややあり		旧水田耕作土。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	あり	ややあり	10～20	水田耕作土。上部に酸化鉄集積。酸化鉄糸根状。砂粒・風化・凝灰岩含む。下面凹凸あり。
3	黒色	10YR2/1	砂質シルト	ややあり	ややあり	2～5	水田耕作土。部分的に残存するのみ。
4	黄灰色	2.5Y4/1	砂質シルト	ややあり	ややあり	5～15	水田耕作土。灰白色火山灰をわずかに小ブロックで含む。酸化鉄糸根状。下面凹凸あり。
5a	黒色	10YR2/1	粘土	ややあり	なし	5～20	水田耕作土。酸化鉄糸根状。下面凹凸あり。
5B	黒色	10YR2/1	粘土	あり	なし	5～15	水田耕作土。5a層よりやや黒い。酸化鉄管状。下面凹凸あり。
6	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	5～40	自然堆積層。互層。上部が砂で、下部が粘土と泥炭の互層となる。
	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	あり	なし		
	灰オリーブ色	7.5Y5/2	粗砂～細砂	なし	なし		
7a	黒色	10YR2/1	粘土	あり	なし	5～25	水田耕作土。植物遺体・風化凝灰岩を含む。下面に凹凸あり。
7b	黒褐色	10YR3/1	粘土	あり	なし	4～10	自然堆積層。互層。黒褐色粘土の方は7a層より明るく、褐色気味に見える。
	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	あり	なし		
8	黒色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	20	自然堆積層。黒色土の方は植物遺体を多く含む。
	灰黄褐色	10YR4/2	泥炭質粘土	あり	なし		
9	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	あり	なし	15	自然堆積層。下部が明るい。植物遺体を含む。
	黒褐色	10YR3/2	泥炭質粘土	あり	なし		
10	黒褐色	10YR2/2	シルト質粘土	あり	なし	10～15	自然堆積層。植物遺体を含む。下面に凹凸あり。
11	灰オリーブ	7.5Y5/2	粗砂	なし	ややあり	40	自然堆積層。下部に大粒の砂、風化凝灰岩を含む。
12	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	あり	なし	10～15	自然堆積層。互層。植物遺体を含む。
	黒色	10YR2/1	泥炭質粘土	あり	なし		
13	黒色	10YR2/1	粘土	あり	なし	5～10	自然堆積層。植物遺体を含む。
14	黒褐色	5Y3/1	粘土	あり	なし	10～20	自然堆積層。植物遺体を含む。
15	灰オリーブ色	7.5Y4/2	シルト質粘土	あり	なし	30～40	自然堆積層。植物遺体を含む。火山灰を極少ブロックに含む。
16	オリーブ黒色	7.5Y3/2	シルト	あり	なし	20～30	自然堆積層。植物遺体を含む。下面に凹凸あり。遺物を含む。
17	暗緑灰色	5GY4/1	砂質シルト	ややあり	なし	15～25	自然堆積層。植物遺体を含む。16層をブロックに含む。
18	暗緑灰色	10GY4/1	細砂	ややあり	なし	60	自然堆積層。植物遺体を含む。
19	暗緑灰色	5GY4/1	砂質シルト	ややあり	あり	20	自然堆積層。植物遺体を含む。
20	暗緑灰色	10GY4/1	シルト質粘土	ややあり	かなりあり	10～15	自然堆積層。植物遺体を含む。
21	緑灰色	10GY4/1	シルト質粘土	ややあり	かなりあり	10～15	自然堆積層。植物遺体を含む。
22	暗緑灰色	7.5GY4/1	シルト	あり	あり	10～15	自然堆積層。植物遺体を含む。


E-25
E-18
プラントオパール採取　A 地点
10.0m A
E-11
プラントオパール採取 B 地点
10.0m
9.0m
8.0m
1. 南壁断面図
0 1 2m
N-10
N-4
10.0m B
B′
2. 東壁断面図
N-4
N-10
プラントオパール採取 C 地点
10.0m C
C′
3. 西壁断面図
E-9
プラントオパール採取 D 地点
10.0m D
D′
SX111
4. 北壁断面図

第 4 図　基本層序断面図

層のため、東側ほど砂のブロックを増してより砂質化し西側ほど粘土質化している。5a層はより西側に分布する。5b層は西側で5a層により撹拌を受けている。

6層は上部が若干の薄い粘土層を挟む砂層、下部が泥炭質粘土と粘土の相互となる自然堆積層である。砂層は北東、特に7a層の畦畔1の北側に厚く（最大厚40cm）調査区中央まで分布し、北東から南西への傾斜を形成している。この砂の堆積は6層より上位各層の微地形に影響を及ぼしている。

7a層は弥生時代と考えられる水田耕作土で、黒色の粘土である。7b層は7a層より明るく褐色気味に見える層で、7a層の母材と考えられる。

8層以下は自然堆積層で、11層には層厚40cmの厚い砂層があり、15層以下はグライ化する。15層には白色の火山灰が極小ブロックで含まれる。

16層はグライ化した中でも黒味を帯びた層で縄文時代早期末の遺物を含む層である。下面に凹凸が見られるが樹根などによるものと考えられる。20・21層はかなり堅く、これらが旧石器時代の腐植層の上位によく見られる固結粘土層（太田：1995）に相当する可能性があるが確証はない。22層以下は湧水が激しくなり安全性を考慮し掘り下げは標高約6.8mで断念した（深度5m）。ボーリング調査によれば基底礫層は標高5.5～6.0mである。

4　検出された遺構と遺物

（1）4層

4層水田跡（第5図）

4層は黄灰色の砂質～粘土質シルト（東に行くほど砂質化する）で、全域に分布している。層中にわずかに灰白色火山灰を含む。

畦畔状高まり3条、段差1ケ所、区画5区画、土坑（SK）2基を検出した。

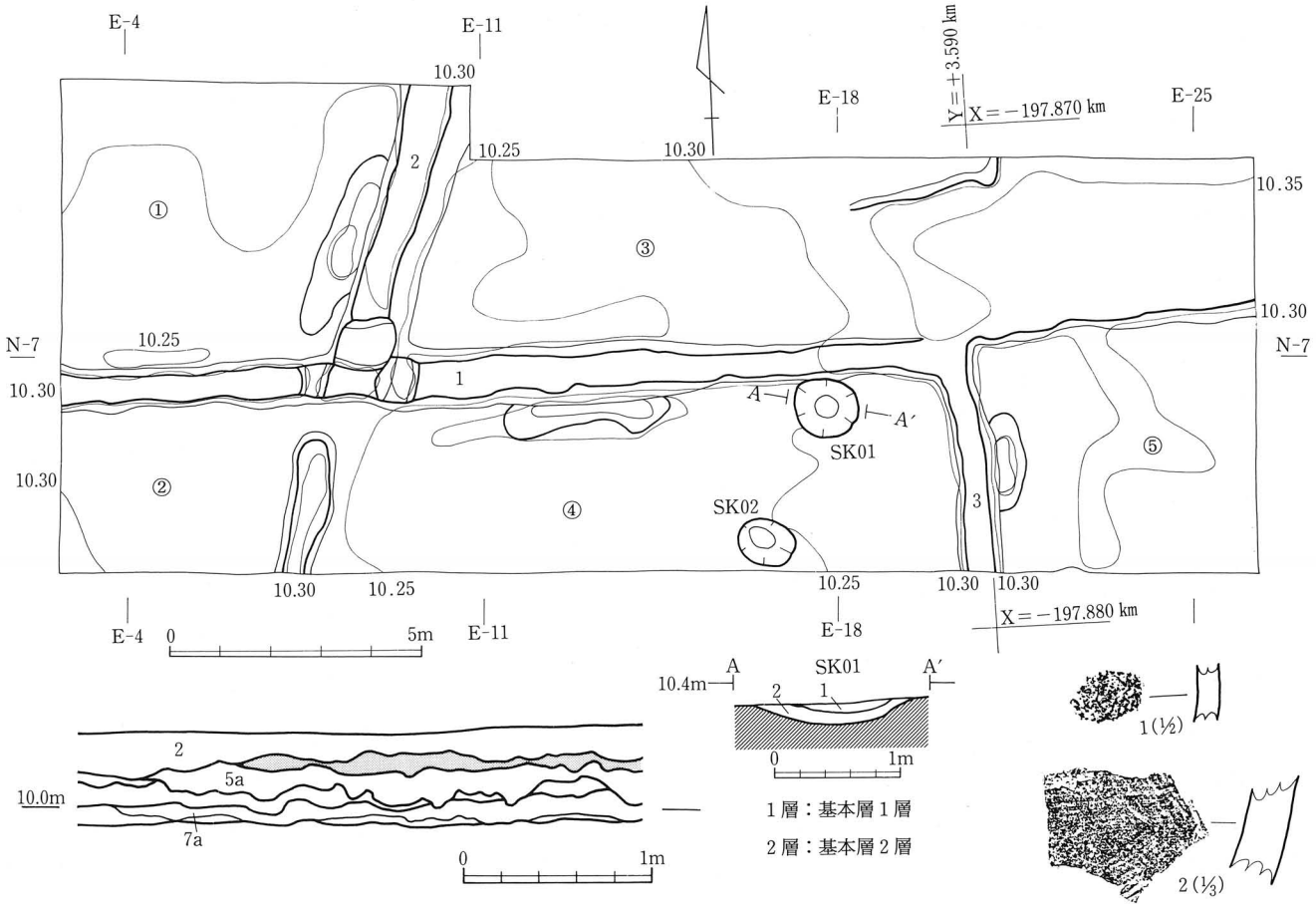
畦畔状の高まりは、真東方向の1とそれに接続する南北方向の2・3である。1は上端幅0.5～0.7m、下端幅0.6～1.2m、高さが残存のよい所で6cmで、方向はN－90°－Eである。検出長は23.5mであるが3との交差点より東は長さ約5.5mの段差で検出されている。2はやや東に振れて（N－20°－E）交差する。交差点の北側が上端幅0.7m、下端幅1.3mと太く、南側が上端幅0.4～0.7m、下端幅0.7～0.9mとやや細く、高さは良好な部分で6cmである。3は1にほぼ直角に接し方向はN－5°－W、規模は上端幅0.5m、下端幅0.8m前後、高さは良好な部分で7cmである。4は東西方向の段差で東端が北へくびれている。方向はN－80°－E、高さは良好な部分で4cmである。

区画は5枚あるが全体のわかるものはない。③は段差の4などからさらに区画される可能性がある。標高は10.2～10.35mで、③の西半が最も低い。③の東半が高いのは6層の砂層が厚く堆積しているためである。

水口状のものが1と2の交差点で検出されている。南側は2が途切れており幅0.9m、深さは4cmである。他は凹み状で幅0.5～1m、深さ2～4cmである。畦畔状高まりに接して溝状に浅く落込む部分が3ケ所検出された。1の中央南側、2の西側、3の東側である。長さは2～4m、幅0.7前後、深さ5cm前後である。堆積土は基本層2層である。

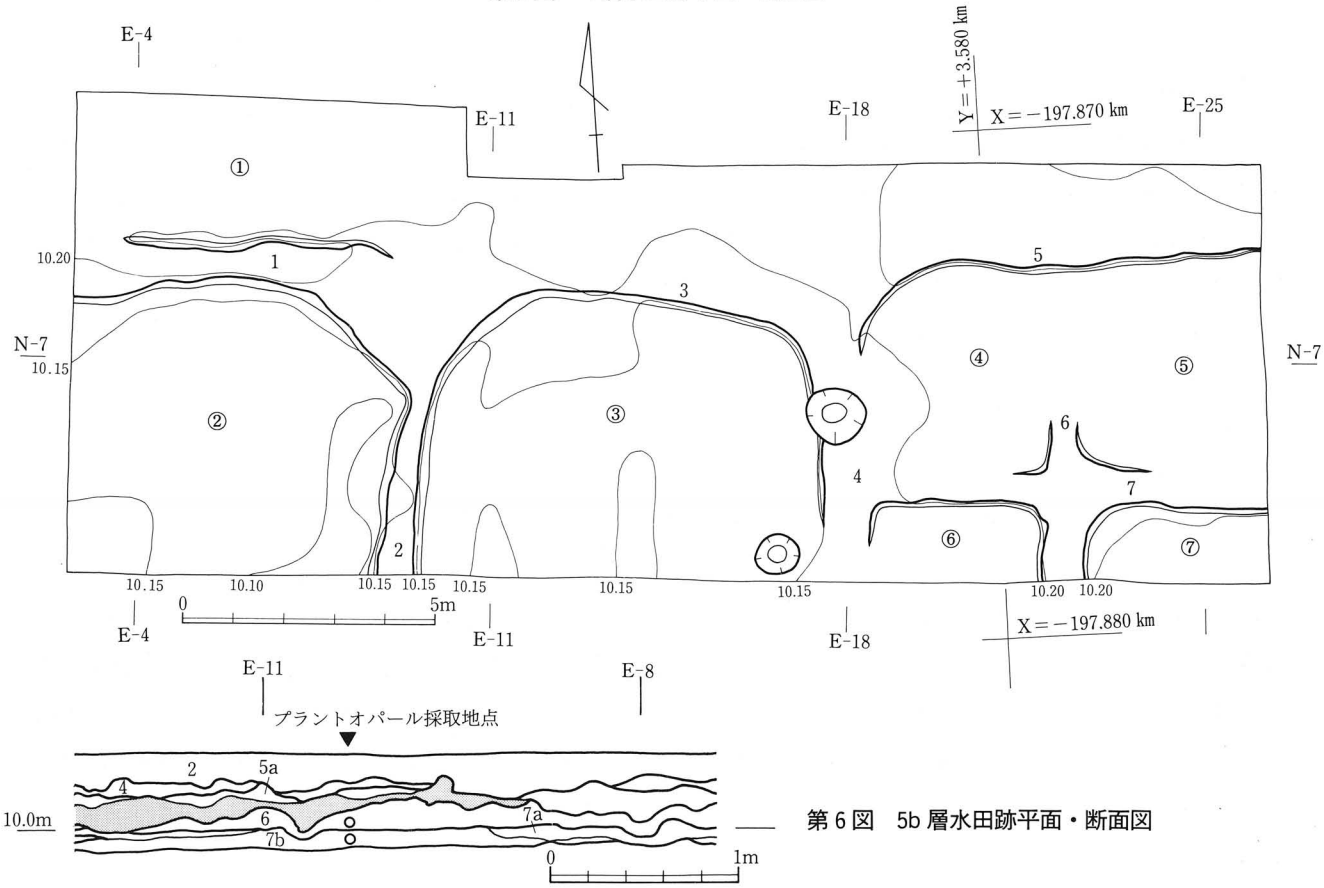
SK01・02は区画④内で検出された。SK01は、径約1.2mのほぼ楕円形、深さ20cm、SK02は0.8×1.2mの楕円形、深さ10cmである。堆積土はいずれも基本層2層である。底面、壁とも基本層4層であることから、下層に土坑状の存在が予想されたが、5層上面でも5層が底面、壁となる浅い凹み、6層では凹みがなくなることから、遺構とは認め難く、上位から強い圧力を受けへこんだものと理解した。

この水田面での畦畔状の高まりは、その上に上層の撹拌があまり見られないこと、畦畔状の高まりの脇に上層の耕作が深く及んだ落込みがあること、畦畔状の高まりの直下に疑似畦畔がないことなどから4層に伴うものではなく、2層の形成した擬似畦畔と考えられる。



図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	写真図版	登録番号
1	弥生土器　甕	4層	縄文LR	9－4	B－1
2	須恵器　甕	4層	外：平行タタキ→ナデ	9－3	E－2

第5図　4層水田跡平面・断面図



第6図　5b層水田跡平面・断面図

出土遺物は弥生土器片と須恵器片で、1は須恵器は甕の体部片である。2は弥生土器はLR縄文の小片である。

（2）5層

①5a層

5a層は層相から水田土壌と判断されたが畦畔などの遺構は検出されなかった。

②5b層

5b層水田跡（第6図）

5b層は黒色の粘土層でほぼ全域に分布するが、西端付近では5a層の撹拌を受け残存が悪くなっている。

畦畔状高まり5条、段差2ケ所、区画7区画を検出している。

畦畔状高まりは、ほぼ東西方向にのびる1とその延長方向の段差3・5、それらに接続する2・4・6・7である。1は方向がN－85°－Wで上端幅0.5～1m、下端幅0.8～1.2m、高さは良好な部分で4cmである。3はやや北に振れN－77°－Wで高さは良好な部分で7cmである。5は真東方向（N－90°－E）で高さは良好な部分で5cmである。1・3・5は、3の方向がややずれるものの連続するものと捉えられよう。2は1・3に広がりながらほぼ直角に接するもので方向はN－10°－E、上端幅0.4～0.7m、下端幅0.6～1mで、高さは良好な部分で6cmである。4は3・5に直角に接するがほぼ西側の段差のみとなっている。その方向は真北方向（N－0°－E）で、高さは良好な部分で5cmである。7は4に直角に接し、6は7に直交する。7の方向はN－85°－W、上端幅0.6m、下端幅0.7mで、高さ4cmである。6は方向N－3°－Eで上端部0.5～0.8m、下端幅0.6～1mで、高さは4cmほどである。

区画は7区画検出されているが全体のわかるものはない。規模のわかるものでは③と⑥の東西で約7.5mと約3.3m、④と⑤の南北が約4mである。標高は10.15～10.3mで北東が高くなっている。

畦畔状高まりの下位に擬似畦畔は検出されていない。

この水田跡は、畦畔状高まりの上に上層の撹拌があまり見られないことや、下位に擬似畦畔がないことなどから上層の4層あるいは5a層の形成した擬似畦畔の可能性が高いといえよう。出土遺物はない。

（3）6層

6層上面で畦畔状高まり1条と段差2ケ所を検出した（第7図）。6層は上部が砂層で、下部が粘土層の自然堆積層であることから、畦畔状高まりは擬似畦畔B、段差は耕作深度の違いにより生じたものとして擬似畦畔Bに準ずるものと捉えられよう。したがって、これらの遺構は上層の5bの水田跡が形成したものと考えられる。2は擬似畦畔Bで方向がN－85°－Wのほぼ東西である。1・3は段差で1の方向がN－67°－E、3がN－74°－Eと並行している。出土遺物はない。

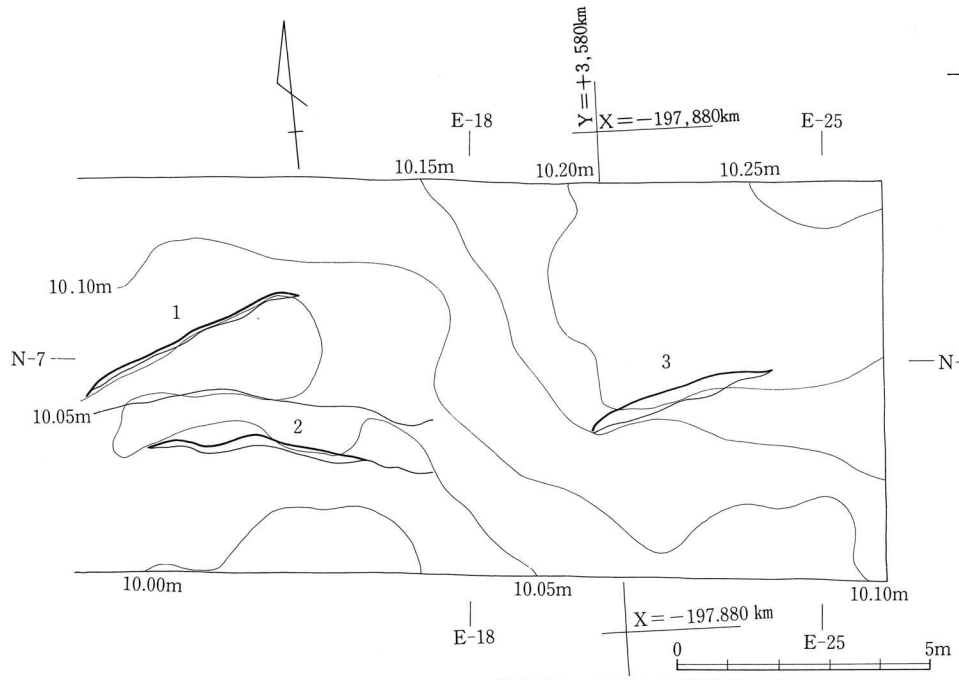
（4）7a層

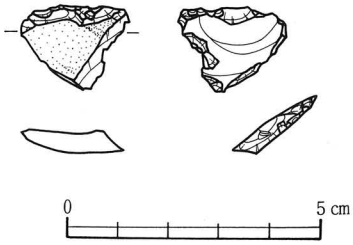
7a層水田跡（第8図）

7a層は黒色の粘土層で全域に分布する。7a層を覆う6層は自然堆積層である。

畦畔4条、段差4ケ所、溝跡（SD）1条、擬似畦畔B6条を検出した。

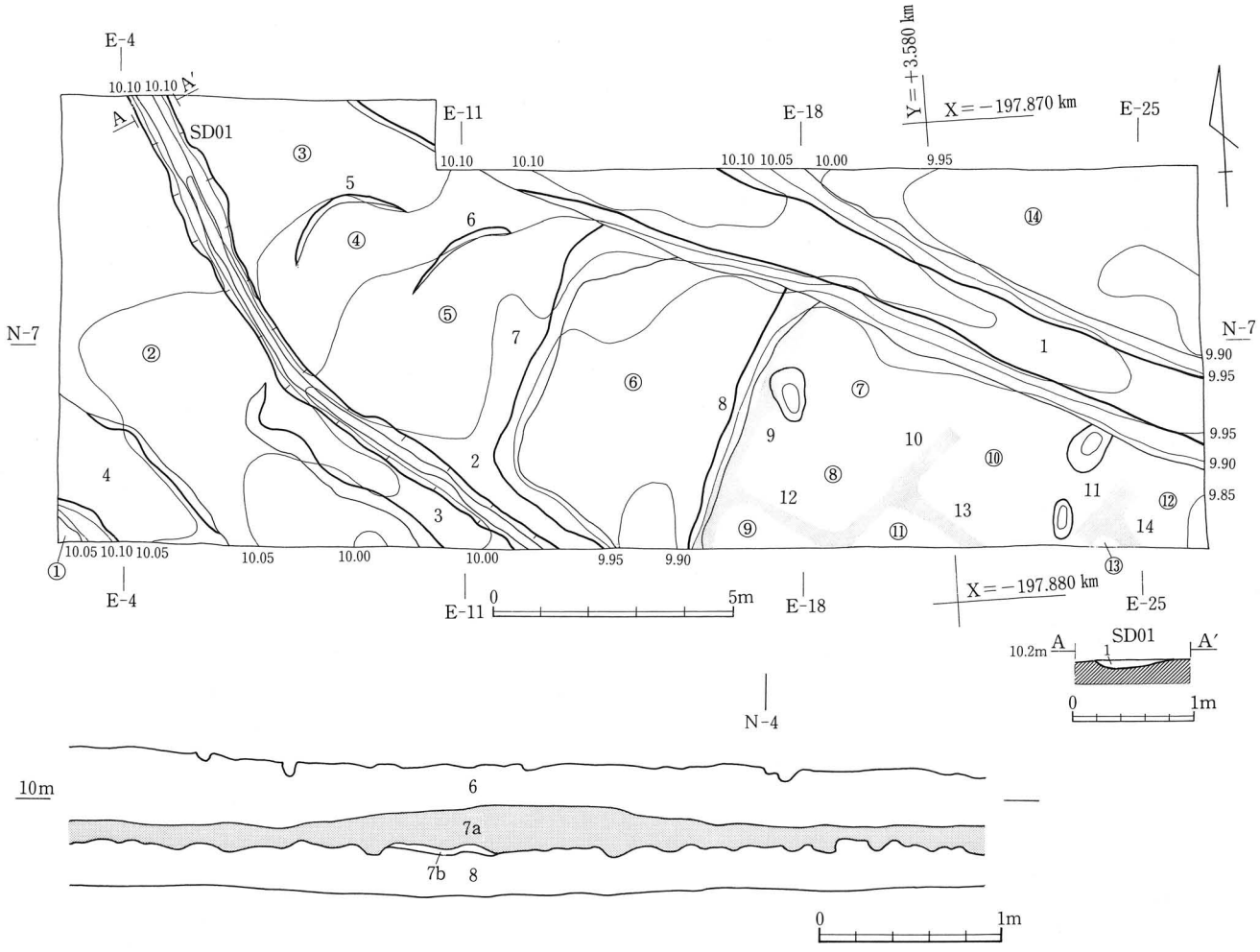
畦畔4条は北西－南東方向に並行するものである。うち1・4の2条は規模が大きく、1は上端幅1～1.6m、下端幅2～2.4mで方向がN－63°－W、高さが7～15cmと残存の良い畦畔である。4は上端幅1.5～2m、下端幅2.4mで方向がN－46°－W、高さが西側の良好な部分で8cmである。2・3はSD01の両側に沿う畦畔で、方向はともにN－50°－Wである。2は上端幅0.5m、下端幅1m、高さは6cm程である。3は上端幅0.8m前後、下端幅1.3mで、高さ3cm程である。2・3が同一の畦畔でSD01が畦畔上を流れる溝とすれば、2・3は上端幅1.9mとなり1・4





種　類		遺構・層位
二次加工のある剥片		6層下部
特徴		
背面に自然面、腹面右辺は折れ面で微細剥離あり		
石材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)
頁岩	1.2	1.6	2.1
厚さ(cm)	写真図版	登録番号
0.4	10－4	K－14

第7図　6層上面遺構平面図



第8図　7a層水田跡平面・断面図

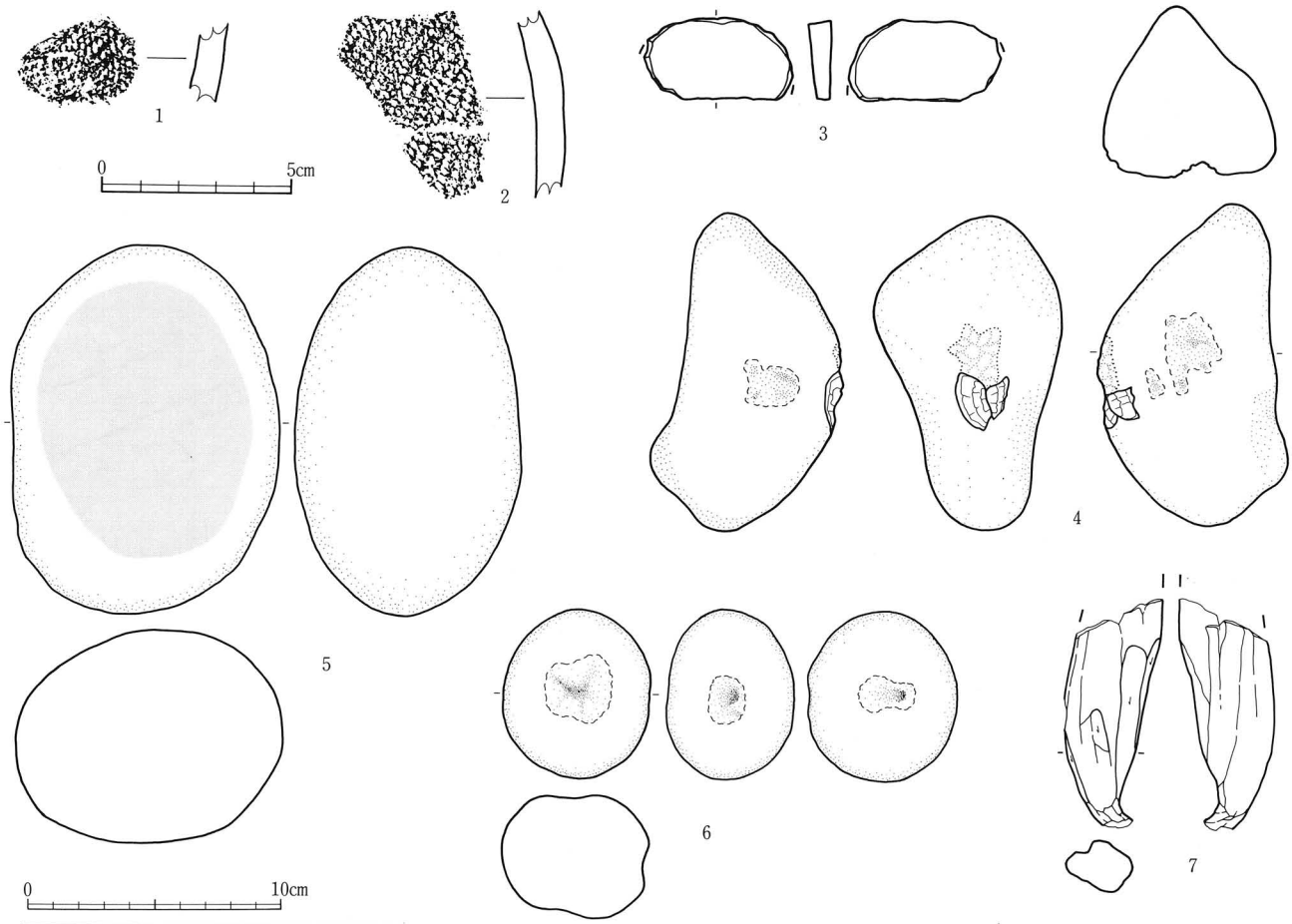
と同様の大規模な畦畔となる。段差７・８は１にほぼ直角に接続するもので方向がともにＮ－25°－Ｅである。高さは良好な部分で７が10cm、８が６cmと明瞭なものである。５・６は高さが３～４cmとやや小さく畦畔にも接続しないが、方向が７・８に並行し小区画の残存の可能性が考えられることから段差と捉えた。

擬似畦畔Ｂは7a層の掘り下げ中に黒色の８層が帯状にのびることで確認された。９は段差８の下位である。10・11は８に並行するがＮ－50°・45°－Ｅとやや東に振れている。12・13・14は１に並行し、Ｎ－60°・50°・45°－Ｗである。これらは固定的な小区画が形成したものと考えられる。

区画は14区画確認された。１区画の規模が推定されるのは⑥のみで、3.7×5.8m、面積約21.5㎡である。10～14の擬似畦畔Ｂからは一辺が２～３ｍの小区画の存在が窺える。標高は9.85～10.1ｍで北西から南東への傾斜で６層より上位の面とは異なる傾斜となっている。

SD01は調査区北西端から中央でやや屈曲しながら南東に向かい、南半では畦畔２・３の間を流れる。上端幅0.5～１ｍ、下端幅0.1～0.3m、深さ４～９cmである。断面形は浅い皿状で底面は南東へ傾斜している。堆積土は基本層６層の最下部黒色泥炭土である。明瞭な水流の痕跡はないが畦畔２・３と並走することなどから水田跡に関連する水路の可能性が考えられる。

出土遺物は、弥生土器片（第９図１・２）、礫石器（同図４～６）、石製品（同図３）である。１・２はLR縄文の体部片である。４から６は畦畔上出土で、凹み痕、凹み痕と敲打痕、摩痕のあるものである。３は石製円盤である。



図版番号	種　類	遺構・層位	内　面	外　面		残　存	写真図版	登録番号
１・２	弥生土器	７層	ミガキ	縄文ＬＲ		体部片	９－５・６	Ｂ－２
図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
３	石製円盤	７層	下部欠損、安山岩、重さ24ｇ	3.2	5.9	0.9	10－５	Ｋ－５
４	礫石器	７層	凹痕、タタキ、凝灰岩質安山岩、重さ390ｇ	12.7	7.5	6.8	10－７	Ｋ－３
５	礫石器	７層	磨痕、安山岩	14.6	11.6	8.4	10－９	Ｋ－６
６	礫石器	７層	凹痕、安山岩　重さ160ｇ	6.7	5.8	4.9	10－６	Ｋ－４
７	杭	７層	丸太材	9.1	3.5	－		Ｌ－２

第９図　７層出土遺物

（５）８層

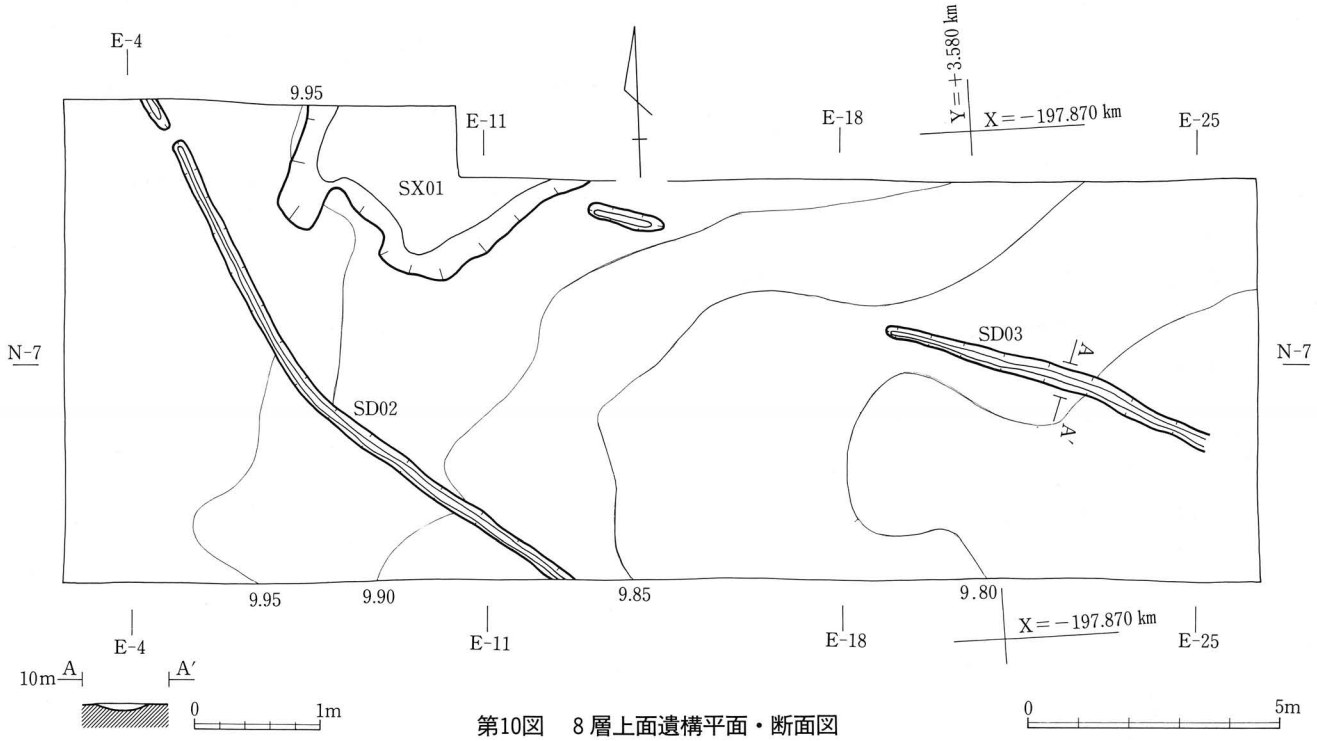
溝跡（SD）２条と性格不明遺構（SX）１基を検出した。

SD02（第10図）

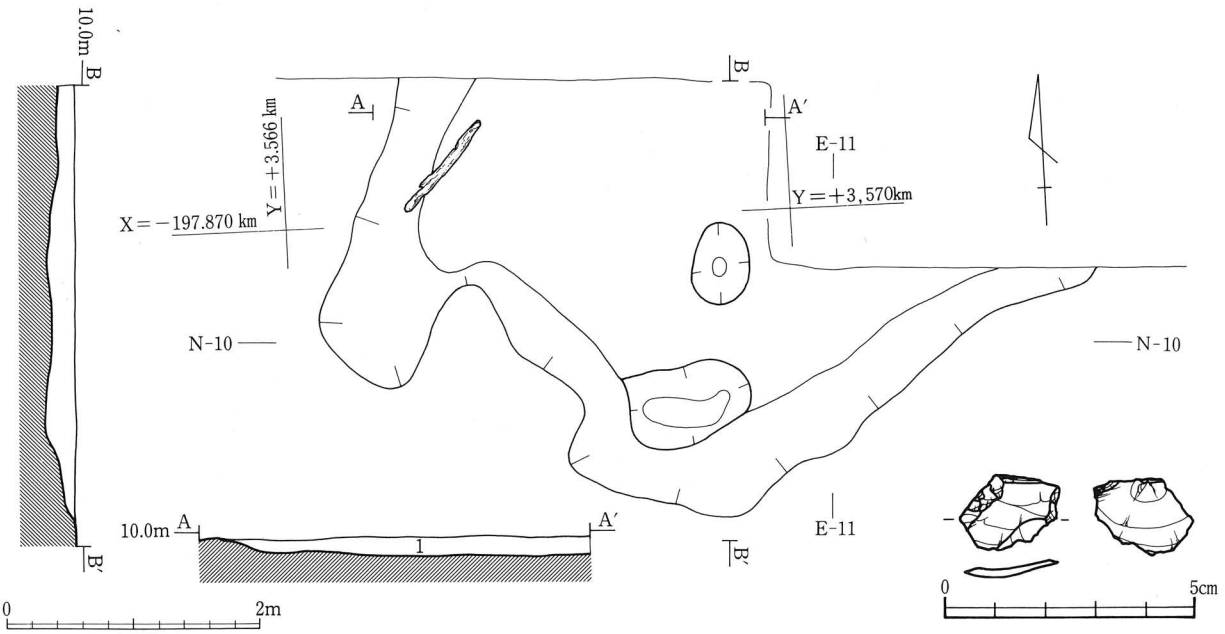
SD1とほぼ同位置である。上端幅0.3～0.5m、下端幅0.1～0.2mで深さは６cmほどである。断面形は浅い皿状で、堆積土は7b層である。出土遺物はない。

SD03（第10図）

7a層畦畔１の下位に位置する。上端幅0.3～0.4m、下端幅0.15mで深さ約４cmはである。断面形は浅い皿状で堆積土は7b層である。出土遺物はない。



第10図　８層上面遺構平面・断面図



種　類	遺構・層位	特　徴	石材	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
ポイントフレイク	SX01・l 1	打面線状	頁岩	0.9	1.5	1.9	0.2	10－３	K－７

第11図　SX01 平面・断面図

SX01（第10図）

調査区北壁西寄りで検出された。平面形は不整形で全体は不明である。規模は南東が4.5m以上、北東が３m以上で、深さは20cmである。堆積土は１層で、基本層８層を撹拌した状況を呈していたため、プラント・オパール分析を行ったが稲は未検出であった。底面は２ケ所の凹みがある他は平坦である。ポイントフレイクが１点出土している。

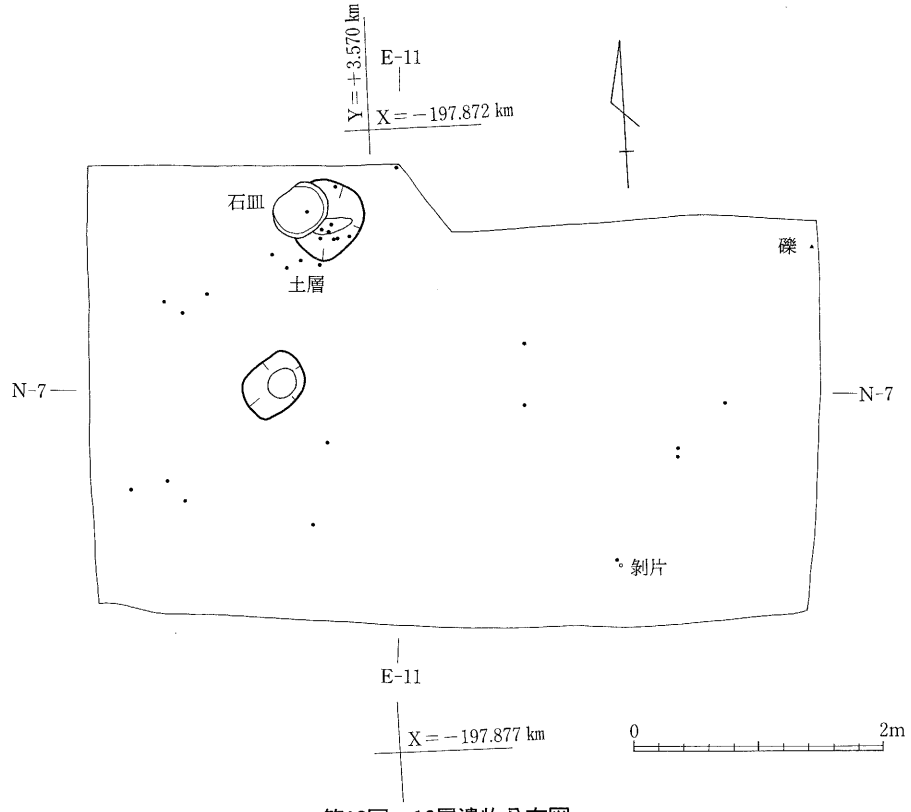
（６）16層

16層から縄文土器片53点、石器２点、礫石器１点、石皿１点が出土している（第12図）。深掘区北側から石皿が出土し、その脇に土器がやや集中する。土器片はすべて繊維を含む土器で、内外面に条痕あるいは縄文のあるものがほとんどである。Ａ１の同一固体が多く53点中13点で、石皿周辺の出土が多い。

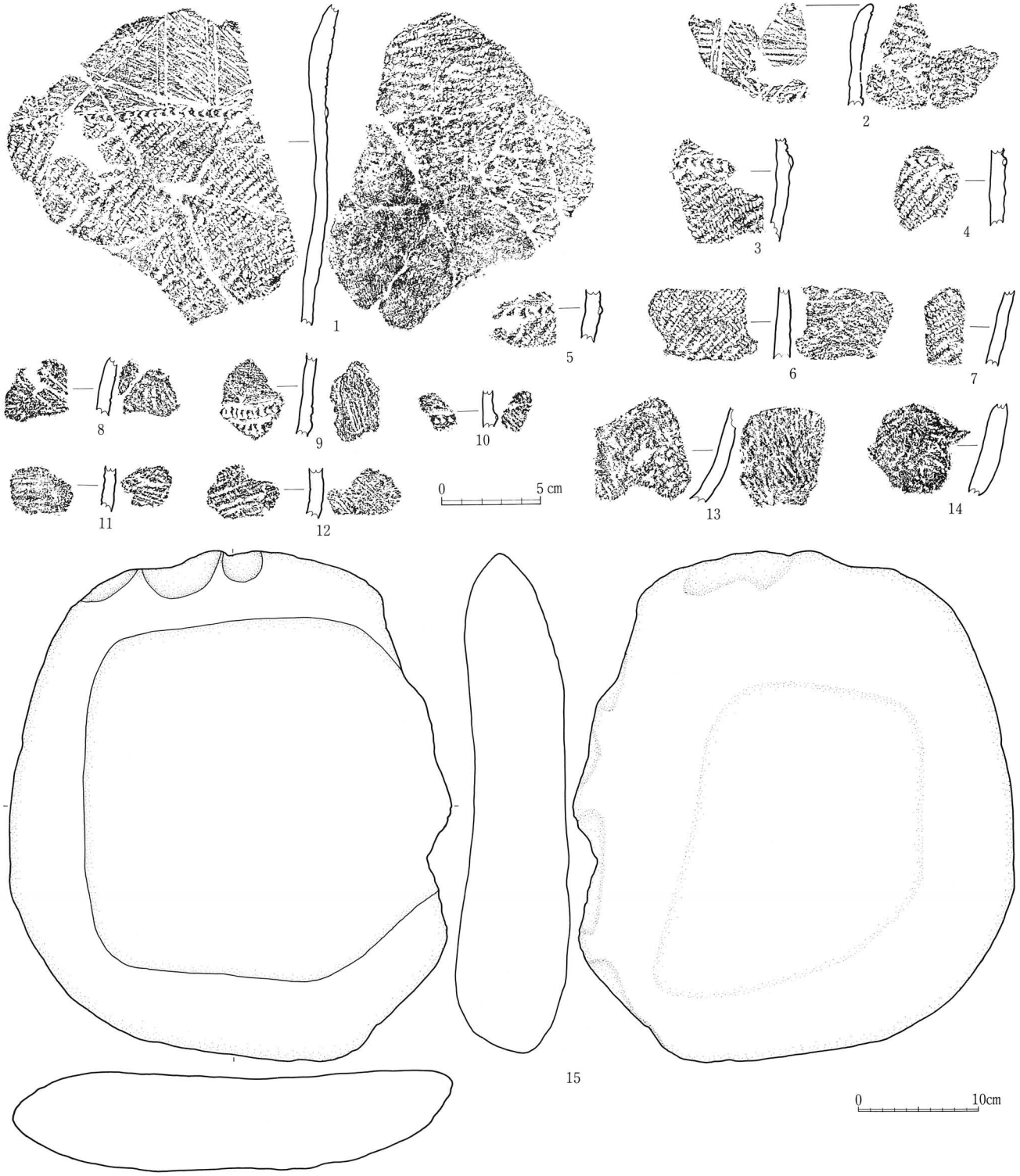
第13図１～７は同一固体の深鉢である（A1）。体部はわずかに膨らみ、口縁部は外傾する。１の縦位沈線の上部が突起になる波状口縁で、その口縁部は肥厚している。口縁部の上端下端に隆帯を巡らし半載竹管による刺突を施す。口縁部は条痕施文後、半載竹管による縦位、斜行、格子状の沈線を施文している。体部は０段多条のLR縄文である。口縁部内面はLR縄文で、体部内面の一部には条痕が観察される。体部内面下半に炭化物が付着している。８～10は口縁部片で、８は斜行沈線、９・10には隆帯がある。11・12は外面縄文内面条痕の体部片である。13・14は底部付近体部片で、その形状から底部は丸みのある尖底と考えられる。15は石皿である。第14図１はエンド・スクレイパー、２は打面側が欠損したフレイクで、ともに流紋岩である。３は磨痕のある礫石器である。

（７）その他の出土遺物

１・２・10層から土師器、須恵器、素焼土器、石器、礫石器、金属製品などが出土している。

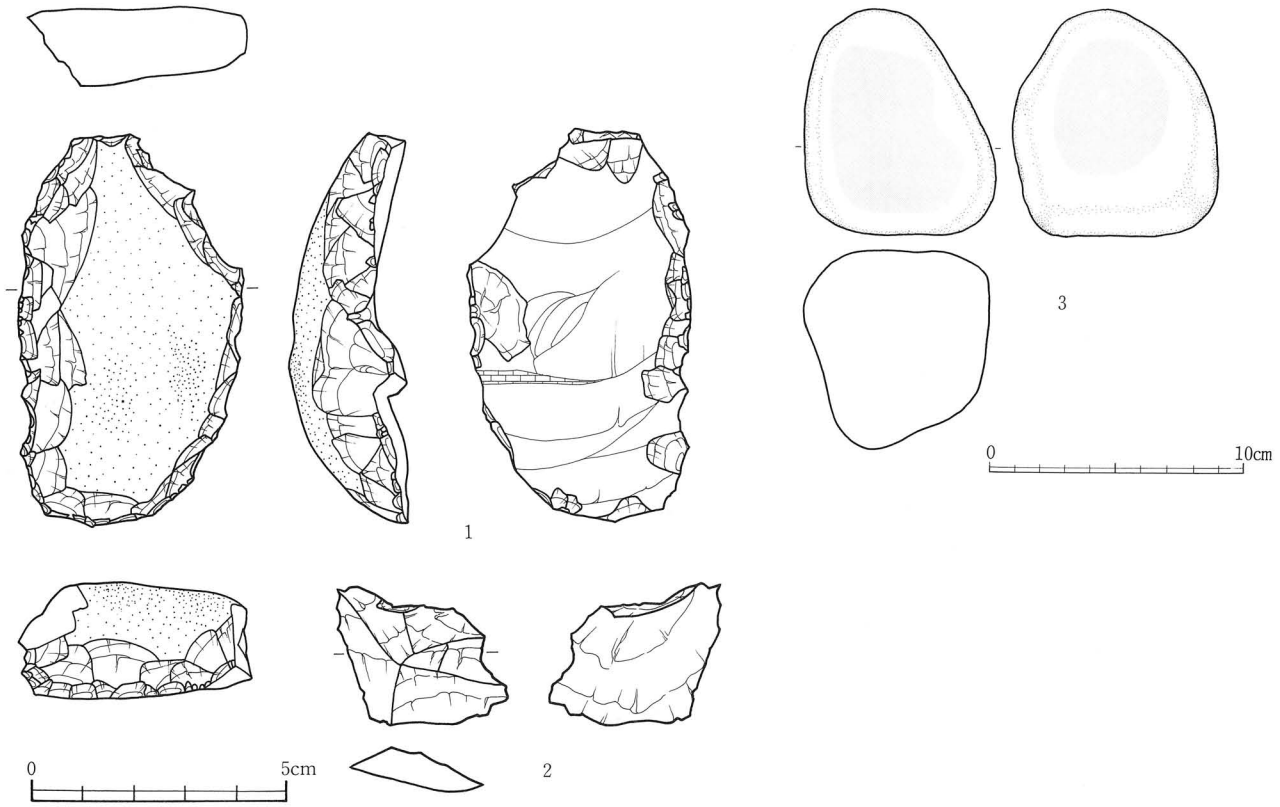


第12図　16層遺物分布図



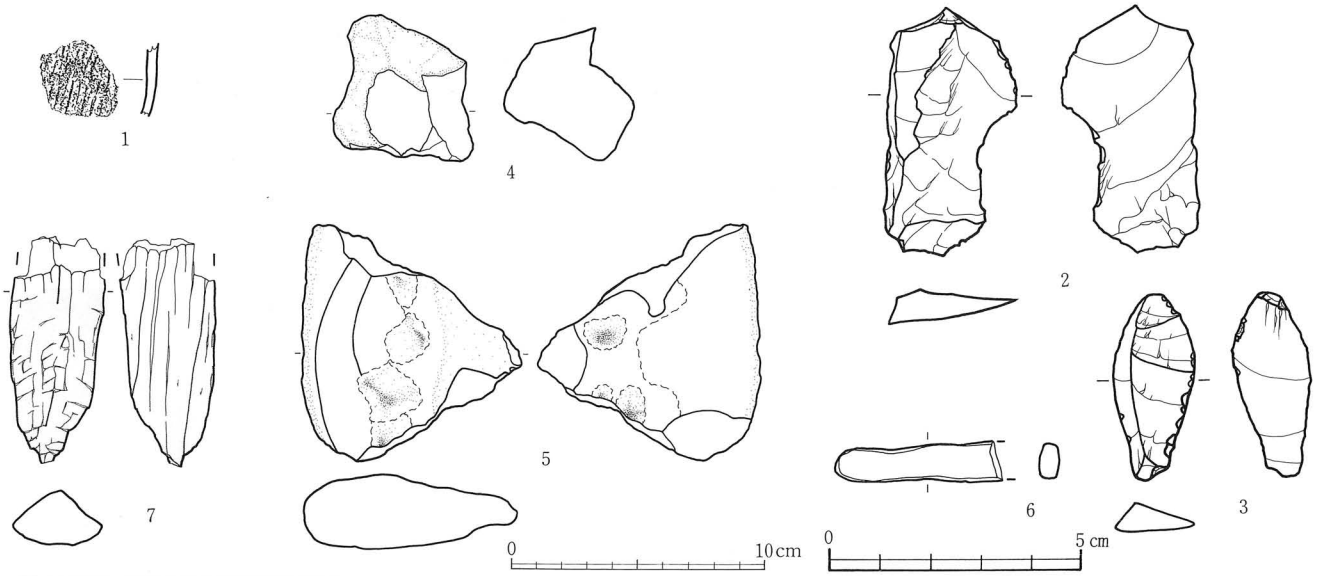
図版番号	種　類	遺構・層位	内　面	外　面			残　存	写真図版	登録番号
1～7	縄文土器　深鉢	16層	口縁：縄文ＬＲ、体：一部条痕、炭化物付着、肥土に繊維を含む	口唇：隆帯刺突、口縁：条痕→縦位・斜行沈線（半截竹管）、隆帯＋刺突（半截竹管）、体：縄文ＬＲ（０段多条）				９－８～14	Ａ－１
8	縄文土器　深鉢	16層	マメツ、胎土に繊維を含む	条痕（？）→沈線			口縁部片	９－17	Ａ－２
9	縄文土器　深鉢	16層	条痕、胎土に繊維を含む	条痕、隆帯２条、刺突			口縁部片	９－16	Ａ－６
10	縄文土器　深鉢	16層	条痕、胎土に繊維を含む	条痕、隆帯、刺突			口縁部片	９－15	Ａ－８
11	縄文土器　深鉢	16層	条痕、胎土に繊維を含む	縄文不明			体部片	９－18	Ａ－３
12	縄文土器　深鉢	16層	条痕、胎土に繊維を含む	縄文ＬＲ			体部片	９－19	Ａ－４
13	縄文土器　深鉢	16層	条痕、胎土に繊維を含む	縄文、尖底？			底部付近	９－20	Ａ－５
14	縄文土器　深鉢	16層	ナデ、条痕、胎土に繊維を含む	縄文ＬＲ（０段多条）、尖底？			底部付近	９－21	Ａ－９
図版番号	種　類	層　位	特　徴	石　材	重量（ｇ）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
15	石皿	16層	右側欠損？	安山岩		43.0	36.6	8.9	10－10	Ｋ－10

第13図　16層出土遺物（１）



図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	石　材	重量(g)	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
1	エンド・スクレイパー	15層	背面に自然面	流紋岩	70	7.8	4.4	1.5	9－23	K－12
2	フレイク	16層	打面欠損	流紋岩	4	2.75	3.3	6.5	9－22	K－9
3	礫石器	16層	磨痕あり	安山岩	776	9.0	7.8	6.8	10－8	K－11

第14図　16層出土遺物（２）



図版番号	種　類	層　位	特　徴			残　存	写真図版	登録番号
1	須恵器　甕		内面ナデ、外面平行タタキ			体部片	9－2	E－1
図版番号	種　類	層　位	特　徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
2	フレイク	2層	打面欠損、頁岩、重さ８g	4.9	2.6	0.5	10－1	K－1
3	フレイク	10層	微細剝離あり、珪質岩、重さ２g	3.7	1.5	0.6	10－2	K－1
4	砥石？	2層	石英安山岩　重さ150g	5.5	5.7	5.2	10－11	K－2
5	礫石器	2層	凹痕あり。石英安山岩質角礫凝灰岩　重さ140g	9.5	8.75	3.5	10－12	K－13
6	鉄製品・不明	2層		4.4	1.1	0.5	9－7	N－1
7	杭	2層	焦痕あり	9.2	3.6	2.2		L－1

第15図　その他の遺物

5　遺構の所属年代とまとめ

（1）検出した遺構は、4層、5b層、6層、7a層上面での畦畔状高まり、8層で溝2条（SD02・03）と性格不明遺跡（SX01）である。2～5・7a層は水田耕作層と考えられる層である。16層からは縄文時代早期末の遺物が出土している。

（2）周辺調査区との対比

今次調査区は富沢遺跡における南部A地区基本層序（佐藤甲：1991）に包括される。近接した調査として、1次（篠原・吉岡：1989）、4次（同）、8次（工藤：1984）、39次（中富：1989）、55次（佐藤甲：1990）、70次（五十嵐：1992）、泉崎浦3次（主浜：1988）がある。それらとの層の対応関係は層相から以下のようになる。

今次	1次 IN 試掘 No.3	1次 IN 試崎 No.4	4次 泉崎 II区	8次	39次	55次	70次	泉崎浦 3次	南部 A地区
3						3			4
4	3		4			4		IV・V	5（平安：灰白火山灰降下以降）
5a・b	4		4		3a	5		IV・V	6（平安：灰白火山灰降下以前）
6砂	5	2	5～7				2～4e	IV	9（古墳中期以前）
6互層	6a・b	3・4	5～7		3b	6a	5a～8	VII・VIIIa	11
7a	7	5	8	8B	4a		9	VIIIb	12
7b	8			9	6b				13
8	9～13	6～9			4b～8	7			14（弥生：寺下囲式期以前）
11砂		13			10		19	XV	

（3）4層上面検出の畦畔状の高まりは、2層の水田が形成した擬似畦畔と判断された（2層水田跡）。真東方向を基準とした方形区画を基本と水田跡である。年代は2層中から出土した近世の陶器や周辺との対比から近世頃と推定される。

（4）5b層上面の畦畔状の高まりは、4層ないし5a層の形成した擬似畦畔と判断された（4層水田跡、5a層水田跡）。両者を同時に検出した可能性が高いが、ほぼ真北を基準とした方向で方形を基調とした水田跡である。年代は層中から出土した土師器や灰白色火山灰のあり方、周辺調査との対比などから、4層水田跡は平安時代の灰白色火山灰降下以降、5a層は平安時代同火山灰降下以前と推定される。

（5）6層上面の畦畔状の高まりは、5b層の水田が形成した擬似畦畔と判断された（5b層水田跡）。畦畔の方向や区画などについての詳細は不明である。6層は4次の5～7層に相当し、4次の5～7層に相当し、4次の4・5層では古墳時代中期を中心とする遺構遺物が検出されていることや5a層の年代から、5b層は古墳時代中期以降平安時代灰白火山灰降下以前と推定される。

（6）7a層水田跡では、畦畔4条、段差4ケ所、溝跡1条、擬似畦畔B6条を検出した。畦畔は傾斜面と同じ南東方向へ並行し、その規模から基幹的なものと考えられる。区画は方形を基調としているが、一辺が2～3mの区画の存在が窺えた。溝跡も水田に関連する水路の可能性が高い。年代は、層中から年代を示す資料は出土していないが、周辺調査との対比から弥生時代中期桝形囲式期と推定される。

周辺の同時期水田跡畦畔は、1次（IN 試掘No.4）5層、3次（泉崎I区）11層、4次（泉崎III区）15層、8次8B層、39次4a層、70次9層、泉崎浦3次VIIIb層で検出されている。3次以外の調査区で大畦畔が検出されている（第　図）。その規模は下端幅で1.5～3mで、高さが良好に残存している場合が多い。その方向は南東方向（N－40～65°－W）のものが多い。周辺地形面は、1・4・70・97・泉崎浦3次が標高9.8～10.0mとほぼ平坦で、南東に

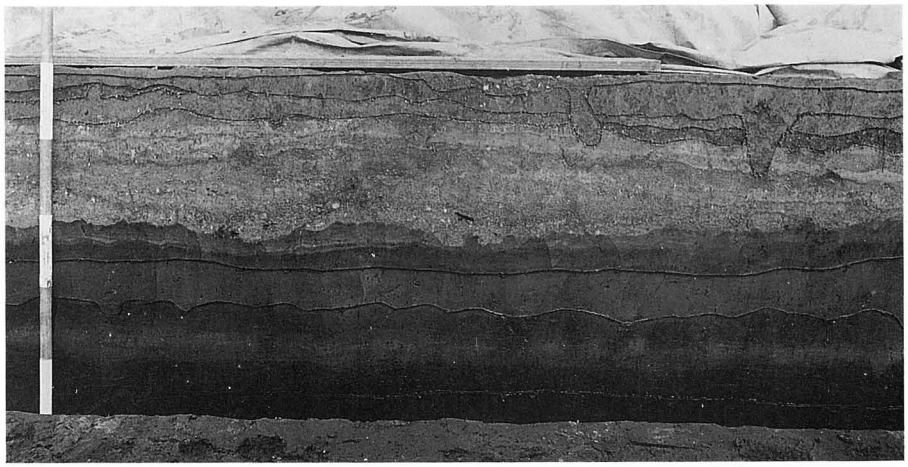
ある3・8・39次が9.0～9.76mと低くなる南東方向の緩斜面である。大畦畔の方向はこの傾斜方向に沿ったためと考えられる。

また、今次調査区南隣での55次6b層（今次7b層）上面でSD01が検出されている。SD01は南東方向の溝で、その北東側（今次調査側）には非耕作土層の6b層が存在する。その延長方向には今次の畦畔4があり、4の南西側には耕作土が存在する。よって、畦畔4と55次SD01との間には耕作境の在在が想定される。

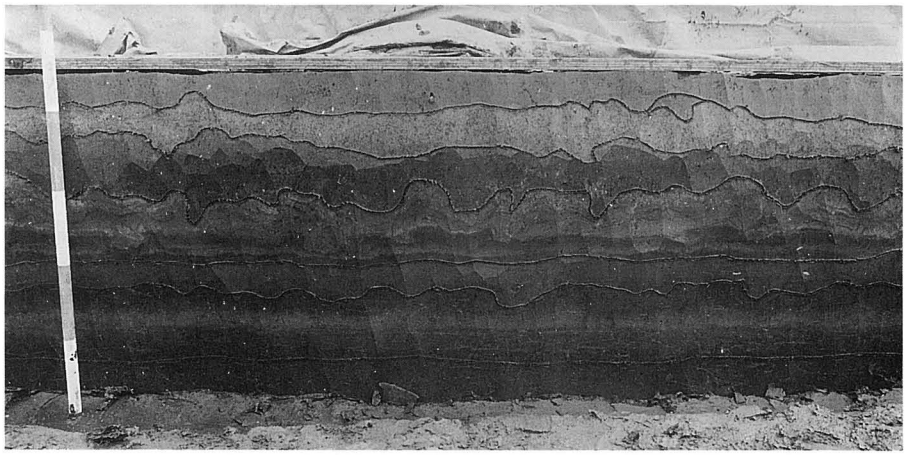
（7）8層上面では溝跡2条と性格不明遺構1基が検出された。SD02はSD01と同位置にあるが、8層は自然堆積層であるのでSD01以前の自然流路と考えたい。SD03は7a層畦畔1の下位に位置する。畦畔との関連が考えられよう。SX01は堆積土が基本層の撹拌を受けた様相であるが人為的営力か自然かは不明であるが、これも畦畔1の下位に位置することから水田に関連した溝構の可能性も考えられよう。年代は7a層の年代観より桝形囲式期以前と推定される。

（8）16層出土遺物はその特徴から早期末葉の縄文条痕土器群に位置づけられる。類例は仙台市北前遺跡、福島県松ケ平遺跡などに見られる。これらは梨木畑式に比定される土器群である（相原：1990）。

第16図　97次周辺弥生桝形囲式期水田（1/2500）

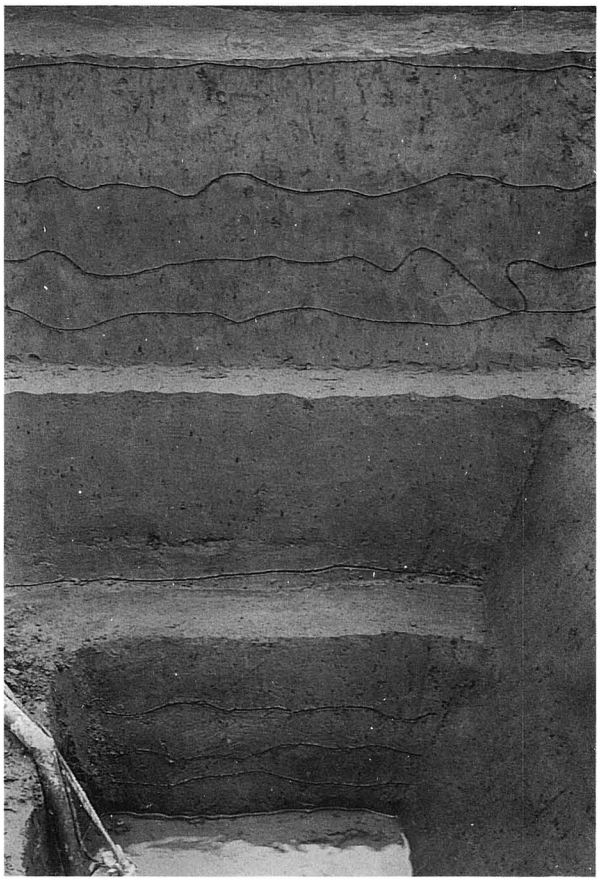


1．東壁断面（N8付近）



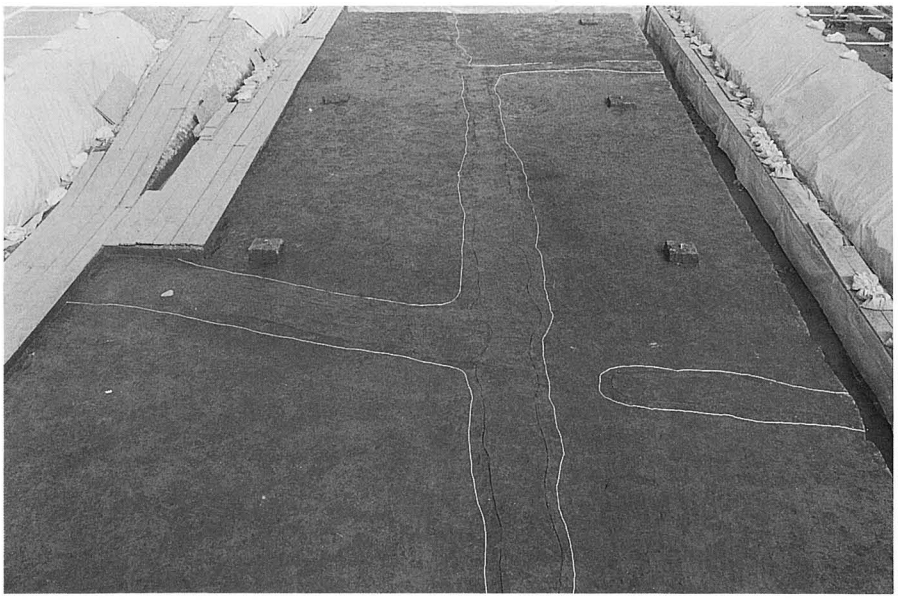
2．南壁断面（E21・22付近）

4．調査区近景（西から）

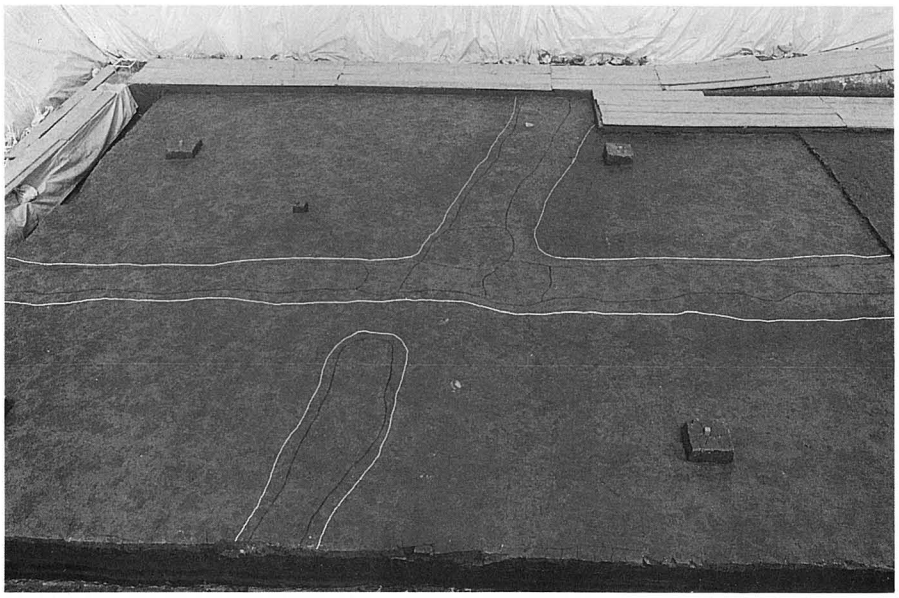


3．深掘南壁断面

写真Ⅰ



1．4層水田跡全景（西から）



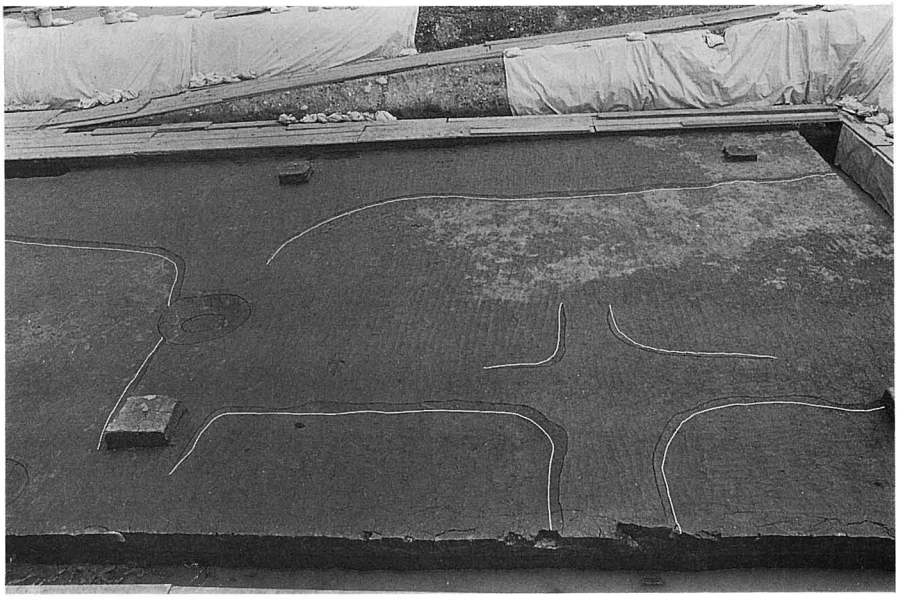
2．4層水田跡西半（南から）

3．4層水田跡東半（南から）

写真2

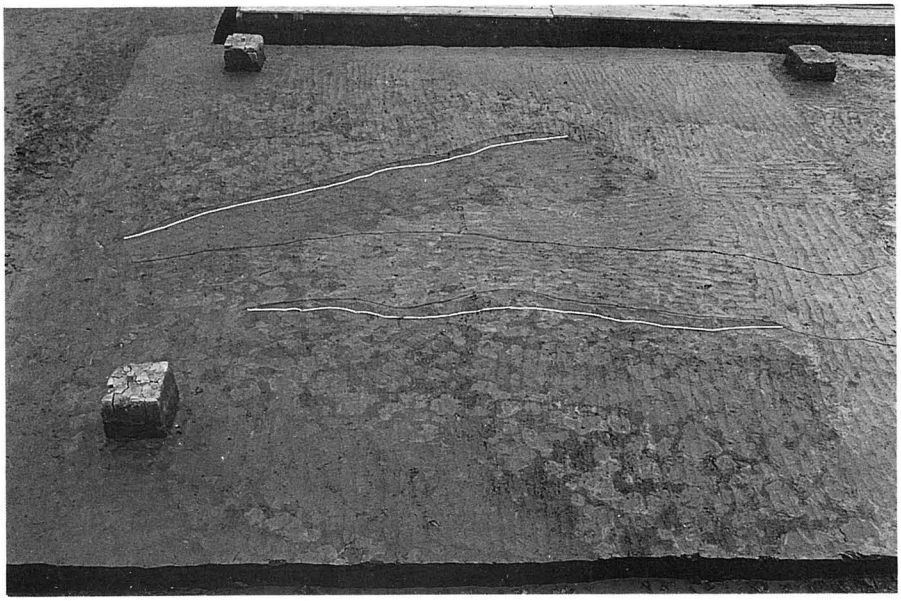
1．5b層水田跡畦畔確認状況（南から）

2．5b層水田跡畦畔検出状況（南から）



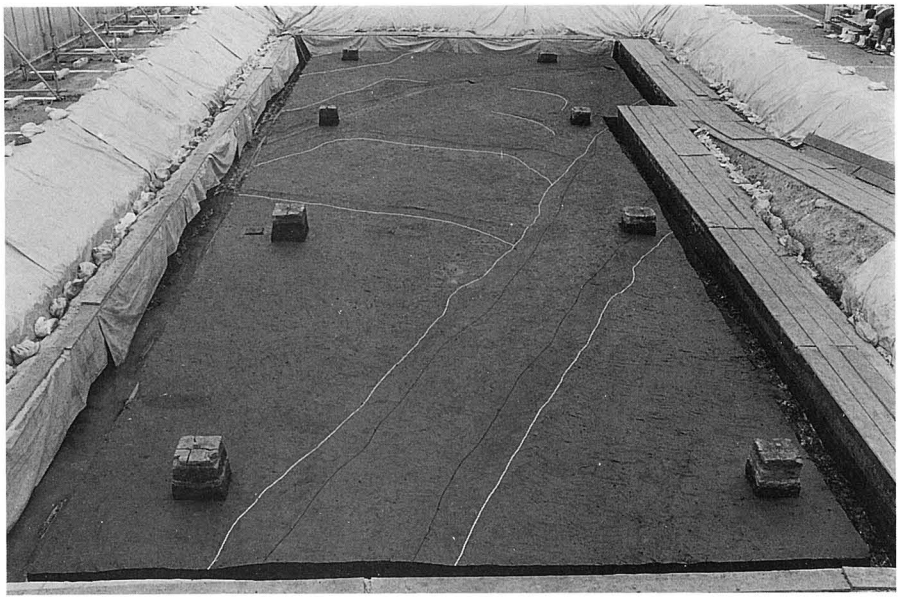
3．5b層水田跡東半（南から）

写真3



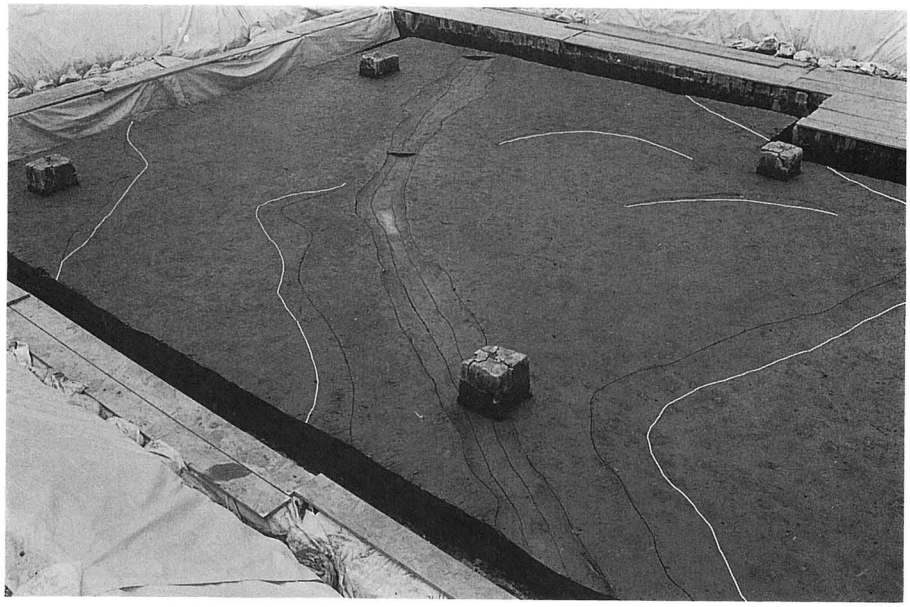
1．6層上面畦畔状遺構（南から）

2．7a層水田跡畦畔検出状況（南から）

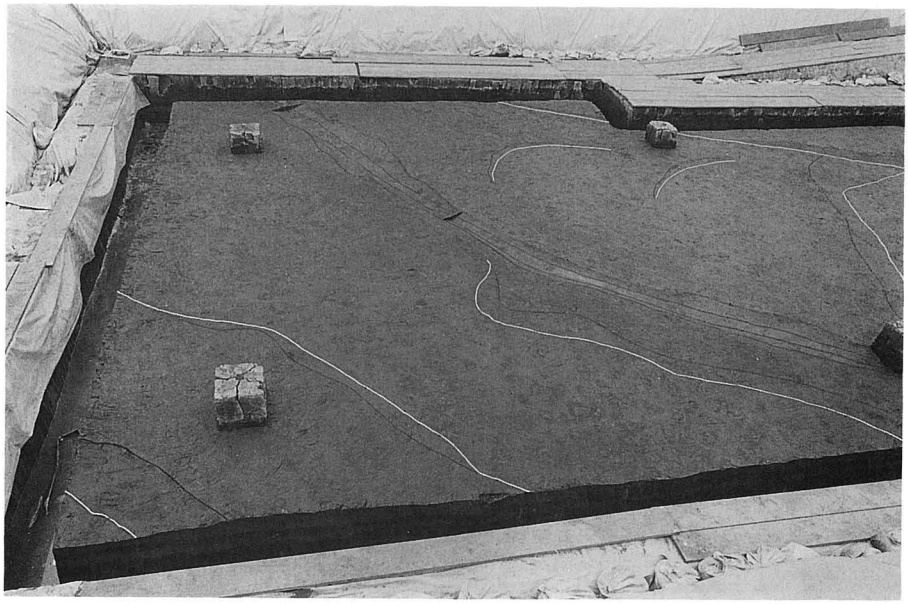


3．7a層水田跡全景（東から）

写真4



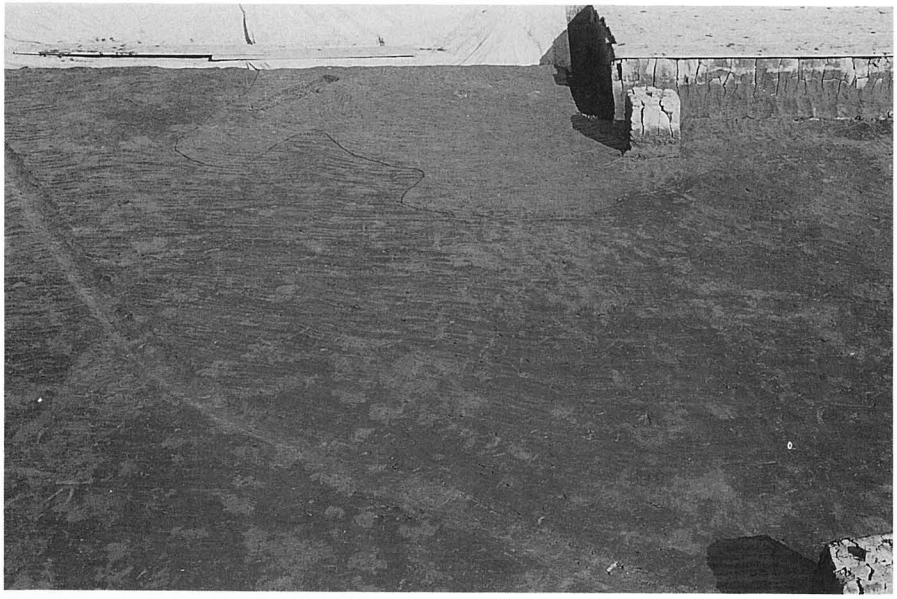
1．7a層水田跡西半（南東から）



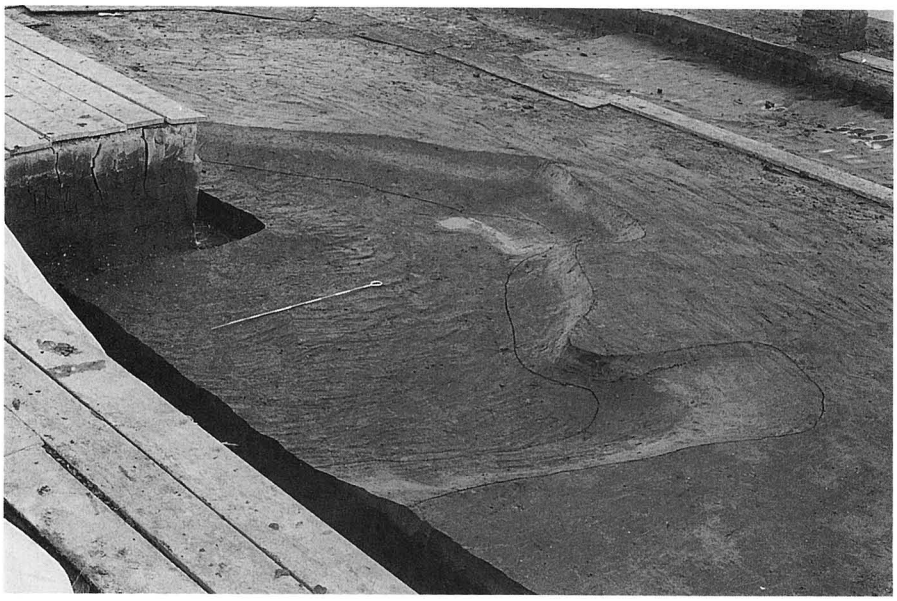
2．7a層水田跡西半（南から）

3．7a層水田跡東半（南から）

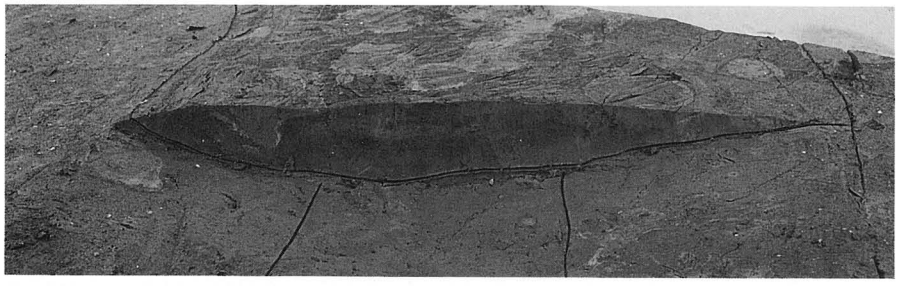
写真 5



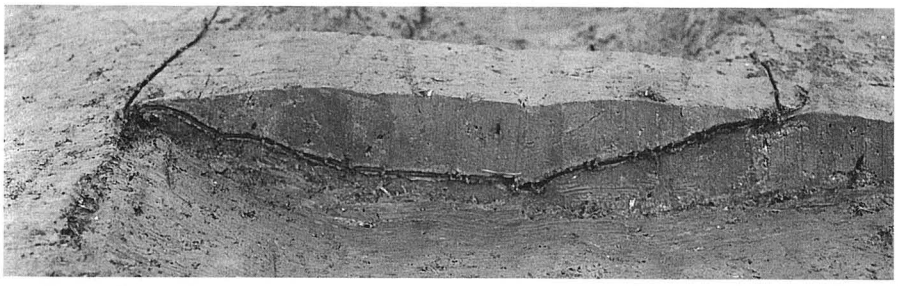
1．8層SD02・SX01（南から）



2．8層SX01（北西から）



3．7層SD01断面（南から）

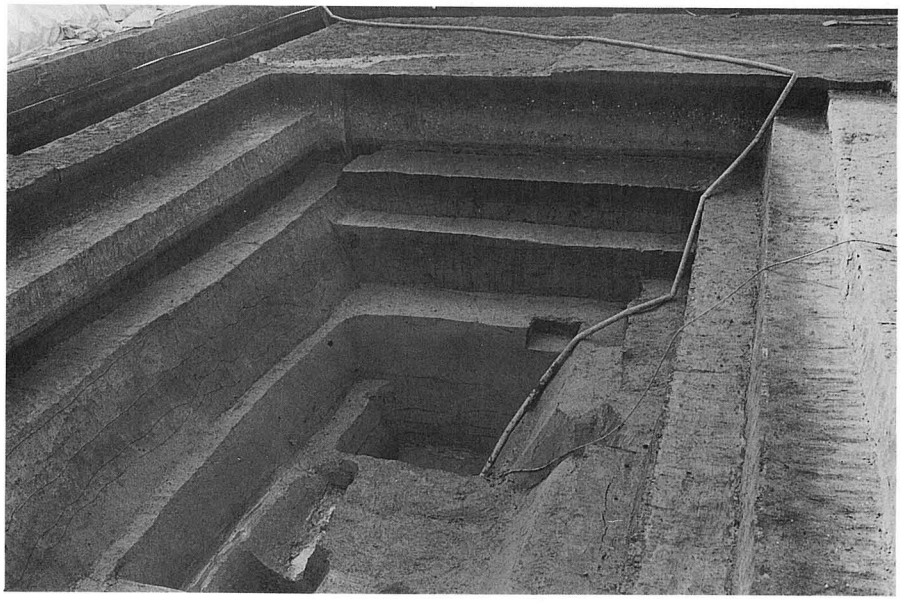


4．8層SD03断面（西から）

写真6

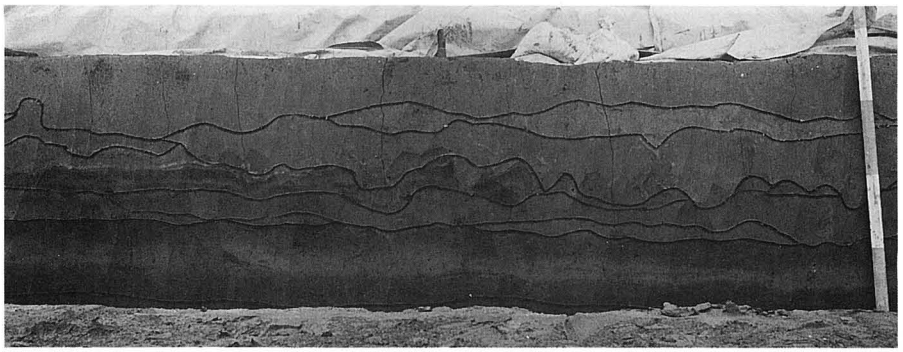
1．16層土器出土状況

2．16層石皿出土状況



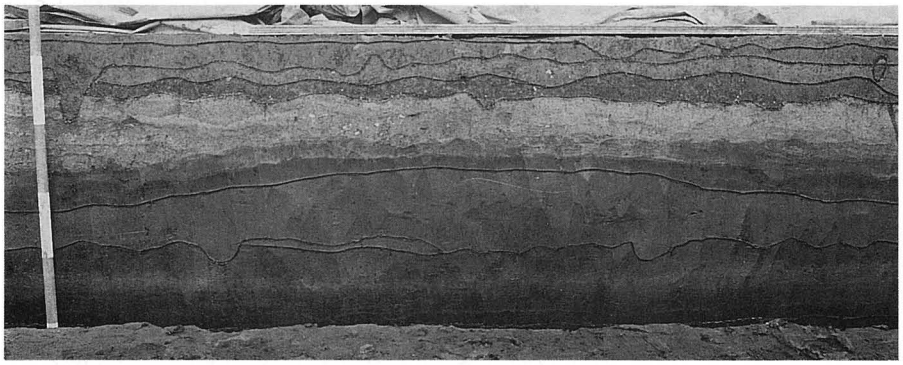
3．深掘区全景（北東から）

写真 7

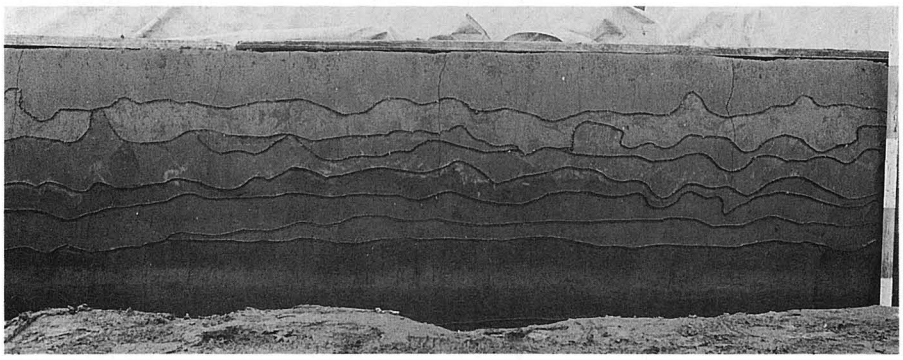


1．4層水田跡畦畔2南壁断面

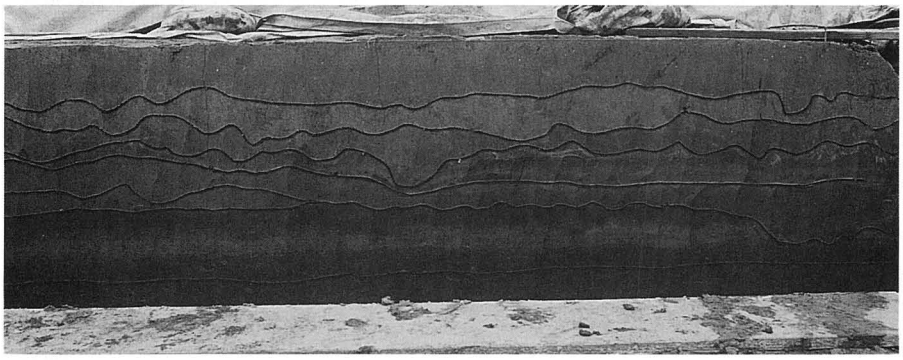
2．5b層水田跡畦畔2東側南壁断面



3．7a層水田跡畦畔1東壁断面



4．7a層水田跡畦畔3南壁断面



5．7a層水田跡畦畔4西側南壁断面

写真8

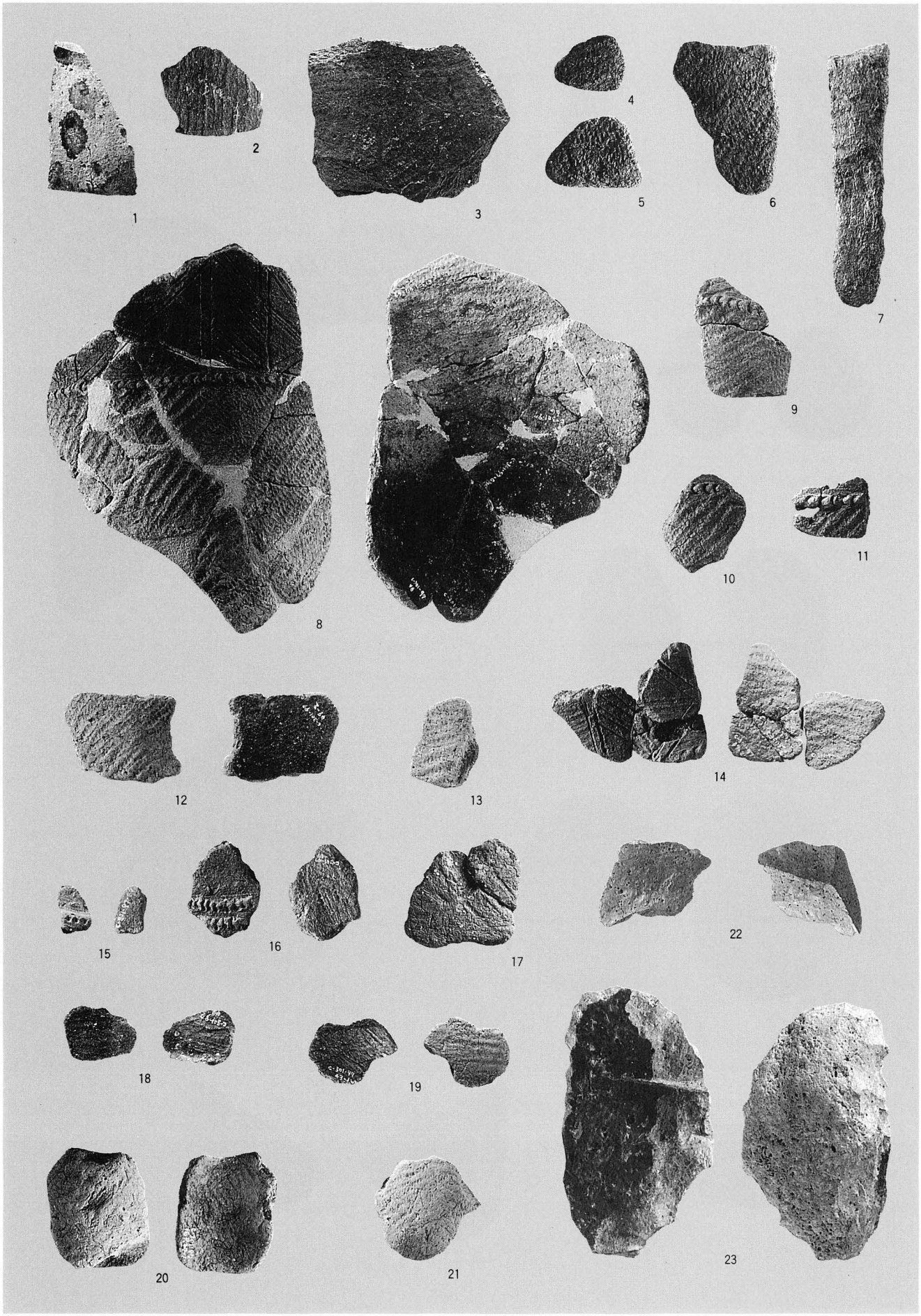


写真９　出土遺物（Ⅰ）

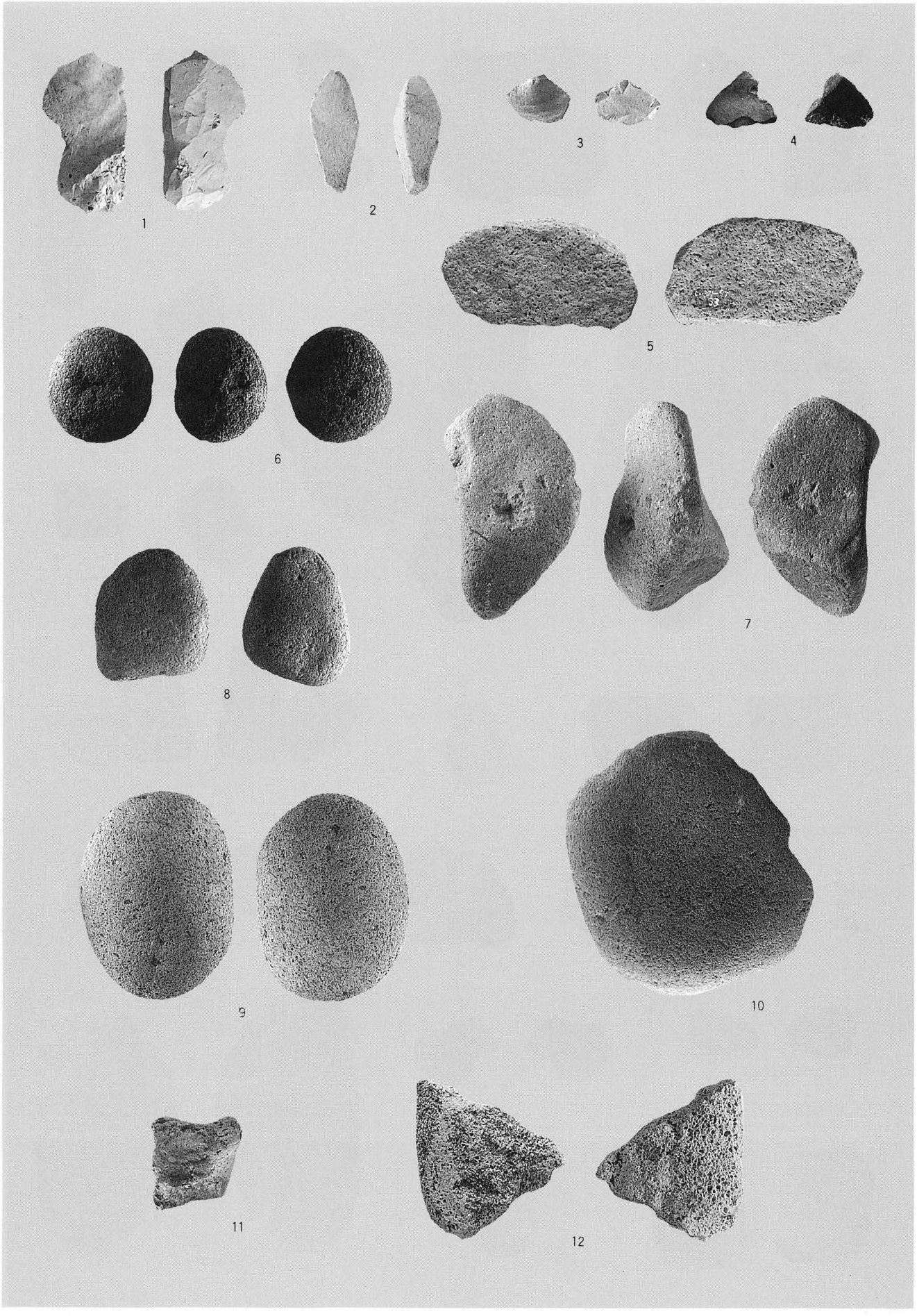


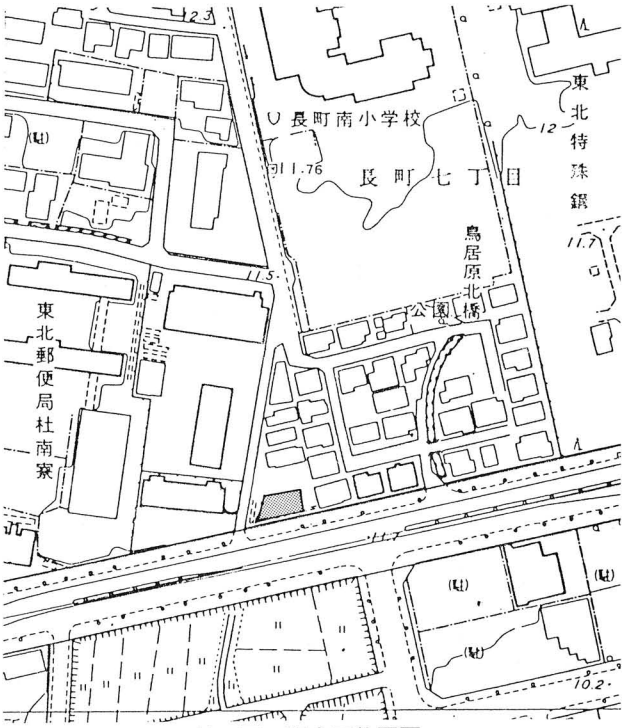
写真10　出土遺物（２）

第４節　富沢遺跡第98次調査

１　調査に至る経過

平成７年４月17日付けで、RC ３階建テナントビルを建築したいとして文化財保護法に基づく届け出が成された。

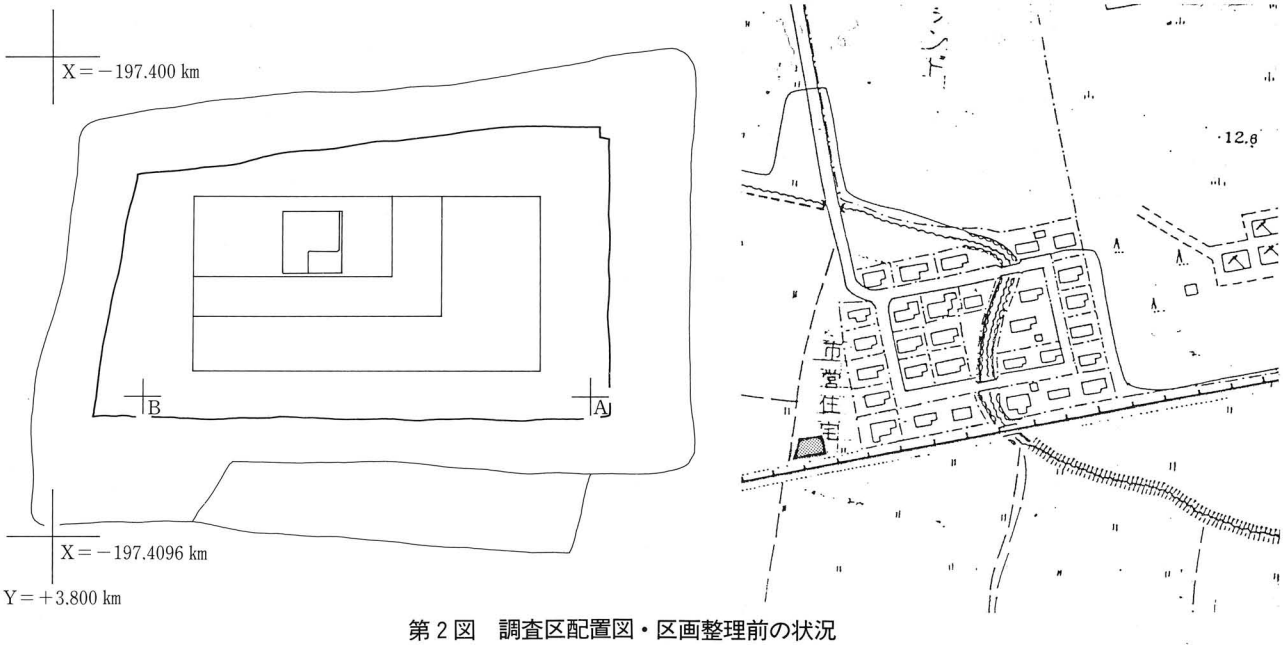
平成８年３月２日、発掘調査の実施に先立って調査の時期、期間、概算契約額、申請者側に準備、提供いただくものの第１回目の打ち合わせを持った。以後も打ち合わせを重ね契約を交わし、平成８年６月19日から調査を開始した。



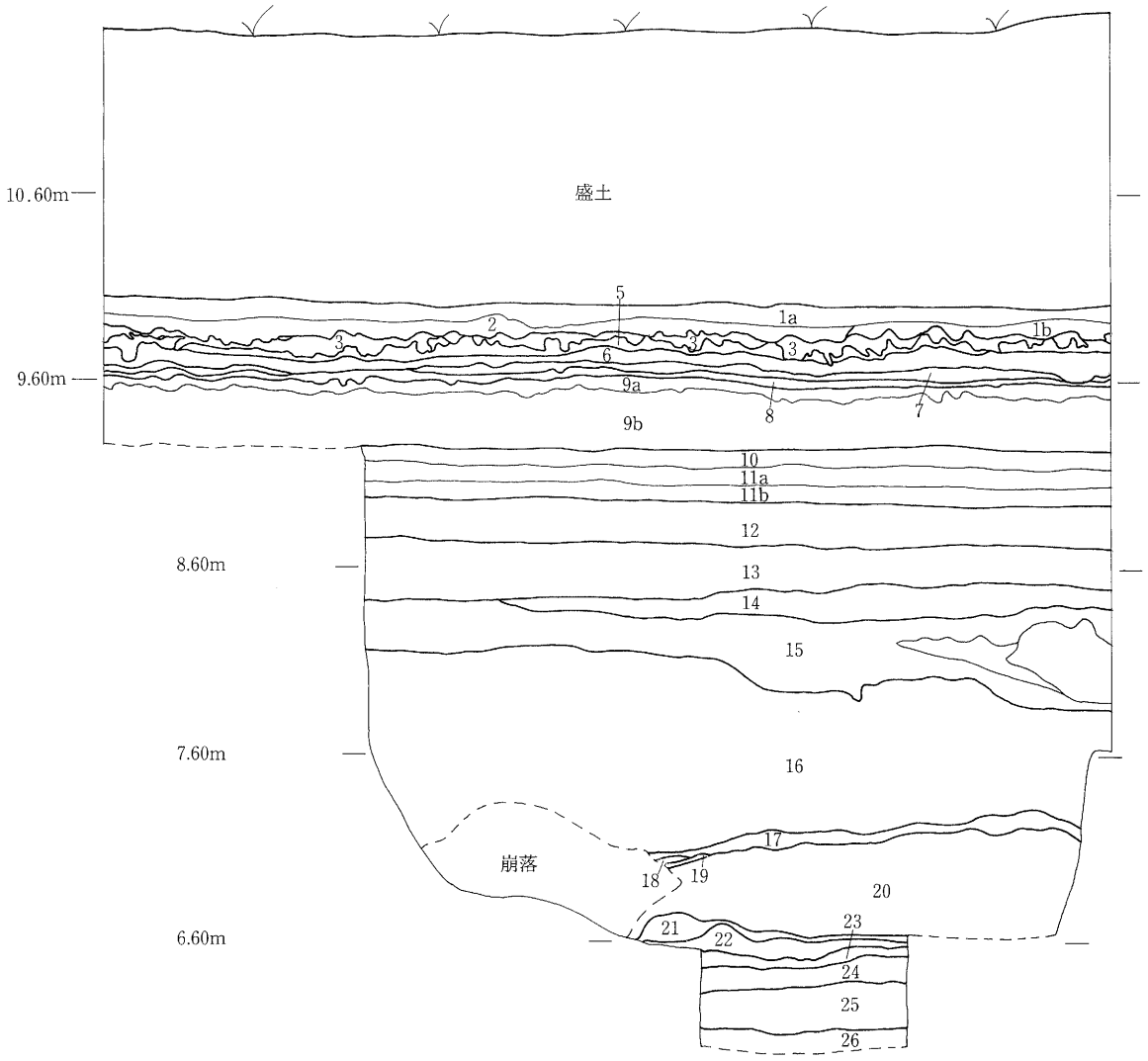
第１図　調査区位置図

２．調査の方法

調査箇所は、富沢遺跡の北部に位置する。付近は早くから宅地化が進み、現在約1.5mほどの盛土が成されている。区画整理前の地形を第２図に示した。旧地名では、長町字中谷地、鳥居原にあたる。今回の調査対象面積は528㎡であるが建物によって破壊される範囲は340㎡になる。その中に13×８m、面積約112㎡のやや台形の調査区を設定した。盛土が約1.5mと厚いために安全確保のため盛土下での調査可能面積は約60㎡であった。遺構の測量には、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平面座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197407.008m・Ｙ＝＋3810.793m、杭Ｂ：Ｘ＝－197407.000m・Ｙ＝＋3801.787m）。また、盛土上面での標高は約12mである。検出された遺構の作図に関しては、杭Ａ・Ｂを基準として１mメッシュを組み縮尺１／20で行った。遺物の取り上げについても杭Ａ・Ｂを基準としている。写真記録には35㎜カメラ２台を使用しモノクローム、カラーリバーサルで撮影し



第２図　調査区配置図・区画整理前の状況



第3図　基本層序土色註記

第1表　基本層序注記表

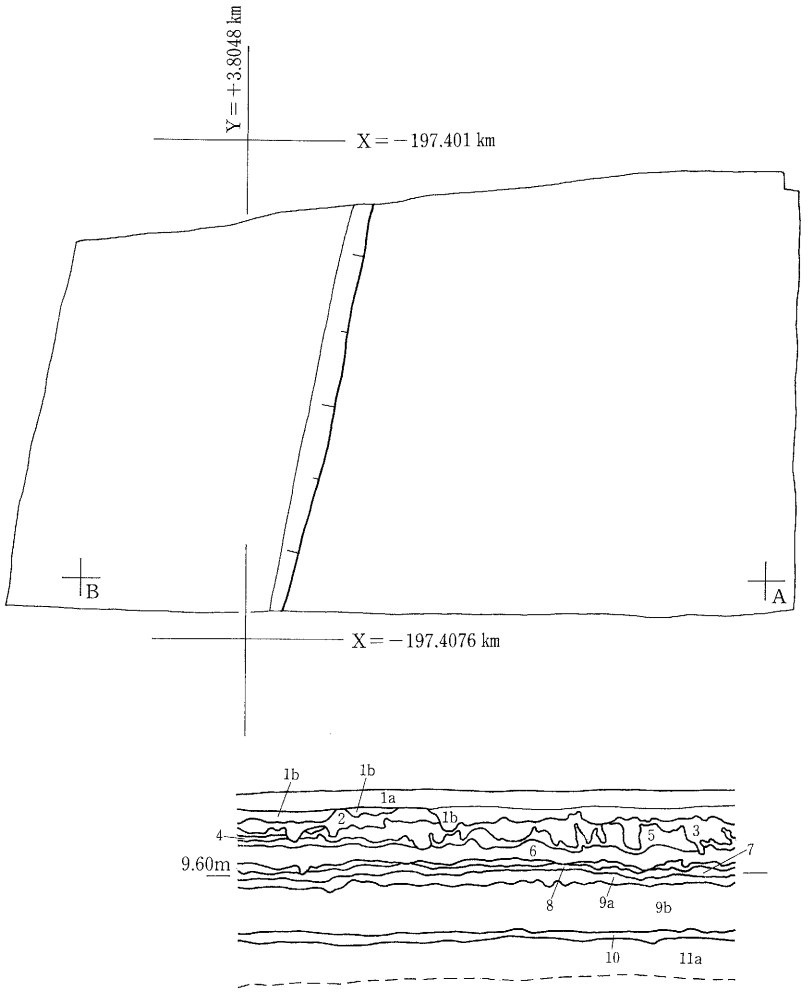
層序	土色	土性	粘性	しまり	層厚（cm）	備考
盛土					150	区画整理時の盛土
1a	10YR2/1 黒色	粘土	あり	なし	10	区画整理前の水田耕作土
1b	7.5Y2/1 黒色	粘土	あり	ややあり	0～15	西半部に分布
2	5GY2/1 オリーブ黒色	粘土	あり	あり	5～15	層下面に凹凸あり（近世の水田）
3	5Y2/1 黒色	粘土	あり	なし	5～20	層下面が著しく凹凸、灰白色火山灰をブロック状に含む（平安から近世の水田）
4	5Y3/1 オリーブ黒色 2.5Y2/1 黒色	粘土	あり	なし	0～10	相互、部分的な分布、植物遺体を少量含む
5	10YR2/2 黒褐色	粘土質泥隅	あり	なし	2～15	植物遺体を多量に含む
6	7.5YR1.7/1 黒色	泥炭質粘土	あり	なし	3～16	植物遺体を含む
7	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	あり	なし	2～7	植物遺体を含む
8	7.5YR1.7/1 黒色	泥炭質粘土	あり	なし	5前後	植物遺体を含む
9a	2.5Y2/1 黒色	粘土	あり	なし	2～8	層下面が凹凸（弥生水田）、植物遺体を含む
9b	2.5Y2/1 黒色	泥炭	あり	なし	20前後	9a層水田の母材層、植物遺体を多量に含む
10	5Y3/1 オリーブ黒色	泥炭質粘土	あり	なし	5～10	植物遺体を含む
11a	2.5Y2/1 黒色	泥炭	弱い	ややあり	10前後	植物遺体を多量に含む
11b	10YR1.7/1 黒色	粘土	強い	なし	10前後	植物遺体を含む
11c	10YR1.7/1 黒色	粘土	強い	なし	10前後	色片では判別できなかったが11b層よりはさらに黒い
12	2.5Y4/1 黄灰色 10YR1.7/1 黒色	粘土	強い	なし	15～25	互層、植物遺体を含むが量は少ない
13	10YR1.7/1 黒色	粘土	強い	なし	30前後	植物遺体、炭化物を少量含む
14	10YR2/1 黒色	粘土	強い	なし	0～20	東半部に分布、火山灰の小ブロックを含んでいる、植物遺体を含む
15	10YR5/2 オリーブ灰色	粘土	強い	なし	20前後	グライ化、植物遺体を少量含む
16	7.5GY6/1 緑灰色	粘土	あり	あり（強い）	60～120	グライ化、層下部に砂層を介在している、植物遺体を少量含む
17	7.5GY6/1 緑灰色	粘土	あり	あり（強い）	0～15	グライ化、植物遺体をわずかに含む
18	10YR2/2 黒褐色	粘土	あり	あり	0～16	部分的な分布、腐植層、針葉樹の葉、枝を含む
19	5GY5/1 オリーブ灰色	粘土	強い	あり	0～6	グライ化
20	5GY5/1 オリーブ灰色	砂	なし	ややあり	40～50	グライ化、層中に粘土層を2～3枚挟在する
21	7.5Y5/2 灰オリーブ色	粘土	強い	ややあり	0～10	僅かにグライ化、針葉樹、根、枝、球果を含む
22	10YR2/2 黒褐色	粘土	あり	ややあり	10～15	腐植層、針葉樹の葉、根、枝、球果を含む、粘土層を1～2枚狭在する
23	7.5Y5/2 灰オリーブ色	粘土	強い	ややあり	4～10	僅かにグライ化、針葉樹の葉、根、を含む
24	10YR2/2 黒褐色	粘土	あり	あり	10前後	腐植層。針葉樹の葉、根、を含む、粘土分が強い
25	7.5YR2/3 黒褐色	粘土	あり	あり	25前後	腐植層、針葉樹の葉、根、枝を含む
26	5Y5/3 灰オリーブ色	粘土	あり	あり		僅かにグライ化

た。また、ネガカラーについては状況に応じて実施している。土壌サンプリングはプラント・オパール分析用に２層から9a層で行っている。

調査は、平成８年６月19日から調査員２名、スタッフ23名体制で開始した。盛土および旧耕作土である1a層は重機により除去したが、これより以下は人力による調査を実施している。調査区周囲には土層観察および排水用の側溝を設けた。断面観察の結果２・３・9a層に水田跡の存在が確認された。10層までは、調査区全面の精査を行ったが、以下の層序に関しては断面観察の結果、自然堆積層が連続し遺構の存在する可能性は低いものとなった。従って、10層以下の調査は第28次調査（佐藤甲：1988）などで検出されている縄文時代早期の層の存在や、森林跡を伴う後期旧石器時代層の有無の確認を目的としたものとした。後期旧石器時代の森林跡を検出した第30次調査（太田：1991）、第88次調査（太田：1995）は当調査地点から南西に約150m前後と近接していることから、同様の森林跡の広がりの確認が期待された。下層の調査には調査区を７×3.5mと縮小し、安全性を考慮しながら28層（27・28層はポンプ穴で確認）まで精査を行った（最下面では1.2×0.8m）。14層で火山灰ブロック〔周辺の調査成果との対比より、十和田中掫火山灰であると予想したが、分析により沼沢テフラの可能性が高いとされた（第３章分析・同定参照）。〕を検出し、18・22・24・27層で小枝、球果を含む腐植質粘土層を確認した。28層で標高が６mとなり、これ以上の深掘は危険であると判断し、調査の一切を終了したのは７月24日である。

３．基本層序

今回の調査で確認された層は、大別28層、細別32層を数える。１層は旧耕作土で粘土、２層から４層は粘土で、２層は近世の水田と考えられ、３層は、層中に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰（白鳥：1980）をブロック状に含むことから平安時代以降の水田土と考えられる。尚、下面の凸凹は顕著である。５層～11a層までは、泥炭と粘土が互層をなしており各層に植物遺体を含んでいる。このうち9a層は遺物が出土していないが、周辺の調査との対応から弥生時代中期の水田跡と考えられる。11b層～15層は非常に粘性の強い粘土層である。また、14層中には灰白色の火山灰を含んでいる、分析・同定は行っていないが、周辺の調査成果から見て縄文時代前期に降下したとされる十和田中掫火山灰の可能性が考えられる。15層からグライ化が始まる。16層、17層はしまりの固い粘土層である。18層で



第４図　２層平面・断面図

針葉樹の葉・小枝を含む腐植層を検出したが、部分的な分布である。22層、24層、25層でも針葉樹の葉・根・枝・球果を含む腐植層を検出している。しかし、樹根は検出できなかった。設定調査区が狭いので、これ以上の深堀調査は困難と判断し、砂礫層までの検出は断面した。（ポンプ穴で確認した27層は腐植層、28層は砂層である。）

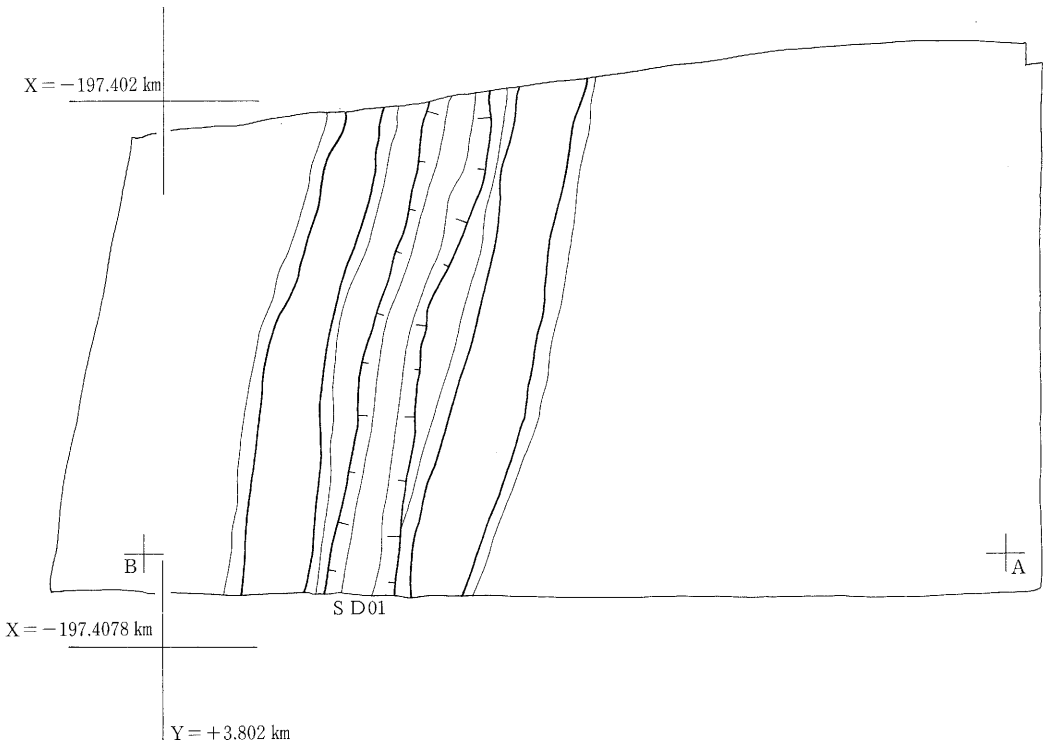
層の堆積状況は、15層まではほぼ水平に堆積しており、以下の層位では、厚く堆積する16層、20層以外は起伏の見られる堆積状況で一様ではない。

4．検出された遺構と遺物

（1）2層の遺構と遺物

2層水田跡（第4図）

2層はオリーブ黒色の粘土層である。1b層が堆積するところには、2層はほとんど存在せず、調査区の主に東半部において確認できた。2層の上面で段差を1ヶ所検出したが、畦畔は確認できなかった。段差の検出長5.5m、比高差4～6cmで、方向は、N－10°－Eである。2層上面の標高は、約9.9m前後である。この段差がどの段階で形成されたかについて考えてみたい。上層の1a層、1b層もともに水田耕作土であり、このように水田耕作土が重なる場合においては、層の帰属が問題となってくる。今回の段差が形成された可能性としては、次の2つが考えられよう。まず2層段階での水田耕作において、ここに段差を伴う水田区画が存在し、その後1b層水田が形成される。（これは2層段階の形状を踏襲するものである。）次に1a層水田の耕作によって高い部分の1b層が削平されている。次に考えられるのは、1b層水田の耕作において、この段差を生じるような耕作が成された場合で、このときには2層上面の耕作痕はすべて削平されている。その後1a層水田の耕作によって高い部分の1b層が削平された場合である。今回の検出状況では、このどちらかであるかを確認することは困難であったので、この段差がどちらに帰属するかについては不明であるとしておきたい。



第5図　3層平面図

遺物は、層中から染付の陶器の皿の破片が１点出土したのみである。産地は肥前で、時期は近世以降と考えられる。

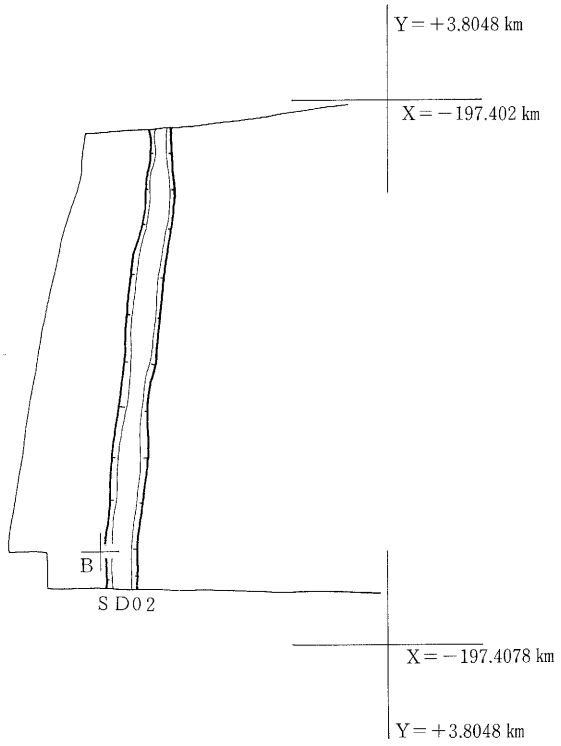
（２）３層の遺構と遺物

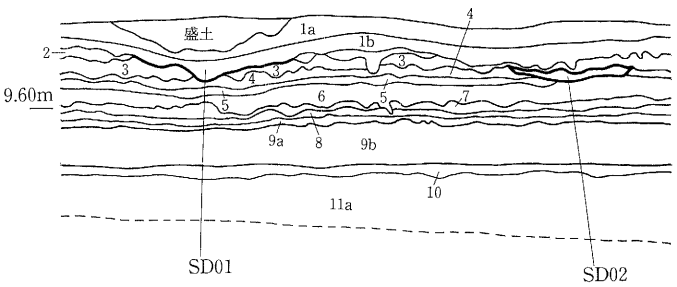
３層上面で畦畔２条と、畦畔に挟まれた溝跡（SD）１条を検出した。

３層水田跡（第５図）

３層は、黒色の粘土層である。層中には灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。この灰白色火山灰は、富沢遺跡における他の調査箇所において10c前半に降下したとされる十和田ａ火山灰と層の特徴が似ているので、同様のものと考えられる。層下面の凸凹は著しい。調査区全面に分布するが、北半部は２層水田の耕作により削平され、遺存状況は悪い。畦畔は２条で平行しており、方向はＮ－10°－Ｅである。規模は、２条ともほぼ同じで検出長約5.5m、上端幅約0.6m、下端幅約0.8m、水田面からの高さは約３cmである。水田区画については不明であり、面積は測りえない。標高は、9.8～9.85mで、北東から南西方向へ緩やかに傾斜している。

遺物は出土していない。





第６図　５層平面・断面図

SD01

SD01は、畦畔１、２に挟まれた溝跡である。方向は、Ｎ－10°－Ｅである。規模は検出長約5.5m、上端幅約0.6m、下端幅約0.3m、深さ約５cmである。北東から南西方向に傾斜している。断面形は、逆台形である。埋土は、基本層の２層が堆積しているが、一部溝底で砂の堆積するところが認められ水が流れた痕跡を示しているので、SD01は３層水田に伴う水路であった可能性が考えられる。

遺物は、溝底面から、金属製品が１点出土した。煙管の吸い口で、内部に羅宇は遺存していなかった（第８図３）。

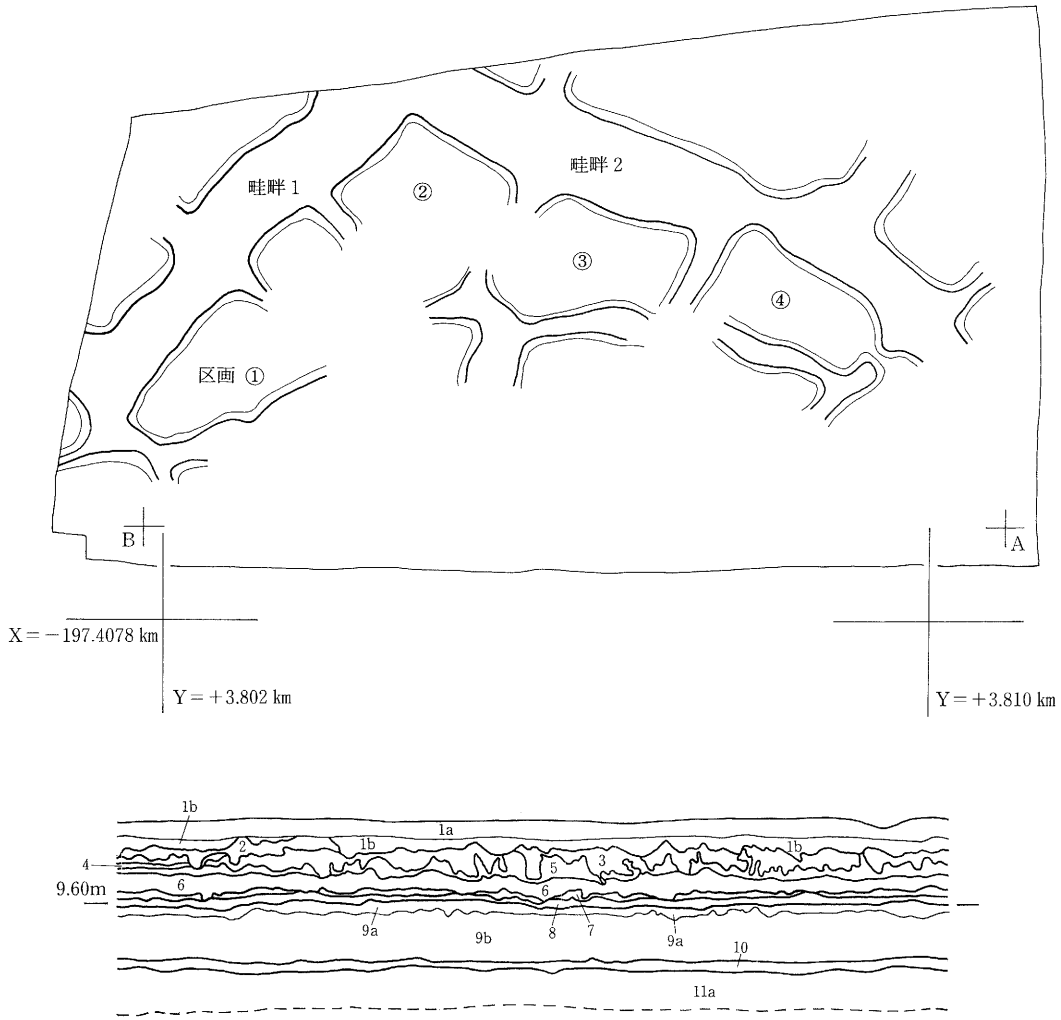
（３）５層の遺構と遺物

５層上面で溝跡１条を検出した。

SD02（第６図）

５層の上面で検出し、方向はほぼ真北を向いている。直線的な溝で、規模は検出長約5m、上端幅約0.35m、下端幅約0.2m、深さは約２cmである。断面形は浅い皿形で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面には緩やかな起伏が見られる。埋土は１層で粘性の強い黒色の粘土である。

遺物は層中から金属製品が１点出土した。煙管の吸い口で、内部に羅宇は遺存していなかった（第８図４）。



第7図　9a層平面・断面図

（4）9a層の遺構と遺物

9a層上面で畦畔18条と、水田区画4区画を検出した。

9a層水田跡（第7図）

9a層は、黒色の粘土層であり、層中には植物遺体を含んでいる。層下面の凸凹は、認められるもののあまり顕著ではない。また、層中には下層土である9b層をブロック状に含んでいる。

遺存状況が悪く完全な形で検出されたものはないが、畦畔18条とこれらによって区画されると想定できるものが4区画、水口と思われる箇所を1ヶ所検出した。畦畔1、2は比較的規模の大きな畦畔で状況から見て基幹的な性格を持つ畦畔と考えられる。1は方向がN－45°－Eで、上端幅約0.7m、下端幅約0.9、水田面からの高さは約5cmである。2は1と交わり方向はN－65°－Wで、上端幅約0.8m、下端幅約1m、水田面からの高さは約3cmである。畦畔3以下は、畦畔1、2に取りつくものがほとんどである。しかし、遺存状況が悪いために詳細は不明な点が多いが、畦畔1、2との接続がわかる部分では、「T」字状が多い。

これらの畦畔に区画されることが想定できる水田区画は、①から④4区画である。それぞれの大きさは、1.3m²～1.9m²で2m²に満たない小区画のものである。水田面の標高は9.6mほどで北西から南東方向への傾斜が見られる。

作土は、自然堆積層である9b層を撹拌している。層下面の起伏はあまり顕著ではなく、10層までは耕作までが及んでいない。

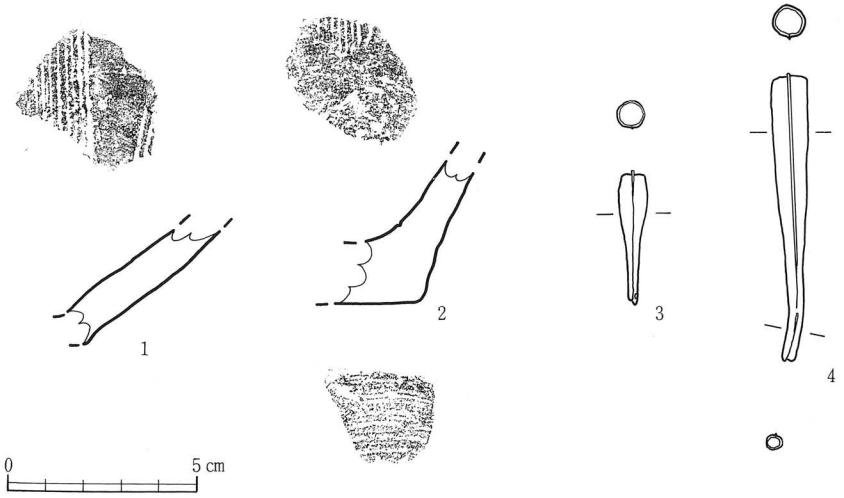
遺物の出土は見られなかった。

（５）旧石器時代相当層の調査

10層以下には遺構が存在しないことが断面観察より確認されたために、周辺の調査で確認されている旧石器時代層の確認のために調査区を縮小して深堀を行った。その結果、18層で針葉樹（グイマツ）の葉、根、枝、球果を含む腐植層を検出した。更に、22層、24層、25層でも球果等を含む腐植層を検出したが、樹根のような物は検出されなかった(写真図版３)。しかし、これらの層は安定した堆積状況を示すものではなく、大きく波打ち所々にしか存在していない。石器等の遺物は出土しなかった。

（６）その他の出土遺物

１層から陶器の擂鉢底部を出土した（第８図１・２）。産地は在地と思われるが、特定はできない。時期は、室町時代頃と考えられる。



第８図　出土遺物

98次　胸・磁気観察表

図版番号	種　別	遺構・層位	特　徴	産　地	年　代	残　存	法　量			写真図版	登録番号
							口径	底径	器高		
1	陶器・すり鉢	基本層　１層		岸窯系	17C～	体部破片	－	－	－	６－１	Ｉ－１
2	陶器・すり鉢	基本層　１層		岸窯系	17C～	底部～体部破片	－	－	－	６－２	Ｉ－２
写真のみ	陶器・皿	２層水田	染付	肥前	近世～	口縁破片	－	－	－	６－３	Ｉ－３
写真のみ	磁器・碗	基本層　1b 層	飴釉	瀬戸美濃	18C～	口縁破片	－	－	－	６－６	Ｊ－１

98次　金属器観察表

図版番号	種　別	遺構・層位	特　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
3	金属製品　キセル	基本層　１層	すい口のみ	(7.5)	1.0	－	６－４	Ｎ－２
4	金属製品　キセル	SD01(３層)、１層	すい口のみ	(3.5)	0.9	－	６－５	Ｎ－３

5．遺構の所属年代とまとめ

1．今次調査は、富沢遺跡の中心から北よりの地点にある。近接した調査として、7次（篠原・吉岡：1989）・25次（松本：1987）・50次（佐藤淳：1990）・76次（五十嵐：1992）・88次（太田：1995）がある。また、富沢遺跡北部東側基本層序（佐藤甲：1991）に包括される。それらの層との対応関係は層々から次のようになる。

今次	7次	50次	76次	88次	北部	
2		2	2	2	2	（近世～現代）
3					3	
4		3	4a	4a	4a	（平安：灰白色火山灰降下以降）
9a	7c		9a		11	（弥生：桝形囲式期）
9b						
14	24					
20				8		
21				9b		
22				9c		
23				10		
24				11a		
25				11b		

2．検出した遺構は、2層で段差、3層で畦畔2条と溝1条（SD01）、5層で溝1条（SD02）、9a層で畦畔18条とそれらによって区画された区画を4区画検出した。

3．2層で検出した段差は、水田耕作に伴うものであることは確認できたが、2層に伴うものか上層に起因するものかの判断はできなかった。年代は層中から出土した陶器から近世以降現代までの水田跡と推定される。

4．3層水田跡では、畦畔2条と畦畔に挟まれた溝跡1条を検出した。検出状況から見てこの溝跡は水田に関する水路と考えられる。調査面積が小さいので、水田区画等は明確ではない。年代は、時期を決定する資料は層中からは出土していいないが、層中に灰白色火山灰を含むことや周辺の調査との対応から平安時代（灰白色火山灰降下以降）から中世頃と推定される。

5．5層では溝跡1条を検出している。年代を示す遺物は、層中から金属性の煙管が出土しているが、上層からの流れ込みの可能性も否定できないことから明確な年代は決定できない。

6．9a層水田跡では、畦畔18条、水田区画4区画、水口1ヶ所を検出した。遺存状況が悪いので、区画がはっきりしないが面積2㎡ほどの小区画水田になるものと考えられる。年代は、時期決定資料が出土していないので周辺の調査（7次調査・30次調査）との対応から弥生時代中期（桝形囲式期）の水田跡と推定される。また、近接する調査では畦畔を伴う水田跡は検出されておらず、同時期の水田跡の広がりが確認できた。

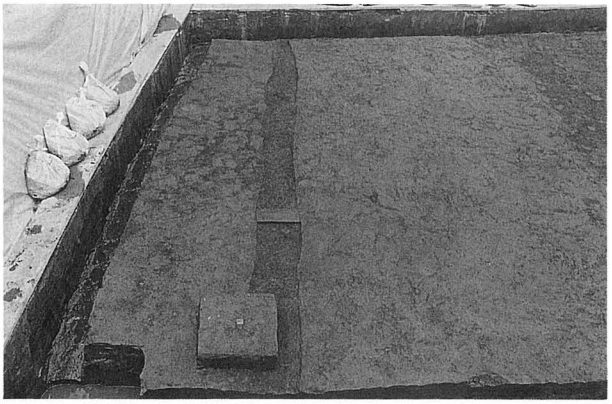
7．21層以下で検出した腐植層は、主にグイマツの葉・枝・球果を含んでいる。これらの層の自然科学的な年代測定は行っていないが、周辺の調査の成果より後期旧石器時代の相当する層と考えられることができる。

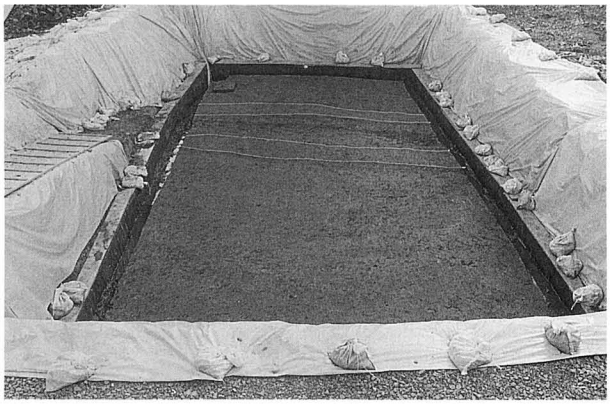
1．9a 層水田跡検出状況確認（東より）

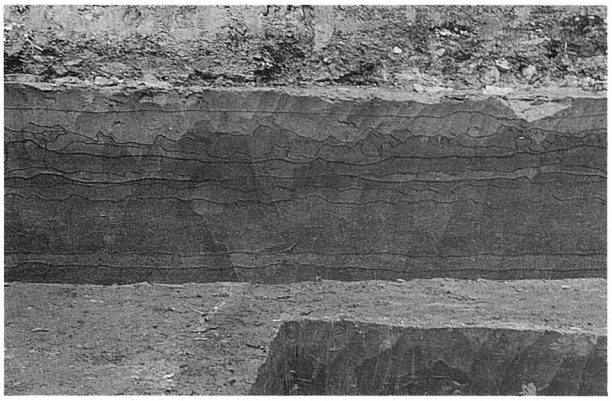
2．9a 層水田跡検出状況確認（東より）

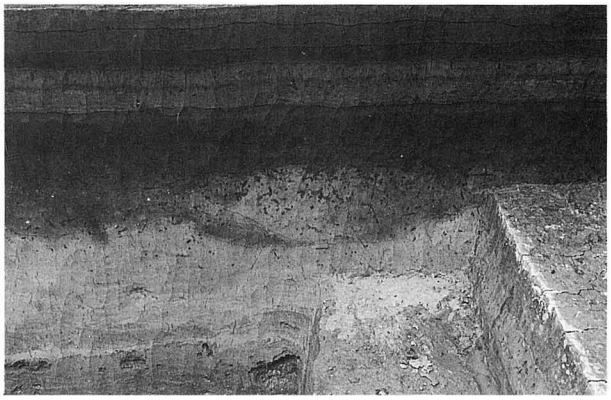
3．22層腐植層全景（南より）

写真 I


1


2


3


4

5

1　SD02 全景
2　3 層水田跡検出状況（東より）
3　北壁 1 段目セクション①（南より）
4　北壁 2 段目セクション②（南より）
5　北壁腐植層（南より）
6　出土遺物

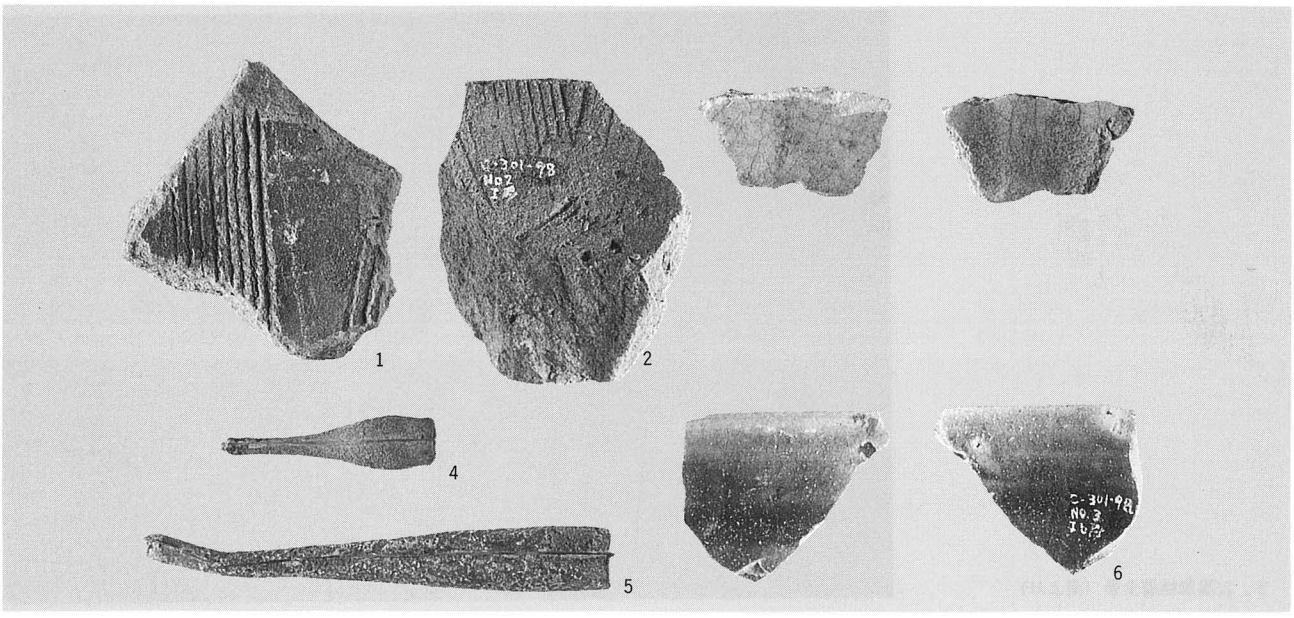
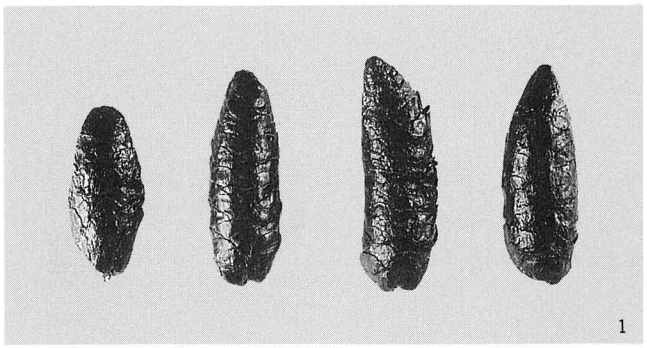
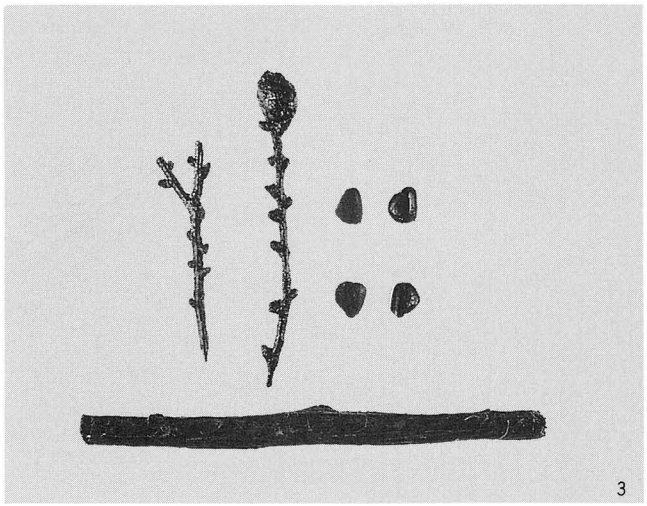
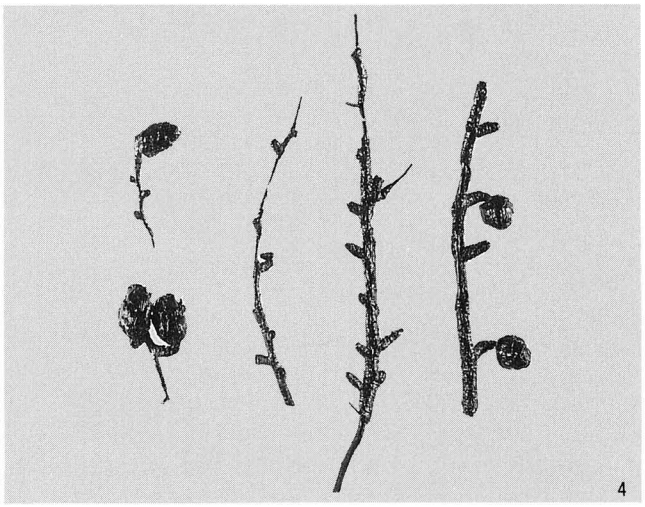
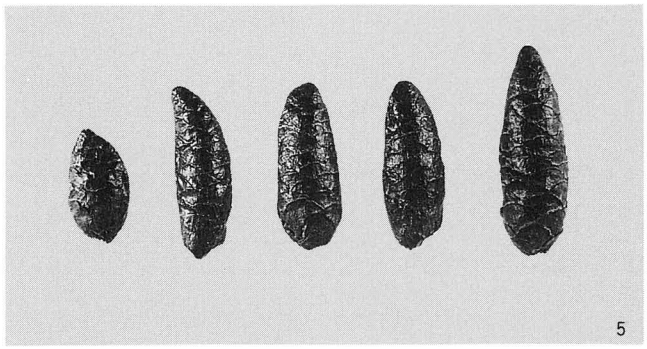


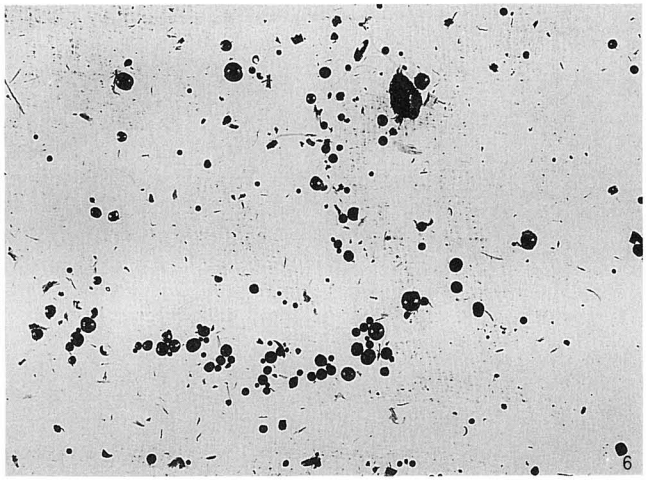
写真 2

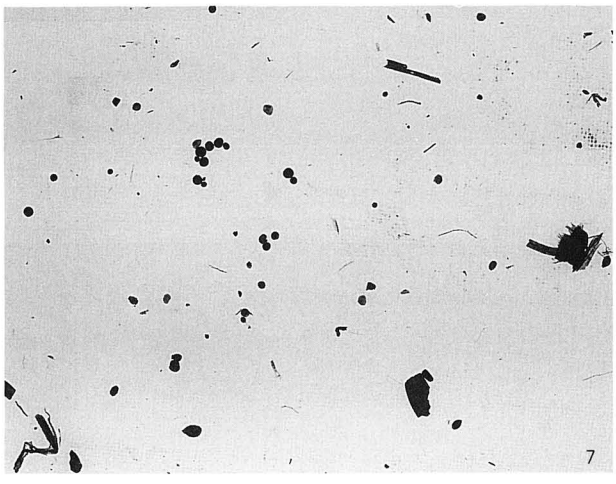












18層　トミザワトウヒ（毬果）
18層　グイマツ（毬果）
18層　グイマツ（毬果十枝）
22層　グイマツ（枝十毬果）
22層　トミザワトウヒ（毬果）
24層　トミザワトウヒ（毬果）
25層　トミザワトウヒ（毬果）

写真 3

第５節　富沢遺跡第99次調査

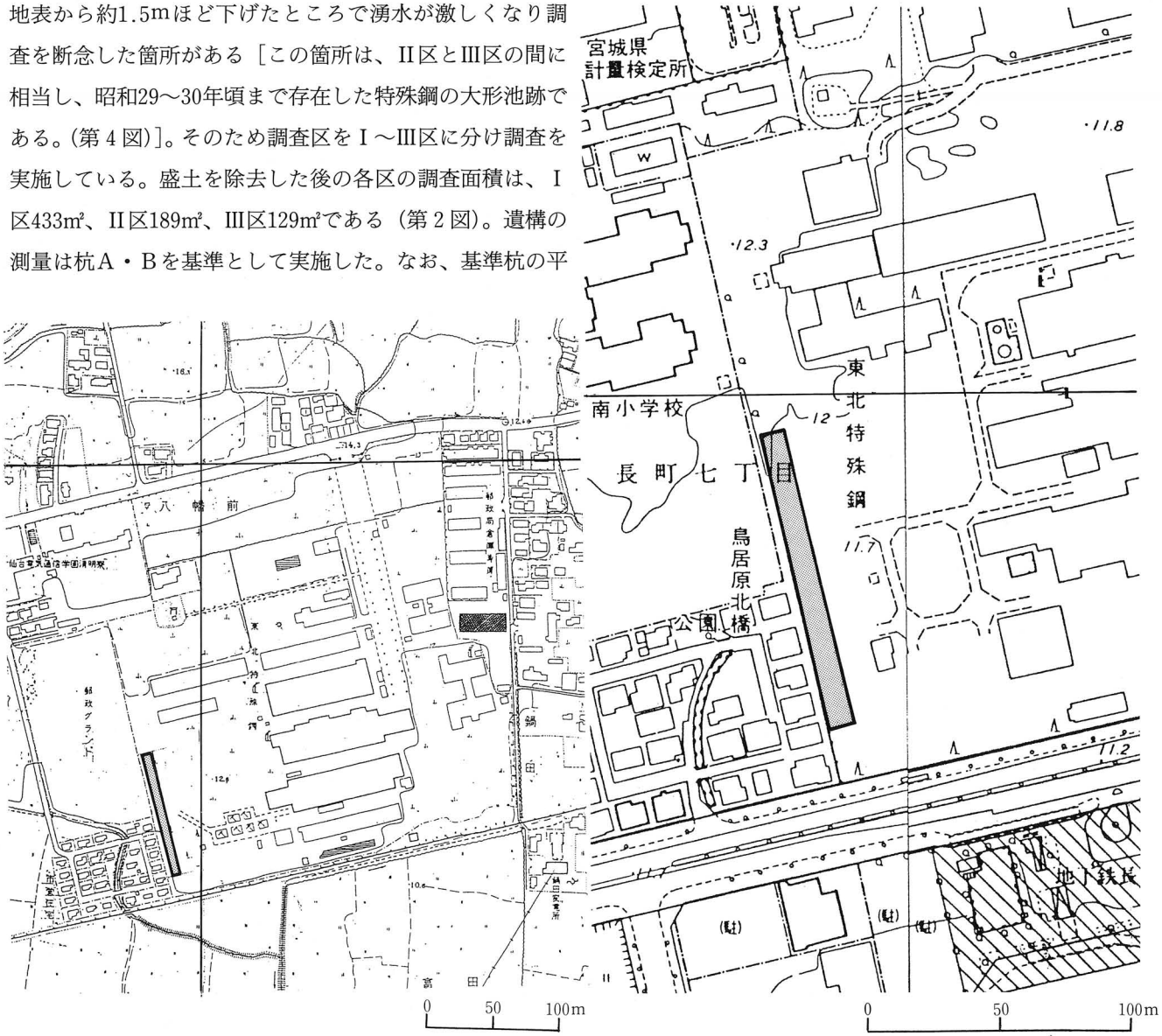
１　調査に至る経過

平成８年７月４日付けで、（仮称）仙台女性センター、大規模小売店舗等の建設に伴い旧東北特殊鋼株式会社（以下「特殊鋼」と略す）の敷地の西端に道路を建設したいとして文化財保護法に基づく届け出が成された。平成８年７月17日に第１回目の話し合いが関係各課、機関との間で持たれた。内容は、調査時期、期間、契約額などであり、以後も話し合いを随時行い契約を交わし、平成８年８月19日より調査を開始した。

２．調査の方法

調査箇所は、富沢遺跡の北部に位置する。特殊鋼の敷地として利用されていたところで、西隣の民地との境にはブロック塀が立っていた。そのため調査に先立ち塀、および基礎の撤去を行った。

今回の調査対象面積は、1300㎡であるが、隣地が近いので安全確保のため南北約115m、東西約９m、面積1026㎡の調査区を設定した（第１図）。しかし、重機により盛土を排除したところ特殊鋼時代の大規模なカクランが露出し、地表から約1.5mほど下げたところで湧水が激しくなり調査を断念した箇所がある［この箇所は、II区とIII区の間に相当し、昭和29～30年頃まで存在した特殊鋼の大形池跡である。（第４図）］。そのため調査区をＩ～III区に分け調査を実施している。盛土を除去した後の各区の調査面積は、Ｉ区433㎡、II区189㎡、III区129㎡である（第２図）。遺構の測量は杭Ａ・Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平



第１図　調査区位置図

面座標系Xにおける座標値を測量し、遺構内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197263.373m・Y＝＋3952.337m、杭B：X＝－197370.776m・Y＝＋3976.095m）。基準杭A・Bを基に5mメッシュを組み南北方向をアルファベット、東西方向を算用数字をあて、その組み合わせでグリット名とした（第2図）。遺物の取り上げ、遺構の実測にはこれらグリットを更に1mメッシュに分けて行っている。遺構実測図は1／20を基本とし、遺物が集中するようなところでは随時1／10などで実測し作図している。写真記録には、35㎜カメラ2台を使用し、モノクローム・カラーリバーサル撮影を行い、カラーネガは随時インスタントカメラで行っている。また、空中写真撮影には6×7、4×5の大型カメラ等を使用している。自然科学分析用としてプラント・オパール分析にⅠ・Ⅲ区で2層～10層、火山灰分析用に35層から土壌サンプリングを行った。また、37層から出土した樹木片を^{14}C分析用に採集している。

調査は、平成8年8月19日から調査員2名、スタッフ23名で開始した。盛土を重機で除去し、以下は人力による調査を実施している。調査区の周囲には排水と土層観察を兼ねた側溝を設定した。断面観察の結果5・7・12・14層に水田土壌の可能性のある層の存在が確認されたので9月18日、調査員1名・スタッフ19名を増員し、遺構の検出に努めた。また、12月からはスタッフ17名を増員し調査を行っ

第2図　調査区設定図

ている。

16層上面までは調査区全面の精査を行ったが、以下の層位は自然堆積層が連続することが確認され、また、周辺の調査の成果かからも同様のことが窺えるので、これより以下では28次調査などで検出されている縄文時代早期の層および、30次・58次・88次調査などで検出されている森林跡を伴う後期旧石器の層の有無の確認を目的とした深掘り調査を実施した。深掘り調査区はＩ区２箇所、III区１箇所設定し、深掘りに関しては安全管理に十分に配慮しながら行った。III区32層中で十和田中掫火山灰と思われる火山灰ブロックを検出した。また、III区35層からナイフ形石器１点が出土したので東南に１×１ｍほど拡張したが、これ以上の出土はなかった。III区では37層を確認した段階で標高５ｍとなり、また、ボーリング棒で下層に礫層の存在を確認できたことによりこれ以上の深掘りは危険であると判断し調査を終了した。III区で確認できた腐植層は、34層・37層・38層である。Ｉ区では、34～37層で腐植質粘土層を検出した。しかし、37層まで掘り下げた段階で湧水が激しくなり、これ以上の調査は危険であると判断し12月27日調査の一切を終了した。

３．歴史的環境

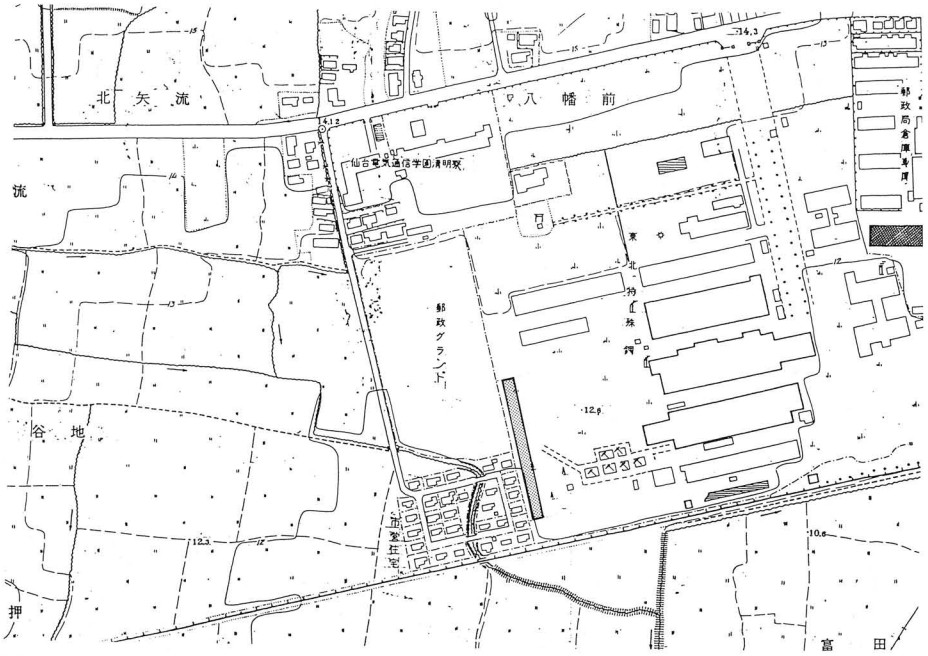
富沢遺跡の全般的な自然的・歴史的環境については、すでに何度か取り上げられており割愛する。詳細は富沢遺跡第15次調査（斎野他：1987）、同第30次調査（太田他：1991）の報告書を参照していただきたい。ここでは、特殊鋼の敷地付近について述べることにしたい。

特殊鋼の敷地内の旧地形は、北部で南側に張り出す微高地となっており、この上に金岡八幡宮が奉られている。南部と西部が低地になっている。特殊鋼の所有地になる前は「舞台八幡宮」と呼ばれ、地元の信仰を集めていたようだ。この八幡宮は塚上にあるが、塚自体は古墳と理解されており、仙台市では「金岡八幡古墳」として登録している。ただ、調査されたことはなく詳細は不明である。

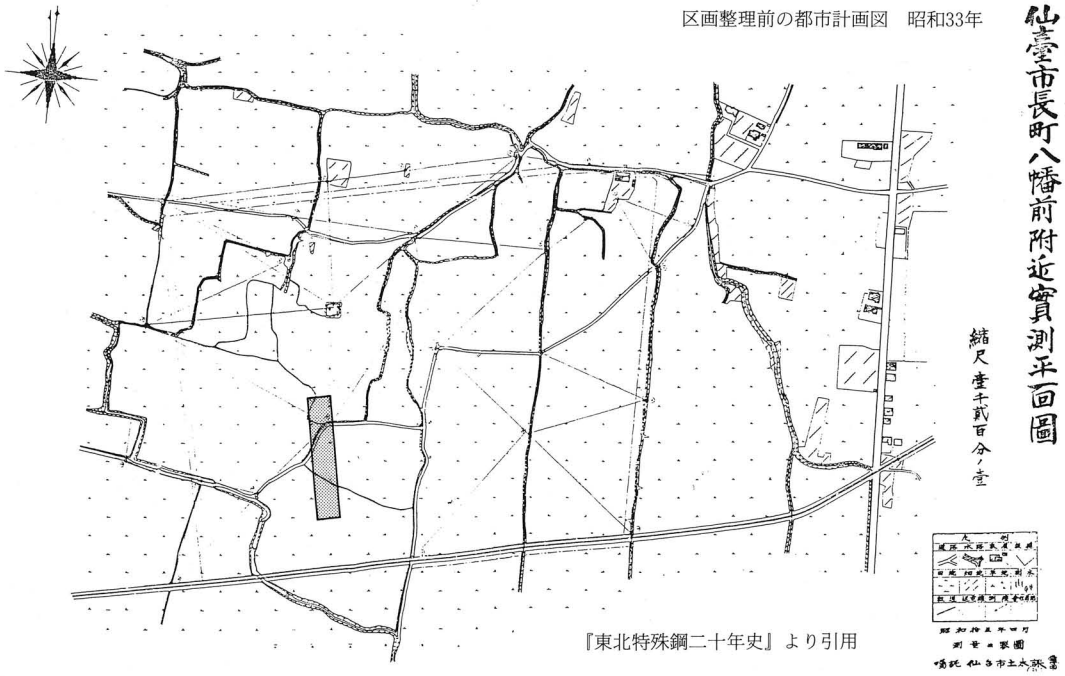
この八幡宮は、『名取郡誌』によれば天喜年中に河内国平岡より遷祀したと言い、その後永禄年中に地元の国人領主粟野大膳が再興したといわれる。また、『東北特殊鋼二十年小史』によれば、明治18～19年頃に火災に合いその後荒廃していた。昭和14年に特殊鋼がこの地一帯を購入し、その際八幡宮の再建（昭和15年）を計った。工事直前まで塚上には数百年を経たと見られる老杉や三本の松、小さな堂祠があった。また、工事に際しては、延宝や安政などの年号のある墓石・屋根瓦・煙管などが発見されたと指摘されている（発見位置は不明）。特殊鋼の敷地になる前は、地元では神社の周辺にある旧字名の「宮田・八幡前・矢流」などは神域であったと言い伝えていたようである。この神社や調査地点の属する行政単位は、中世には正応五年（1292）の『中務丞惟秀譲状』（斎藤文書）にある「なとりのこほりひらおかのかう」にみられるように、片穂氏が地頭代である名取郡平岡郷に属していた。近世には「平岡村」と呼ばれていたことが『封内風土記』などにみえる。第３図の『名取郡北方根岸村・平岡村入会絵図』（文政五年）でも「平岡村」が確認できるとともに、塚上に鳥居が表現され「舞台八幡」の名が明記されている。この神社は、前述したように河内国平岡より遷祀したという記述と村名が一致する点興味深いのであるが、これを裏付ける資料はないようである。いずれにしろ、この神社はこの村の重要な位置を占めていたと推察される。なお、調査区のＩ区内に「八幡前」と「鳥居原」の字境が位置することが、地図の検討によって判明したことを報告しておきたい（第３図）。

４．基本層序

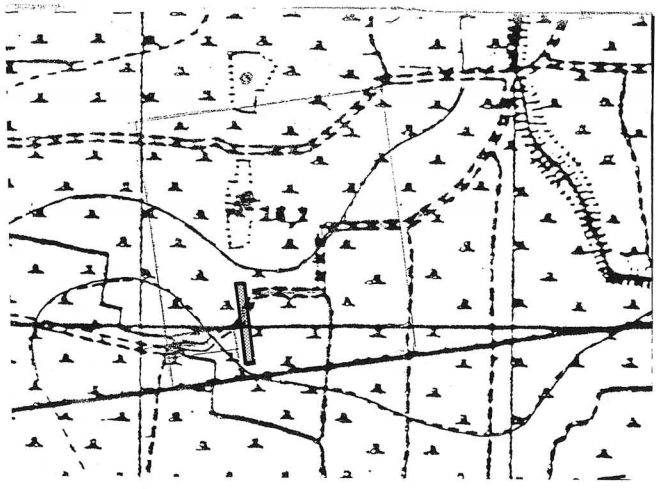
今次調査区は特殊鋼敷地内にあり、工場解体に伴って削平され、その後山砂による盛土整地がなされていた。このときの削平や工場使用時の撹乱等によって、Ｉ・II区の基本層上部は失われている。一方、南側のIII区は、元来低地部のためか工場建設以前の耕作土が、盛土によって保存されていた。なお。調査区北部では、基本層１層以下



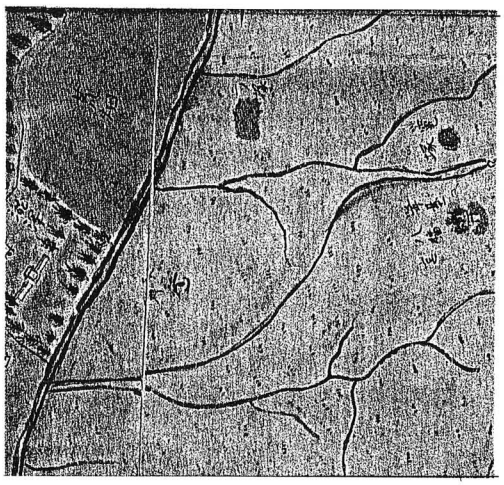
区画整理前の都市計画図　昭和33年



『東北特殊鋼二十年史』より引用

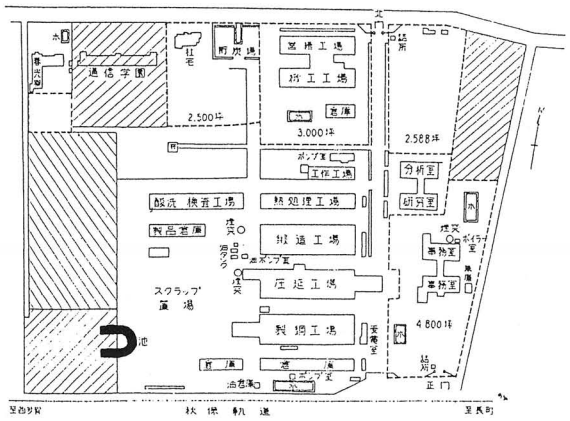


「仙台南部」大日本帝国陸地測量部　明治四十年発行



『根岸村・平岡村入会絵図』（部分）

第3図　調査地付近の土地利用変遷図



第４図　昭和30年当時の特殊鋼敷地図

『東北特殊鋼二十年史』より引用

の層序は西壁セクションのみ確認できるが、１～４層の平面的精査・理解はできなかった。

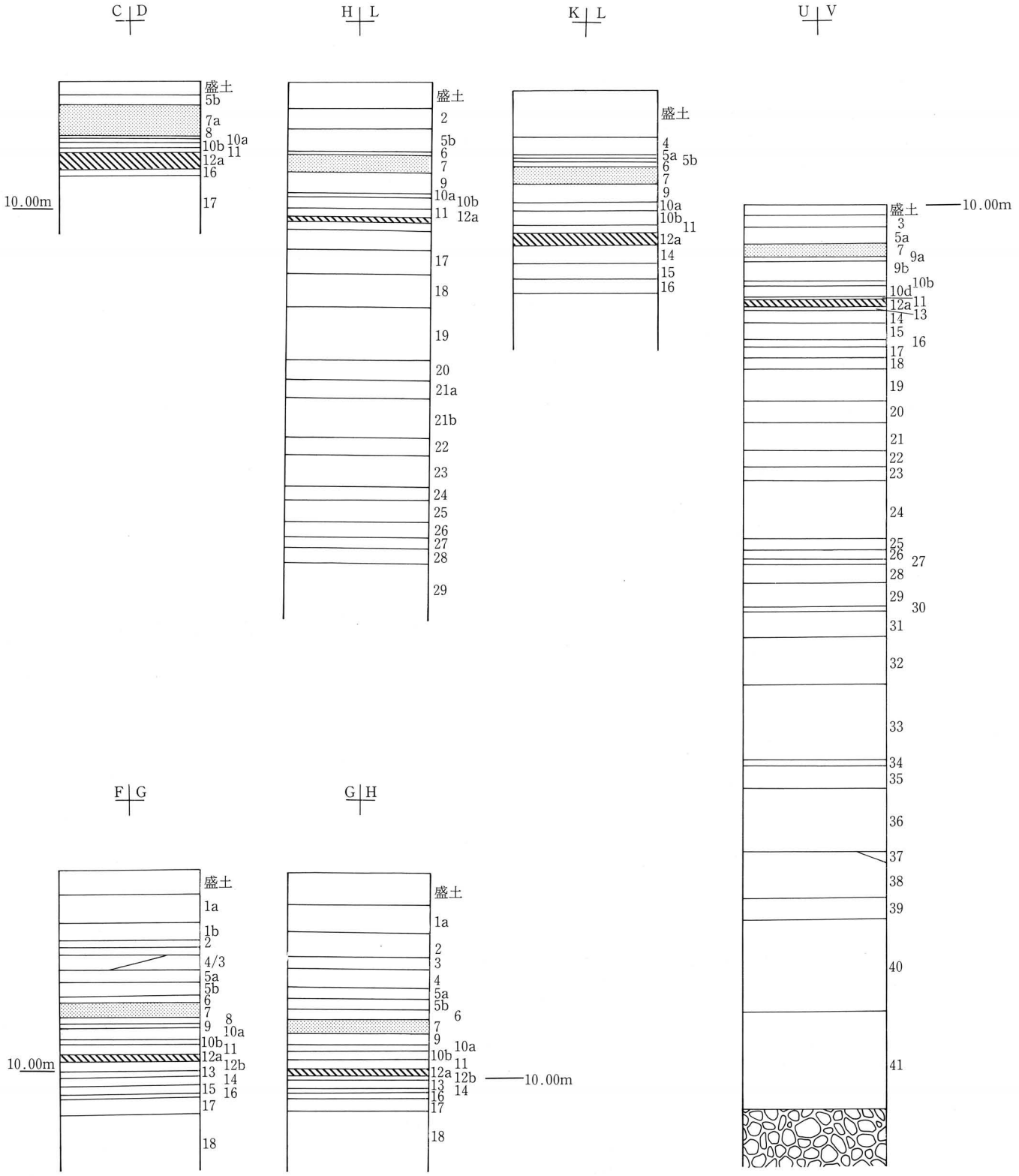
基本層はⅠ・Ⅱ区では大別37層、細別43層に分けられたが、さらに細分可能な層もある。１～３層は、砂を多量に含むシルト系の土壌である。いずれも水田土壌と考えられる。４層は、風化礫を含みラミナ状の堆積を示す砂層である。下部に薄い粘土層がⅠ・Ⅱ区で見られ、一部で灰白色火山灰をブロック状に混入する。５層はかなり砂の影響が認められる。5a 層は水田土壌だが、下部に比較的厚い砂層を伴う地点（Ⅰ区南半～Ⅱ区）がある。Ⅰ区では本層の上面に灰白色火山灰ブロックがのるが、Ⅲ区では層中に混入している。Ⅱ区では火山灰が確認できない。６層より17層までが泥炭質粘土・粘土層で、植物遺体の目立つ層群である。特に、Ⅱ区・Ⅲ区に分布する15層は、植物遺体を極めて多量に含有している。これらの層序中、7a・８・12a・14 層が水田土壌である。また、10a 層も下面に細かな起伏があり、水田土壌の可能性がある。ただし、畦畔等の水田施設は検出されなかった。Ⅲ区では、16層以下の層がⅠ・Ⅱ区と異なるようになる。弱い還元化は、７層以下で認められるようになる。18層は風化礫を含む砂層であり、Ⅰ・Ⅱ区に分布しⅢ区には認められない。Ⅰ区北部では層厚が非常に厚くなっていく。19～24層は粘土層であり、上層に比べて植物遺体は非常に少ない。25層は砂礫層で、上部は黒く土壌化している。この層も18層同様、Ⅲ区では認められない。26～30層は粘土層で、このうち28層で火山灰と見られるブロックが出土した。また、28･29層の上面でピットが検出され、樹根跡と判断した。31～36層も粘土層であるが、還元化して緑灰色へと変化する。32～36層は締まって硬く、特に33層は緑色が強く非常に硬い土である。腐植層そのものは検出できなかったが、腐植質粘土層（35層）は確認できた。旧石器時代に相当する層である。また、34～37層中には、針葉樹の葉が含まれているが、球果・樹根・枝等は出土していない。37層は砂層である。

（Ⅲ区の特徴）

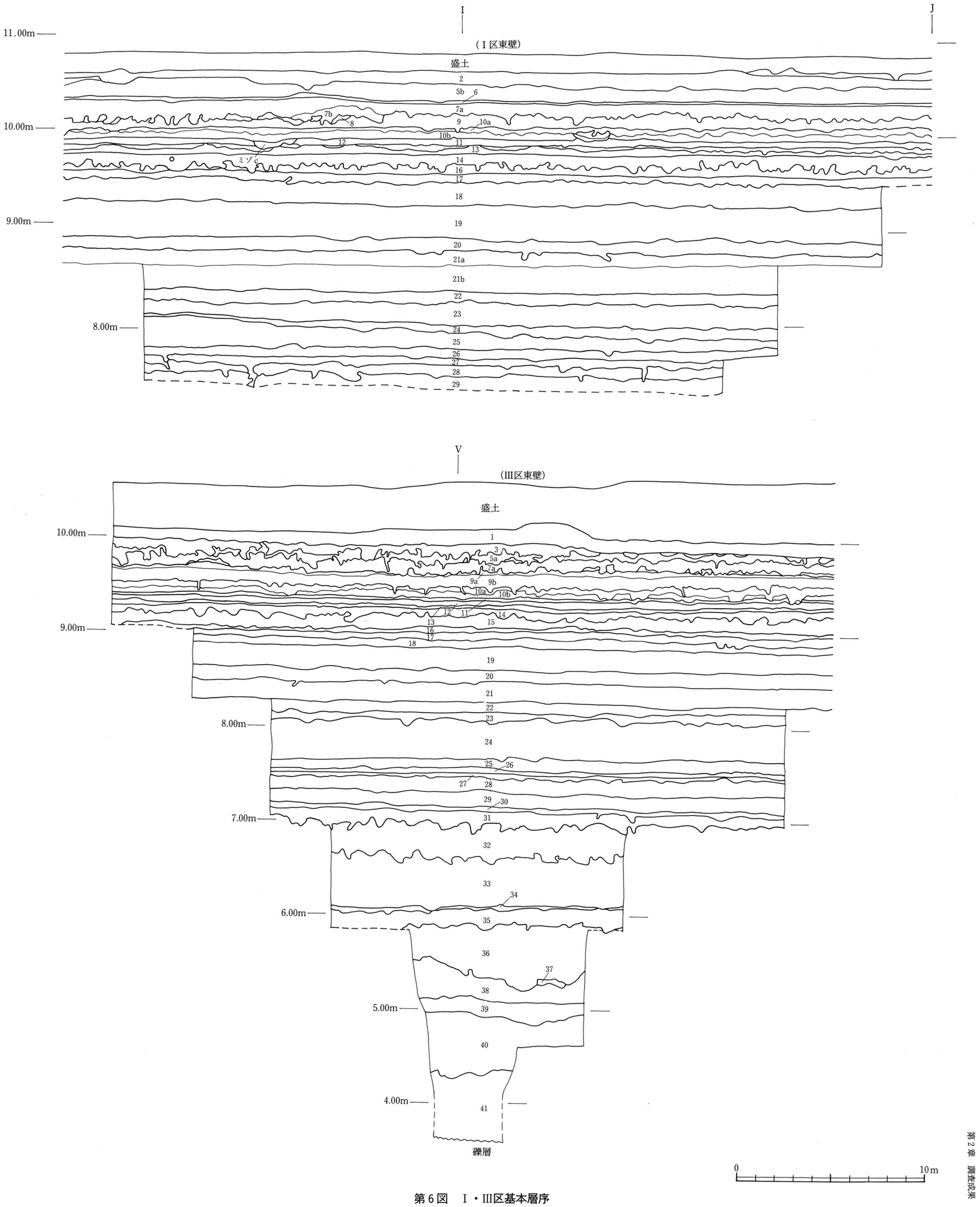
Ⅲ区では5a 層が存在し、９層が２層に細分される。Ⅲ区では泥炭質粘土が発達しており、16層以下でも顕著である。16～31層は泥炭質粘土・粘土であるが、風化礫を含む24層を境に上・下に大別できよう。24層自体は、Ⅰ区の18層に対応する可能性があろう。31層では、上面に火山灰ブロックがのり、層中から縄文時代早期末の条痕文土器が出土した。この火山灰の存在から、Ⅰ区の28層、第98次調査区の14層、地下鉄長町南駅深掘り区（第５次調査）の33層や、同長町南駅Ｂ換気口区（第17次調査）の24層との対応が考えられる（1989：篠原･吉岡）。32～41層は還元化の顕著なシルトや粘土の層が主体で、締まっている。特に、38～40層は強い還元化を受け緑色の土に変化している。但し、これらの層はⅠ区ほど硬く締まってはいない。腐植質化が見られるのは34・37層で、マツ科と思われる針葉樹の葉が含まれている。また、37層では枝、38層では木片や種子（約1.5cm×約0.8cm・中空）３個体分が検出された。今回の調査で特に注目される点は35層で１点ではあるが石器が出土したことである。本遺跡では、これまで石器の出土は第30次調査地点に限られていたが、今回の出土により分布域が広がった。

以上で層序の特徴を概観したが、次に地形との関係について若干触れておきたい。

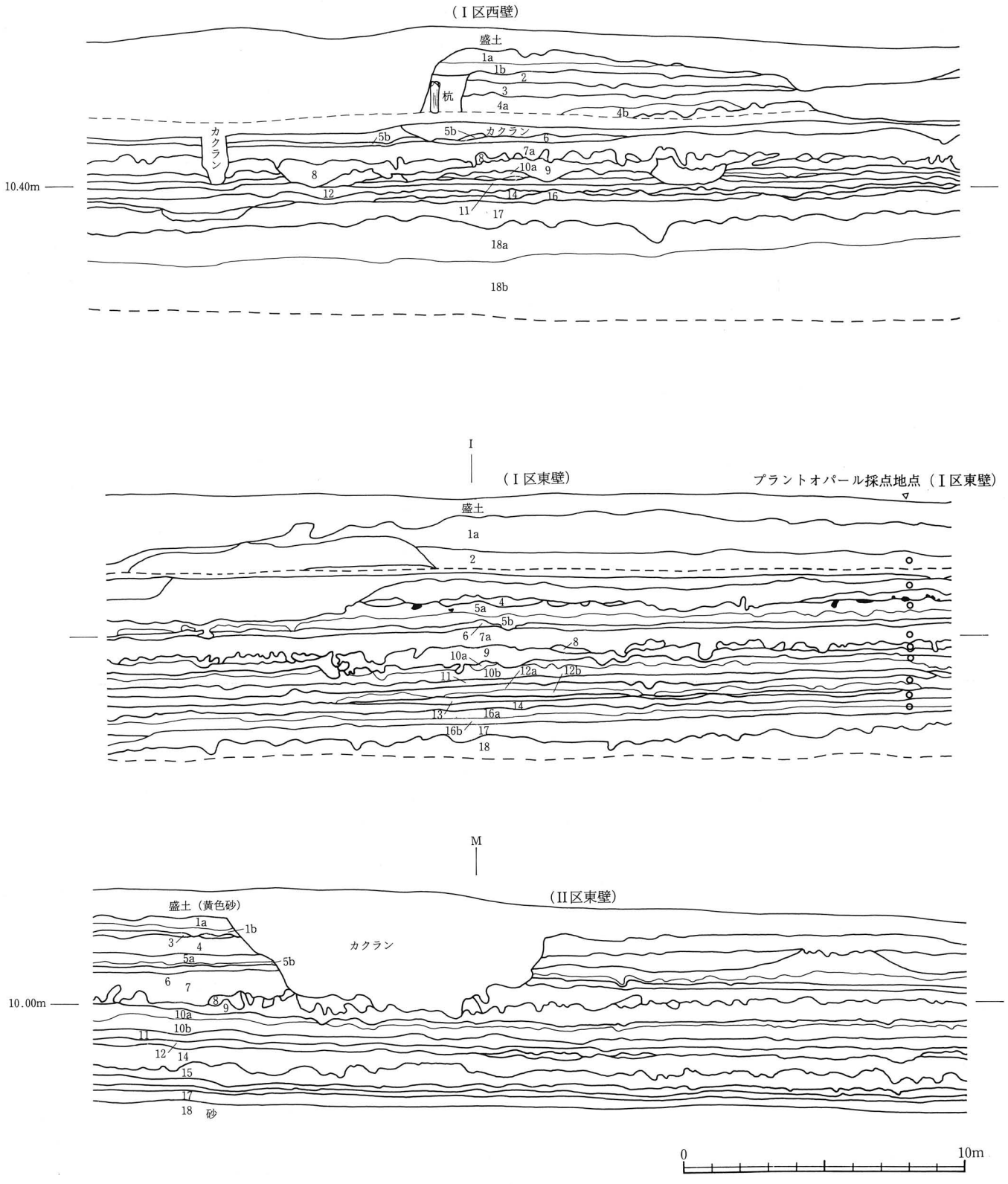
今回の調査区は、遺跡の北端部にあたり北側の微高地から東・南西に下がる傾斜地である。調査区内では、Ⅰ区中央からやや北寄りと、Ⅱ区･Ⅲ区間に傾斜の変換点があるようである。基本層序もこの変換点に対応するように、Ⅰ区北部では下層の砂層が発達しており、Ⅲ区では泥炭質粘土や粘土が発達している。Ⅰ区では、変換点付近で各層水田跡の大畦畔の集中傾向が見られる。一方、旧石器時代の地層は、Ⅰ区・Ⅲ区ともおよそ34層以下が相当する


C | D
盛土
5b
7a
8
10b 10a
12a 11
16
10.00m
17
H | L
盛土
2
5b
6
7
9
10a 10b
11 12a
17
18
19
20
21a
21b
22
23
24
25
26
27
28
29
K | L
盛土
4
5a 5b
6
7
9
10a
10b 11
12a
14
15
16
U | V
盛土
10.00m
3
5a
7 9a
9b
10d 10b
12a 11
14 13
15 16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26 27
28
29 30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
F | G
盛土
1a
1b
2
4/3
5a
5b
6
7 8
9 10a
10b 11
10.00m
12a 12b
13 14
15 16
17
18
G | H
盛土
1a
2
3
4
5a
5b 6
7
9 10a
10b 11
12a 12b
10.00m
13 14
16
17
18

第5図　層序模式図


I
J
11.00m
10.00m
9.00m
8.00m
（Ⅰ区東壁）
盛土
2
5b
6
7a
7b
8
9
10a
10b
11
12
13
14
ミゾ6
16
17
18
19
20
21a
21b
22
23
24
25
26
27
28
29
V
（Ⅲ区東壁）
盛土
10.00m
9.00m
8.00m
7.00m
6.00m
5.00m
4.00m
1
3
5a
7a
9a
9b
10a
10b
12
11
14
13
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
礫層
0
10m

第6図　Ⅰ・Ⅲ区基本層序


（Ⅰ区西壁）
盛土
1a
1b
2
3
杭
4a
4b
カクラン
5b
5b
カクラン
6
7a
8
10a
9
10.40m
12
14
16
11
17
18a
18b
I
（Ⅰ区東壁）
プラントオパール採点地点（Ⅰ区東壁）
盛土
1a
2
4
5a
5b
6
7a
8
10a
9
11
10b
12a
12b
13
14
16a
16b
17
18
M
（Ⅱ区東壁）
盛土（黄色砂）
1a
1b
3
4
カクラン
5a
5b
6
7
8
9
10.00m
10a
10b
11
12
14
15
17
18
砂
0
10m

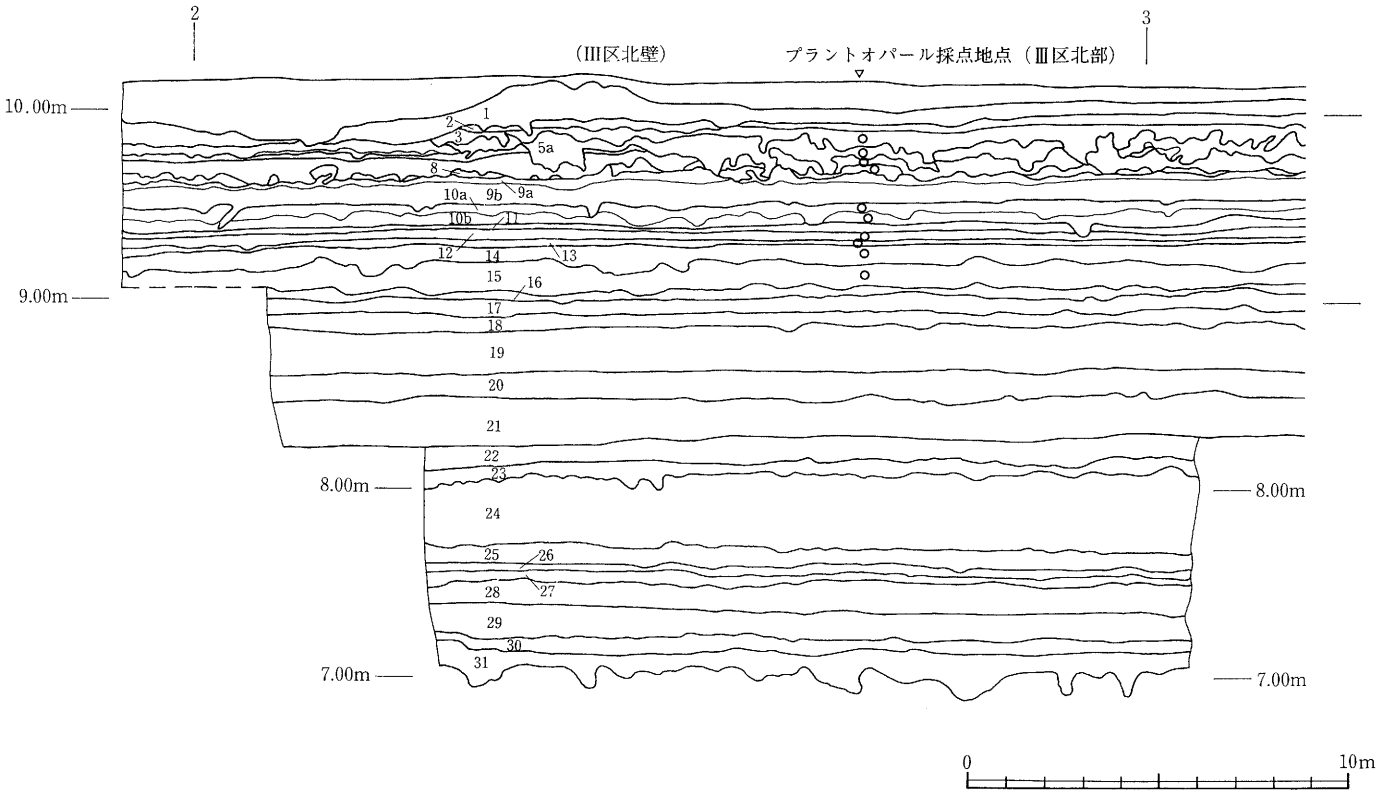
第7図　Ⅰ・Ⅱ区基本層序

99次Ⅰ・Ⅱ区註記

層序	土　色	土　性	粘　性	しまり	層厚（cm）	備　考
1a	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	ややあり	あり	10～18（Ⅲ区）	砂多量　Ⅰ～Ⅱ区では削平が著しい　黒色シルトや黄灰色砂質シルトのブロックを含む
1b	褐色 10YR4/4	シルト質砂	ややあり	あり	2～10	酸化鉄を多量に含む　粘土を含む
2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	ややあり	あり	6～20	小礫は少ないが、砂は多い（近世の水田？）
3	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	ややあり	あり	4～20（Ⅲ区）	小礫は少ないが、砂は多い（中世の水田？）
4	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂	なし	なし	0～31	風化礫を含み、細砂、粗砂をラミナ状に堆積する　下部に粘土層があり、火山灰ブロックを含むところがある
5a	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	あり	あり	3～28	Ⅰ・Ⅱ区では下部に砂層があり、層上面に火山灰ブロックを含む（水田）
5b	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土	あり	あり	0～22	Ⅰ・Ⅱ区では上面に粗砂を含む　酸化鉄、灰白色砂を含んでてる
5c	黒色 10YR2/1	泥炭質粘土	あり	あり	2～3	Ⅲ区の北部にのみ分布　植物遺体を含む
6	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	2～8	植物遺体を少量含む
7a	オリーブ黒色 5Y3/1	粘土	あり	ややあり	5～30	酸化鉄・植物遺体を僅かに含む（平安水田）
7b	黒褐色 2.5YR3/1	粘土	あり	なし	0～16	Ⅰ区のみ分布　上部ににぶい黄褐色粘土層がある　酸化鉄・植物遺体を少量含む
8	黒色 10YR1.7/1	粘土	あり	なし	0～15	酸化鉄・植物遺体・炭化物を少量含む（奈良～平安？水田）
9	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	0～15	植物遺体を多量に含む　上部に灰黄褐色泥炭層（10YR4/2）が見られる。
10a	暗灰黄色 2.5Y4/2	粘土	強い	なし	0～12	植物遺体を少量含む　水田？
10b	灰黄色 2.5Y6/2 黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	強い	なし	0～12	互層　植物遺体を含む
11	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	0～11	植物遺体を含む
12a	黒色 10YR3/1	粘土	あり	なし	2～14	植物遺体を含む　弥生水田
12b	黒褐色 2.5Y3/1	粘土	あり	なし	0～6	Ⅰ区にのみ分布　植物遺体を含む
13	黒褐色 2.5Y3/1	粘土	あり	なし	0～12	黄褐色粘土（10YR5/3）層を狭在する
14	黒色 2.5Y2/1	粘土	あり	なし	0～19	植物遺体を含む（Ⅰ区北部には少ない）弥生水田
15	黒色 10YR2/1	泥炭	あり	なし		植物遺体を多量に含む（Ⅰ区には分布しない）粘土層を含む
16	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	0～28	Ⅰ区からⅡ区北端にかけて分布し、Ⅰ区では更に4層に細分が可能で、北部では砂が混じる
17	黒褐色 10YR2/2	粘土	あり	なし	6～30	砂を含むがⅠ区北部では特に大きい
18	オリーブ褐色 2.5Y4/4	砂	なし	なし	18～34	上部は粗砂で風化が多く、Ⅰ区北半では粘土層を狭在する
19	暗灰黄色 2.5Y4/2 黒色 2.5Y2/1	粘土	あり	なし	27～39	互層　植物遺体を含む
20	黒色 10YR1.7/1	粘土	あり	なし	10～17	上部に多く植物遺体を含む　3層に細分ができるところもある
21a	灰黄褐色 10YR4/2 黒褐色 2.5Y2/1	粘土	強い	なし	12～19	互層　植物遺体を含む　層境が不明瞭
21b	灰黄褐色 10YR4/2 黒褐色 2.5Y2/1	粘土	強い	なし	24～30	互層　植物遺体を含む　層上面で自然流路（砂堆積）を検出
22	黒色 10YR1.7/1	粘土	あり	なし	8～18	植物遺体を含む
23	灰オリーブ 5Y5/2 黒褐色 2.5Y3/1	粘土	あり	なし	8～21	互層　植物遺体を含む
24	黒色 2.5Y2/1	粘土	あり	なし	0～10	植物遺体を含む
25	暗灰黄色 2.5Y2/1	砂礫	ややあり	ややあり	21～34	植物遺体・粘土を含む　上部は土壌化して黒い（2.5Y2/1）
26	黒色 2.5Y2/1	粘土	あり	ややあり	6～12	植物遺体少量
27	黒色 10YR1.7/1	粘土	あり	ややあり	5～13	植物遺体少量
28	黒褐色 2.5Y3/1	粘土	あり	ややあり	4～14	火山灰（？）ブロックを含む　上面で樹根跡検出
29	オリーブ黄色 5Y6/3	粘土	あり	ややあり	約20前後	砂を含む　上面で樹根跡検出
30	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土	あり	ややあり	約20前後	砂多量（確認のみ）
31	色片になし	粘土	あり	あり	30～40	砂が多量で、色調は濃緑色である（確認のみ）
32	明緑灰 7.5GY8/1	粘土	あり	かたい	6～9	（確認のみ）
33	色片になし	シルト質粘土	ややあり	かたい	75～80	非常にかたく、砂層を狭在し、色調は暗濃緑色である（確認のみ）
34	色片なし	粘土	あり	あり	3～6	針葉樹の葉を少量含み、色調は明濃緑色である（確認のみ）
35	黒褐色 2.5Y3/2	粘土	あり	ややあり	4～7	腐植層　針葉樹の葉を多く含むが、球果や枝などは含まない（確認のみ）
36	にぶい黄橙色 10YR6/3	粘土	あり	あり	13～14	針葉樹の葉を少量含む（確認のみ）
37	明緑灰色 5G2/1	細砂	なし	なし	16以上	針葉樹の葉を少量含む（確認のみ）

99次Ⅲ区註記

層序	土　色	土　性	粘　性	しまり	層厚（cm）	備　考
1a	灰黄褐色 10YR4/2	砂質シルト	ややあり	あり	10～18（Ⅲ区）	砂多量　Ⅰ～Ⅱ区では削平が著しい　黒色シルトや黄灰色砂質シルトのブロックを含む
1b	褐色 10YR4/4	シルト質砂	ややあり	あり	2～10	酸化鉄を多量に含む　粘土を含む
2	にぶい黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	ややあり	あり	6～20	小礫は少ないが、砂は多い（近世の水田？）
3	黒色 10YR2/1	シルト質粘土	ややあり	あり	4～20（Ⅲ区）	小礫は少ないが、砂は多い（中世の水田？）
4	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂	なし	なし	0～31	風化礫を含み、細砂・粗砂をラミナ状に堆積する　下部に粘土層があり、火山灰ブロックを含むところがある
5a	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘土	あり	あり	3～28	Ⅰ・Ⅱ区では下部に砂層があり、層上面に火山灰ブロックを含む（水田）
5b	にぶい黄褐色 10YR5/3	粘土	あり	あり	0～22	Ⅰ・Ⅱ区では上面に粗砂を含む　酸化鉄、灰白色砂を含んでいる
5c	黒色 10YR2/1	泥炭質粘土	あり	あり	2～3	Ⅲ区の北部にのみ分布　植物遺体を含む
6	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	なし	2～8	植物遺体を少量含む
7a	オリーブ黒色 5Y3/1	粘土	あり	ややあり	5～30	酸化鉄・植物遺体を僅かに含む（平安水田）
7b	黒褐色 2.5YR3/1	粘土	あり	なし	0～16	Ⅰ区のみ分布　上部ににぶい黄橙色粘土層がある　酸化鉄・植物遺体を少量含む
8	黒色 10YR1.7/1	粘土	あり	なし	0～15	酸化鉄・植物遺体・炭化物を少量含む（奈良～平安？水田）
9a	黒褐色 5YR2/2	泥炭質粘土	ややあり	ややあり	1～8	植物遺体を多量に含む
9b	黒色 7.5YR2/1	泥炭質粘土	あり	ややあり	8～17	植物遺体を多量に含む
11	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2～6	植物遺体を多量に含む
12	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	3～10	植物遺体を多量に含む（水田）
13	オリーブ黒色 5Y2/2	泥炭質粘土	つよい	あり	2～7	植物遺体を多量に含む
14	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	あり	4～16	植物遺体を多量に含む（水田）
15	黒色 7.5YR1.7/1	泥炭	あり	ややあり	4～21	植物遺体を特に多く含む
16	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	あり	ややあり	2～9	植物遺体を含む
17	オリーブ黒色 7.5Y3/2	粘土	あり	ややあり	5～12	細分できるところもある
18	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	5～12	植物遺体を含む
19	オリーブ黒色 5Y3/2	粘土	つよい	ややあり	21～27	色別はできなかったが、薄い互層である
20	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	あり	11～17	植物遺体多量



第8図　III区北壁基本層序・土層注記

99次III区註記

層序	土色	土性	粘性	しまり	層厚（cm）	備考
21	オリーブ黒色 7.5Y3/1	粘土	つよい	ややあり	18～27	薄い互層になっており、植物遺体を特に多く含む層がある
22	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	あり	7～16	細砂を含む　植物遺体を多量に含む
23	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2～14	細砂を含む　植物遺体を多量に含む
24	灰オリーブ色 7.5Y4/2	砂質シルト	あり	あり	30～46	薄い互層　風化礫を含む　植物遺体を多量に含む
25	暗オリーブ色 5Y4/3	粘土	つよい	あり	8～16	薄い互層　植物遺体を多量に含む
26	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2～6	植物遺体を含む
27	黒色 7.5YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	2～9	植物遺体を含む
28	オリーブ黒色 5Y3/2	粘土	あり	ややあり	9～21	植物遺体を含む
29	黒色 7.5YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	10～20	植物遺体を含む
30	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	つよい	ややあり	3～11	層下部に砂層を含む　植物遺体を含む
31	黒色 2.5Y2/1	シルト質粘土	あり	ややあり	6～25	上面に火山灰ブロックを乗せる　細砂を含む　縄文土器を出土　植物遺体を含む
32	暗オリーブ灰色 2.5GY3/1	粘土室シルト	あり	ややあり	26～46	植物遺体・炭化物を含む　上面で樹根と思われるピットを多数検出
33	暗緑灰色 7.5GY4/1	粘土質シルト	つよい	あり	45～63	植物遺体を含む　細砂をブロック状に含む
34	オリーブ黒色 7.5Y3/1	粘土質シルト	つよい	あり	1～7	上部は腐食層である　針葉樹の葉を含む
35	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	粘土質シルト	あり	あり	12～23	植物遺体・炭化物を多く含む　石器出土
36	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	細砂	なし	あり	34～76	層下部では粗砂に変わる　植物遺体・炭化物を含む
37	オリーブ灰色 10Y4/2	シルト質粘土	つよい	あり	0～6	針葉樹の葉・枝を含む　部分的に分布
38	緑灰色 7.5GY5/1	シルト	つよい	ややあり	12～45	木片・種子を含む　粘土層と砂層が薄い互層となる
39	緑灰色 5G6/1	シルト質粘土	つよい	あり	12～24	砂層との互層　層下部は粗砂になる
40	緑灰色 10G5/1	粘土	つよい	つよい	55～72	砂層ブロックを所々に含む
41	オリーブ灰色 2.5GY5/1	粘土	つよい	あり	22以上	約50cm下位に礫層あり

ものと考えられるが、各区の対応関係や地形的な特徴は明確ではない。

5．検出された遺構と遺物

第99次調査では、水田層7枚・溝跡14条・縄文時代の遺物包含層1枚・旧石器時代の遺物包含層1枚を検出した。なお、水田跡については精査できたものの以外に、調査区の壁面にて認定あるいは予想したものがある。以下では、層位別に報告したい。

（1）2層の遺構と遺物

2層水田跡

調査時には耕作土がすでに削平されており、平面的な精査を行うことができなかった。Ⅰ・Ⅱ区の壁面で、耕作土や畦を確認した。特にⅠ区西壁セクションでは大畦（農道？）や杭を打ち込んだ溝の一部が確認され（第3図）、歴史的環境のなかで述べた「八幡前」と「鳥居原」との字境とみられる。

2層はにぶい黄褐色砂質シルトで、Ⅲ区では確認できない。水田区画などの特徴は不明だが、大畦断面はラミナ状の層相が特徴で耕作土とは色調がやや異なっており、客土による造成のように思われる。田面の標高は。区北部で11～11.2m、Ⅰ区南部やⅡ区では上部を削平されているが、それぞれ10.6～10.7m・10.4～10.5m付近に位置し、比高差はかなり大きかったようである。

遺物は磁器片が出土しているが図示できるものではない。

（2）3層の遺構と遺物

3層水田跡（第9図）

3層は黒色シルト質粘土であるが、この水田跡はⅠ・Ⅱ区では削平されて存在しない。僅かに、Ⅰ区西壁やⅡ区東壁で土層を確認できるのみである。一方、Ⅲ区では比較的残りが良く、畦畔5条・水田区画4区画を検出した。ただし、1層水田跡（現代）の耕作深度が深いことから耕作土が失われ、5a層が露出している部分もある。畦畔は南北方向がN－10～20°－E、東西方向はN－70～80°－Wに集中傾向がある。真北基準にはなっていないようである。区画面積は、全体を予想できる区画3で約31㎡であるが、これが平均的なものか不明である。水田標高は、Ⅰ区北部で11.1～11.2m、Ⅱ区10.5m、Ⅲ区（南半部）約9.8mであり、1m以上の比高差がある。畦幅は下端幅で1mを越すものが多く、最大で2.14mである。畦高は最大12cmである。擬似珪畔や水口は検出されていない。下面の起伏は認められ、特にⅢ区で著しい。

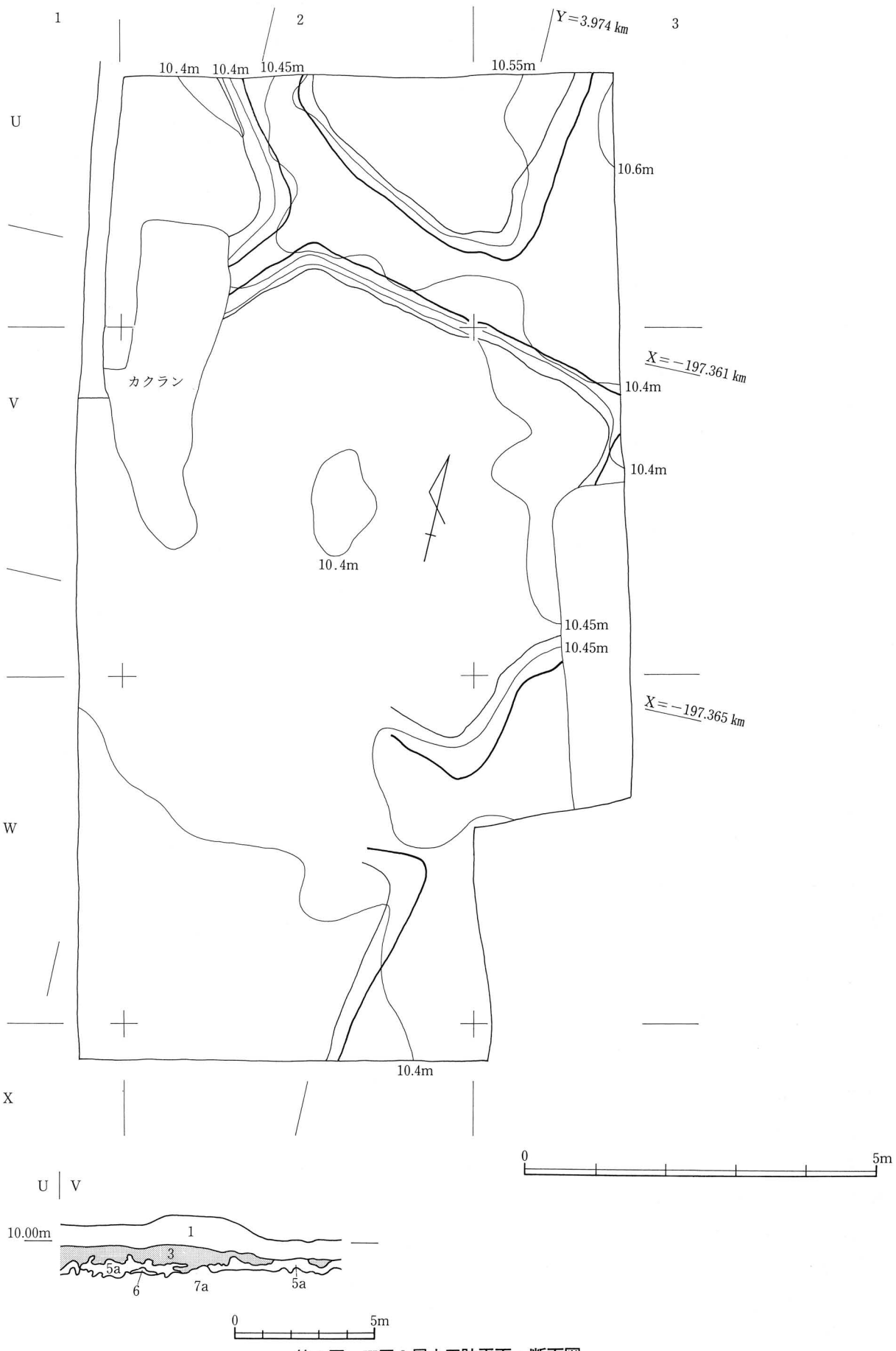
出土遺物は、Ⅲ区で土師器・赤焼き土器・須恵器片各1点ずつ出土しているが、図示できるものではない。

（3）5a層の遺構と遺物

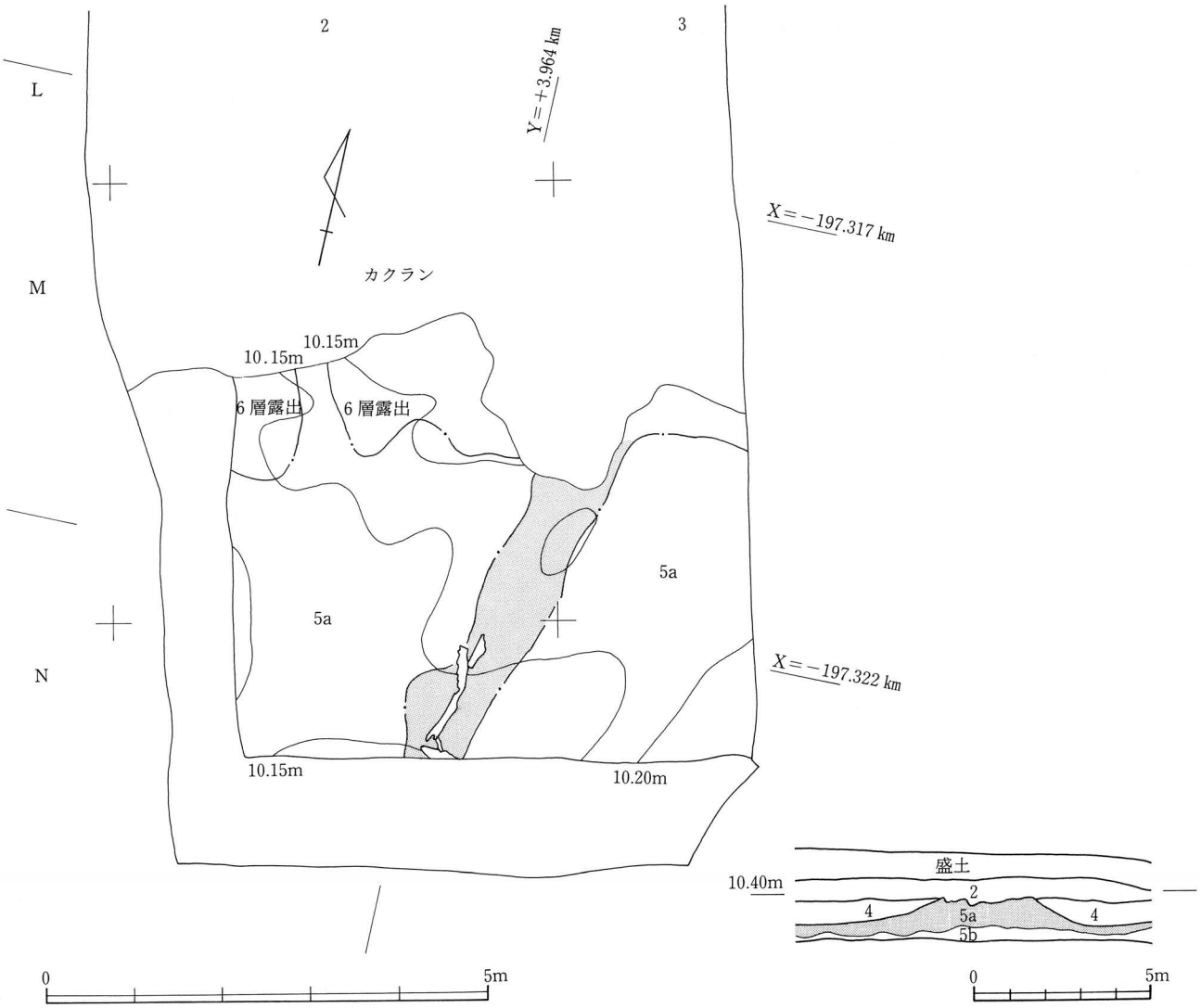
5a層水田跡（第10図）

5a層は、にぶい黄褐色の粘土層で、調査区の全域に分布している。水田跡が確認できたのはⅢ区だけである。Ⅰ区では層の上面に灰白色火山灰を乗せ、層下面には砂層を含んでいる。Ⅱ区では火山灰の存在は確認できなかった。Ⅲ区では、層中に灰白色火山灰を含んでいる。

層の遺存状況は悪く、4層を除去した段階ですでに5b層・6層が露出する箇所が多い。その結果、面的に確認できたのはⅢ区のみであるが、確認できたは段差のみである。これは、上部の3層水田による耕作が深く及んでいた結果と考えられる。段差の方向は、東西方向である。Ⅲ区5a層上面の標高は10.4mである。層が遺存するところでの下面の起伏は、あまり大きくはない。



第9図　III区3層水田跡平面・断面図



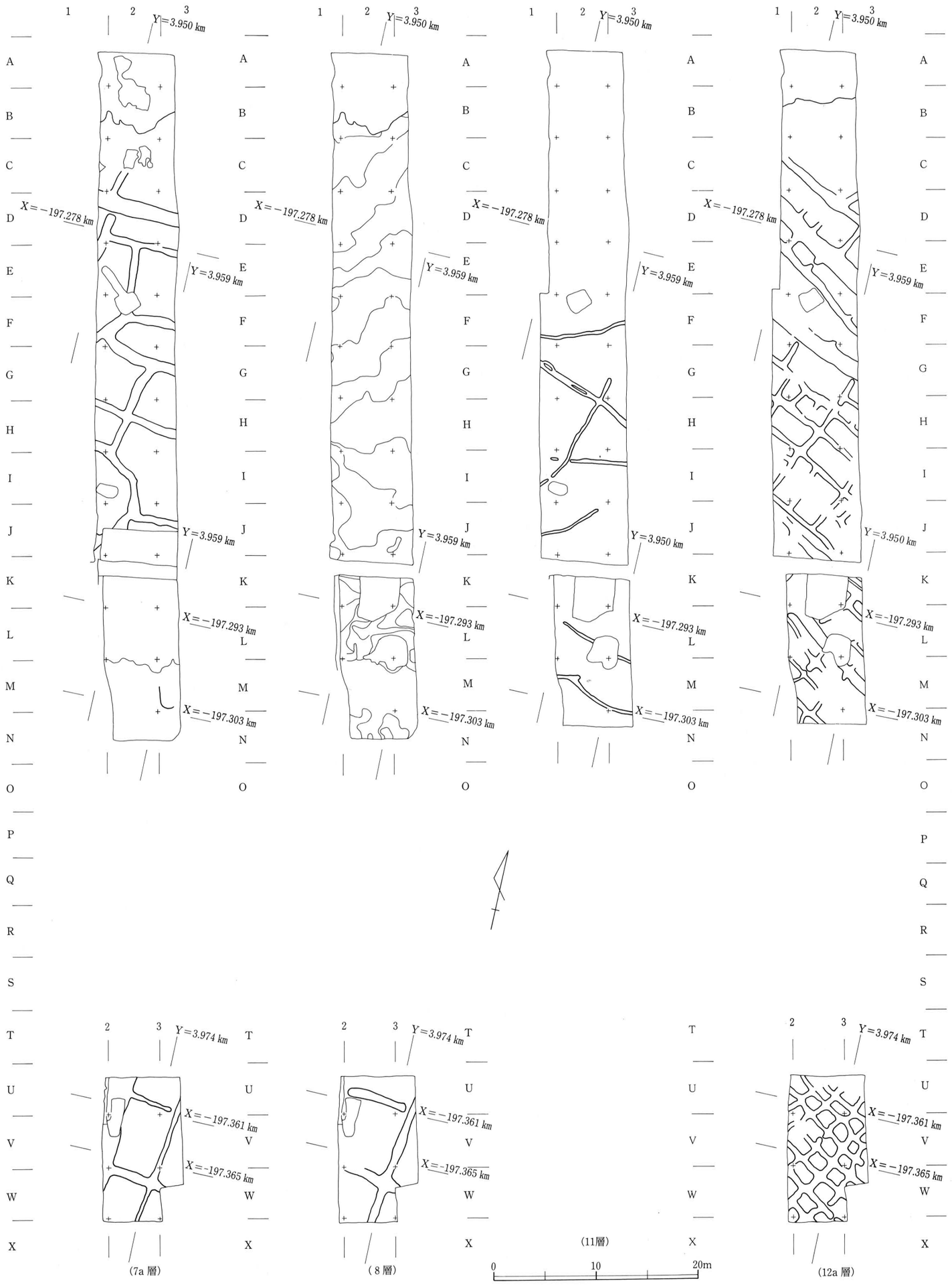
第10図　II区5 a層水田跡

遺物はIII区北半で打ち込み杭が四本確認できたのみであるが、打ち込み層位がはっきりしないのでこの水田跡に伴うものであるかは断定できない。

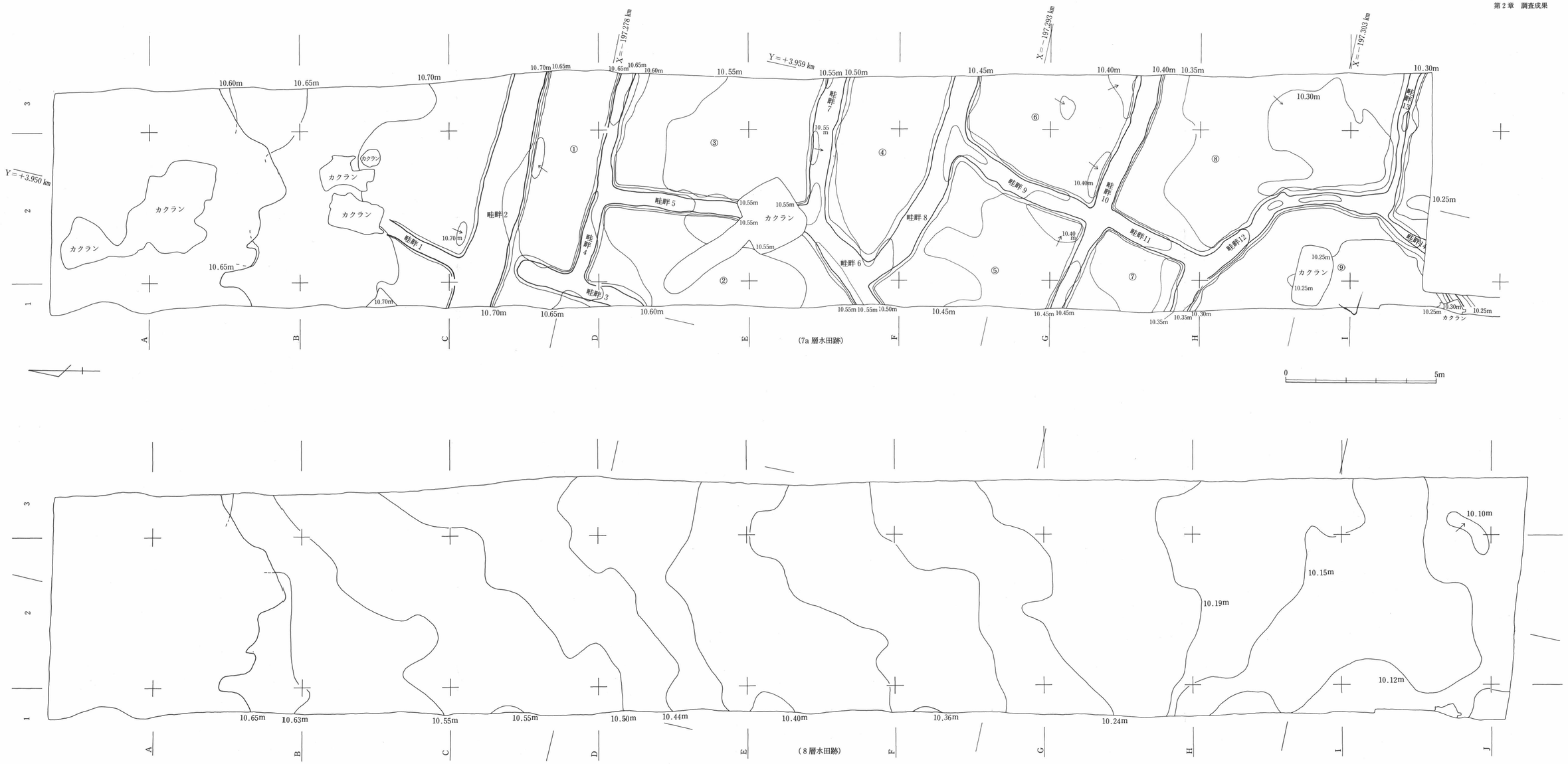
（4）7a層の遺構と遺物

7a層水田跡（第11・12・13・14図）

7a層は、オリーブ黒色の粘土層で、調査区の全域に分布している。しかし、I区北端部では削平されすでに下層の砂礫層が露出しているところもある。水田区画はI区とIII区で検出し、II区では畦畔は検出できなかった（性格不明の土手状の高まりを検出している。）。この水田跡では、畦畔20条（I区14条・III区6条）、水田区画14区画（I区9区画・III区5区画）を検出した。畦畔の方向は、I区では南北方向N－10°～20°－E、N－10°～20°－Wに集中が見られた。しかし東西方向では、ばらつきが多く規格性が見受けられない。III区では南北方向N－6°～8°－E、東西方向N－79°～82°－Wに集中が見られ、下層の畦畔方向を踏襲している。しかし、北半部では遺存状況が悪くなり段差はほとんど確認できなくなっているところもある。区画面積はすべてを検出したIII区区画2で28.9m²を測る。III区は長方形を基調とした整った区画であるのに対して、I区ではすべてを検出した区画もなく、また、検出できた区画では畦畔が湾曲したりと区画に規格性が認められない。標高はI区が10.6m～10.25m、II区

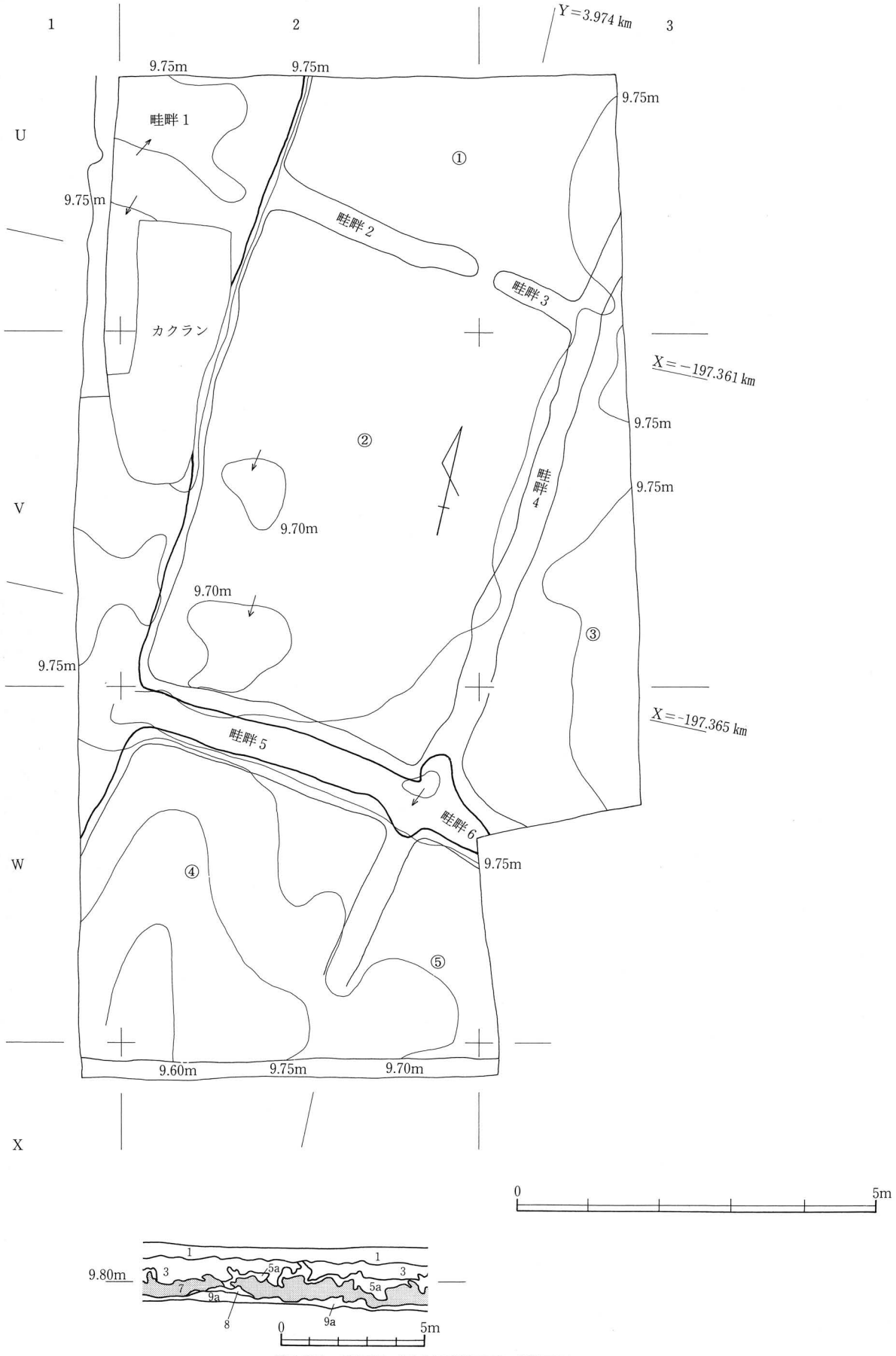


第11図　7a・8・11・12a 層全体図



第12図　Ⅰ区7a・８層水田跡平面図

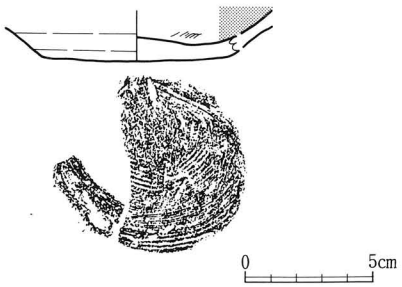
第13図　II区7a層水田跡平面・断面図



第14図　III区7a層水田跡平面・断面図

が10.2m～9.9m、III区が9.8m～9.7mであり、ほぼ北から南に（Ｉ区では畦畔毎に細かな傾斜が見られる）傾斜しており、Ｉ区北端とIII区南端とでは約１mの比高差が認められる。これは地形的な影響のようでＩ区に大きな傾斜の変換点が存在し、Ｉ区畦畔２を境として水田面は約10cmの比高差を持っている。他には畦畔６、７、８などが同様の傾向を示している。また、傾斜の方向に沿うような形で湾曲する畦畔12などがあり、このようにＩ区では、傾斜に合わせて畦畔をつくることによって比高差を是正している。このことはこれより下層の水田跡でも同様の傾向が伺える。畦畔の規模に関しては、前述したように傾斜の変換点となるＩ区の畦畔２、６、７、８では下端幅平均126cm、上端幅平均101cmと大きく、ほかは下端幅の平均が98cm、上端幅が56cmである。畦畔の接続は「＋」状、あるいは「Ｔ」字状である。III区で擬似珪畔Ｂを検出した。Ｉ・III区で水口を１箇所ずつ確認した（Ｉ区畦畔２・３、III区畦畔２・３）。この水田耕作土の母材層は7b層、８層であり、下面の乱れは著しい。

出土遺物は、内面黒色処理のロクロ成形土師器(第15図)、弥生土器片等である。図示したもの以外は細片である。



図版番号	種　類	遺構・層位	外　　面	内　　面	残　存	備　考	写真図版	登録番号
15	土師器	7a層	ロクロナデ　底：静止糸切無調整	ミガキ　黒色処理	底部～体部		8－12	D－1

第15図　7a層水田跡出土遺物

（５）８層の遺構と遺物

８層水田跡（第11・16・17図）

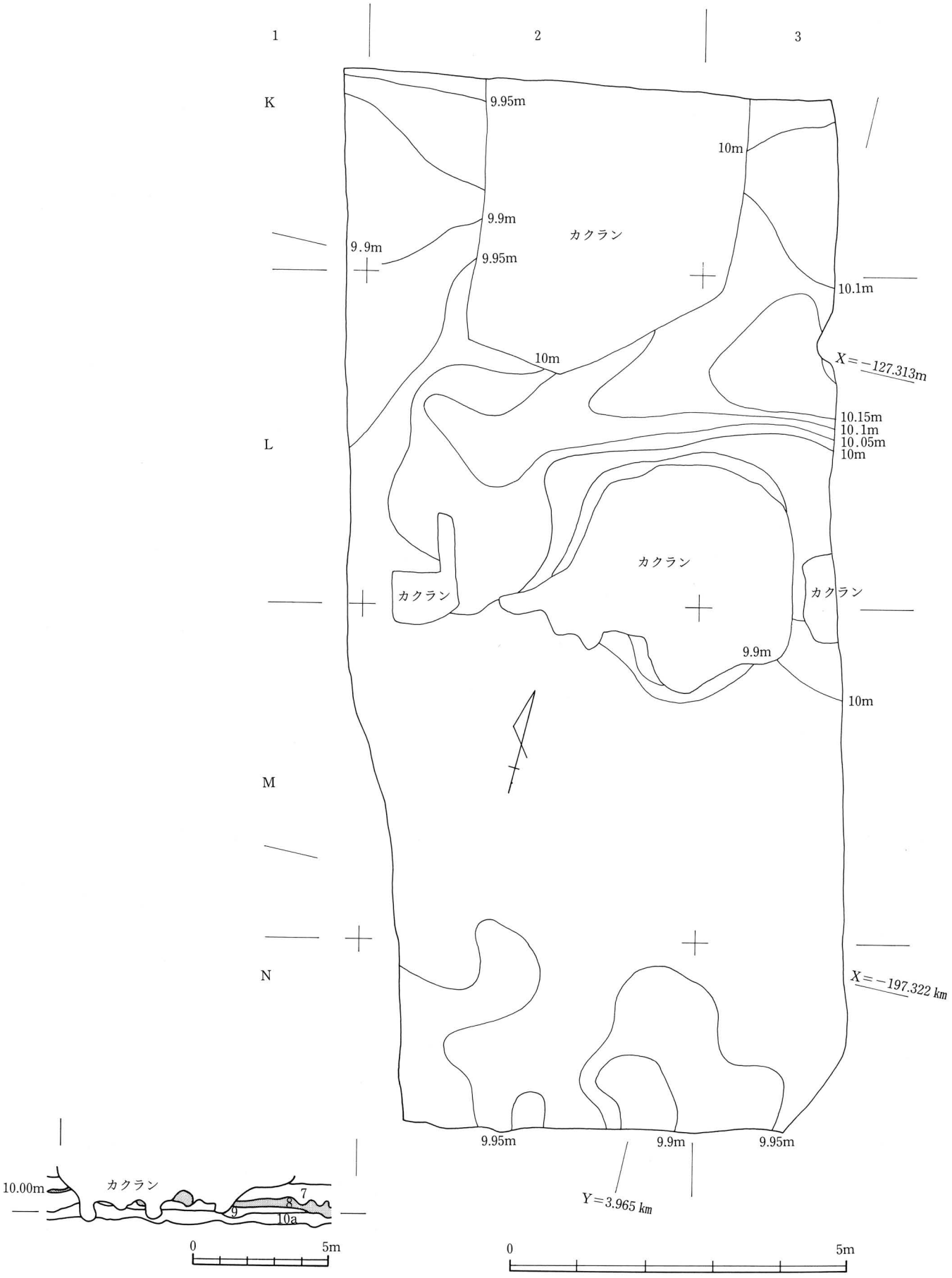
８層は黒色の粘土層で、調査区の全域に分布している。水田区画はIII区で検出し、他の調査区では耕作土のみの検出である。この水田跡では畦畔６条、水田区画５区画を検出した。畦畔の方向は、南北方向Ｎ－８°－Ｅ、東西方向Ｎ－79°～85°－Ｗで直行している。これらの畦畔は、上層の7a層水田跡とほぼ同じ方向である。区画面積はすべてを検出した区画がないが、ほぼ３辺を検出した区画２から推察すると約40㎡以上と考えられる。標高は、Ｉ区で10.4m～10.05m、II区で10m～9.9m、III区で9.7m～9.6mである。比高差は、Ｉ区が40cm前後あるのに対してII・III区では10cm前後と小さい。III区での水田標高の変化は、北東から南西への動きが窺える。畦畔の交点は「＋」状である。畦畔１・２、２・３の間に水口が存在する。この水田の母材となる層は９層で、下面の乱れは著しい。

出土遺物は、土師器、弥生土器片であるがいずれも細片であり、図示できるものはない。

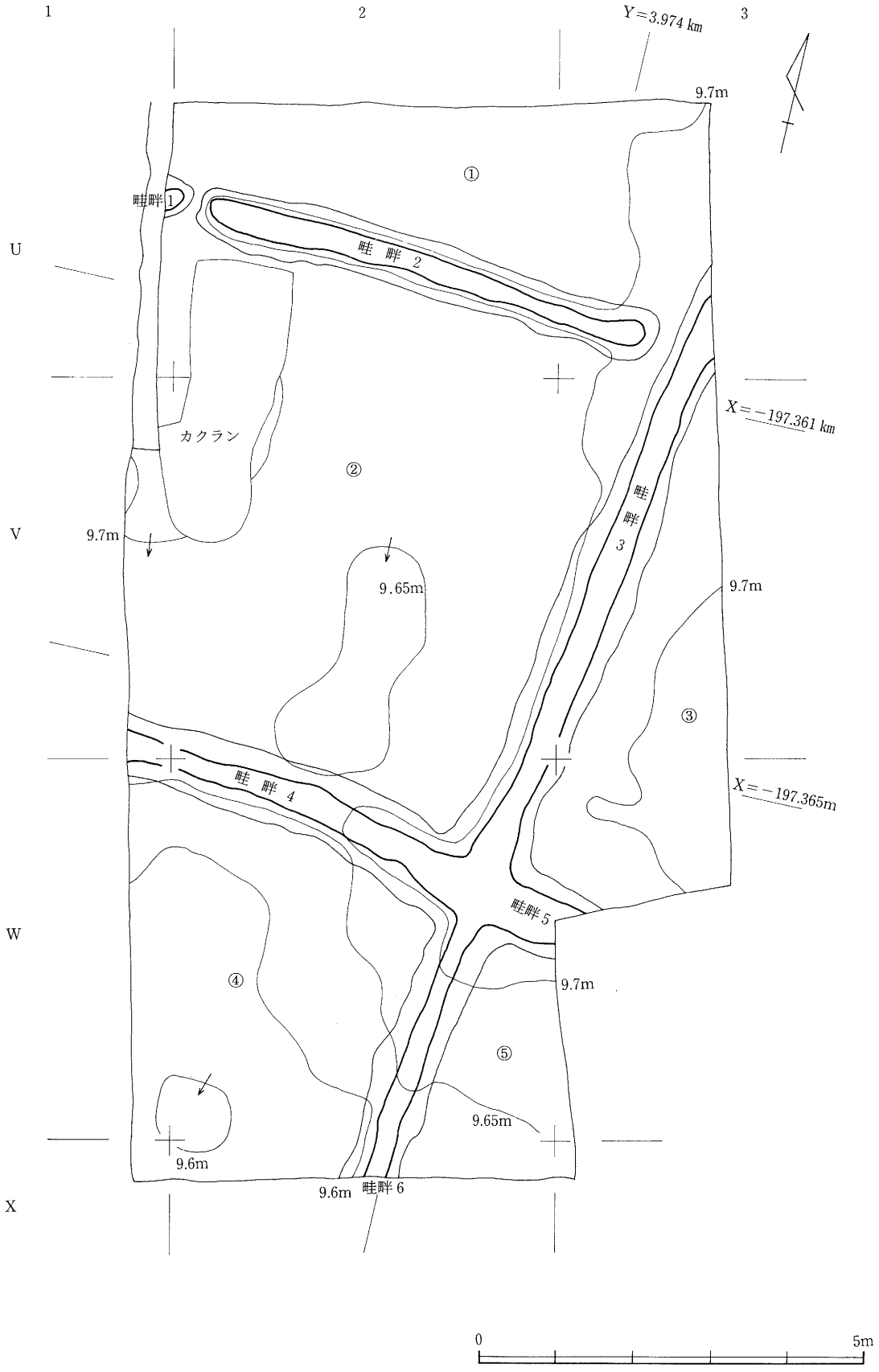
（６）10a層の特徴

10a層は暗灰黄色粘土層で、調査区の全域で確認されているが、Ｉ区北端部では残りが悪い。この層の上面では畦畔が確認できなかったものの、かなりこわれているように見受けられた。また、擬似珪畔は確認できなかったが、下面に起伏が認められ、特に南側のIII区で顕著であった。過去の調査では、近接する第７次調査（地下鉄長町南Ｉ区）の５層に類似する（1986：篠原・吉岡）。また、富沢遺跡北部Ａ地区基本層序（1991：佐藤甲）の9a層と類似するようである。水田耕作土の可能性を指摘しておきたい。

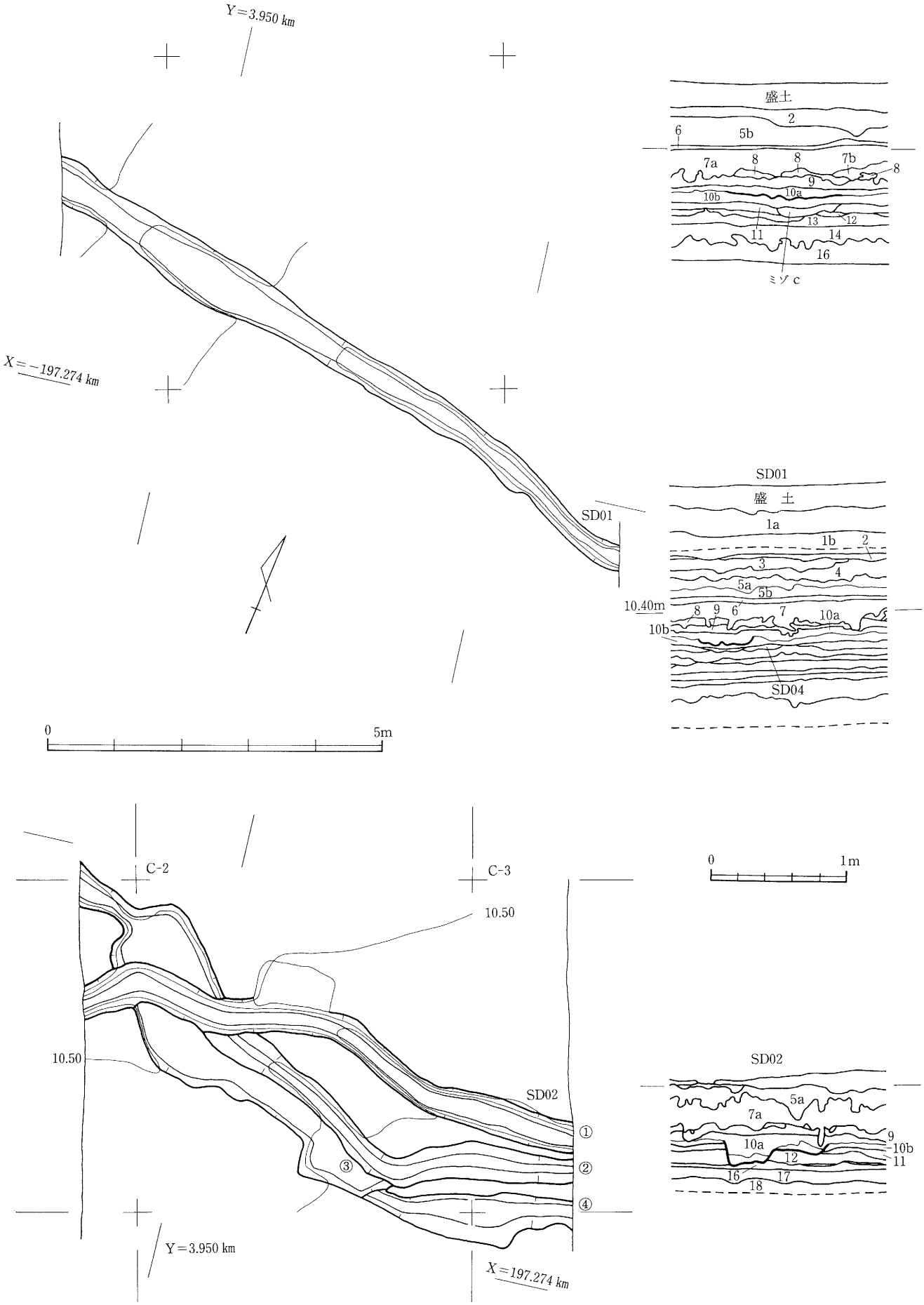
出土遺物は、弥生土器の細片と石器が各１点出土している（第36図）。これらの遺物では、時期決定が難しい。



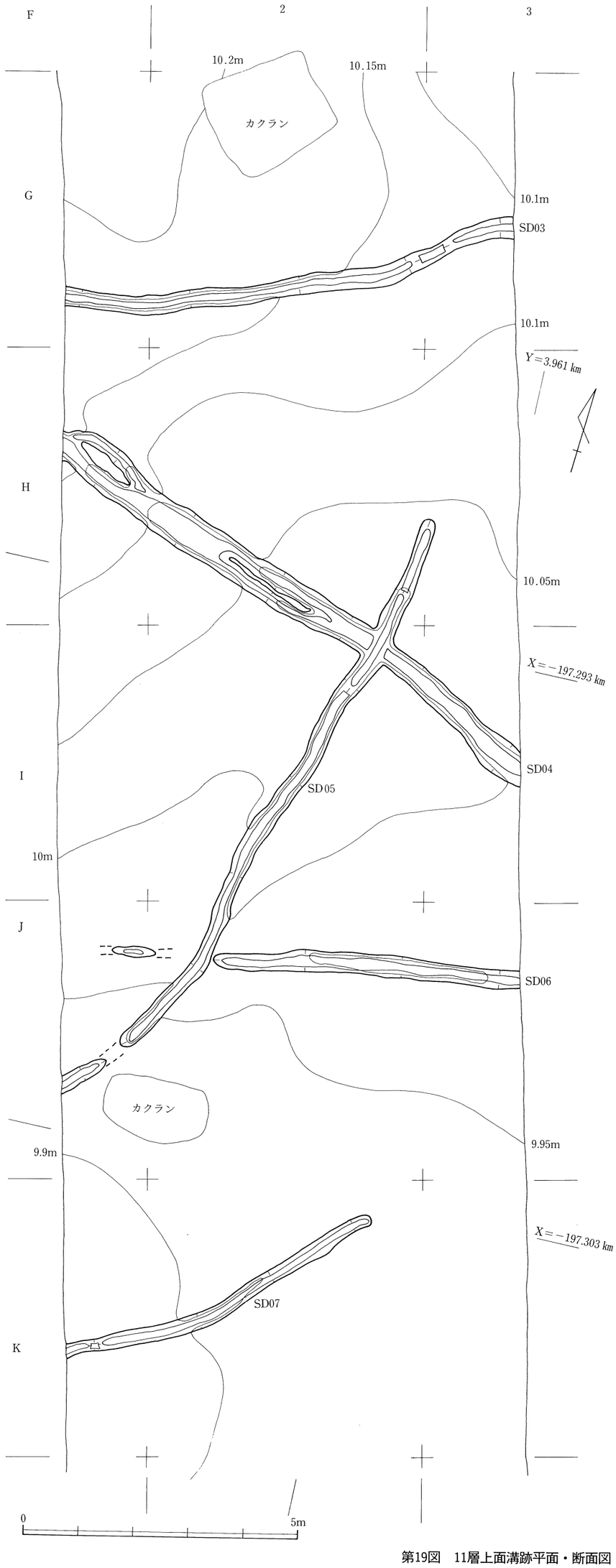
第16図　II区8層平面・断面図

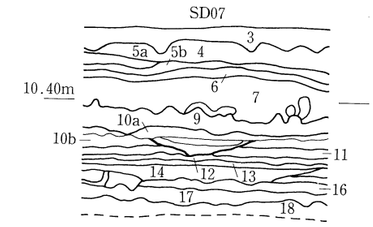


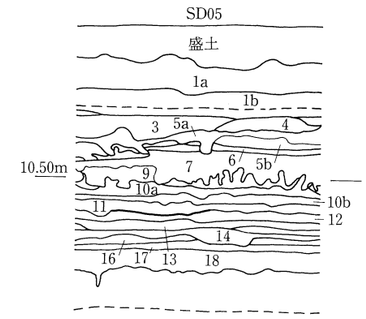
第17図　III区8層水田跡平面図

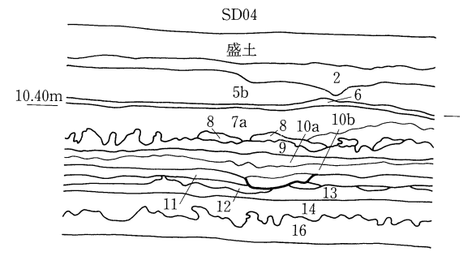


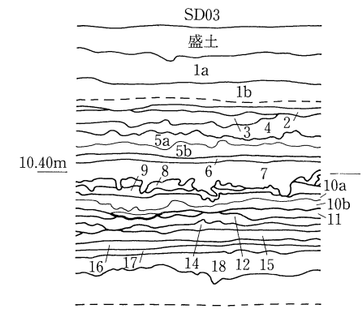
第18図　I区SD01・02平面・断面図

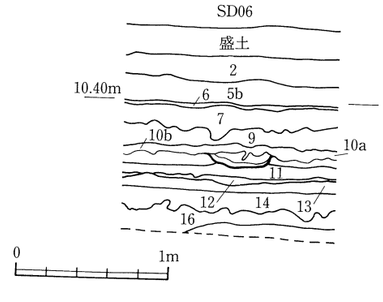












第19図　11層上面溝跡平面・断面図

（７）10b 層の遺構と遺物

10b 層上面で、溝跡２条を検出した。いずれもＩ区である。（第18図）

SD01

Ｉ区中央部（G・H区）に位置し、10b 層上面で検出した。下層の SD04 と重複し、これを踏襲しているようである。規模は検出長約10.08m、幅0.18m、深さ８cmで、方向はＮ－69°　－Wで直線的に走行する。埋土は10a 層が堆積しているが、部分的に９層が堆積しているところもある。遺物は出土していない。

SD02

Ｉ区北部（Ｃ区）に位置し、10b 層上面で検出した。遺構確認当初は一条の溝のように考えられたが、結果は４条の溝跡に細分された。新しい溝から古い溝にａ～ｄを付して、以下述べることにする。ａの規模は検出長約8.08m、幅0.6m、深さ20cmで、方向は約Ｎ－83°　－Wであるが、西端部は南へ屈折している。ｂは検出長約7.28m、幅0.6m、深さ８cmで、方向はＮ－63°　－W～Ｎ－82°　－Ｅである。ｃは検出長約6.72m、幅0.28～1.32m、深さ６cmで、方向はＮ－56.5°　－Wである。ｄは検出長約3.6m、幅0.84m、深さ５cmで、方向はＮ－79.5°　－Ｅである。いずれの溝も不規則であり、埋土はａが砂、ｂが砂混じり粘土、ｃ・ｄは粘土である。

遺物は、縄文（地文）のみの弥生土器６点が出土し、内訳はａ２点・ｂ１点・ｃ３点である。いずれも小片で表面が摩耗し、地文も不明瞭である。図示したのは２点である（第25図）。

これらの溝跡は、自然流路か人工的なものか判断に難しいが、前者を示唆しておきたい。また、ｄ→ｃ→ｂ→ａと変遷し、新しくなる。

（８）11層の遺構と遺物

11層上面で、溝跡７条が検出され、内訳はＩ区５条・II区２条である。（第19・20図）

SD03

Ｉ区中央部（Ｆ区）に位置し、11層上面で検出した。規模は検出長約8.28m、幅0.39m、深さ７cmで、方向はおよそＮ－69°　－Ｅで、ゆるく屈曲している。埋土は10b 層に類似する粘土で、２層に細分できるところもある。遺物は出土していない。

SD04

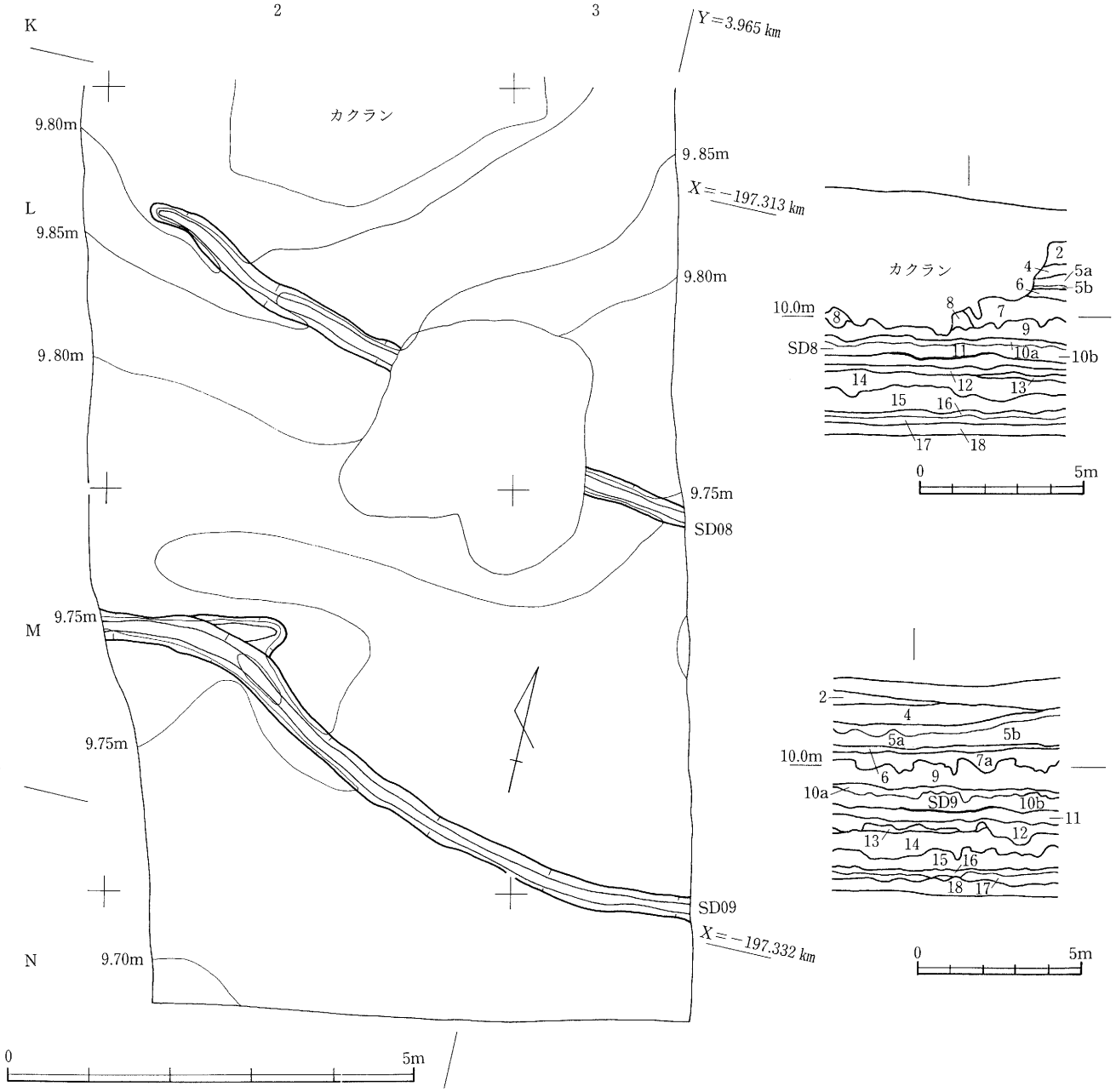
Ｉ区中央部（G・H区）に位置し、11上面で検出した。SD01（10b 層）・SD05 と重複している。このうち、SD05 とはほぼ同時期のものであろう。また、下層の12層水田跡の畦17とほぼ同じ位置にあり、何か関連があるかもしれない。規模は検出長10.18m、幅0.69m、深さ10cmで、方向はＮ－67.5°　－Wで直線的である。溝内部では、部分的に２条に分離するところがある。遺物は出土していない。

SD05

Ｉ区中央部（G～Ｉ区）に位置し、11層上面で検出した。SD04・06 と重複する。SD04 とはほぼ同時期と考えられるが、SD06 との関係は不明である。規模は検出長約12.4m、幅0.39m、深さ７cmで、方向はＮ－16.5°　～39°　－Ｅで南部で屈曲する。埋土は、10b 層と類似する灰黄色粘土である。SD04 と交差する部分は深くなっている。この溝は、下層の12層水田跡畦25とほぼ同じ位置にあり、前述した SD04 と同じ状況である。遺物は出土していない。

SD06

Ｉ区南部（Ｉ区）に位置し、11層上面で検出した。SD05 と重複するが、新旧不明である。規模は検出長約7.42m、幅0.41m、深さ６cmで、方向はＮ－82°　－Ｅで直線的である。西側は残存状況が悪い。遺物は出土していない。



第20図　II区 SD08・09 平面・断面図

SD07

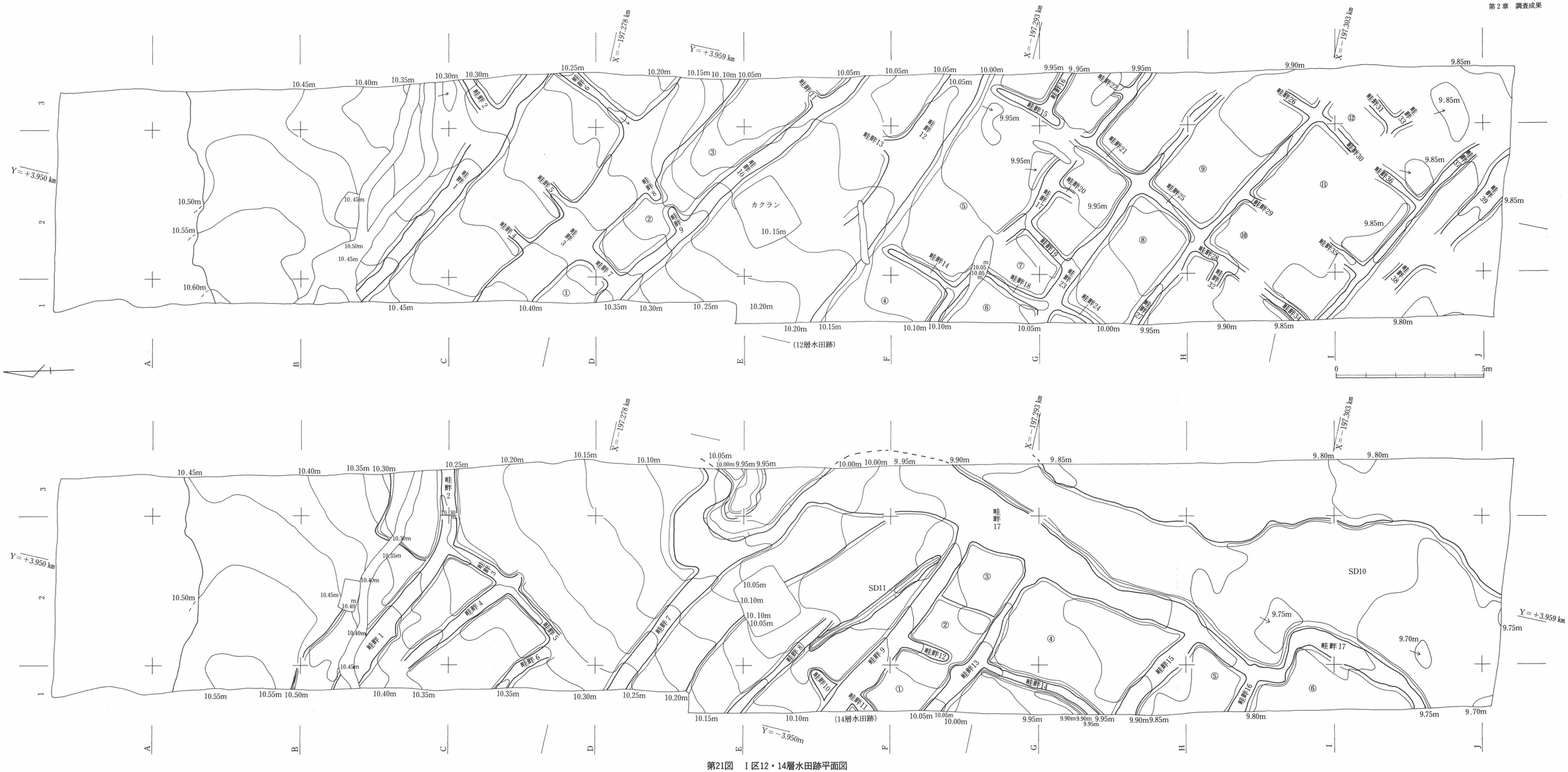
I区南部（J区）に位置し、11層上面で検出した。規模は検出長約6.86m、幅0.26m、深さ3cmで、方向はおよそN−54°−Eで中央部が屈曲する。埋土は10b層である。遺物は出土していない。

SD08

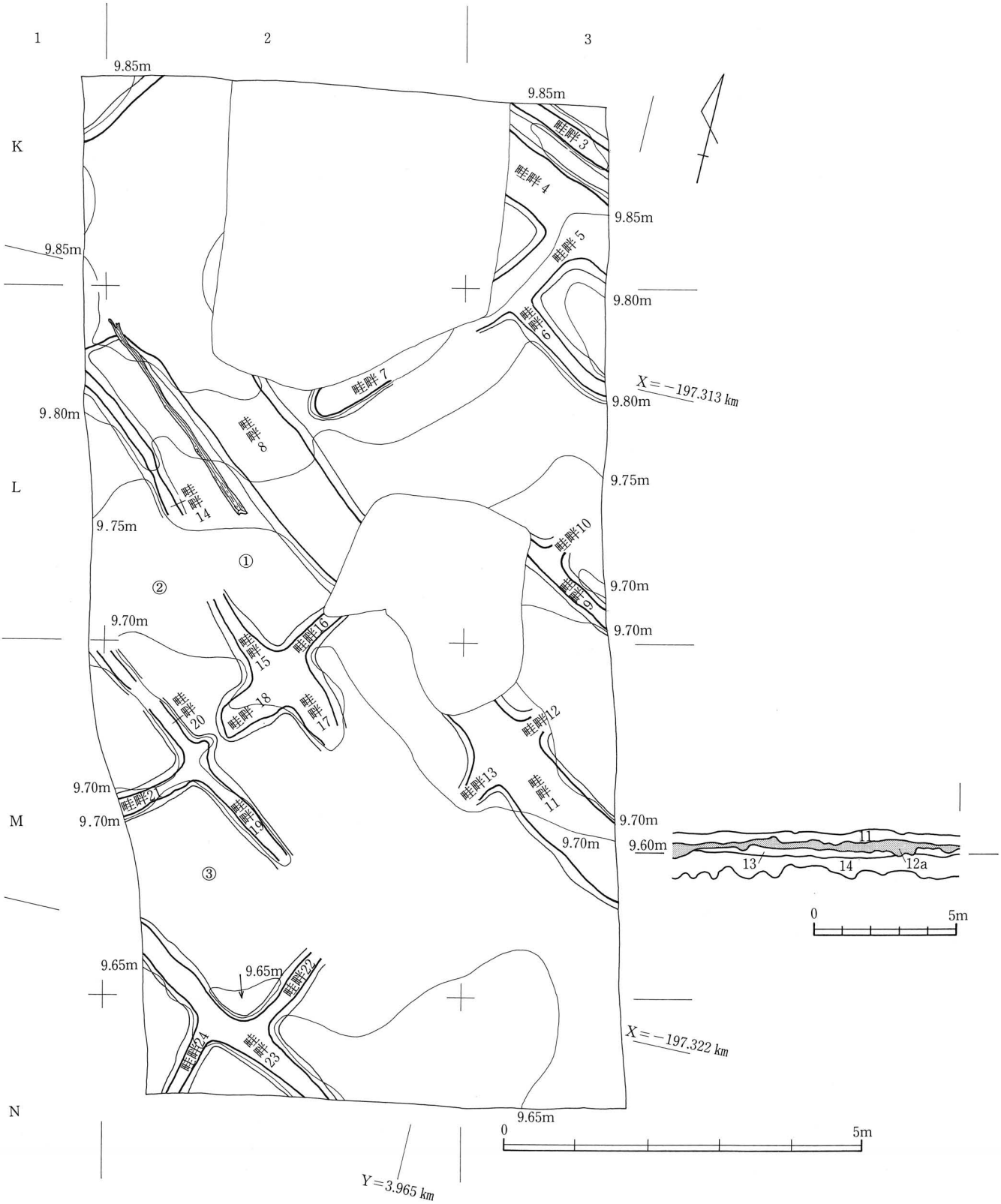
II区北半部（L区）に位置し、11層上面で検出した。撹乱杭により一部消失している。規模は検出長7.58m、幅0.27m、深さ4cmで、方向はN−72°−Wで直線的である。埋土は10b層である。遺物は出土していない。

SD09

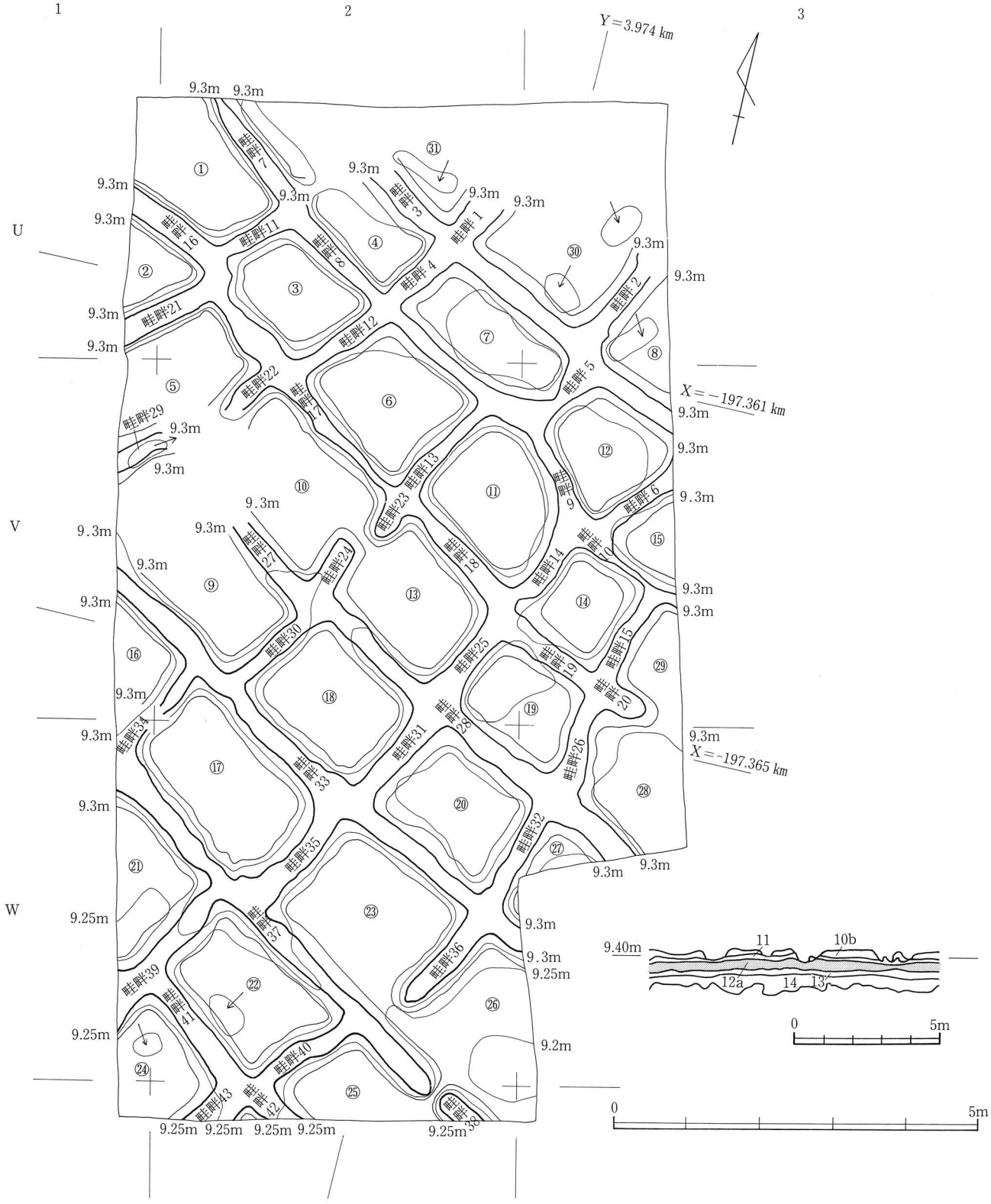
II区南半部（M区）に位置し、11層上面で検出した。規模は検出長約8.22m、幅0.42m、深さ6cm、方向はおよそN−80°−E〜N−69.5°−Wへ屈曲する。屈曲部は東へ張り出しを持ち、あるいは東へ溝が分岐していたものかもしれない。埋土は10b層である。遺物は出土していない。



第21図　Ⅰ区12・14層水田跡平面図



第22図　II区12層水田跡平面・断面図



第23図　III区12層水田跡平面・断面図

（９）12a 層の遺構と遺物

12a 層水田跡（第21・22・23図）

12a 層は黒色の粘土から泥炭質粘土層で、全域に分布している。水田区画も調査区のほぼ全域で検出したが、Ｉ区北端部で検出できなくなる。畦畔105条（Ｉ区39条、II区23条、III区43条）、推定できる区画79区画（Ｉ区32区画、II区16区画、III区31区画）を検出した。畦の方向はＩ区が南北Ｎ－15°～30°－Ｅ、東西Ｎ－50°～60°－Ｗ、II区が南北Ｎ－25°～40°－Ｅ、東西Ｎ－45°～65°－Ｗ、III区が南北Ｎ－20°～50°－Ｅ、東西Ｎ－48°～65°－Ｗにそれぞれ集中傾向が認められる。区画面積は、最小区画単位がよくわかるIII区で平均約1.7㎡である。Ｉ・II区ではこの２～３倍の区画面積を示すものが多い。水田標高はＩ区北部で10.3～10.4m、III区で9.3～9.4mで１mの比高差がある。Ｉ区中央部とＩ・II区の境には大畦畔［Ｉ区畦畔３、12と畦畔39（Ｉ区）・4（II区）、III区畦畔８・11］があり、２条一組で比高差を是正し、水平面を確保しているようである。また、Ｉ区南端の畦畔37と38・39の間、II区北東部の畦畔３の両側は溝になる可能性があるかもしれない。さらに、II区北西部の畦畔４と８の間には、幅広で畦条の非耕作域が見られる。擬似畦畔は確認できなかったが、下面の起伏は認められた。水口はＩ区畦畔12の南辺などで検出した。この水田耕作土の母材層は、Ｉ区12ｂ・13層、II～III区では13層である。

出土遺物はＩ区より出土した弥生土器片85点があり、その大部分は北部畦畔１脇より一括で出土した（第24・25図）。おそらく、甕１個体分と予想されるが、細片であり摩耗し接合できない。しかも、口縁部や底部の破片は含まれていない。調整は、前述したように摩滅が著しく観察が困難であり、特に内面は一部ヨコナデが確認できるところもあるが、ほとんど判然としない。外面は地文（縄文 LR）を施してあるが、沈線等は認められない。頸部にヨコナデが認められる。

（10）13層出土の遺物について（第26図）

13層出土の植物巻き石製品（第26図５）

この遺物が出土したII区13層は、12a 層水田と14層水田の間層を成す自然堆積層で、12a 層水田跡の母材層である。出土状況は層中に少し刺さった状態で出土している。これに続く矢柄等は確認できなかった。頁岩製で、最大長は4.8cm、最大幅は1.1cm、厚さは６㎜を計る。先端の尖った部分より幅約２㎜の植物状のものを巻き初め、鏃身の根元まできつく巻き、最後の部分を折り返し中を通して巻き終えている（植物は未同定）。更に、茎部のくびれた部分だけにまた植物を巻きつけている。この部分は鏃身の部分と違い若干緩めである。Ｘ線写真撮影によると全面に剝離痕が認められるのものである。しかし、茎部のくびれや茎部端の形状・全体長など桜形囲式期の石鏃の形態とは違いを認められる点もあり、石鏃としていいものか疑問が残る。今後は民俗例など広く情報を集め、また、植物の同定・保存処理・分析などをとおして類例を探していきたい。

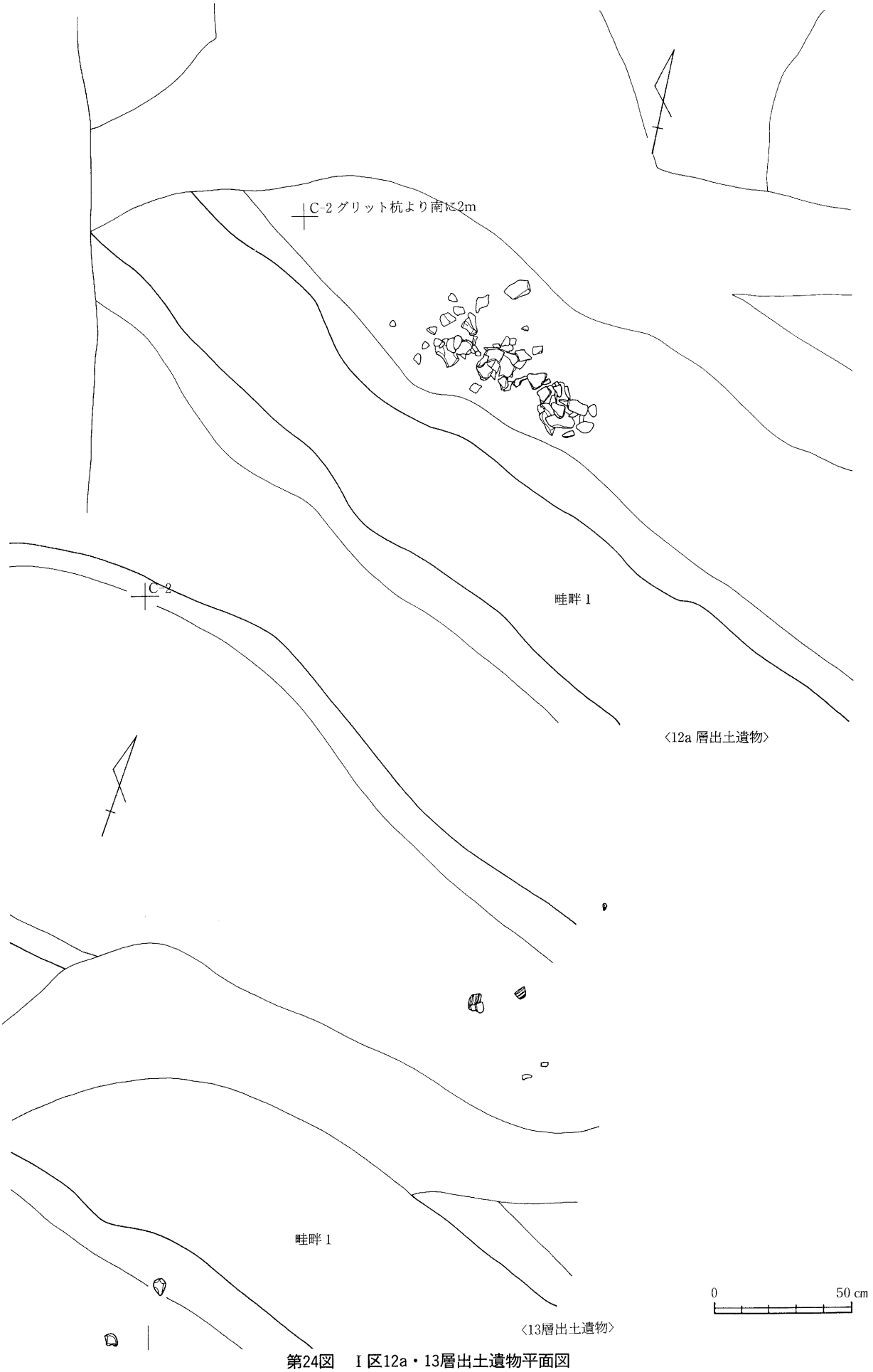
13層からはこの他に、弥生土器片が９点出土している。そのうち図２は鉢の口縁部で外面に幅2㎜の沈線で区画したのちに縄文 LR を充填する手法で施文されている。内面にも１条の沈線がある。図３は、幅2㎜の平行沈線を引くもので、胎土中に白色細砂を多く含んでいる。図４は、図２と類似するような手法が取られている。

（11）14層の遺構と遺物

14層ではＩ・III区で水田区画、溝跡３条（Ｉ区・II区各１条、Ｉ区からII区にかけて１条）を検出した。

14層水田跡（第27・28図）

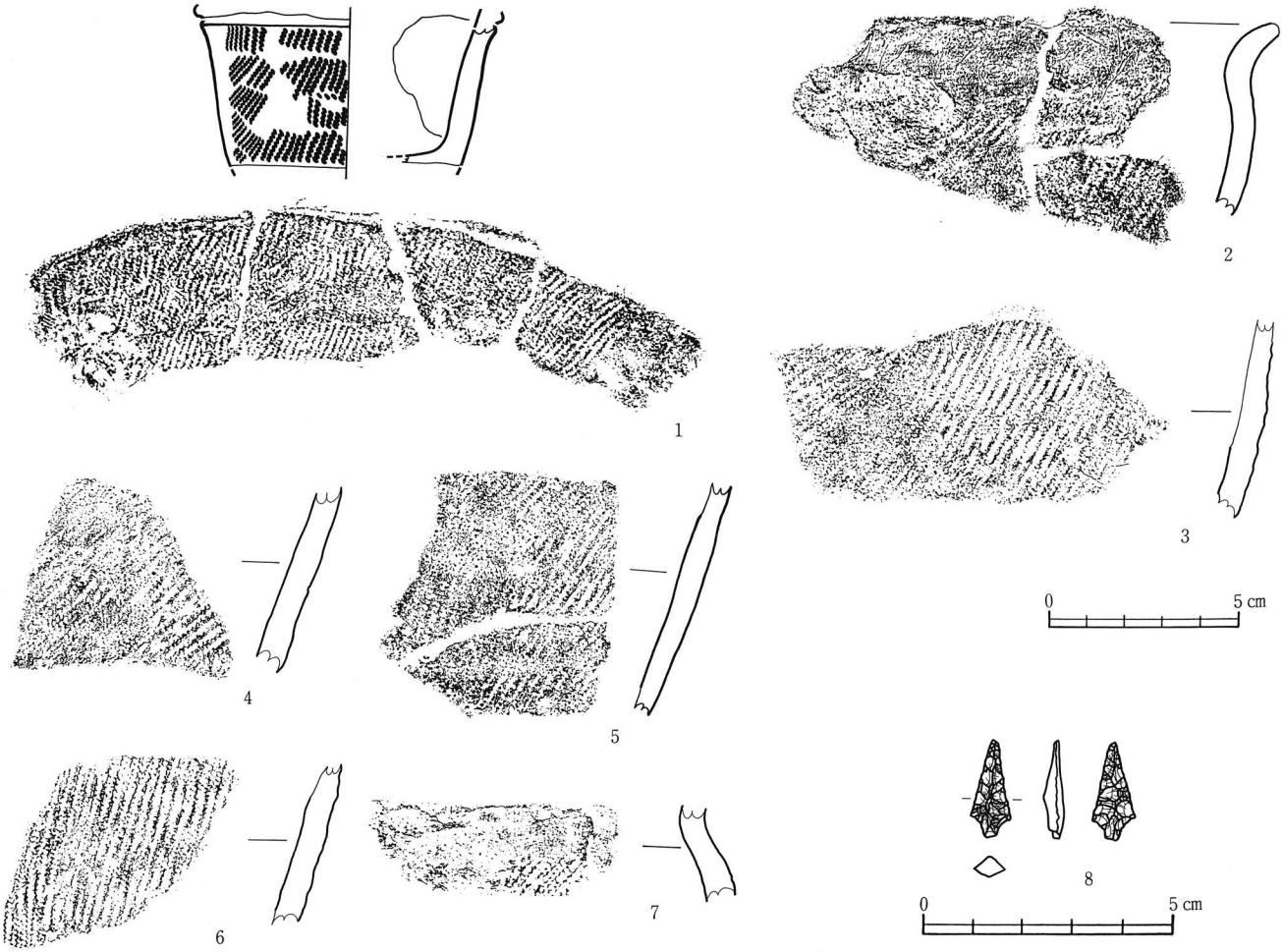
14層は黒色の粘土～泥炭質粘土で、調査区全域に分布しているが、水田区画はＩ区とII区で検出した。Ｉ区は SD10 の西側で、III区は全域でそれぞれ検出したがII区では畦畔は検出できなかった。このII区とＩ区の SD10 の東側は非耕作域となっている。この水田跡では、畦畔20条（Ｉ区17条・III区３条）、段差４ヶ所（Ｉ区３ヶ所・III区１ヶ



第24図　Ⅰ区12a・13層出土遺物平面図

所)、水田区画18区画（すべてＩ区で、Ⅲ区は不明）を検出した。畦畔の方向はＩ区で南北方向がＮ－10°－Ｅ前後とＮ－30°～40°－Ｅに分極化し、東西方向がＮ－50°～70°－Ｗの間で振れ幅が比較的大きい。Ⅲ区でも、東西方向がＮ－50°～80°－Ｗの間で振れ幅が大きい。区画面積は、最小単位がＩ区の区画２・３と見られ３㎡代である。中規模のものは（Ｉ区区画４など）は14㎡代前後である。水田標高はＩ区北部で約10.4m、Ⅲ区南半部で約9.2mで、1.2mの比高差がある。水口は、Ｉ区中央部で２ヶ所認められた。畦畔の検出されたＩ区北西側では層厚が薄く、下面の起伏は弱い。一方１・Ⅱ区のSD10直下や東側の非耕作域及びⅢ区では層厚が厚く、下面の起伏も顕著である。Ｉ区の水田域では擬似珪畔Ｂは確認できなかったが、SD10直下で南北方向の擬似珪畔Ｂが検出され(第33図スクリントーン部分)、しかも東側（非耕作域側）へ伸びている。ただし、西側へ伸びるものはない。この特徴により、Ｉ・Ⅱ区のSD10下や非耕作域の14層下面の起伏は、耕作によるのもであることが理解できた。つまり、SD10の形成以前や非耕作域もかつては水田域であった。したがって、14層では新旧２時期の水田跡が存在したことになる。一方、Ⅲ区の水田域は遺存状態が悪く、また、前述した新旧どちらの水田跡かは明確でない。

出土遺物は、弥生土器27点（Ｉ区26点・Ⅱ区１点)、石器７点（Ｉ区６点・Ⅱ区１点)、クルミ１点（Ⅲ区）がある。Ｉ区の土器は畦畔１の畦上部で集中的に出土していて（第29図)、いずれも地文（縄文）のみの破片である。畦



図版番号	種　類	遺構・層位	外　　面	内　　面	残　存	備　考	写真図版	登録番号
25－１	鉢	11層、１区Ｋ３	底部欠損､体部：縄文ＬＲ､１条の沈線（幅２～３㎝、深さ１㎜）	ミガキ	底部～体部	白色細砂	７－１	Ｂ－２
25－２	甕	12層、１区Ｃ２	口縁：ヨコナデ、体部：縄文ＬＲ	ヨコナデ＋ミガキ（下部）	口縁～体部	一括出土	７－７	Ｂ－５
25－３	甕	12層、１区Ｃ２	縄文ＬＲ	マメツ	体部	一括出土	７－６	Ｂ－８
25－４	甕	12層、１区Ｃ２	ミガキ、（マメツ多い）	縄文ＬＲ（一部マメツ）	体部	一括出土	７－２	Ｂ－４
25－５	甕	12層、１区Ｃ２	縄文ＬＲ	マメツ	体部	一括出土	７－３	Ｂ－６
25－６	甕	12層、１区Ｃ２	縄文ＬＲ	マメツ	体部	一括出土	７－５	Ｂ－７
25－７	甕	12層、１区Ｃ２	頚部：ヨコナデ、体部：縄文ＬＲ	ミガキ？	頚部～体部	一括出土	７－４	Ｂ－９

図版番号	種　類	遺構・層位	特　　徴	石　材	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
25－８	石鏃	１区・１層上面		石英	0.4	1.9	0.3	0.25	６－１	Ｋ－３

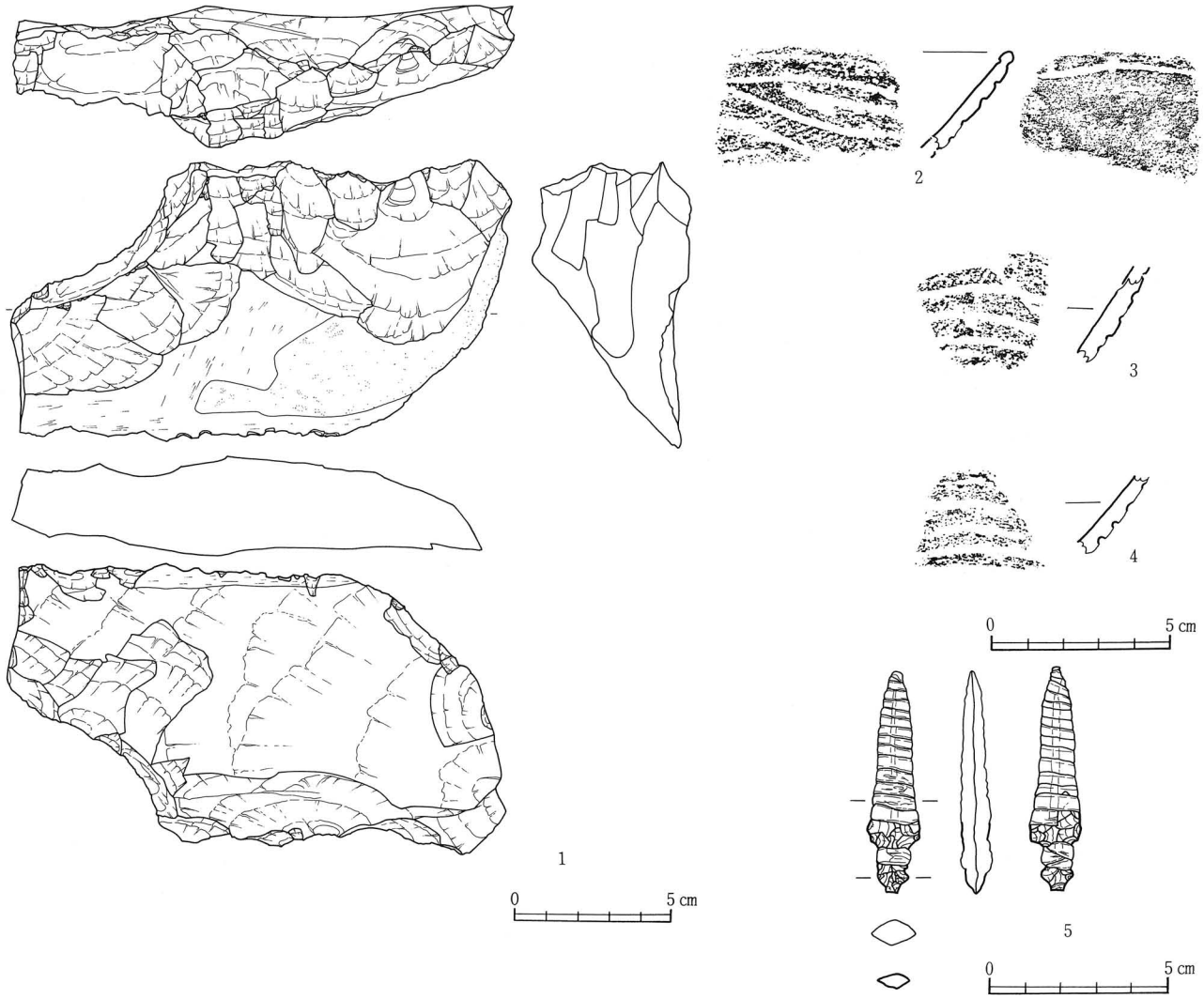
第25図　12層出土遺物実測図

１の北では、幅２㎜の沈線文を施し、胎土に白色細砂を多く含んだ土器が出土した（第32図２）。また、この土器の内面には籾痕が認められる（写真図版７－18）。II区では、SD10下の14層中（N区）で幅３㎜の沈線（平行＋波状）を施した鉢が出土している（第32図４）。石器は、１・II区で石鏃・石庖丁・二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片・石核？が出土している。

SD10（第30図）

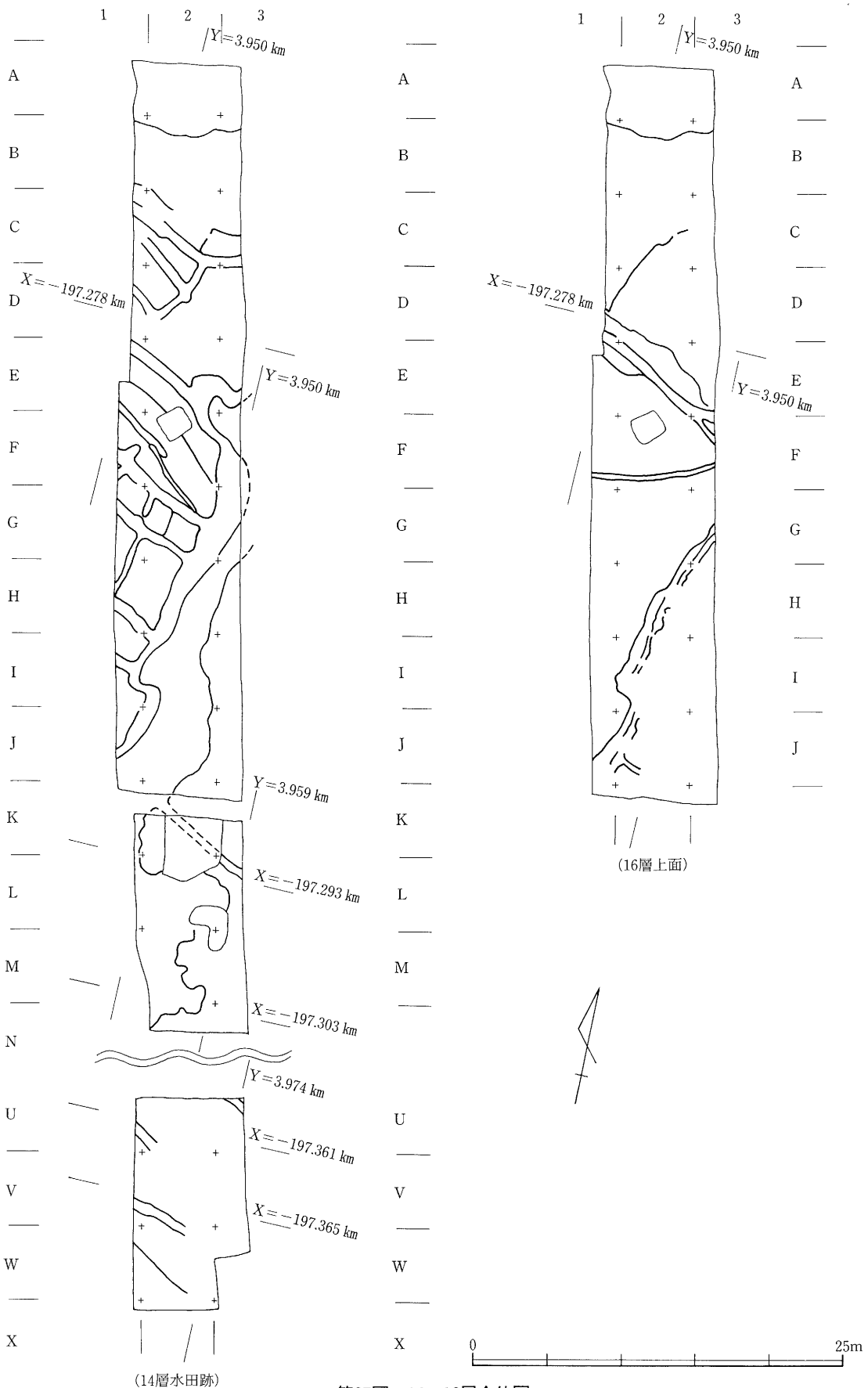
I区中央部からII区にかけて位置し、14層上面で検出した。規模は検出長約42m、幅I区4.7m・II区6.85m以上、深さ西側11cm、東側３cm、方向はおよそN－9.5°－Eで蛇行している。溝西壁が高いのは、西側水田跡と関連するものであり、この溝に合わせて畦17が形成されているに起因する。北部では蛇行が著しくなるものと予想され、南部（II区）では溝幅が広がり著しくプランが不定形となっている。溝の東側は非耕作域となっており、ここにあるSD12（II区）はSD10から派生する溝と考えられる。埋土は13層である。遺物は出土していない。

この溝は、元来自然流路と考えられるが、14層水田（新期段階）の耕作に際しては多分に利用されていたものと

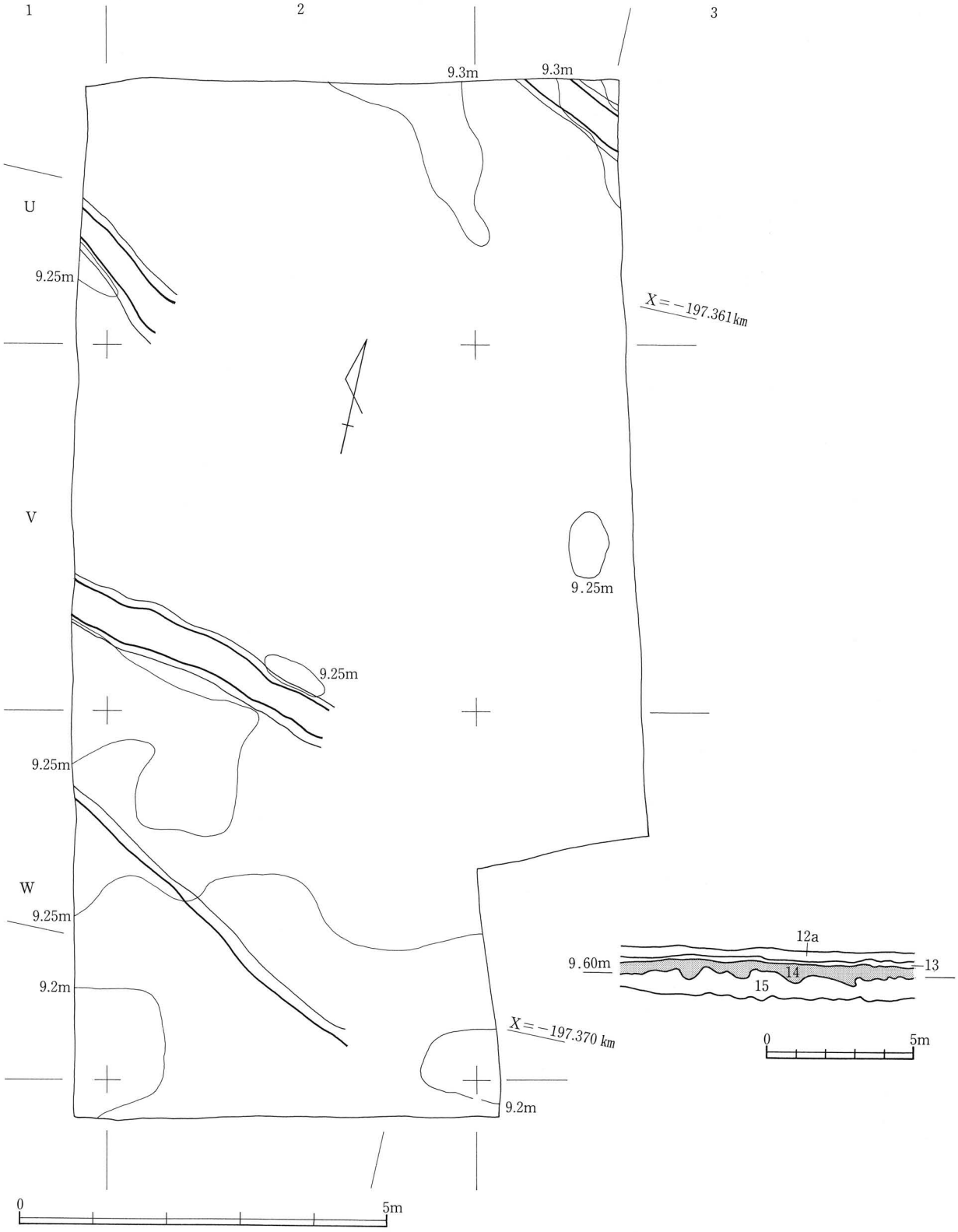


図版番号	種　類	遺構・層位	外　面	内　面			残　存	備　考	写真図版	登録番号
26－２	高坏	13層、１区B、C	沈線＋縄文LR＋（充填）剝落	口縁部に一条の沈線、ミガキ			口縁～体部	白色細砂	７－10	B－17
26－３		13層、１区B、C	沈線＋縄文LR＋（充填）、剝落	ミガキ？			体部		７－12	B－16
26－４		13層、１区B、C	並行沈線（幅２㎜、深さ２㎜）、剝落	マメツ			体部	白色細砂	７－11	B－14
図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	石　材	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
26－１	大型板状石器	１区13層中	G－２区	安山岩	500	9.1	15.9	5.0	６－２	K－17
26－５	石鏃	II区13層下部	鏃身部・茎部に植物を巻く	頁岩	2.6	4.8	1.9	0.3	６－３	K－15

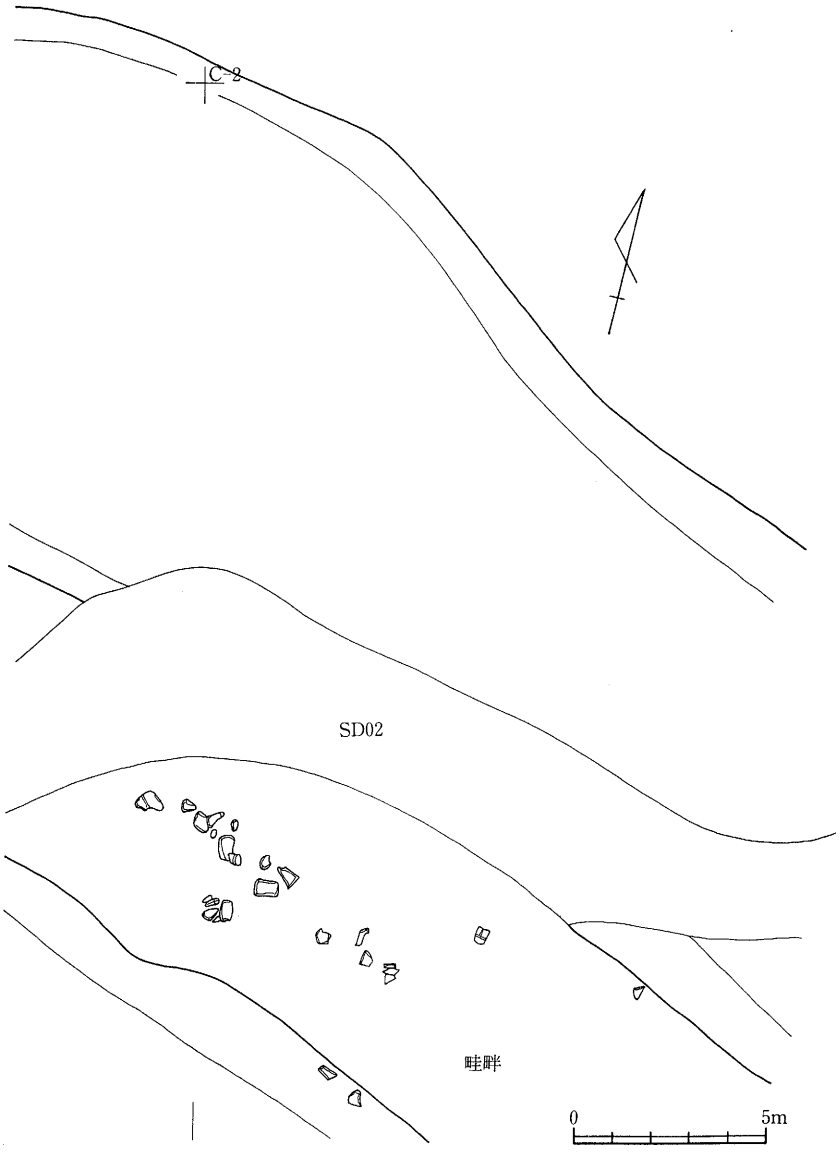
第26図　13層出土遺物実測図



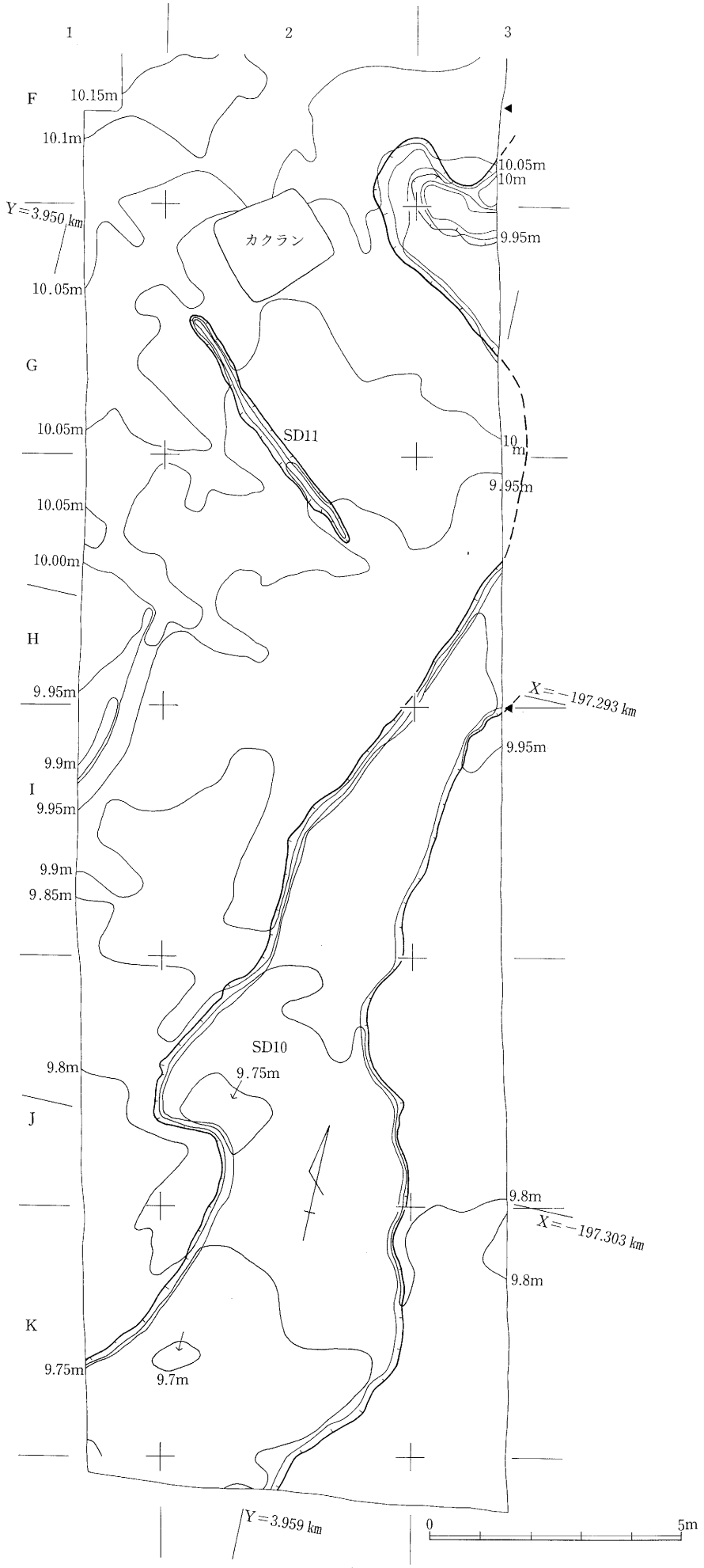
第27図　14・16層全体図

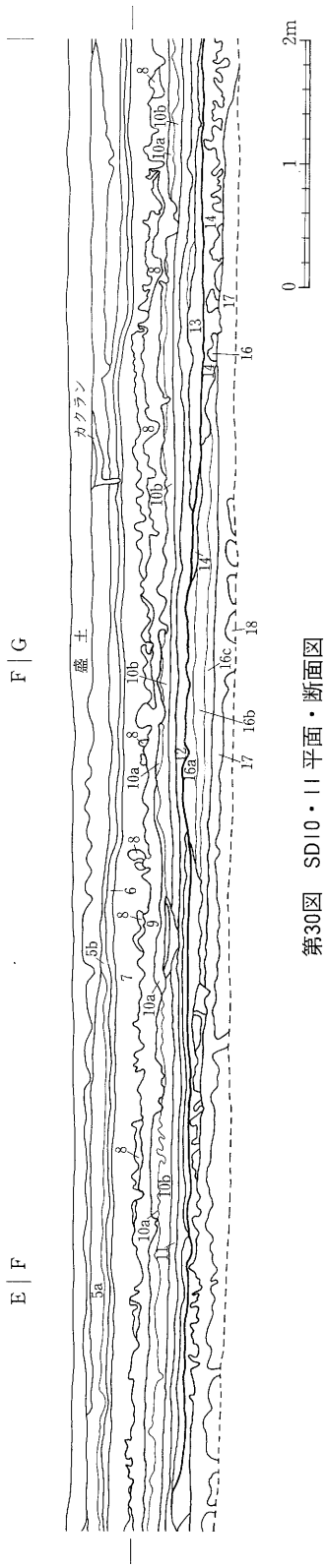


第28図　III区14層水田跡平面・断面図



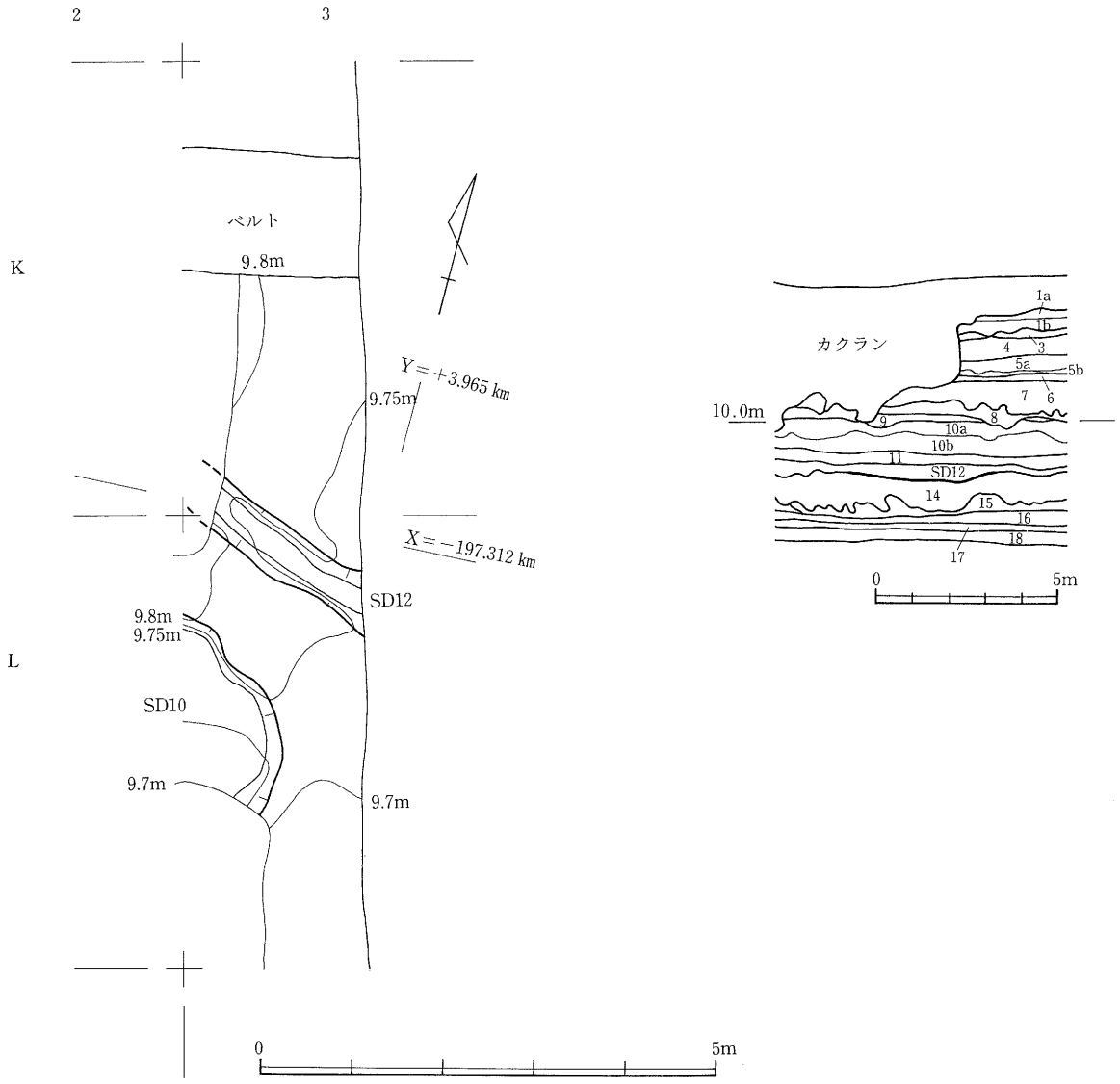
第29図　Ⅰ区14層水田跡出土遺物平面図





第30図　SD10・11平面・断面図

第30図　SD10・11平面・断面図



第31図　SD12 平面・断面図

SD11（第30図）

Ⅰ区中央部（F・G区）に位置し、14層上面（水田区画内）で検出した。規模は検出長5.51m、幅0.35m、深さ4㎝、方向はN－47.5°－Wで直線的である。隣接する14層水田跡の畦畔方向とは一致しない。遺物は出土していない。

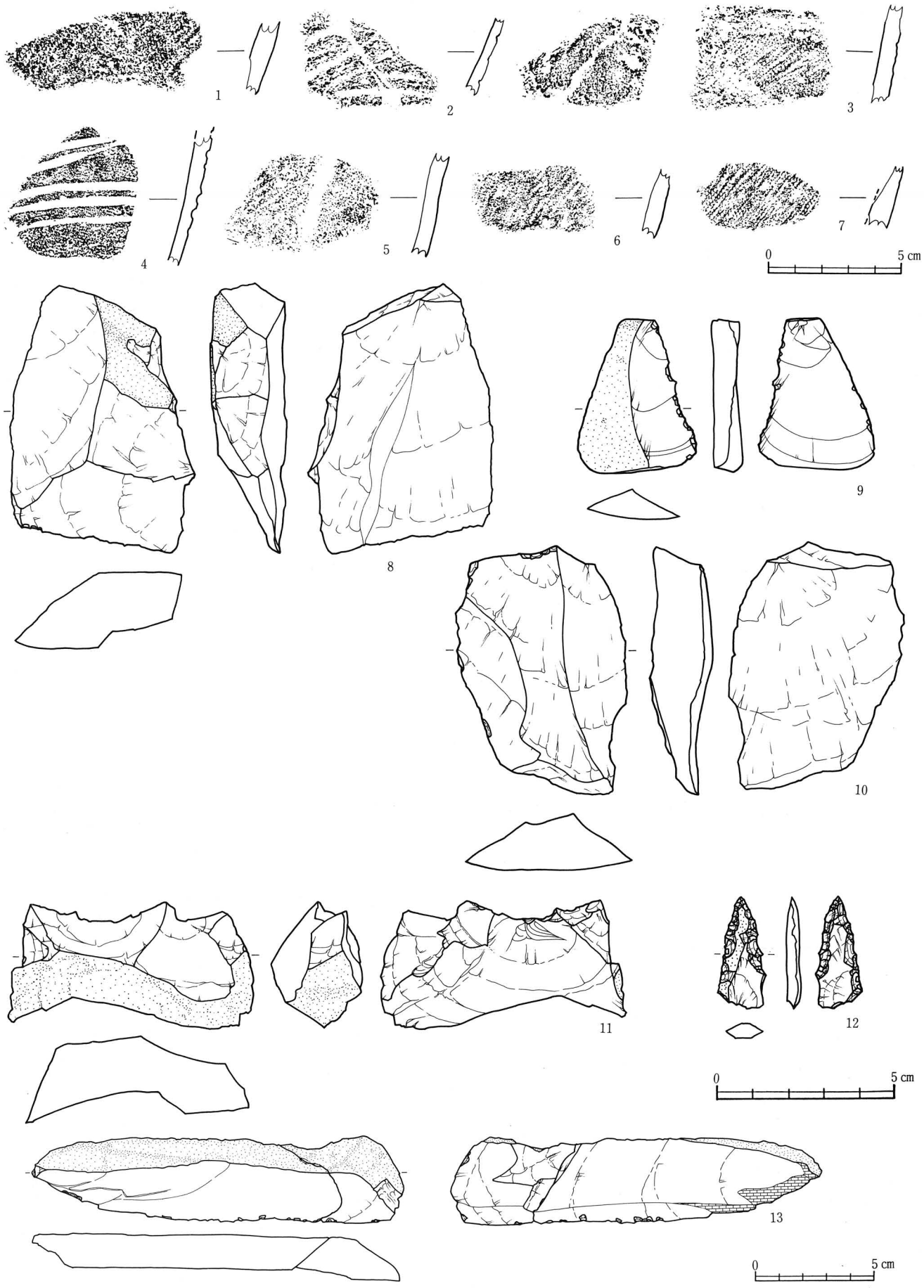
SD12（第31図）

Ⅱ区北半部（L区）に位置し、14層上面で検出した。Ⅰ区とⅡ区の境で、SD10に接続するものと予想される。規模は検出長1.88m、幅0.54m、深さ7㎝、方向はN－65.5°－Wで直線的に続くものと思われる。埋土は13層である。遺物は出土していない。

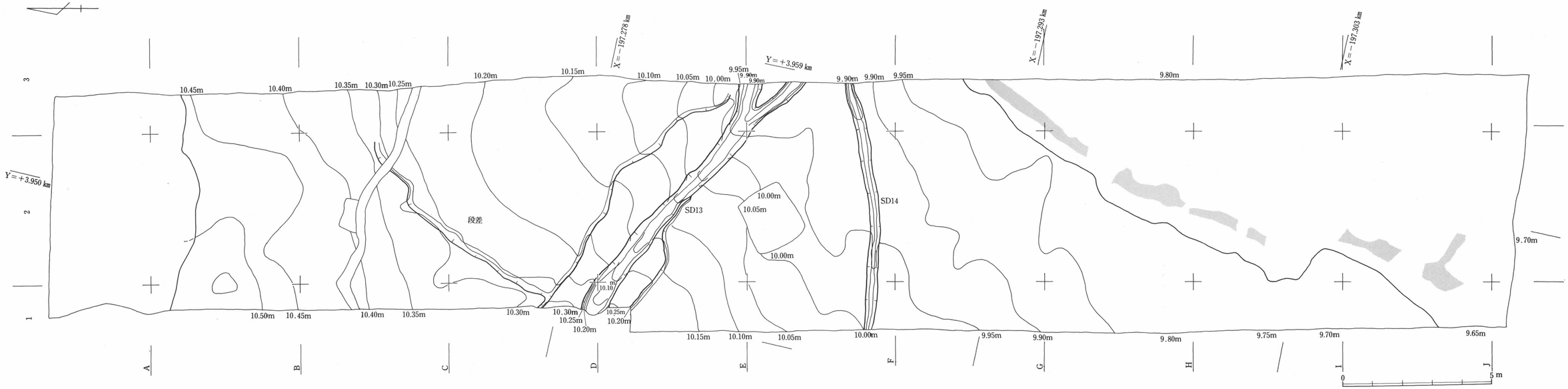
(12) 16層上面の遺構と遺物（第33図）

16層上面では溝跡2条・段差・14層水田の擬似珪畔Bを検出した。擬似珪畔については、14層水田跡で述べたのでここでは省略する。

SD13（第34図）



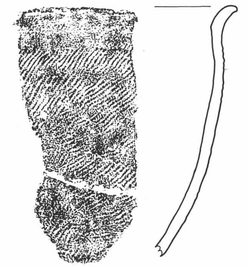
第32図　14層出土遺物実測図①



14層出土遺物

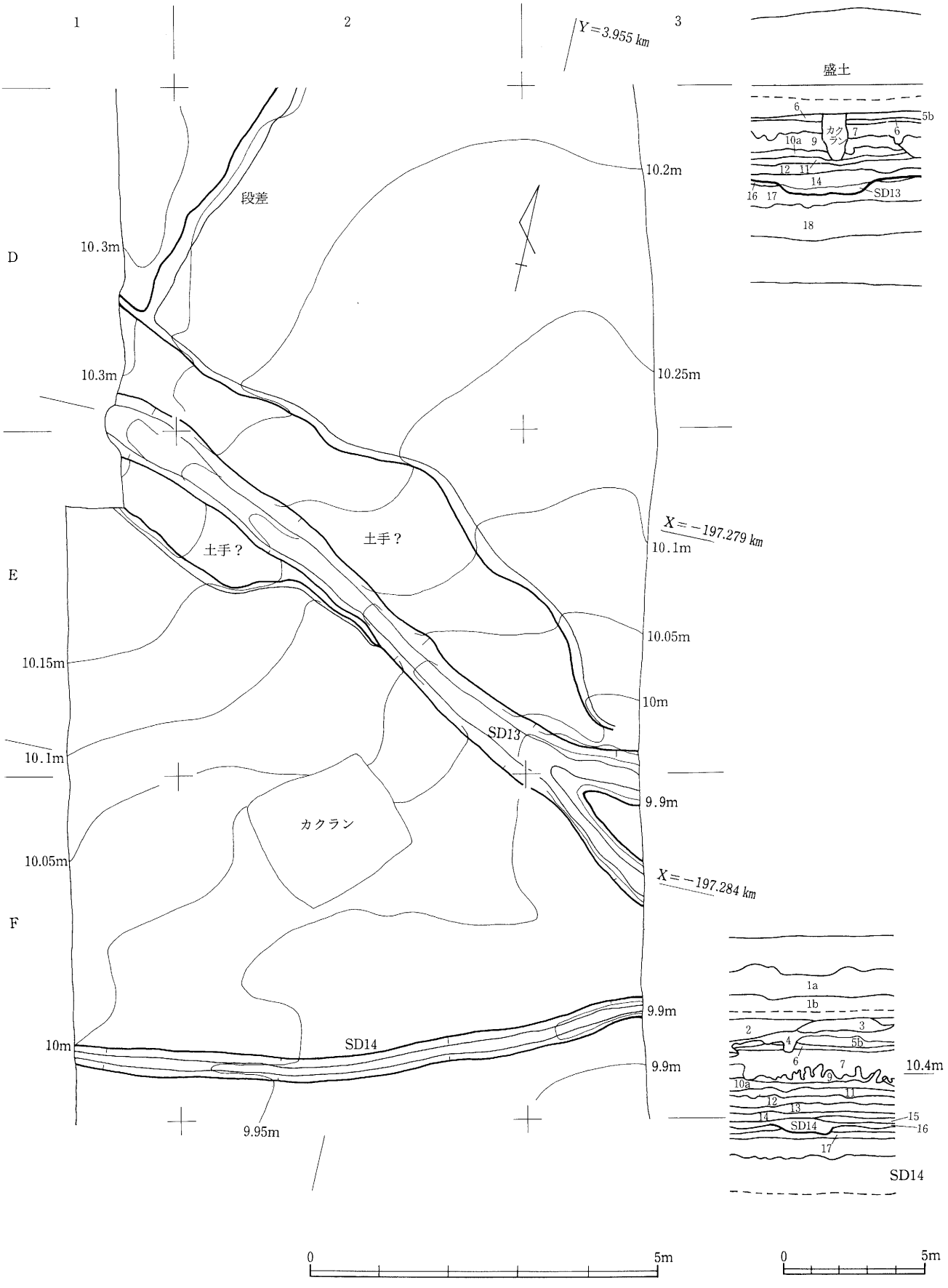
図版番号	種　類	遺構・層位	外　面	内　面	残　存	備　考	写真図版	登録番号
32－3		14層、Ⅰ区C１、２	縄文ＬＲ	マメツ	体部		7－16	B－10
32－6		14層、Ⅰ区C１、２	縄文ＬＲ	マメツ	体部		7－15	B－11
32－1		14層、Ⅰ区C１、２	縄文ＬＲ	ミガキ	体部		7－14	B－12
32－5		14層、Ⅰ区C１、２	縄文ＬＲ	マメツ	体部		7－17	B－13
32－2	鉢	14層、Ⅰ区C１、２	沈線＋縄文ＬＲ、刺落	粗成あり、ミガキ	体部	白色細砂	7－18	B－15
32－7		14層、Ⅰ区C２	縄文ＬＲ	マメツ	体部		7－13	B－20
32－4	鉢	14層、Ⅱ区N２	平行＋波状沈線（幅３㎜、深さ２㎜）	ミガキ	体部		7－19	B－19

図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	石　材	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
32－8	二次加工のある剥片	Ⅰ区　14層上面	G－２区	安山岩	85	7.6	5.2	2.2	6－5	K－6
32－9	微細剥離のある剥片	Ⅰ区　14層		頁岩	18	4.3	3.3	0.8	6－6	K－11
32－10	微細剥離のある剥片	Ⅰ区　14層		安山岩	50	7.0	4.9	1.8	6－5	K－9
32－11	石核？	Ⅰ区　14層		頁岩	52	3.6	6.9	2.6	6－8	K－10
32－12	石鏃	Ⅰ区　14層上面	H－１区	頁岩	1.6	3.15	1.3	0.4	6－4	K－5
32－13	石包丁	Ⅱ区　14層中	N－２区　K－17（14層下部）と接合		123	15.7	1.8	4.5	6－9	K－8



図版番号	種類	遺構・層位	外　面	内　面	残　存	備　考	写真図版	遺物番号	登録番号
33	壺	16層上面	口縁：ヨコナデ、ミガキ、体部：縄文ＬＲ	ミガキ	口縁～体部	口唇部刺落	7－20	50	B－21

第33図　Ⅰ区16層上面平面図



第34図　Ⅰ区 SD13・14 平面・断面図

Ⅰ区中央部（E・F区）に位置し、16層上面で検出した。規模は検出長約10.4m、幅0.86m、深さ14cm、方向はN－60.5°－Wで直線的に走行し、東部で2条に分岐する。この分岐部分が、上層のSD10の西側張り出し部分とプランが重複している。また、溝の両側に土手状の高まりが取り付いている。北側のものは調査区内のほぼ全面にあり、検出長約8.8m、最大幅1.78m、高さ3～4cm、南側のものは検出長4.63m、最大幅0.98m、高さ3～4cmである。この土手状の高まりは、溝の掘り上げに起因するものと予想されるが、その性格・目的は明確ではない。埋土は、1層で、土性は黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

SD14（第34図）

Ⅰ区中央部（F区）に位置し、16層上面で検出した。規模は検出長約8.28m、幅0.42m、深さ7cm、方向はN－65°～80°－Eで屈曲している。埋土は14層である。遺物は出土していない。

段差

段差はⅠ区で2ヶ所検出されている。北部の段差は、SD13北側の土手状の高まりより北へ伸びている。段差の比高差は、2～6cmである。段差の北端部では、14層水田跡の区画と重複する部分があるが、大部分は14層水田区画とは一致しない。したがって、14層水田の耕作深度の差によるものとは、必ずしもならないようである。何に起因するものかは明確ではない。段差の下段で弥生土器の甕片が出土している。

南部の段差は、SD10の形成や14層水田跡（古段階）の耕作深度の差に起因するものである。段差の比高差は10cm前後である。段差の東側には、14層水田跡の擬似珪畔Bが一定の間隔を持って並走している（第33図）。水田跡との関連は、14層水田跡の報文を参照されたい。

（13）縄文時代・旧石器時代相当層の調査

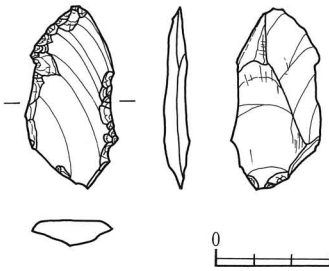
16層以下では、断面観察の結果自然堆積が連続することから縄文時代・旧石器時代相当層の確認調査をすることとした。縄文時代の遺構は・遺物は、第28次調査や　などで縄文時代早期末の土器や石器が出土している。また、旧石器時代相当層は、地下鉄工事に伴う調査（5次・17次調査）や、で腐植層が確認されている。これらの層位が、今次調査区まで伸びているかどうかの確認のための深掘り調査はⅠ区2箇所、Ⅲ区1箇所設定した。深掘り調査では作業上での安全確保のために調査範囲を縮小し、Ⅰ区では16層の精査が終了した12月9日より6.5m×12m、2×2mの調査区を設定した。Ⅲ区では、6.2×7.8mの調査区を設定し11月28日より開始した。

その結果、Ⅲ区31層で火山灰ブロックを確認した。この火山灰は周辺の調査から見て、十和田中掫火山灰と予想された［自然科学分析の結果では、沼沢テフラの可能性が指摘された。（第3章分析・同定参照）］。また、31層中からは縄文土器、石器が出土した。縄文土器は、早期の条痕文土器であるが細片のため実測は困難であった（写真図版7・21・22）。石器は、第36図に示した磨石、凹石である。34層で最初の腐植質粘土層を検出した。この腐植層中には炭化物は含まれるが、種子・枝等の植物遺体は含まれていなかった。35層で、石器を出土した（第35図）。このため、石器の出土した地点を中心に1m程周囲を拡張して石器の確認を行ったが、更なる出土は見られなかった。38層で、樹木片を含む腐植質粘土層を確認した。さらに、41層まで深掘り調査を行ったが、標高が5m以下になりこれ以上の調査は危険であるとして、12月17日Ⅲ区での調査を終了した。なお、41層下面から約50cm下で礫層が存在することをボーリング棒で確認している。

Ⅰ区では、28層で火山灰ブロックを確認したがⅢ区と同様のものであるかどうかは、分析を行わなかったので不明である。30層以下は土壌が非常に固いものとなり、調査期間も少なくなったので1×1m程の確認のための深掘りに変えて調査を行った。その結果、34～37層にかけて腐植質粘土層を検出した。特に35層は、針葉樹の葉を多量に含んでいる。12月27日、調査の一切を終了した。

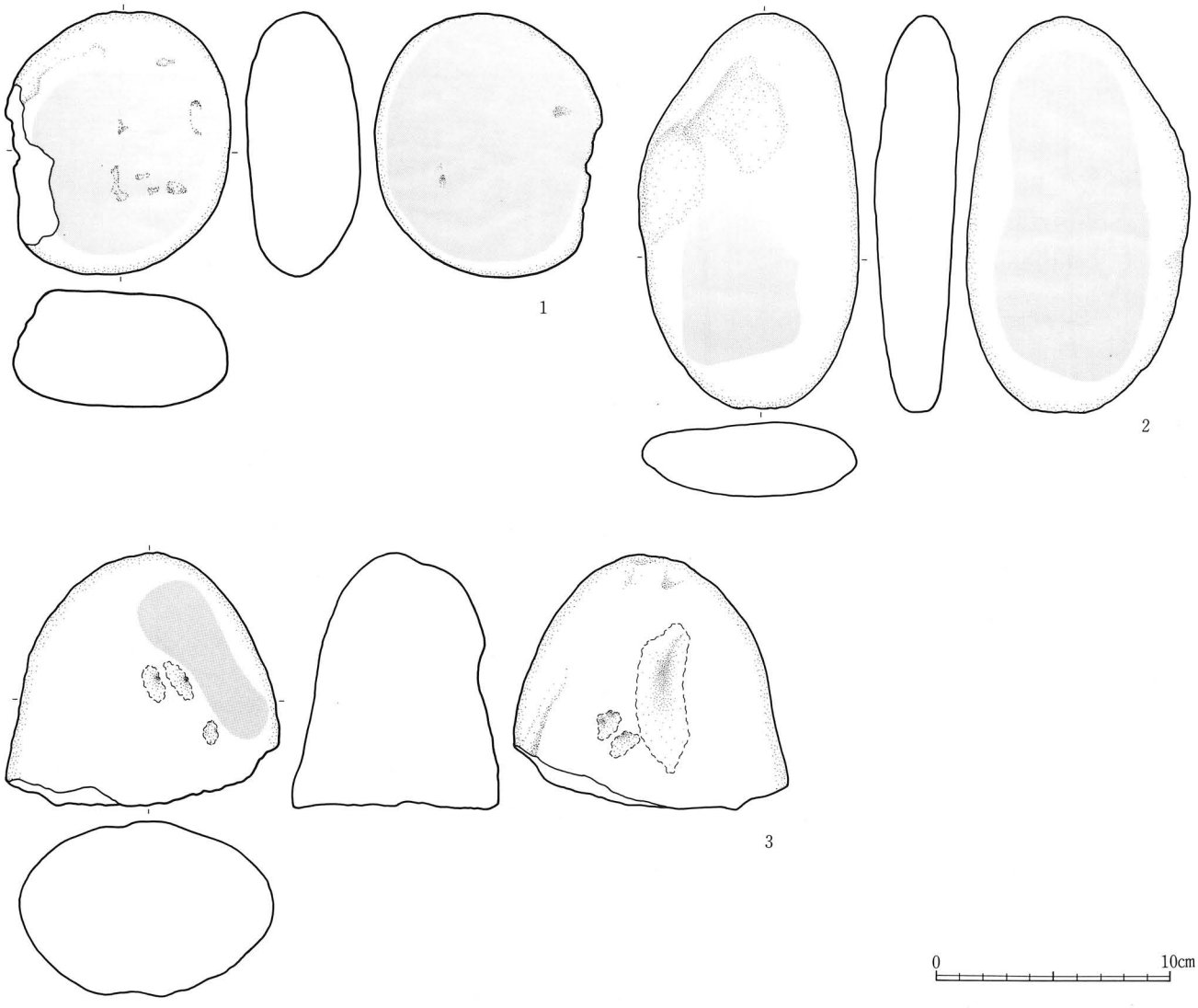
35層出土石器について

出土した地点は、Ⅲ区35層である。石材は頁岩で、表皮に近い部分と思われる。横長の剝片の腹面の両縁辺に連続した二次加工がなされている。また、先端から衝撃剝離と思われる新しい剝離痕が認められる。このことから、形態的にはナイフ形石器と呼べるが、基部の調整が途中で行われていないことや、横長の剝片を利用していることなど、狭義ではナイフ形石器と呼べるかどうか疑問である。



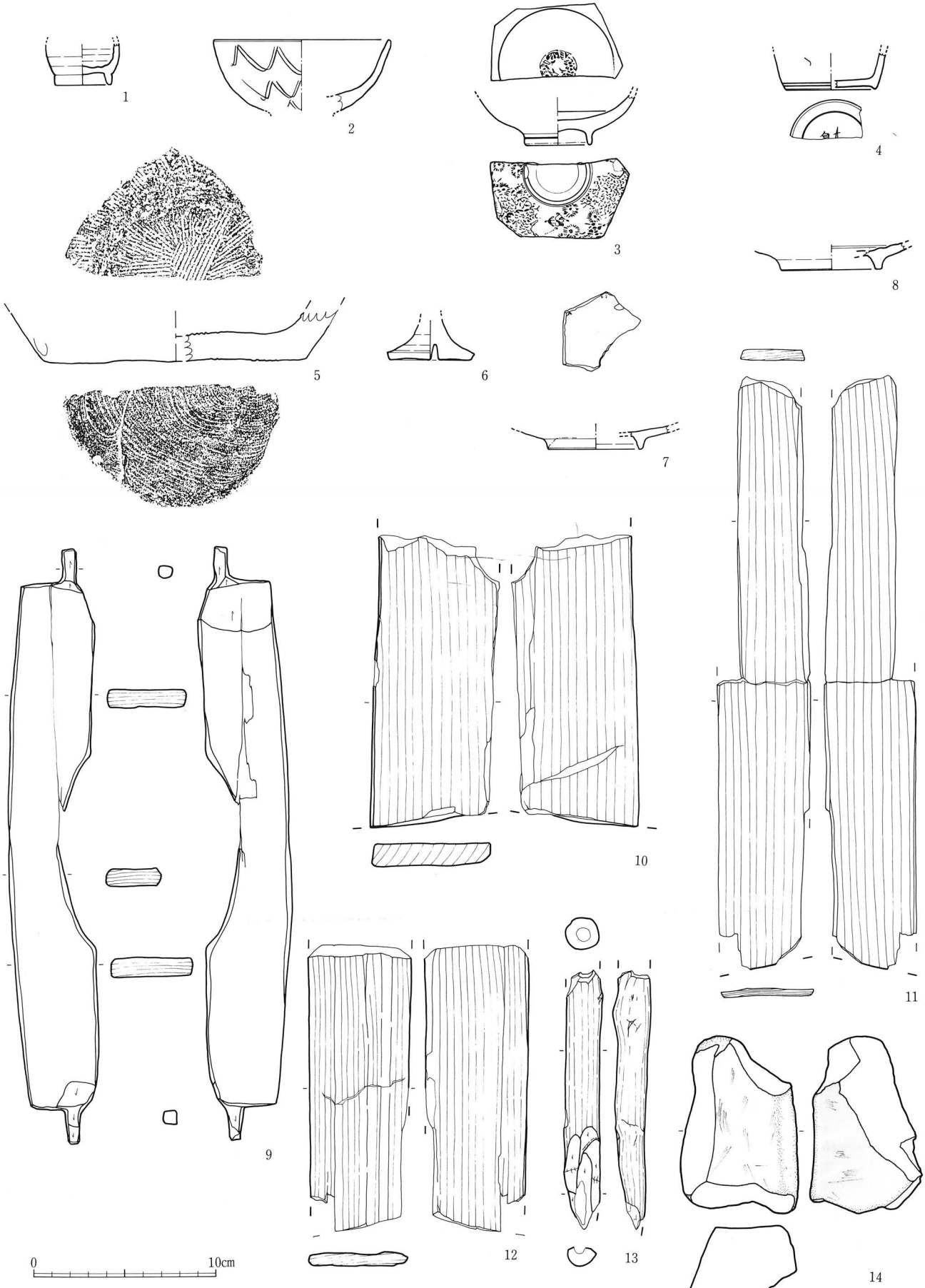
図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	石　材	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
35	ナイフ	Ⅲ区　35層	両縁辺に連続した二次加工	頁岩	2.6	3.6	1.8	0.4	6－13	K－16

第35図　35層出土遺物

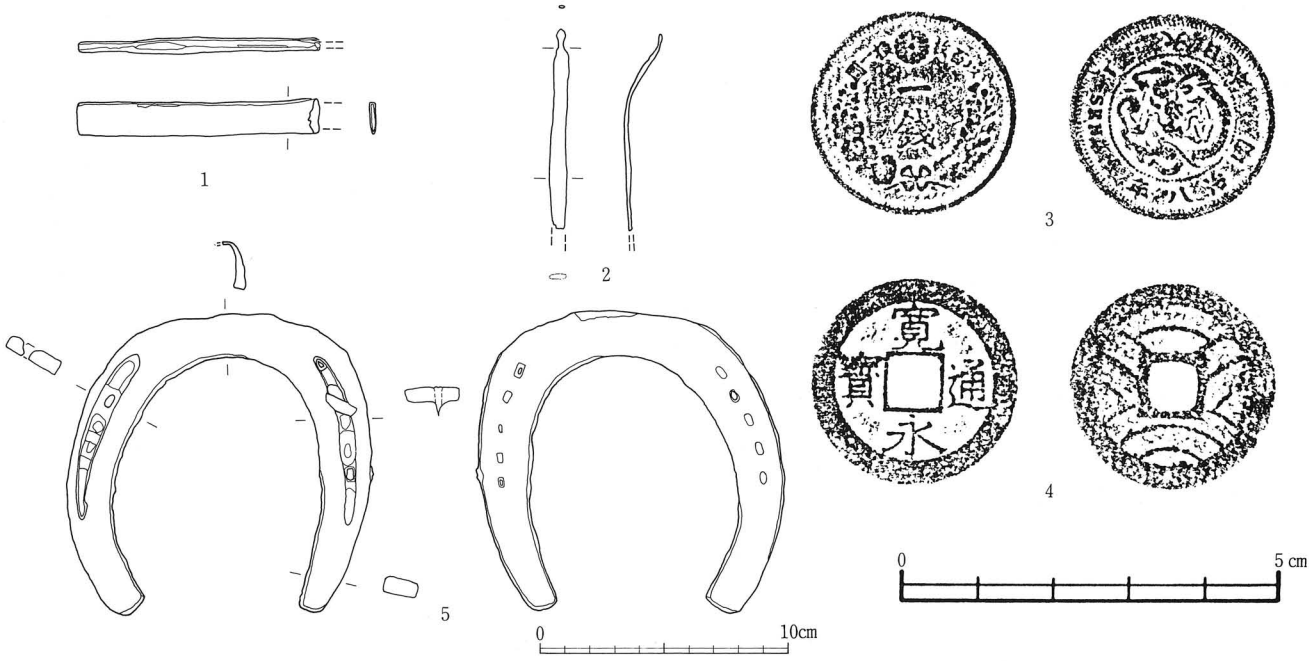


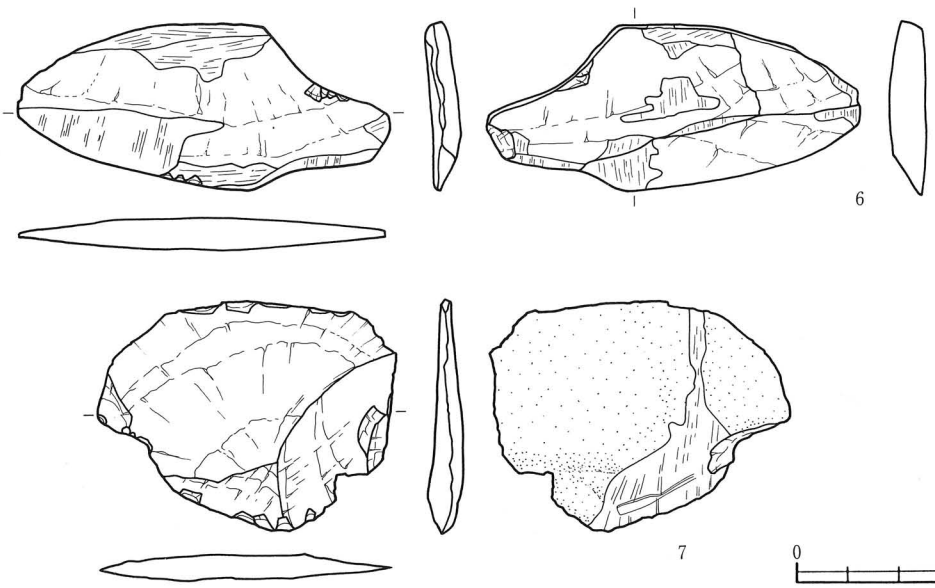
図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	石　材	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
36－1	磨石	Ⅲ区31層	一部欠損	ギョウカイ岩	745	11.2	9.65	4.85	6－11	K－13
36－2	磨石	Ⅲ区31層		ギョウカイ岩	688	17.0	9.2	3.4	6－10	K－14
36－3	磨石＋凹石	Ⅲ区31層	一部敲打痕あり　欠損した石を利用	ギョウカイ岩	1065	10.8	11.65	8.7	6－12	K－12

第36図　31層出土遺物



第37図　1層他出土遺物①





図版番号	種　別	遺構・層位	特　徴	産　地	年　代	残　存	法　量（cm）			写真図版	登録番号
							口　径	底　径	器高		
37－1	磁器　小瓶	Ⅰ区　壁切	白磁？　上部欠損	肥前	18C以降	体～底部	－	3.1	(2.3)	8－5	J－1
37－2	磁器　碗	Ⅰ区　1層	染付　二重縄目文	肥前	18C	口～体部	9.6	－	(4.0)	8－1	J－3
37－3	磁器　碗	Ⅲ区　撹乱	染付、摺絵、見込松竹梅文	不明	19C後半	体～底部	－	3.6	(2.7)	8－6	J－5
37－4	磁器　猪口	Ⅲ区　撹乱	染付、高台内に銘あり「太明年製」か	肥前	18C	体～底部	－	4.8	(2.05)	8－11	J－5
37－5	陶器　擂鉢	Ⅱ区　撹乱坑	内外鉄釉、擂目10本単位、底部糸切り近世土杭か	堤	18C以降	底部	－	(14.4)	(2.8)	8－9	I－10
37－6	陶器　仏飯具？	Ⅲ区　撹乱	飴釉？底部糸切り、盲孔あり	瀬戸・美濃	18C？	脚部	－	4.6	(2.3)	8－8	I－2
37－7	陶器　皿	Ⅲ区　1層	灰釉　鉄絵（文様不明）	大堀相馬	18C後半以降	底部付近	－	5.2	(1.35)	8－14	I－3
37－8	陶器　瓶	Ⅲ区　1層下部	白濁釉　内面・畳付露胎	大堀相馬	18C後半以降	底部	－	5.4	(1.9)	8－7	I－4

図版番号	種　類	遺構・層位	特　徴	材　質	重量（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	写真図版	登録番号
37－9	不明	Ⅱ区　撹乱坑	堤灯内型か？（近世土坑？）	－	－	33.1	4.5	1.1	8－16	L－1・2
37－10	桶　底板	Ⅱ区　撹乱坑	約1/2欠損	－	－	16.3	6.5	1.3	8－26	L－3
37－11	桶　底板	Ⅱ区　撹乱坑	一部欠損	－	－	33.1	5.0	0.5	8－22	L－5
37－12	桶　底板	Ⅱ区　撹乱坑	約1/2欠損	－	－	16.0	5.6	0.8	8－25	L－6
37－13	杭	Ⅰ区　10層	先端は片面加工　中空材　上部欠損	－	－	14.5	1.9	1.8	8－19	L－4
37－14	砥石	Ⅲ区　1層下部	使用面二面残存　欠損（近世以降か）	－	－	9.9	6.5	4.8	9－3	K－2
38－1	小柄	Ⅱ区　撹乱坑	刀身欠損　茎残存　近世土坑か	真ちゅう？	22.1	9.8	1.45	0.7	8－17	N－2
38－2	笄	Ⅲ区　1層下部	耳掻きあり　変形　下部欠損	銅？	7.8	8.1	0.7	0.2	8－18	N－1
38－3	古銭	Ⅱ区　撹乱	竜一銭銅貨　明治８年（1875）	銅	6.9	2.7			8－20	N－5
38－4	古銭	Ⅲ区　盛土	四文銭、正字11波　明和６年（1769）	銅	4.3	2.7			8－21	N－4
38－5	蹄鉄	Ⅲ区　1層	有溝式（明治27年以降か）釘穴５コ一対	鉄	268.3				8－27	N－3
38－6	石包丁？	Ⅰ区　壁切			17.5	3.3	7.4	0.6	9－2	K－1
38－7	微細剥離のある薄片	Ⅱ区　1層中		安山岩	14.6	4.6	5.8	0.7	9－1	K－4

第38図　１層他出土遺物②

(14) その他の遺物（第37・38図）

その他の遺物は1層や撹乱による土坑から多く出土しているが、その所属時期を一定にしない遺物が多い。そのなかで図示したものは、19点である。また、II区で撹乱として掘り上げた土坑には、近世の遺物しか含まれないことから近世の土坑であった可能性も否定できない。このなかで第37図9に図示した木製品は、桶の把手とも考えられるが、継ぎ口部分が細すぎるので、提灯の内型の可能性を指摘しておきたい。また、第37図13に図示した木製品は、10層より出土した打ち込み杭である。上部を欠損しており、中が空洞になっている。先端は片面にだけ加工が認められる。

5．遺構の所属年代とまとめ

1．今次調査は、富沢遺跡の中心から北よりの地点にある。隣接した調査として、5次、7次、16次、17次(篠原・吉岡：1989)、28次（佐藤甲：1988)、74次（平間：1992)、86次（佐藤甲：1996）など多くの調査が行われている。また、富沢遺跡北部A地区基本層序に包括されている(佐藤甲：1991)。これらの調査の成果との主な対応関係は次のようになる。

99次	99次	5次	7次	17次	28次	74次	86次	86次	北部	年代
I・II区	III区						C地区	E地区		
2		2	2		2				2	近世以後
3	3									中世
5a	5a	3	3	3	4	4	3			平安時代
7a	7a				5a	5	5？	5？	4c1	平安時代
8	8						6？		5	奈良～平安時代
10a	10a	5	5	5	9a	7	10		9a	弥生時代
12a	12a	7c	7c	7c	11a	12			11	弥生時代(桝形囲式期)
14	14	8	8	8						弥生時代（桝形囲式期以前)
28	31	33		24			31			

2．検出した遺構は、調査区全域において検出されたものとして7a層水田跡・12層水田跡がある。その他に、I区で検出した遺構としては、10b層上面で溝跡2条(SD01・02)、11層上面で溝跡5条(SD03～07)、14層水田跡、SD10・11(14層上面)、16層上面で溝跡2条(SD13・14)がある。II区で検出された遺構としては、11層で溝跡2条(SD08・09)、14層上面でSD12がある。III区で検出された遺構としては、3層水田跡、5a層水田跡、8層水田跡、14層水田跡がある。また、I・II区の壁面において2層水田跡が確認されている。これは近世から現代にかけての水田であり、特にI区では「字境」と思われる大畦を確認している。

3．III区において3層水田跡（畦畔5条とそれによって区画される水田区画4区画）を検出した。I・II区では上層の水田耕作によって削平され、壁面においてわずかに土層が確認されるだけである。時期は、層位的には平安時代以降近世以前であるが、過去の調査との対応から中世の可能性が高い。

4．III区において5a層水田跡（段差のみ）を検出した。I・II区では前述したようにすでに削平されている。遺物は杭を4本出土したのみで、時期を決定するようなものはない。しかし、層中に灰白色火山灰を含むことから平安時代（灰白色火山灰降下以降）から中世にかけての水田跡と推定される。

5．調査区全域で7a層水田跡（I区：畦畔14条・水田区画9区画、II区：畦畔等は検出では土壌のみ、III区：畦畔6条・水田区画5区画）を検出した。I区では地形の傾斜に合わせて畦畔が作られているようで規則性が見られない。III区では、ほぼ真北とそれに直行する方向を示す畦畔であるが、富沢地区における条里型水田に含まれるかは

方向的なずれが見られるので今後の調査成果と合わせて判断していきたい（富沢地区での条里型水田の南北方向は真北か東に振れても１°以内である）。明確な時期を示す遺物は出土していないが周辺の調査との対応から、平安時代（灰白色火山灰降下以前）の水田跡と推定される。

６．８層水田跡は、Ⅲ区において検出した（Ⅰ・Ⅱ区では水田土壌のみの検出である）。明確な時期を示す遺物は出土していないが周辺の調査との対応から、奈良時代から平安時代（灰白色火山灰降下以前）の水田跡と推定される。

７．10b 層上面で溝跡２条を検出した。いずれもⅠ区である。

８．11層上面で溝跡７条を検出した。Ⅰ区で５条、Ⅱ区で２条である。時期を決定するような遺物は出土していない。

９．調査区の全域で12a 層水田跡（Ⅰ区：畦畔39条・水田区画32区画、Ⅱ区：畦畔23条・水田区画16区画、Ⅲ区：畦畔43条・水田区画31区画）を検出した。区画単位がよくわかるⅢ区で見ると、平均1.7㎡ほどの小区画の水田である。遺物は、Ⅰ区畦脇で甕１個体が一括で出土しており、土器の文様形態や周辺の調査との関連から時期は桝形囲式期に比定される。

10．13層では遺構は検出できなかったが、石鏃？・石器・土器等の遺物が出土している。特に土器に関しては、幅２㎜ほどの沈線と充填縄文手法による「変形工字文」と考えられる文様が描かれている。また、胎土に白色細砂を多く含んでいるなどの特徴が見られる。このような特徴の土器は弥生時代中期前葉の船渡前式や寺下囲式の土器に見られるものである。しかし、富沢遺跡から西に約４㎞の「船渡前遺跡」出土の土器には同様のモチーフは見られない。よって、大きくは弥生時代中期前葉の時期で収まると考えられるが、中期中葉の桝形囲式期により近いものであると理解しておきたい。

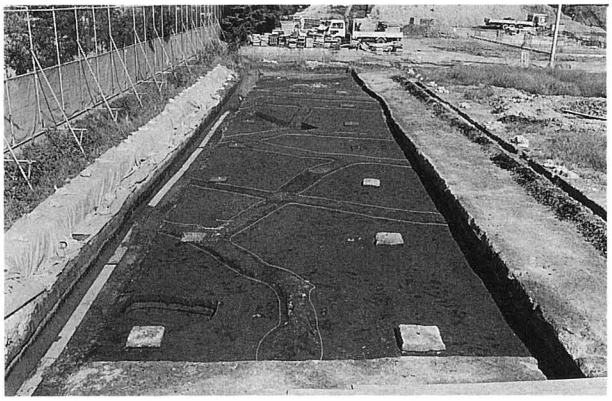
11．14層で水田跡（Ⅰ区：畦17条・水田区画18区画、Ⅲ区：畦３条）と溝跡３条を検出した。検出した溝跡（SD10）直下や、非耕作域下で擬似珪畔Ｂが確認された。このことは、14層水田が２時期あったことを表しているものと考えられる。遺物は、弥生土器や石器などがある。土器の文様の特徴を見ると細片が多く全体の手法が判然としないが弥生時代前期の山王Ⅲ層式の特徴が見られ、この時期に該当するものと想定される。

12．16層上面で溝跡２条と段差を検出した。時期を決定する遺物が出土していないので断定はできないが、弥生時代前期とだけしておきたい。

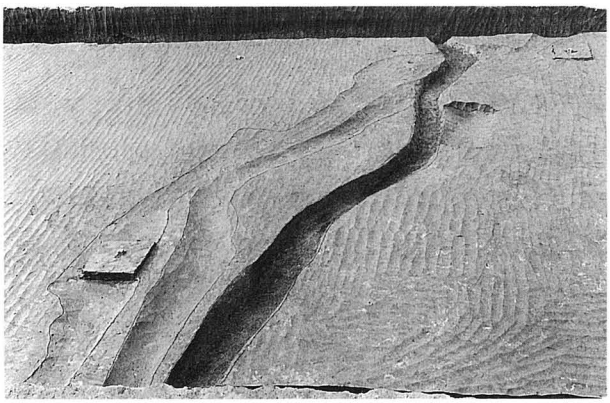
13．Ⅲ区31層中で検出した火山灰は、周辺の調査で検出している火山灰と肉眼の観察では似ているので、当初十和田中掫火山灰と考えていたが、自然科学分析の結果「沼沢テフラ」との同定をえた。今次調査区から西へ50ｍの98次調査35層から検出した火山灰も同様のものであるという指摘があった。このことから、この火山灰は今まで富沢遺跡からは検出報告がなされていない火山灰であり、縄文時代の古環境を復元する上でも重要なものと考えられる。今後の資料の増加に期待するとともに、関連科学との連携の重要性についても再認識していきたい。

14．Ⅲ区35層で出土した石器は、30次調査で出土して以来のものであり、旧石器時代の人類活動の広がりが確認できた。

15．腐植層はⅠ区で４層、Ⅲ区で２層確認できた。いずれにも、針葉樹の葉は確認できたが、樹根・球果などの植物遺体は確認できなかった。

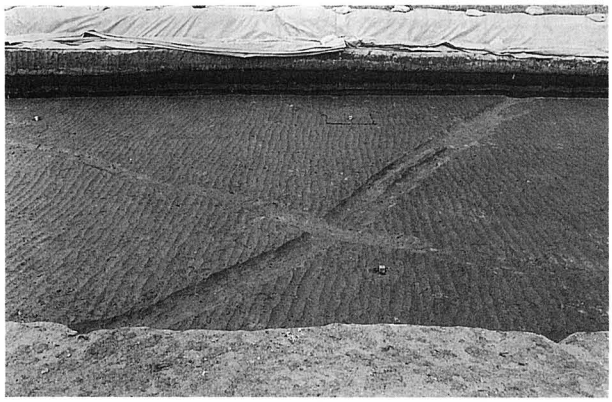


1．Ⅰ区7a 層水田検出状況（南より）



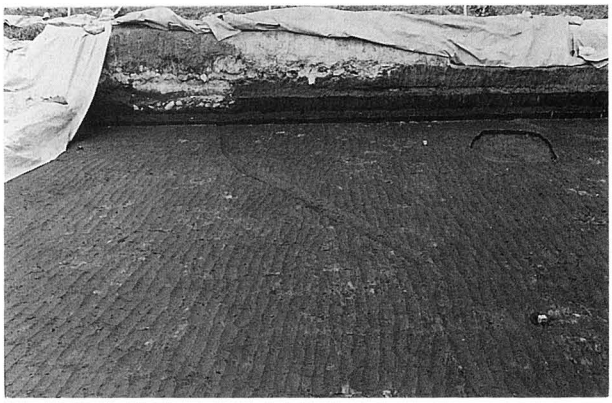
2．Ⅰ区 SD02 全景（東より）

3．Ⅰ区 SD03完掘（東より）



4．Ⅰ区 SD04・05 完掘（東より）

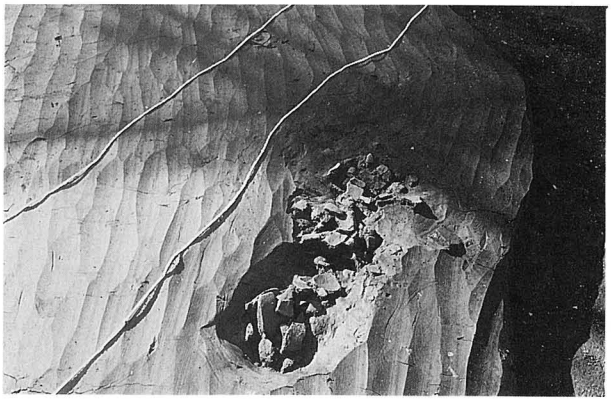
5．Ⅰ区 SD06 完掘（東より）



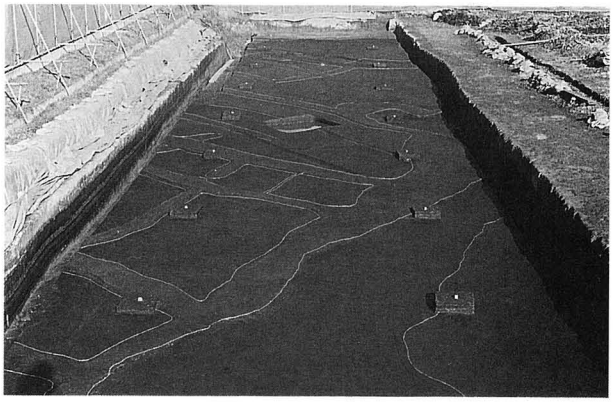
6．Ⅰ区 SD07 完掘（東より）

7．Ⅰ区12層水田確認状況北部アップ（南より）

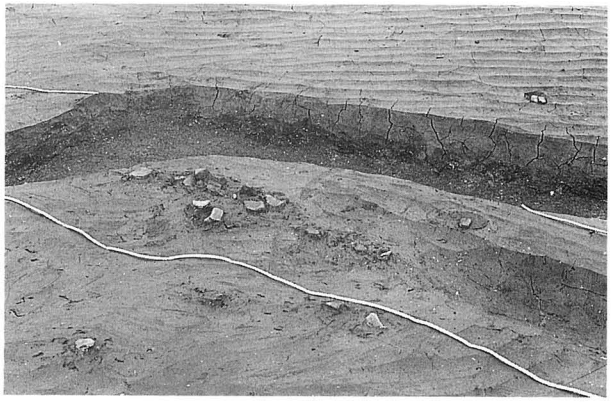
8．Ⅰ区12層水田検出（南より）



1．Ⅰ区12層土器出土状況（東より）



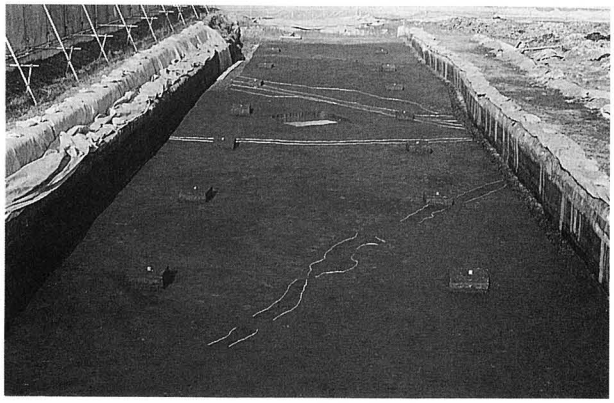
5．Ⅰ区14層水田北部アップ（南より）



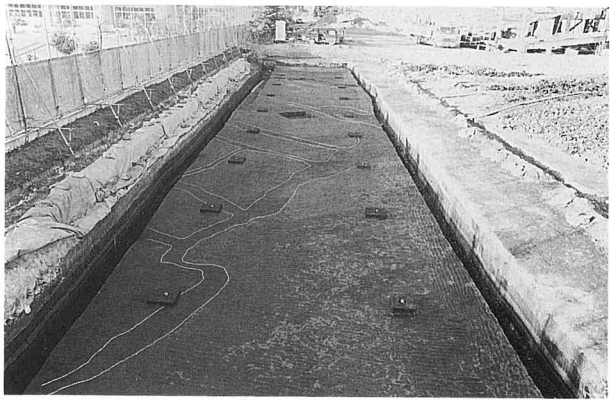
2．Ⅰ区北部土器出土状況（南より）

6．Ⅰ区14層水田北部土器（東より）

3．Ⅰ区13層石器出土状況（西より）



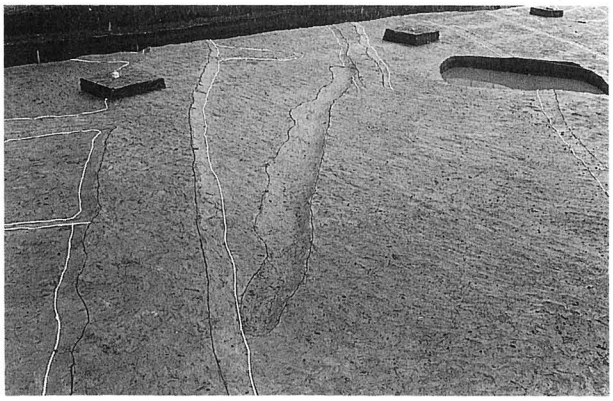
7．Ⅰ区 SD13・14 擬似畦畔（南より）



4．Ⅰ区14層水田確認状況（南より）

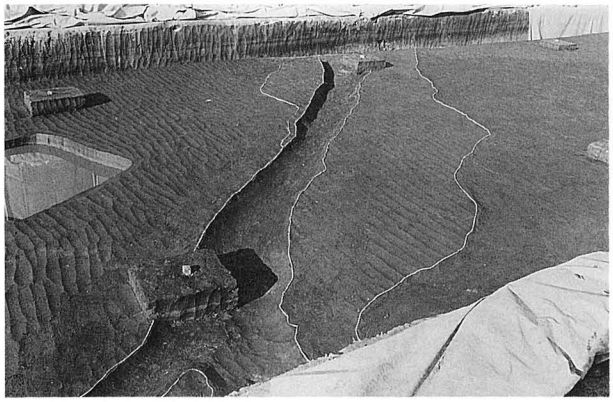
8．Ⅰ区14層水田下の擬似畦畔Ｂ（南より）

写真 2

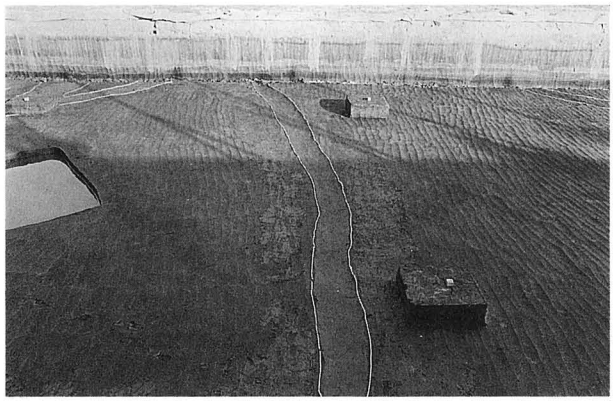


1．Ⅰ区 SD11 全景（南東より）

2．Ⅰ区16層上面出土弥生土器（東より）

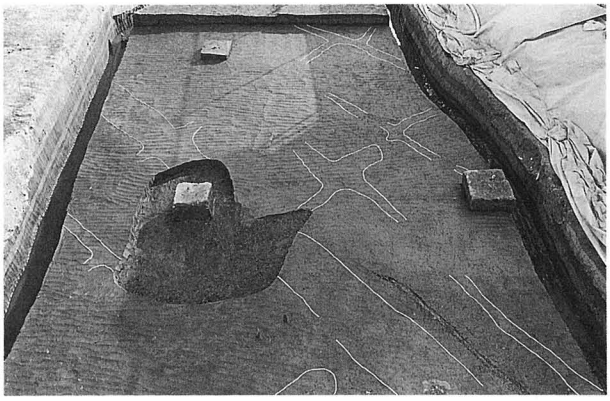


3．Ⅰ区 SD13 全景（東より）



4．Ⅰ区 SD14 全景（西より）

5．Ⅱ区 SD08・09 完掘（北より）



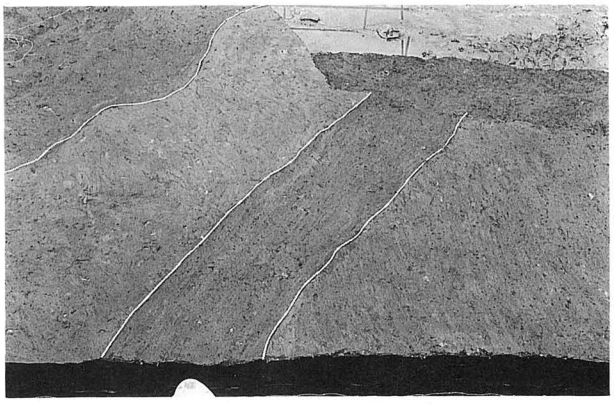
6．Ⅱ区12層水田確認（北より）

7．Ⅱ区12層水田全景（南より）

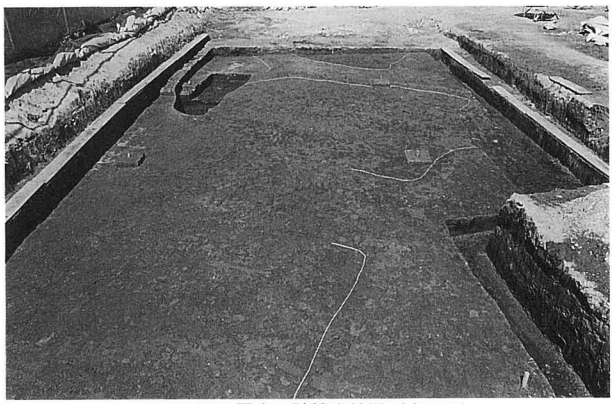
8．Ⅱ区13層出土遺物（東より）

写真 3

1．II区14層上面全景（南より）

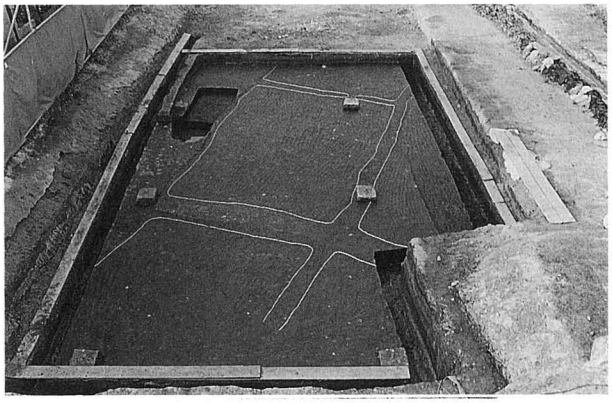


2．II区 SD12 全景（南より）

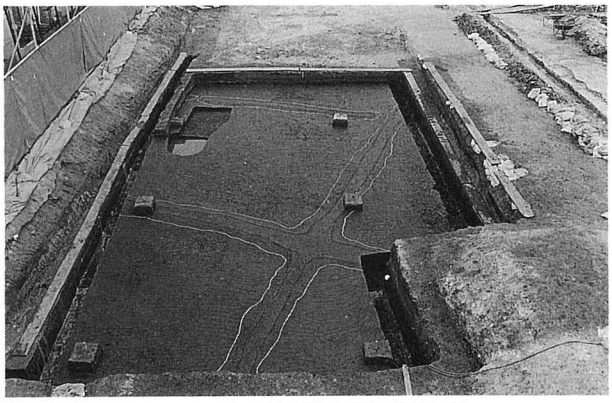


3．III区 2 層水田跡検出状況（南より）

4．III区 2 層水田跡土器遺物（北より）



5．III区 7 層水田跡検出状況（南より）

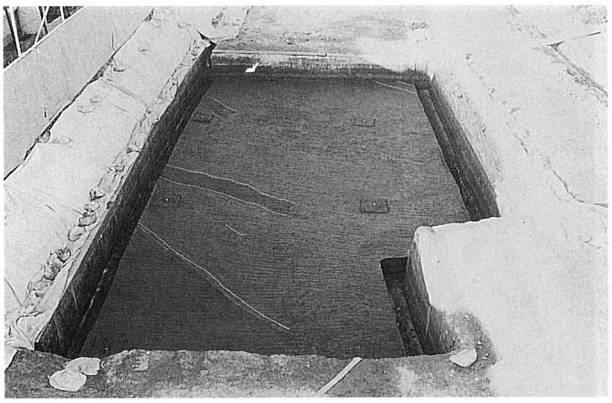


6．III区 8 層水田検出状況（南より）

7．III区12層水田確認状況（南より）

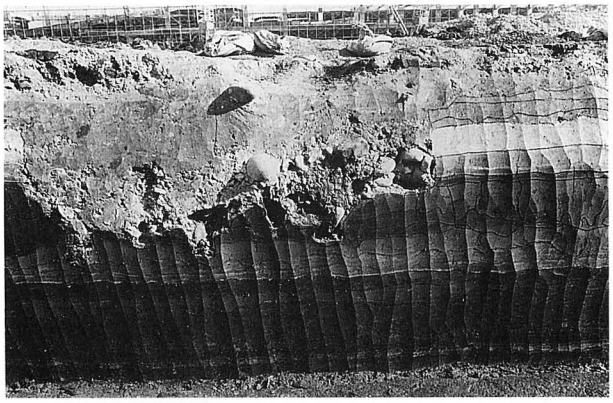
8．III区12層水田検出状況（南より）

写真 4

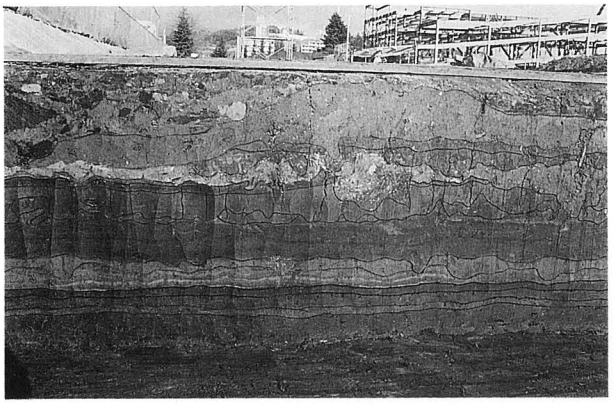


1．Ⅲ区14層水田全景（南より）

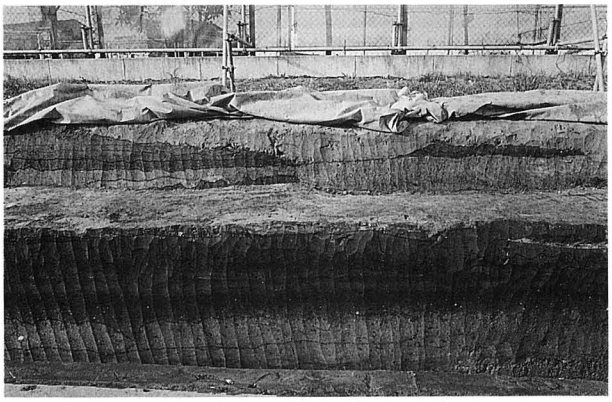
5．Ⅲ区35層下部石器出土（東より）



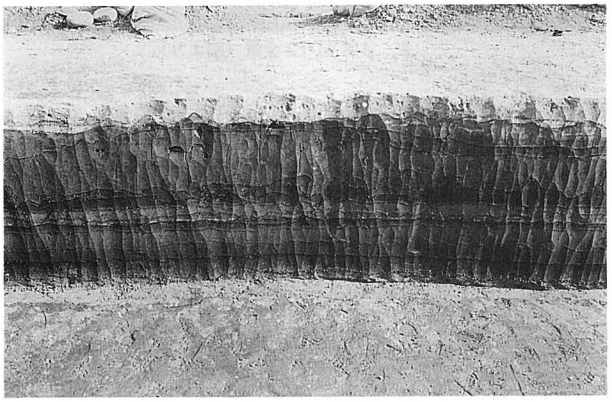
2．Ⅱ区東壁セクション（西より）



6．Ⅲ区北壁セクション（南より）



3．Ⅰ区西壁セクション（東より）C・D-2グリット付近



7．Ⅰ区東壁セクション（西より）

4．7a層水田（上空より）

8．7a層水田（北西上空より）

写真5

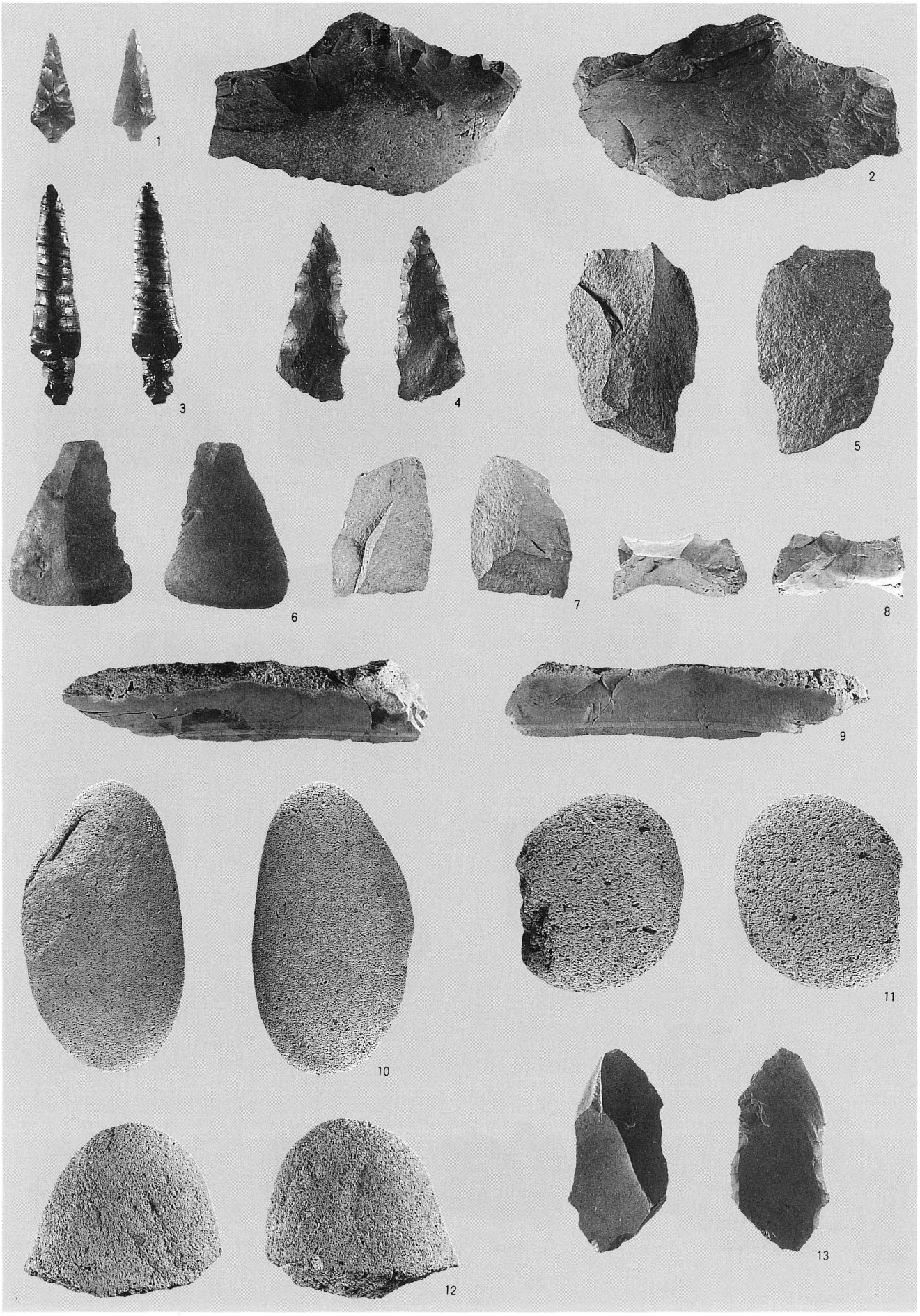


写真６　出土遺物（１）

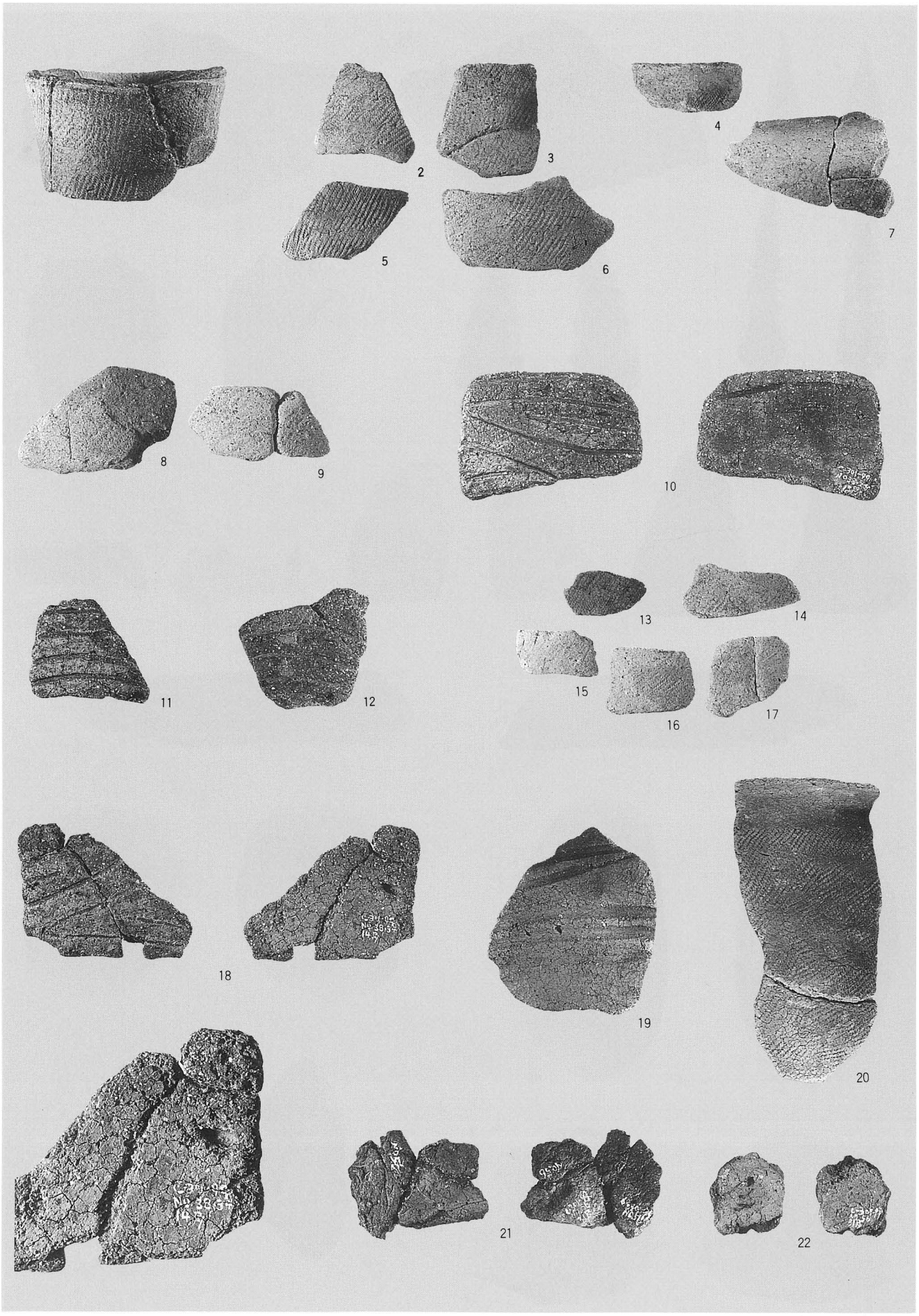


写真７　出土遺物（２）

写真８　出土遺物（３）

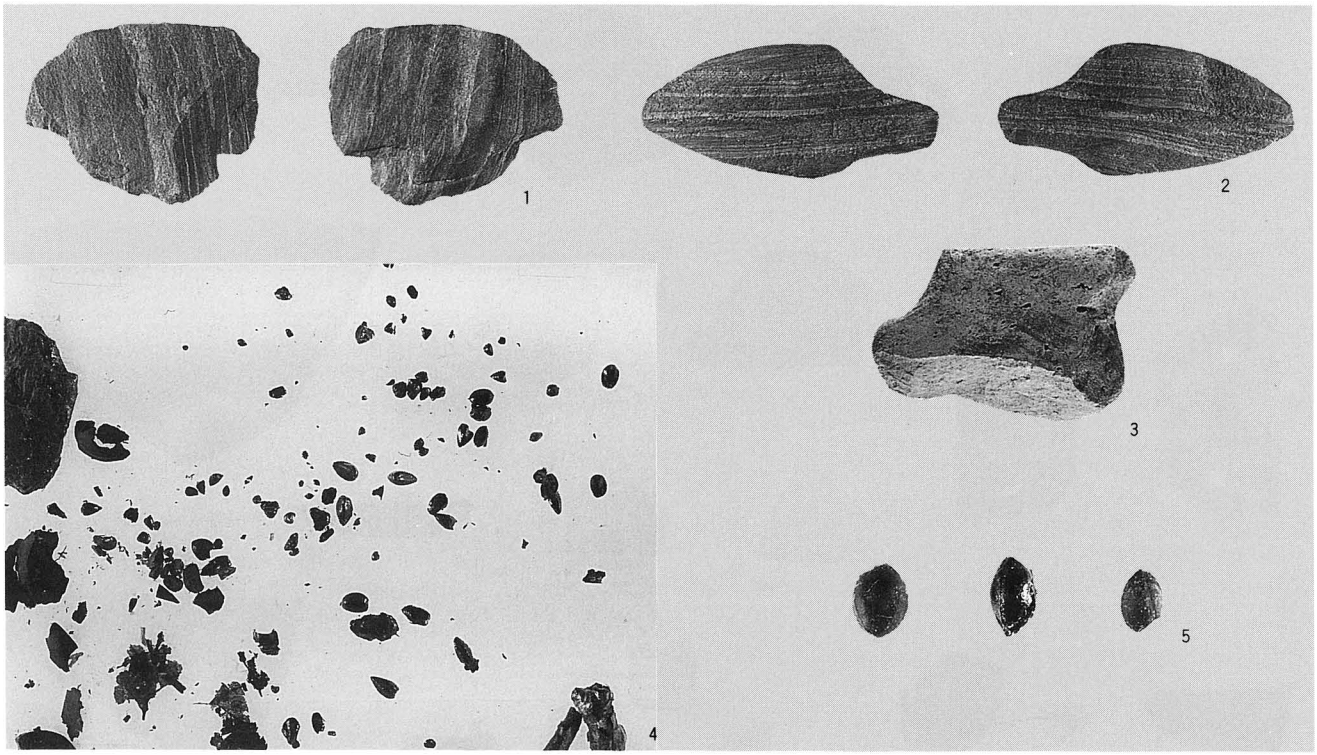


写真 9　出土遺物（4）

第６節　富沢遺跡第101次調査

１　調査に至る経緯

平成７年６月14日付けで、庄子正一氏よりRC ７階建共同住宅の発掘届が提出されたが、当教育委員会では７年度の調査予定は決定していたため、平成８年度の調査で受託することでご了解を得たものである。

平成８年２月27日、発掘調査の実施に先立ち申請者側と第１回目の協議を持った。同申請者からは同遺跡内別地点での発掘届が提出されており(96次)、今次調査の面積が狭いことから同時に調査を行うことが効率的であると判断し、96次調査期間内に調査を実施することを申し合わせた。したがって事前の準備、契約等は96次調査と併せて行っている。

２　調査の方法

調査箇所は富沢遺跡の北東端にあたる。旧地名では「広岡」の北端部で北の「山根街道南」に接した箇所である。現在は都市計画街路長町折立線の北に面した箇所である。

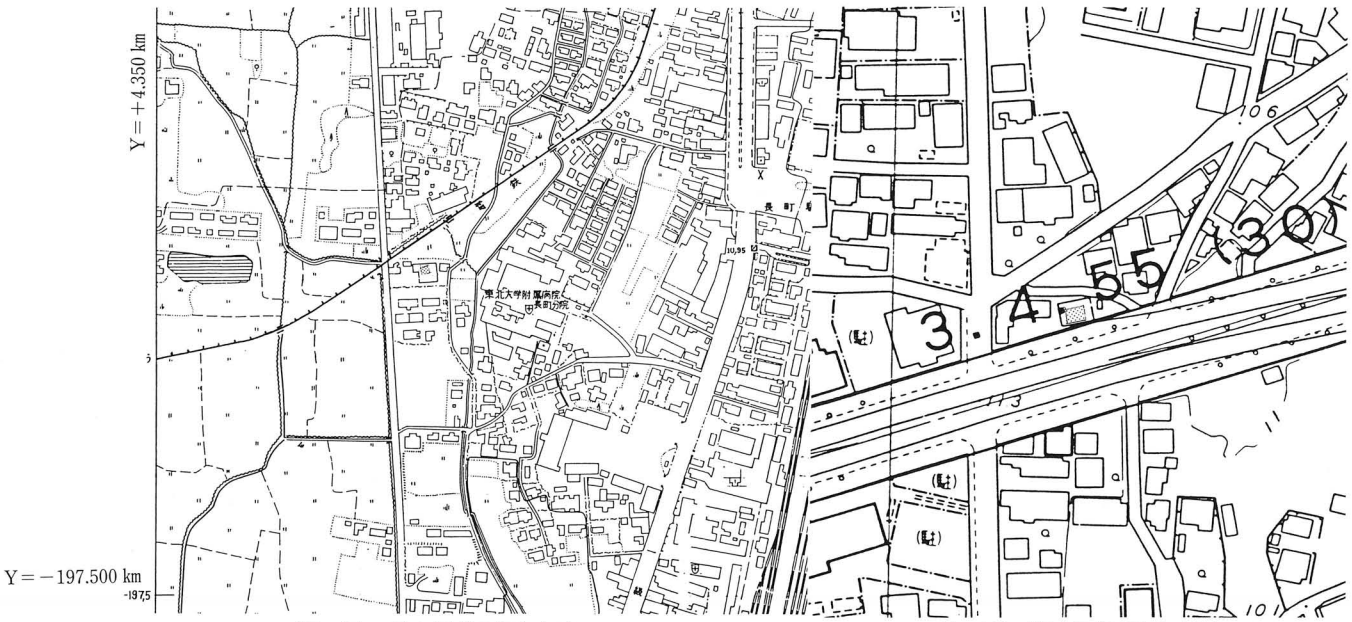
今回の調査対象面積は90㎡と狭いため2.5×５ｍの調査区を設定し、重機により掘り下げを行い断面観察を中心に行った。測量基準点は任意の２点Ｔ１（Ｘ＝－197241.979m、Ｙ＝＋4578.613m)、Ｔ２（Ｘ＝－197249.575m、Ｙ＝＋4554.727m）を用いている。

調査は８月１・２日に実施した。重機により盛土を１ｍ除去し、さらに旧表面から約２ｍ掘り下げた。安全性を考慮し現地表面から約３ｍの深さで調査を終了している。

３　基本層序

確認された層は大別で12層、細別で13層である。層序を大まかにみると１～４層がシルト質粘土層、５～９層が粘土層、10･11層が砂層、12層の泥炭質粘土層となる。12層以下は未確認である。11層以下からグライ化がはじまっているようである。

層の下面に下層を乱す凹凸がみられる。これは水田耕作土の一般的な特徴であることから水田層と考えられるのは、3a・４・６・８層である。



第１図　調査区位置図（１）

第２図　調査区位置図（２）

4　検出された遺構と遺物

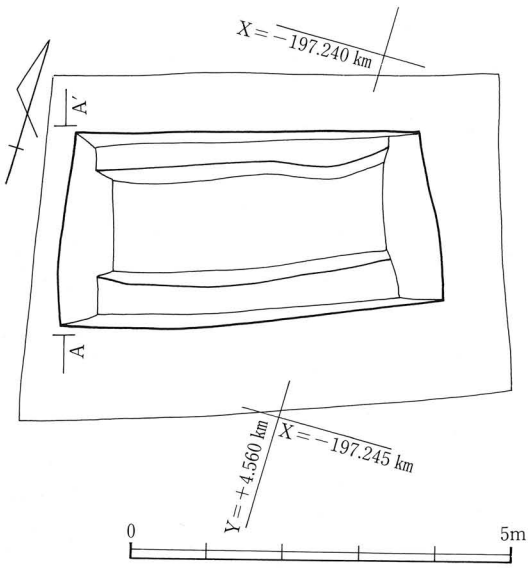
4 層上面で溝跡（SD）1 条検出した。

SD01（第 5 図）

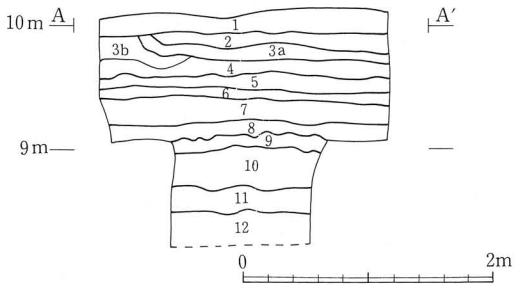
北壁、東壁の断面からの復元である。上端幅1.6m、下端幅0.3m、深さ110cmで、方向はN－81°－Wである。断面

第 1 表　基本層序注記表

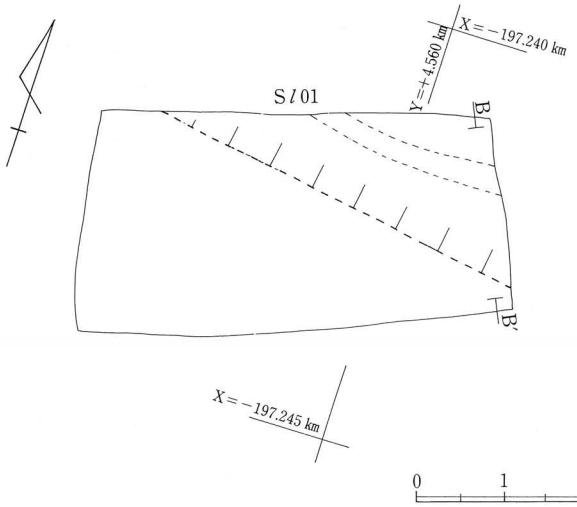
層序	土色	土性	粘性	しまり	備考
1 層	5Y3/1　オリーブ黒色	シルト質粘土			旧水田耕作土。
2	2.5GY4/1　暗オリーブ灰色	砂質シルト	あり	あり	下面に酸化鉄層。炭化物若干。
3a	10YR4/2　灰黄褐色	シルト質粘土	あり	あり	水田耕作土？マンガン比較的多量。
3b	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	あり	あり	マンガン比較的多量。畦畔部分？
4	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質粘土	あり	ややあり	水田耕作土？下面やや凹凸。
5	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	あり	あり	黒色、黄褐色の薄い層互層になる。
6	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土	あり	あり	水田耕作土？下面やや凹凸
7	10YR4/2　灰黄褐色 2.5Y6/3　にぶい黄色 2.5Y2/1　黒色	粘土 粘土 粘土			互層。
8	10YR5/1　褐灰色	粘土	あり	ややあり	水田耕作土？下面やや凹凸。
9	2.5Y5/3　黄褐色 2.5Y4/1　黄灰色	シルト質粘土 シルト質粘土			
10	2.5YG4/1　暗オリーブ灰色	細砂	ややあり	あり	
11	2.5GY4/1　暗オリーブ灰色	細砂			互層。薄い灰色土縞状。
12	10YR1.7/1　黒色 5Y5/2　灰オリーブ色	泥炭 粘土			互層

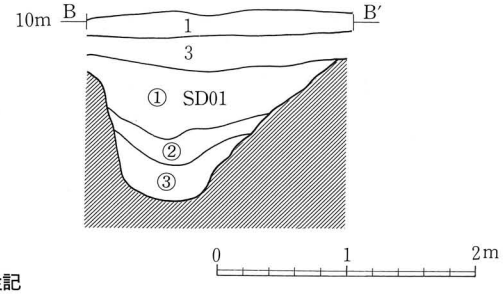


第 3 図　調査区全体図



第 4 図　基本層序断面図（西壁）





SD01 土層注記

①10YR4/2　灰色褐色粘土　粘性あり。しまりややあり。マンガン粒・酸化鉄含む。うすい黄褐色土を上部に含む。

②2.5GY4/1　暗オリーブ灰色シルト質粘土　粘性あり。しまりあり。

2.5Y3/2　黒褐色粘土　粘性あり。しまりなし。植物遺体多く含む。

③5GY4/1　暗緑灰色　シルト質粘土　粘性かなりあり。しまりかなりなく、かなり軟弱でべたつく。

第 5 図　SD01 平面・断面図

形はやや開いたＵ字形で堆積土は３層である。

5　遺構の所属年代とまとめ

（１）検出した遺構はSD01である。水田耕作土と考えられる層は、3a・４・６・８層である。

（２）周辺調査区との対比

今次調査区は15次のⅢＣ区の北側10ｍに位置する。15次Ⅲ区との層のおおまかな対比は以下のようである。

107次	15次Ⅲ区	107次	15次Ⅲ区
３ａ	２ｂ	８	８ａ・８ｂ
４	３ａ	９	９ａ～９ｃ
５	４	10	10
６	５・６	11	11ａ～11ｂ
７	７	12	12ａ～12ｆ

（３）SD01の確認面は15次調査での2b･3a層である。15次の2b･3a層は近世以降と考えられることから、SD01もほぼ同時期の可能性が高い。この溝跡は15・40次の中近世の溝跡と方向性を同じくしており、その関連性が考えられる。また、字切図との対応では字境（山根街道南と広岡）に位置することからそれに関連する水路の可能性も考えられる。

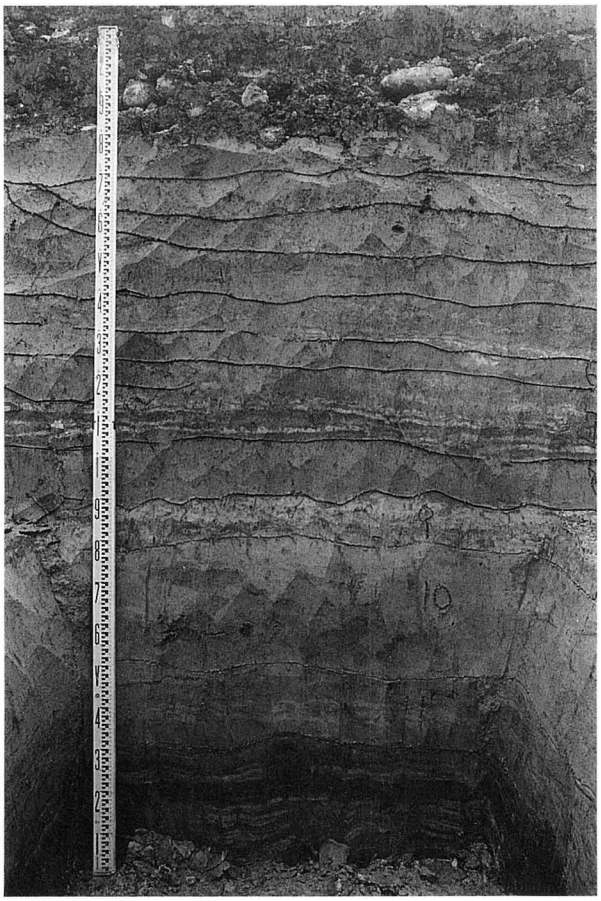


写真１　西壁断面

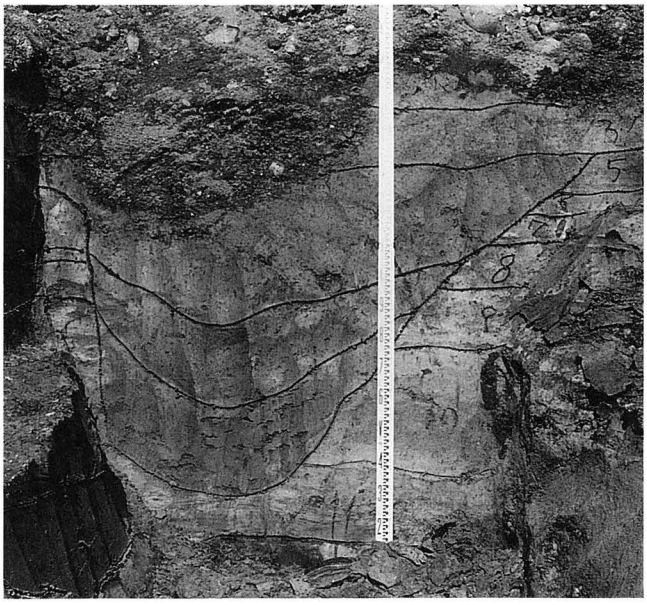


写真２　SD01東壁断面（西から）

第３章　分析・同定

株式会社 古環境研究所

第１節　富沢遺跡第95次，96次，97次，98次，99次調査の火山灰分析

１．はじめに

仙台市、富沢遺跡第95次，96次，97次，98次および99次発掘調査の際に発掘調査担当者により検出採取された試料について、屈折率の測定により示標テフラとの同定を行って、土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。

２．屈折率測定

（１）測定試料

試料は、いずれも発掘調査担当者により発見採取されたものであり、その内訳は、第95次調査の19層、第96次調査の27層、第97次調査の15層、第98次調査の14層および第99次調査の31層である。屈折率の測定は位相差法（新井、1972）による。

（２）測定結果

屈折率の測定結果を表１に示す。第95次調査の19層には、無色透明の軽石型火山ガラス（最大径1.5㎜）が多く含まれている。この火山ガラスの屈折率（ｎ）は、1.497-1.503である。重鉱物としてはごくわずかに斜方輝石や角閃石さらに黒雲母が含まれている。第96次調査の27層には、無色透明の軽石型火山ガラス（最大径0.2㎜）が多く含まれている。この火山ガラスの屈折率（ｎ）は、1.511-1.514である。重鉱物としてはごくわずかに斜方輝石が含まれている。第97次調査の15層には、無色透明の軽石型火山ガラス（最大径0.8㎜）が比較的多く含まれている。この火山ガラスの屈折率（ｎ）は、1.497-1.503である。重鉱物としてはごくわずかに角閃石が含まれている。第98次調査14層には、軽石型ガラスが比較的多く含まれている。火山ガラスの最大径は0.6㎜で、屈折率（ｎ）は1.500-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や角閃石がごく少量含まれている。斜方輝石（γ）と角閃石（n_2）の屈折率は、各々1.708-1.713と1.670-1.677である。この試料の中には、石英も比較的多く含まれている。第99次調査31層には、軽石型ガラスが少量含まれている。火山ガラスの最大径は0.3㎜で、第98次調査14層と比較するとより細粒である。その屈折率（ｎ）は1.498-1.504である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石がごく少量含まれている。斜方輝石（γ）の屈折率は、1.713±である。この試料の中には、石英が少量含まれている。含まれる軽石型ガラスの形状や屈折率、斜方輝石の屈折率、石英が含まれていることなどにおいて、第98次調査の14層と第99次調査の31層の間に似た傾向が伺えるが、前者の火山ガラスの粒径がが大きいことやごくわずかながら角閃石が含まれている点では違いも認められる。

３．考察－示標テフラとの同定

第95次調査の19層がテフラであるとすると、火山ガラスの色調や形態さらに屈折率など、915年に十和田火山から噴出したと考えられている十和田ａ火山灰（To-a，町田ほか，1981）に同定される可能性が最も大きい。

第96次調査の27層に含まれる火山ガラスの特徴は、約5,500年前に十和田火山から噴出した十和田中掫テフラ（To-Cu，大池ほか，1966，早川，1983，町田・新井，1992）の特徴と一致する。したがって、27層がテフラとすると、To-Cuに同定される可能性が非常に大きい。なおTo-Cuは現在のところ福島県吾妻山以北の東北地方一帯で検出されており、縄文時代の良い指標となっている（早田・八木，1991）。

第97次調査の15層がテフラとすると、火山ガラスの色調や形態さらに屈折率などから、十和田a火山灰（前出）に同定される可能性が最も大きい。

第98次調査14層に含まれるテフラ粒子は、火山ガラスの色調、形態、屈折率、角閃石が含まれること、さらに石英が比較的多く含まれていることなどから、従来仙台市域とその周辺で知られているテフラの中では、約5,000年前に福島県会津地方の沼沢沼火山から噴出した沼沢テフラ（Nm-1，只見川第四紀研究グループ，1966a，b）の特徴とほぼ同一である。ただし斜方輝石の屈折率（γ）は、Nm-1のそれ（1.706-1.708；町田・新井，1992）と比較すると若干高い。なお火山ガラスが比較的粗粒なことから、これらのテフラ試料が基盤の凝灰岩に由来している可能性も完全に否定はできない。

第99次調査31層に含まれるテフラ粒子のうち、火山ガラスさらに石英については、Nm-1に由来する可能性も若干考えられる。ただ今回の分析測定では、分析者は現地の土層断面を観察記載する機会を得ることができず、試料の産状に関する資料を多く持ち合わせていない。したがって、試料中のテフラが一次堆積層か否かについての判断は難しく、複数のテフラに由来するテフラ粒子が混在している可能性についても言及できない。

4．まとめ

富沢遺跡第95次，96次，97次，98次および99次調査の際に検出された火山灰層について、屈折率測定を行った。その結果、第95次調査の19層と第97次調査の15層については、どちらも十和田a火山灰（To-a，915年）に同定される可能性が最も高いことが明らかになった。また、第96次調査の27層のテフラについては、十和田中掫テフラ（To-Cu，約5,500年前）によく似ていることが明らかになり、同テフラに同定される可能性の最も高いことが明らかになった。第98次調査の14層と第99次調査の31層については、沼沢沼火山から噴出した沼沢テフラ（Nm-1，約5,000年前）に由来するテフラ粒子の混入している可能性が考えられた。

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

早川由紀夫（1983）十和田火山中掫テフラ層の分布，粒度組成，年代．火山，第2集，28，p.263-273.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

町田　洋・新井房夫（1991）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

大池昭二・中川久夫・七崎　修・松山　力・米倉伸之（1966）馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰．第四紀研究，5，p.29-35.

早田　勉・八木浩司（1991）東北地方の第四紀テフラ研究．第四紀研究，30，p.369-378.

只見川第四紀研究グループ（1966a）福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の^{14}C年代－日本の第四紀層の^{14}C年代ＸＸＶＩ－．地球化学，82，p.8-9.

只見川第四紀研究グループ（1966b）只見川・阿賀野川流域の第四紀編年－とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について．第四紀，8，p.76-79.

表1　富沢遺跡第95次，96次，97次，98次，99次調査の屈折率測定結果

調査，試料	火山ガラス					重鉱物	
	量	形態	色調	最大径	屈折率（n）	組成	屈折率
95次，19層		pm	cl,tr	1.5	1.497-1.503	(opx,ho,bi)	
96次，27層		pm	cl,tr	0.2	1.511-1.514	(opx)	
97次，15層		pm	cl,tr	0.8	1.497-1.503	(ho)	
98次，14層	＋＋	pm	tr		1.500-1.505	(opx,ho)	opx:1.708－1.713 ho:1.670－1.677
99次，31層	＋	pm	tr		1.498-1.504	(opx＞cpx)	opx:1.713±

＋＋：中程度，＋：少ない．pm：軽石型，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，bi：黒雲母．cl：無色，tr：透明．重鉱物組成の（）は量の少ないことを示す．屈折率の測定は，位相差法（新井，1972）による．

第2節　富沢遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

1．試料と方法

No.	試　料	試料の種類	前処理・調整	測定法
1	95次12層下部	樹　木	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン処理	β－線計数法
2	95次17層	樹　木	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン処理	β－線計数法
3	95次23層	樹　木	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン処理	β－線計数法 長時間測定
4	99次35層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン処理	β－線計数法 長時間測定
5	99次36層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン処理	β－線計数法 長時間測定

2．測定結果

試料名	^{14}C年代 (年 BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年 BP)	暦年代	測定No. Beta-
No. 1	4220± 60	-28.4	4170± 60	交点 BC 2865,2805,2750,2720,2705 2 σ BC 2900 TO 2575 1 σ BC 2880 TO 2610	100671
No. 2	5010± 80	-29.3	4940± 80	交点 BC 3705 2 σ BC 3945 TO 3625,BC 3565 TO 3540 1 σ BC 3790 TO 3650	100672
No. 3	7830± 70	-28.3	7780± 70	交点 BC 6560 2 σ BC 6705 TO 6440 1 σ BC 6615 TO 6475	100673
No. 4	8530± 60	-25.5	8530± 60	交点 BC 7535 2 σ BC 7595 TO 7470 1 σ BC 7560 TO 7505	103022
No. 5	8740±110	-25.7	8730±110	交点 BC 7855,7830,7710 2 σ BC 8000 TO 7525 1 σ BC 7940 TO 7575	103023

（2 σ：95% probability，1 σ：68% probability）

1）１４Ｃ年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年 AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。ただし、この補正は10,000年 BP より古い試料には適用できない。

※本試料の測定は、米国の Beta Analytic 社において行われた。

第３節　富沢遺跡第95次，96次，97次，98次，99次調査のプラント・オパール分析

１．はじめに

富沢遺跡第95次，96次，97次，98次，99次調査では、発掘調査において水田遺構（畦畔）が検出された（98次，99次）。また、土層断面の観察から耕作跡とみられる土層も複数認められた。そこで、検出された遺構における稲作の検証およびその他の層における稲作跡の探査を目的に、プラント・オパール分析を行うことになった。

２．試料

分析試料は、第95次調査では、調査区東壁の上位より２層，３層，4a 層，4b 層，5a 層，5b 層，６層，8b 層，8c 層，9a 層，9c 層，10層，11層，12層の計14点、第96次調査では、調査区南壁の上位より２層，3a 層，3b 層，４層，６層，８層，９層，10層，11層，12層の計10点、第97次調査では、Ａ地点の上位より２層，４層，5b 層，６層，7a 層，８層，９層の７点、Ｂ地点の上位より６層，7b 層，８層の３点、Ｃ地点の上位より６層，7a 層，８層の３点、Ｄ地点の上位より5a 層，7a 層，7b 層，８層の４点、Ｅ地点の上位より5a 層，7a 層，SX1 のｌ１層，９層の４点の計21点、第98次調査では、上位より２層，３層，４層，５層，６層，７層，８層，9a 層，9b 層の９点、第99次調査では、Ｉ区西壁の上位より２層，３層，5a 層，7a 層，８層，10a 層，12層，14層，16層の９点、Ｉ区東壁の14層の１点、III区北壁の上位より３層，５層，７層，８層，10a 層，10b 層，12層，13層，14層，15層の10点の計20点である。

３．分析方法

分析は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料土を絶乾（105℃・24時間）後、仮比重を測定する。２）試料約１ｇを秤量後、ガラスビーズ（直径約40μm・約0.02ｇ）を添加する。３）電気炉灰化法により有機物を焼却する。４）試料に超音波（300W・42KHz）を10分間照射し粒子を分散する。５）沈底法により微粒子（20μm 以下）を除去後、乾燥する。６）封入剤（オイキット）中に分散し、プレパラートを作成する。

検鏡は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10－５ｇ）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米(2.94，種実重は1.03)、キビ族はヒエ(8.40)、ヨシ属はヨシ(6.31)、ウシクサ族はススキ(1.24)、タケ亜科については数種の平均値（0.48）を用いた（杉山・藤原，1987）。

４．分析結果

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科、さらにシバ属、ジュズダマ属のプラント・オパールが検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１～５、図１～10に示した。なお、主な分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。

５．稲作の可能性について

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、仙台平野ではイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ3,000

個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくても稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。これらのことを基準として以下、稲作の可能性について検討を行う。

（1）第95次調査：上位より2層～6層と9c層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、2層，3層，4a層，4b層では、プラント・オパール密度が3,000個/g以上と高い値であることから、耕作層である可能性が高いと考えられる。

（2）第96次調査：上位より2層～6層，9層，10層，11層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これら各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、2層，4層，10層では、プラント・オパール密度が3,000個/g以上と高い値であり、それぞれピークが認められることから、耕作層である可能性が高いと考えられる。

（3）第97次調査：A地点の2層～5b層，7a層，8層、B地点の6層と7b層、C地点の7a層、D地点の5a層と7a層、E地点の5a層と7a層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これら各層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、A地点の2層と4層および7a層、B地点の6層と7b層、C地点の7a層、D地点の5a層と7a層、E地点の5a層では、プラント・オパール密度が3,000個/g以上と高い値であり、それぞれピークが認められることから、いずれも耕作層である可能性が高いと考えられる。

（4）第98次調査：2層，3層，4層，6層，7層，8層，9a層，9b層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これら各層において稲作が行われていた可能性が考えられる。とくに2層，3層，4層では、プラント・オパール密度が10,000個/g前後と非常に高い値であることから、いずれも耕作層と判断される。また8層でも密度が3,000個/g以上であり、ピークが認められることから、耕作層である可能性が高いと考えられる。

（5）第99次調査：I区西壁の2層～12層、同東壁の14層、III区北壁の3層～10a層，12層，13層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これら各層が耕作層であった可能性が考えられる。このうち、I区西壁の2層では、プラント・オパール密度が30,000個/g弱と非常に高い値であることから耕作層と判断される。また、同3層，7a層、III区北壁の3層，7層，8層，12層では密度が3,000個/g以上であり、ピークも認められることから、耕作層である可能性が高いと考えられる。

6．まとめ

富沢遺跡第95次，96次，97次，98次，99次調査についてプラント・オパール分析を行った。その結果、検出された水田遺構（98次調査の2層と3層、99次調査の3層，5a層，7層，7a層，8層，12層，14層）からはそれぞれイネのプラント・オパールが検出されたことから、各遺構において稲作が行われていたことが分析的に確認された。なお、これら以外では、95次調査の2層，3層，4a層，4b層、96次調査の2層，4層，10層、97次調査A地点の2層，4層，7a層、B地点の6層，7b層、C地点の7a層、D地点の5a層，7a層、E地点の5a層，7a層、98次調査の4層と8層、99次調査の2層と3層についても稲作跡である可能性が高いと判断された。

文献

杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告，10，p.281-298.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativa L.）生産総量の推定－．考古学と自然科学，12，p29-41．

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p73-85．

表1　富沢遺跡第95次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群／試料	東壁													
	2	3	4a	4b	5a	5b	6	8b	8c	9a	9c	10	11	12
イネ	60	84	42	74	13	12	14				7			
キビ族（ヒエ属など）														
ヨシ属	20	6	14		13		92		22	26	21	28	20	11
ウシクサ族（ススキ属など）	20	22	28	13			35	14	22	13	21	7	20	6
タケ亜科（おもにネザサ節）	245	186	163	216	155	242	226	229	140	85	113	219	127	61

指定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	1.76	2.48	1.25	2.18	0.40	0.36	0.42				0.21			
（イネ籾）	0.62	0.87	0.44	0.76	0.14	0.15				0.07				
キビ属（ヒエ属など）														
ヨシ属	1.26	0.35	0.89		0.85		5.80		1.39	1.64	1.33	1.78	1.27	0.70
ウシクサ族（ススキ属など）	0.25	0.28	0.35	0.17			0.44	0.17	0.27	0.16	0.26	0.09	0.25	0.07
タケ亜科（おもにネザサ節）	1.18	0.89	0.78	1.04	0.74	1.16	1.09	1.10	0.67	0.41	0.54	1.05	0.61	0.29

表2　富沢遺跡第96次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群／試料	南壁									
	2	3a	3b	4	6	8	9	10	11	12
イネ	42	14	14	58	27		13	42	14	
キビ族（ヒエ属など）										
ヨシ属			7	22	7		13	14	14	21
ウシクサ族（ススキ属など）	12					6				
タケ亜科（おもにネザサ節）	89	69	41	22	20	26	39	21	42	42

指定生産量（単位：kg／m²）

イネ	1.22	0.41	0.40	1.72	0.80		0.38	1.23	0.41	
（イネ籾）	0.43	0.14	0.14	0.60	0.28		0.13	0.43	0.14	
キビ族（ヒエ属など）										
ヨシ属			0.43	1.38	0.43		0.82	0.88	0.88	1.33
ウシクサ族（ススキ属など）	0.15					0.08				
タケ亜科（おもにネザサ節）	0.43	0.33	0.20	0.11	0.10	0.12	0.19	0.10	0.20	0.20

表3　富沢遺跡第97次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群／試料	A地点							B地点			C地点			D地点				E地点			
	2	4	5b	6	7a	8	9	6	7b	8	6	7a	8	5a	7a	7b	8	5a	7a	SX1,11	9
イネ	61	72	26		31	6		29	36			48		40	33			39	27		
キビ続（ヒエ属など）																					
ヨシ属	20	20	13	55	38	114	34	29	71	54	90	68	26	33	45	27	7	67	46	20	
ウシクサ族（ススキ属など）	27	26	13		6		55	14	15			18	6	13		26		7	7		7
タケ亜科（おもにネザサ節）	88	72	90	42	81	96	55	50	117	52	30	84	12	79	59	90	89	151	113	46	46

指定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	1.78	2.13	0.75		0.92	0.18		0.84	1.07			1.41		1.16	0.97			2.02	0.78		
（イネ籾）	0.62	0.75	0.26		0.32	0.06		0.29	0.38			0.49		0.41	0.34			0.71	0.27		
キビ族（ヒエ属など）																					
ヨシ族	1.27	1.25	0.81	3.49	2.37	7.21	2.16	1.84	4.51	3.38	5.67	4.31	1.66	2.08	2.85	1.72	0.43	4.21	2.92	1.24	
ウシクサ族（ススキ属など）	0.33	0.33	0.16		0.08		0.68	0.18	0.18			0.22	0.08	0.16		0.32		0.09	0.08		0.08
タケ亜科（おもにネザサ節）	0.42	0.35	0.43	0.20	0.39	0.46	0.26	0.24	0.56	0.25	0.14	0.40	0.06	0.38	0.29	0.43	0.43	0.73	0.54	0.22	0.22

表4　富沢遺跡第98次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群／試料	2	3	4	5	6	7	8	9a	9b
イネ	153	99	103		7	14	32	22	13
キビ族（ヒエ属など）					7				
ヨシ属		7	7	41	309	85	139	65	95
ウシクサ族（ススキ属など）		7	7						6
シバ属	7	7	7						
タケ亜科（おもにネザサ節）	118	73	76	27	35	21	63	29	44

指定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	4.50	2.92	3.03		0.21	0.42	0.93	0.64	0.37
（イネ籾）	1.57	1.02	1.06		0.07	0.15	0.33	0.22	0.13
キビ族（ヒエ属など）					0.59				
ヨシ属		0.42	0.43	2.56	19.52	5.34	8.78	4.13	5.97
ウシクサ族（ススキ属など）		0.08	0.09						0.08
タケ亜科（おもにネザサ節）	0.57	0.35	0.36	0.13	0.17	0.10	0.30	0.14	0.21

表5　富沢遺跡第99次調査のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群／試料	Ⅰ区西壁									Ⅰ区東壁	Ⅲ区北壁									
	2	3	5a	7a	8	10a	12	14	16	14	3	5a	7	8	10a	10b	12	13	14	15
イネ	290	38	20	85	14	26	21			13	45	25	72	49	7		60	6		
キビ続（ヒエ属など）																				
ヨシ属	27	13	7	33	191	26	7	177	122	69	6	12	39	21	13	993	226	102	136	321
ウシクサ族（ススキ属など）	7		7	7	14								6	14	7				7	
ジュズダマ属																			7	
タケ亜科（おもにネザサ節）	149	82	93	92	68	117	84	59	86	76	58	80	39	91	101	149	80	38	61	41

指定生産量（単位：kg／m²・cm）

イネ	8.53	1.11	0.59	2.51	0.40	0.77	0.61			0.37	1.32	0.73	2.13	1.44	0.20		1.76	0.19		
（イネ籾）	2.99	0.39	0.21	0.88	0.14	0.27	0.22			0.13	0.46	0.25	0.74	0.50	0.07		0.62	0.07		
キビ族（ヒエ属など）																				
ヨシ族	1.70	0.80	0.42	2.07	12.03	1.64	0.44	11.15	7.68	4.37	0.40	0.78	2.46	1.32	0.85	62.63	14.29	6.44	8.58	20.23
ウシクサ族（ススキ属など）	0.08		0.08	0.08	0.17								0.07	0.17	0.08				0.08	
タケ亜科（おもにネザサ節）	0.71	0.39	0.45	0.44	0.33	0.56	0.40	0.28	0.41	0.36	0.28	0.39	0.19	0.44	0.49	0.71	0.38	0.18	0.29	0.20

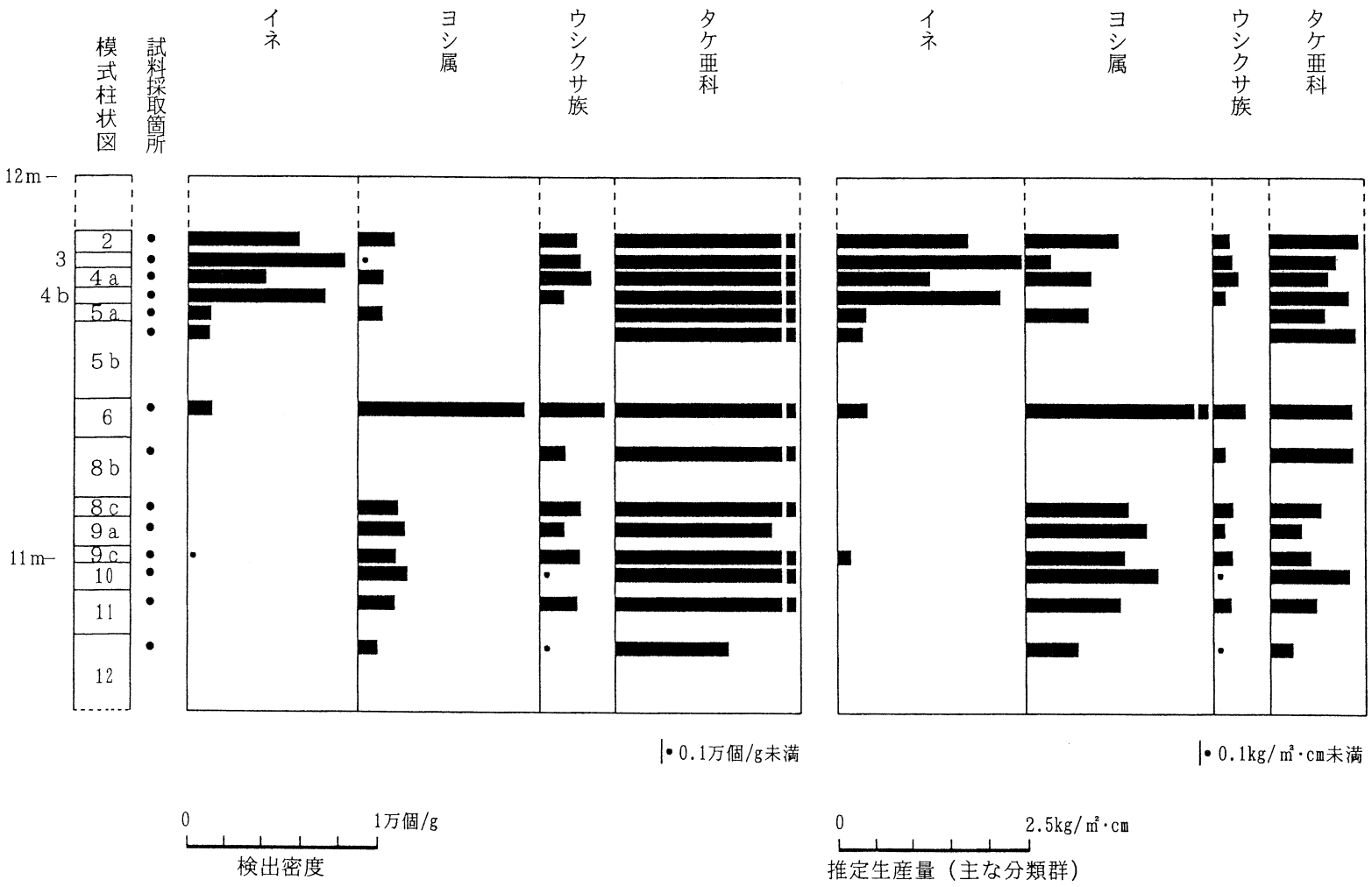


図1　95次，東壁のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

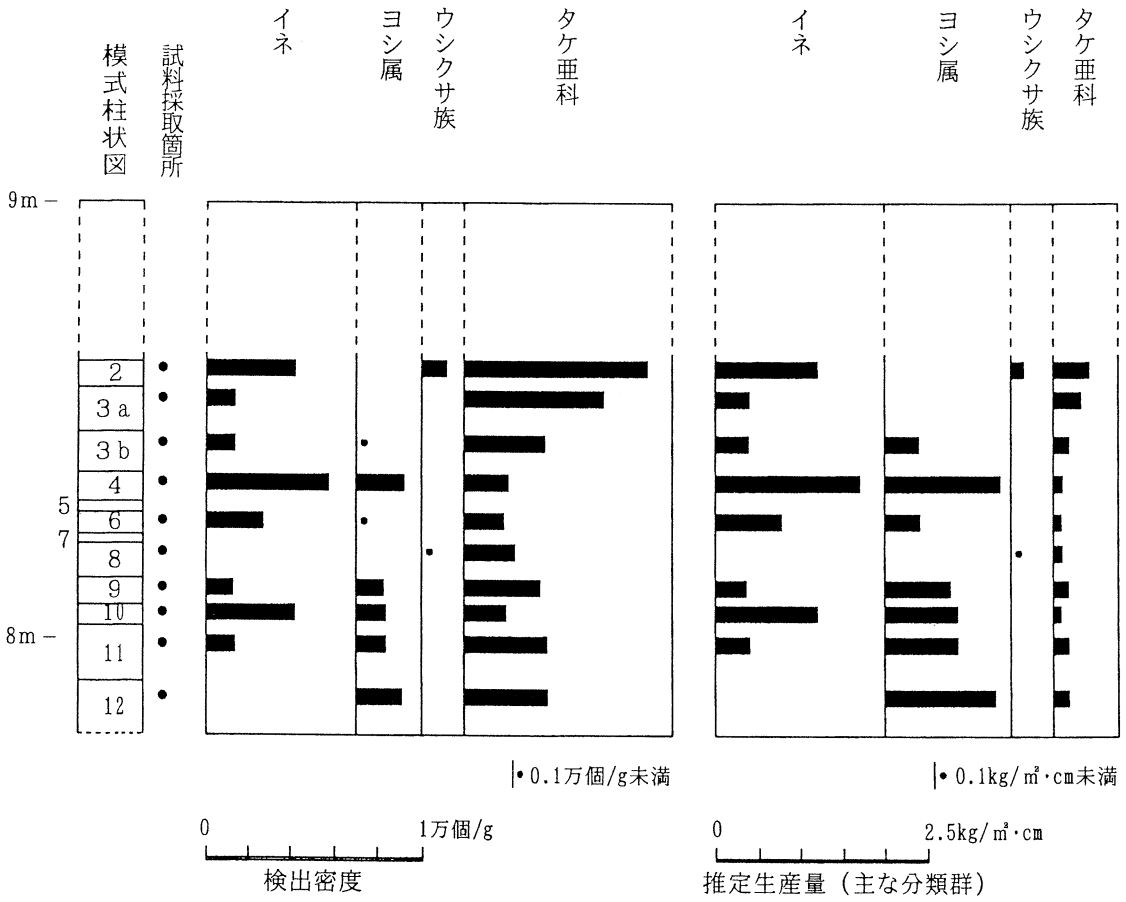


図2　96次，南壁のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

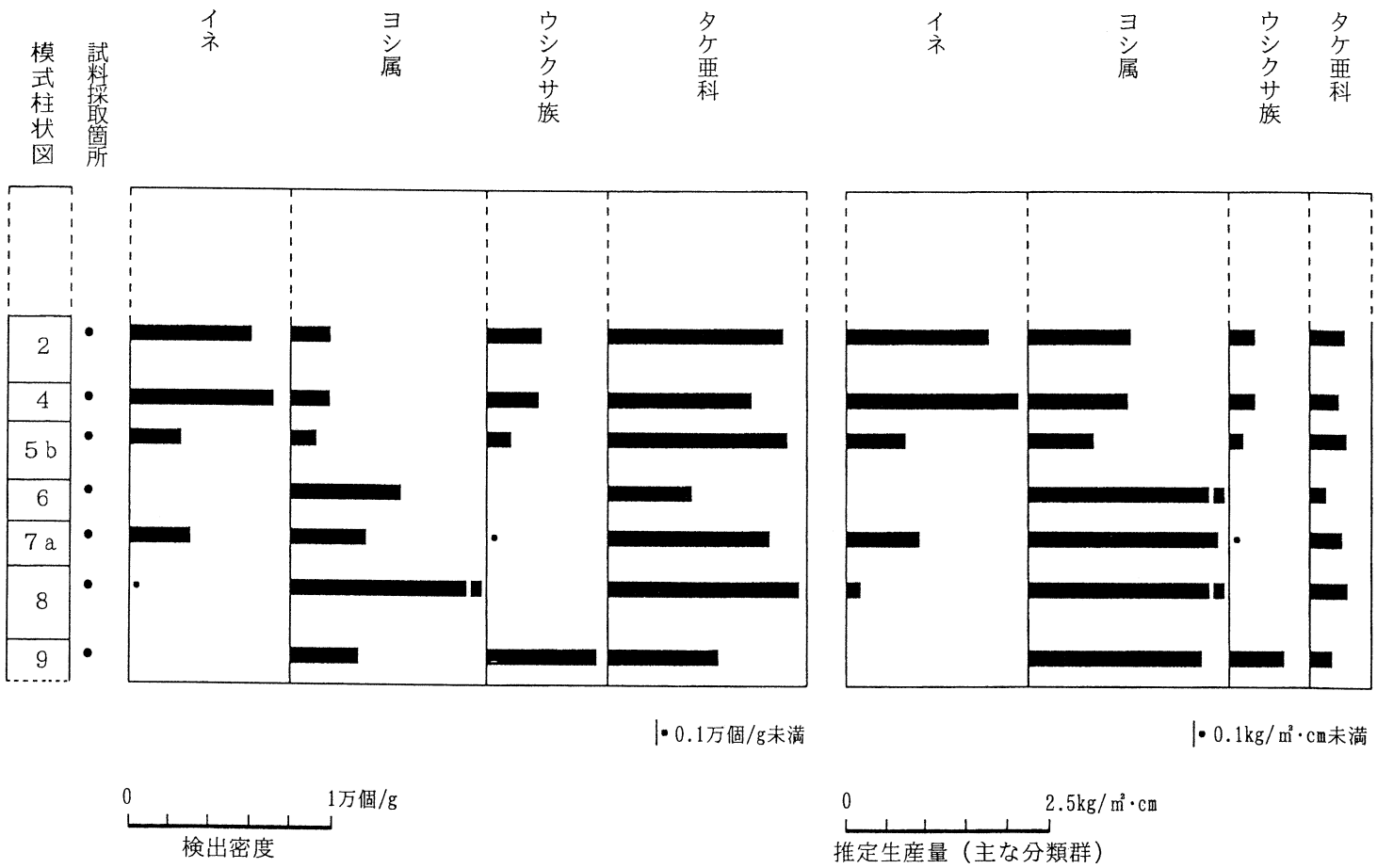


図3　97次，A地点のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

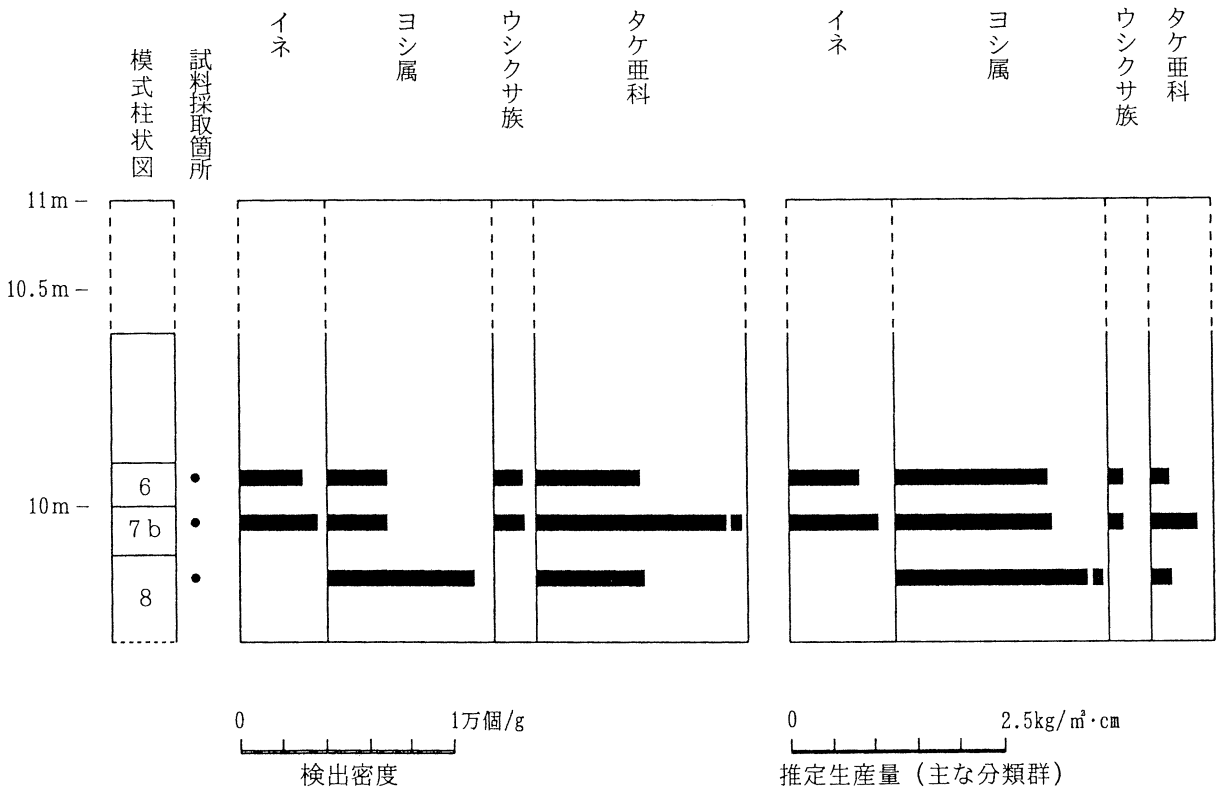


図4　97次，B地点のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

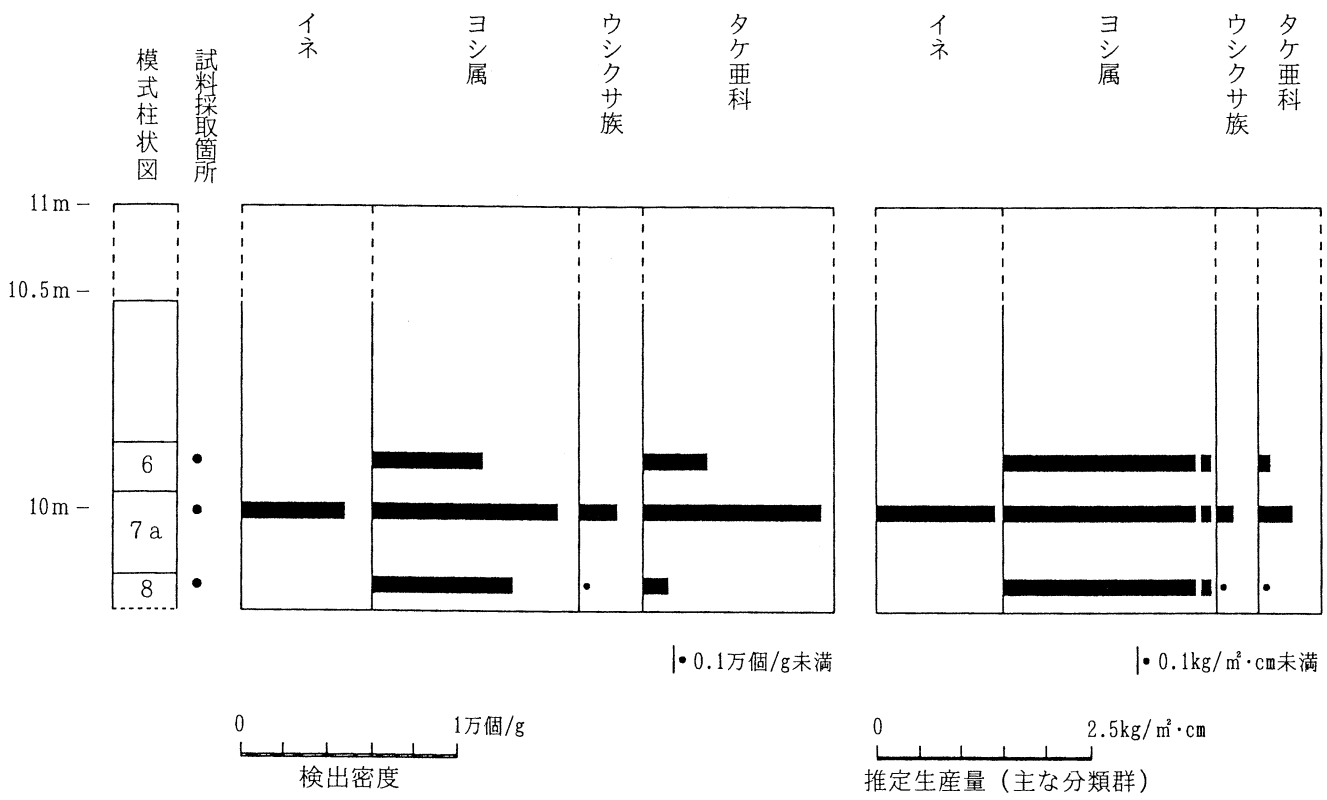


図5　97次，C地点のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

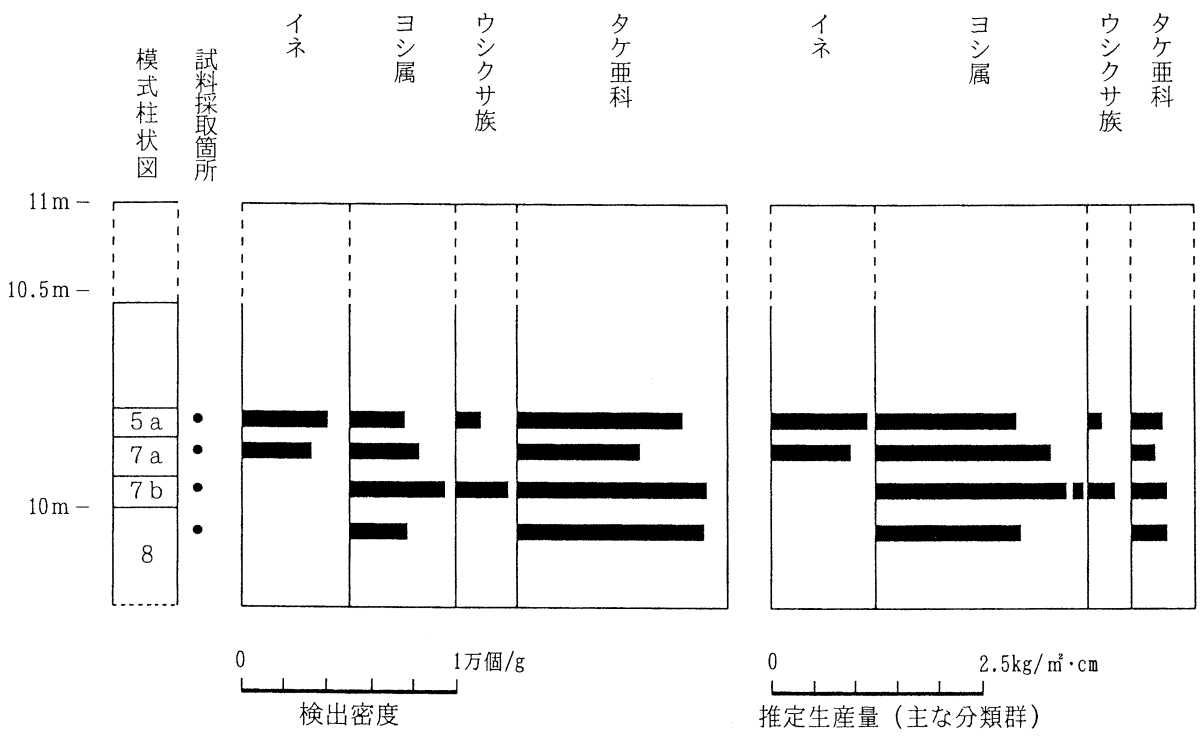


図6　97次，D地点のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

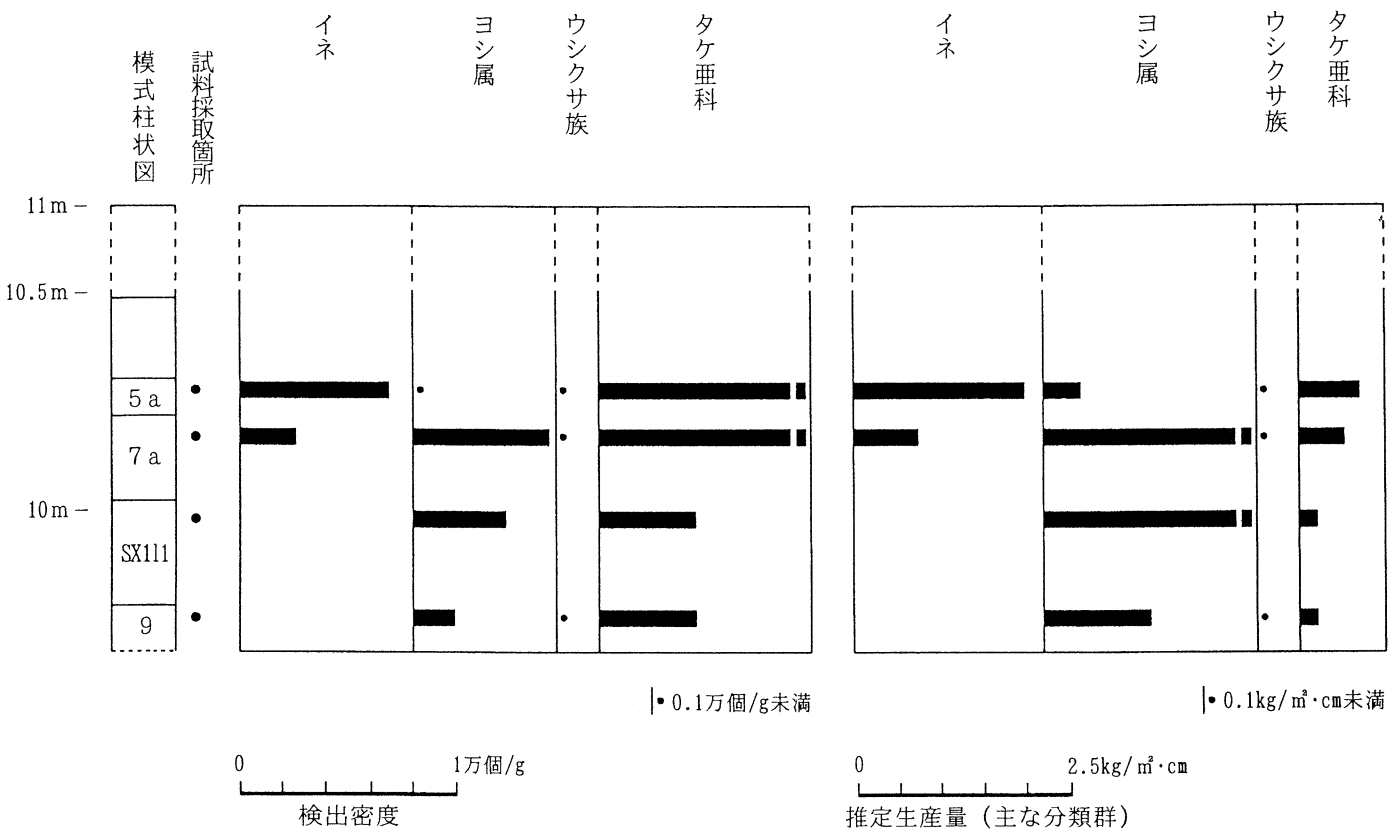


図7　97次，E地点のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

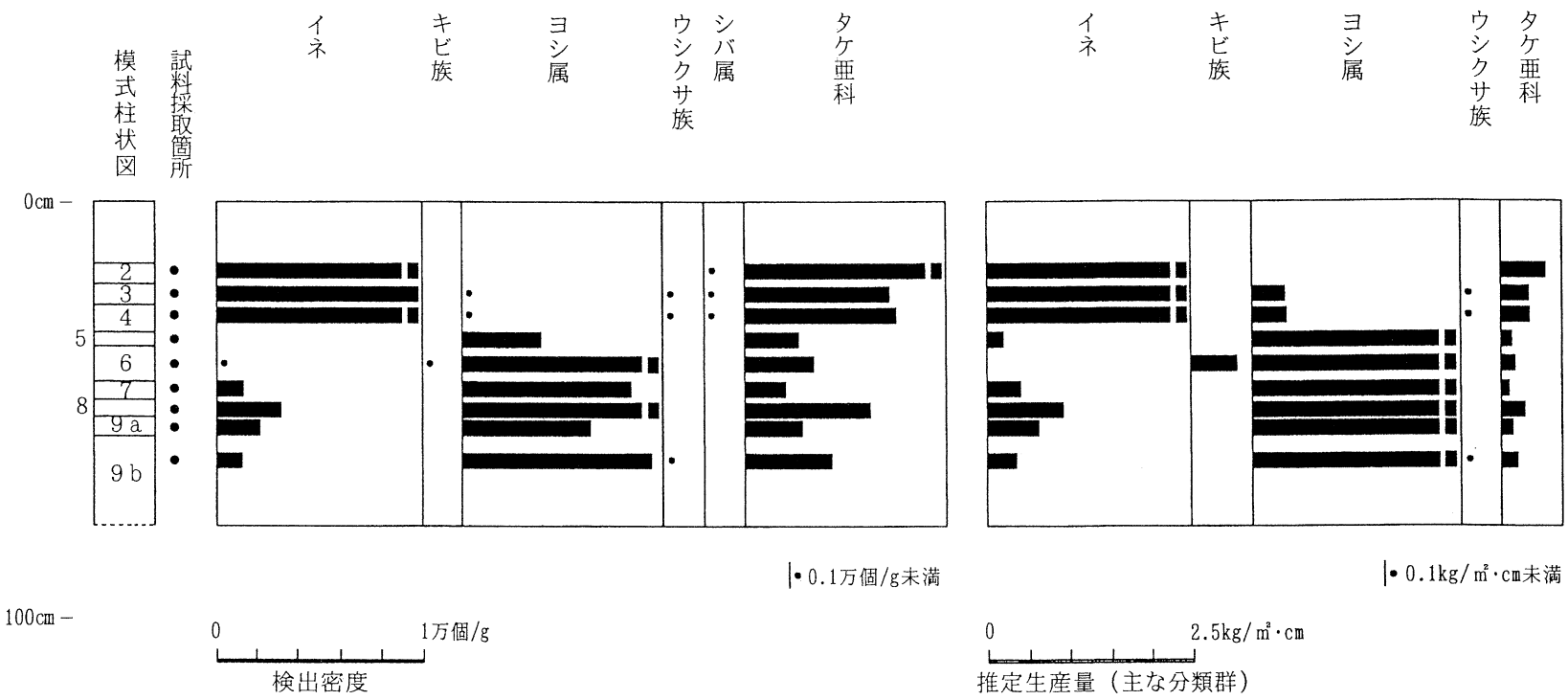


図8　98次調査のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

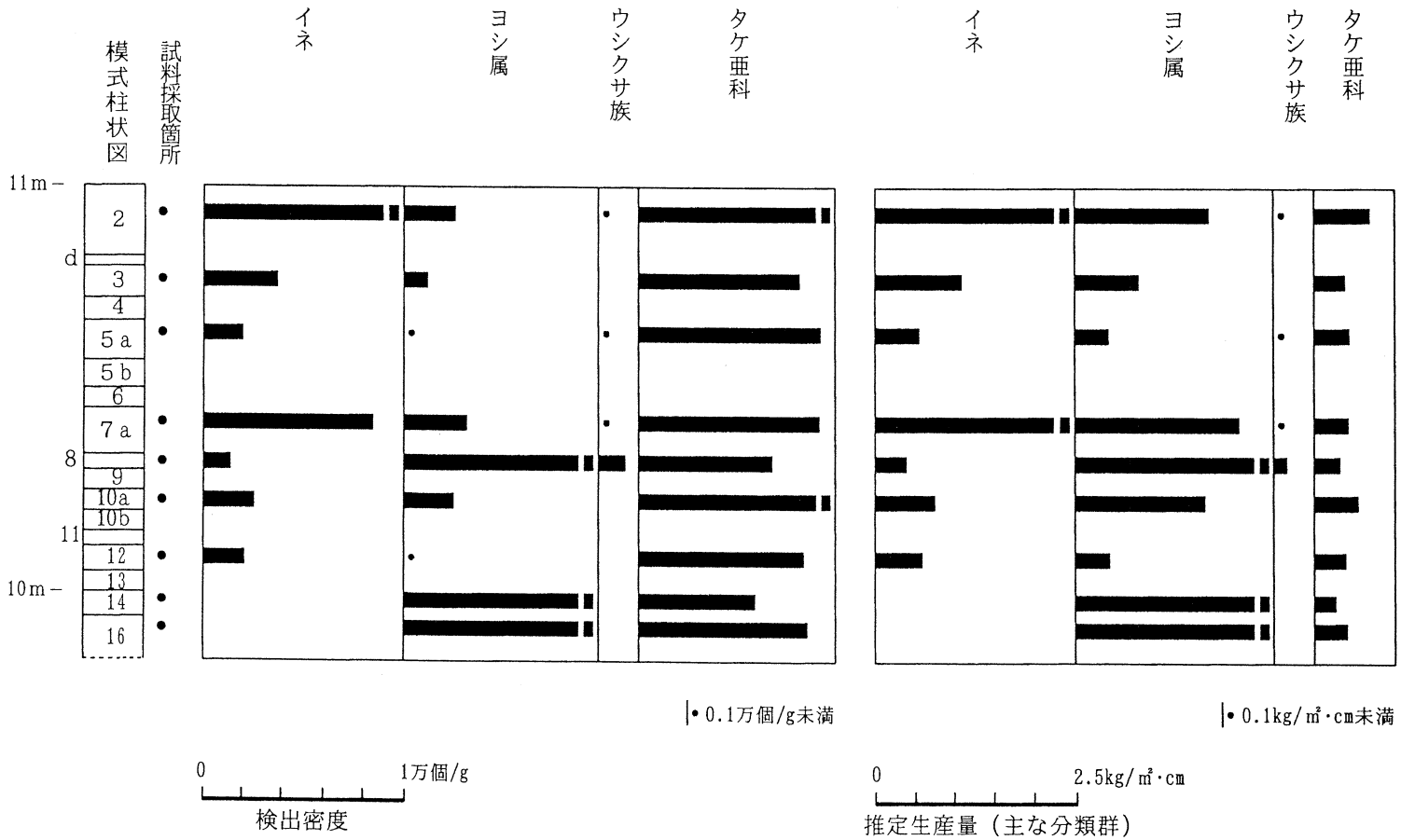


図9　99次，Ⅰ区西壁のプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示。

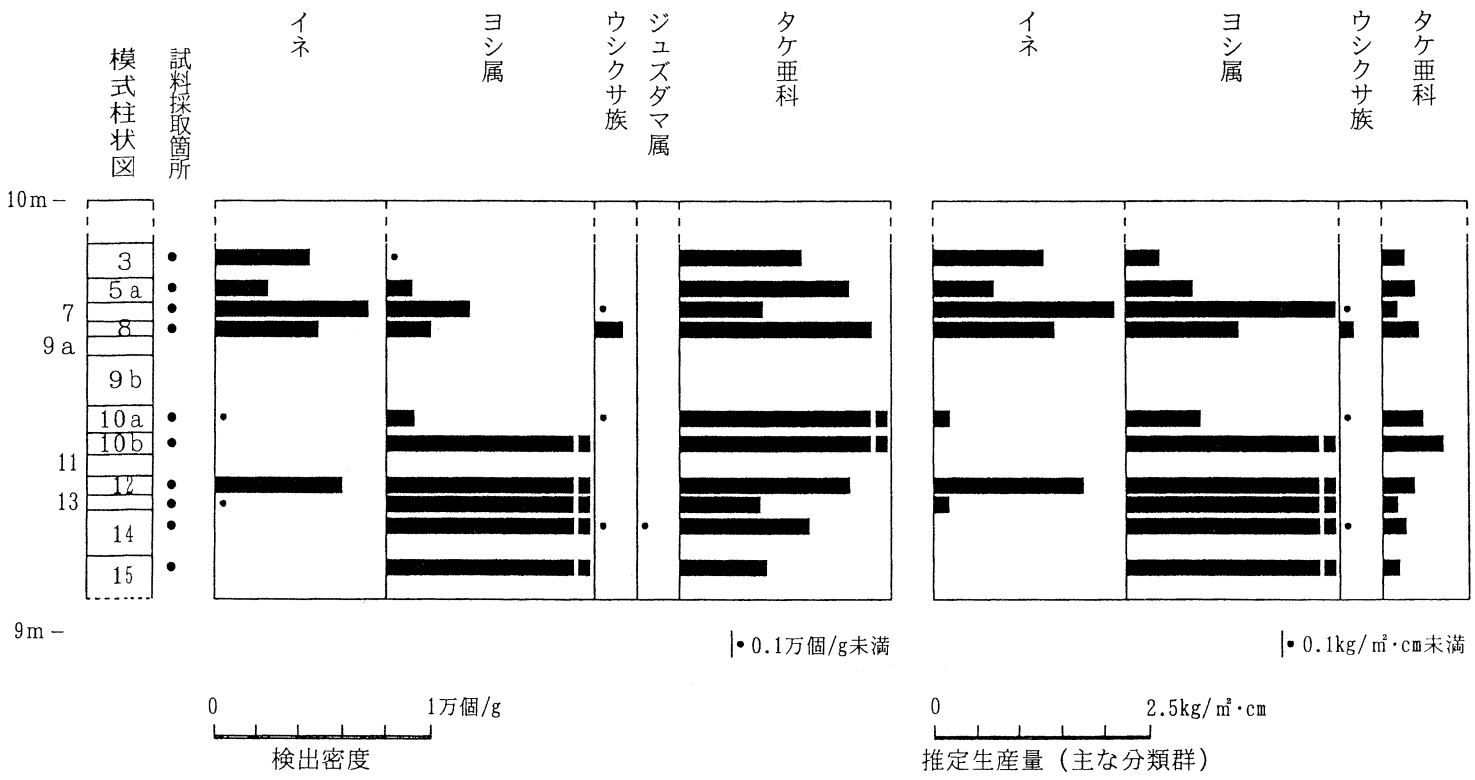
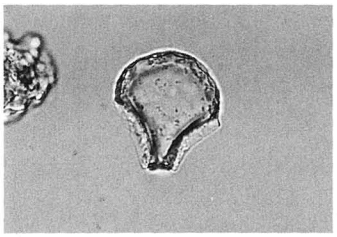
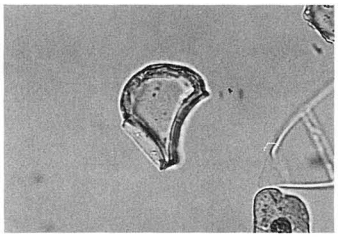
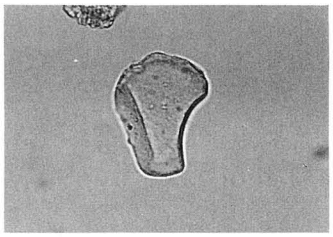


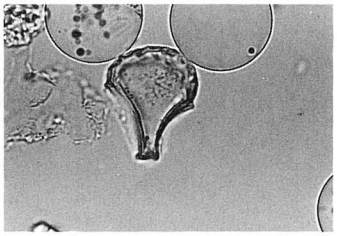
図10　99次，III区北壁のプラント・オパール分析結果

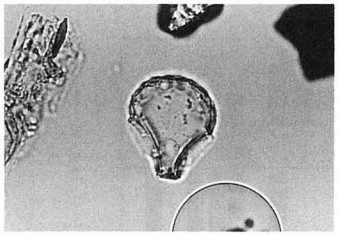
※主な分類群について表示。

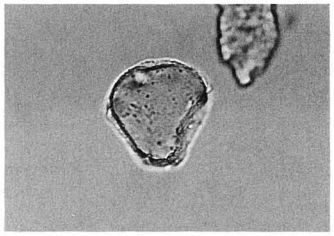

1

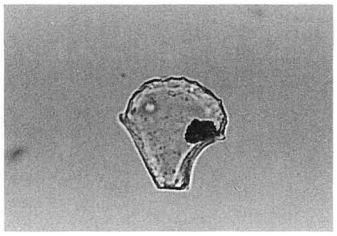

4

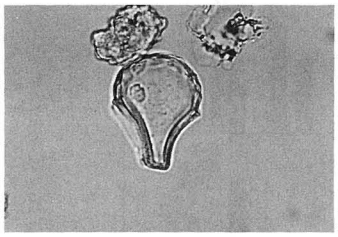

7

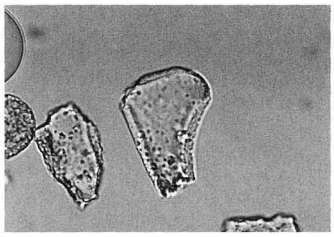

2

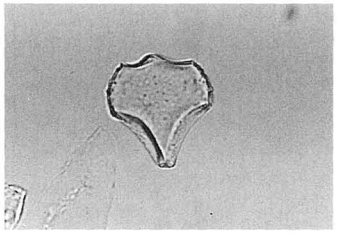

5

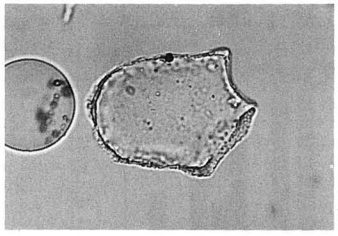

8

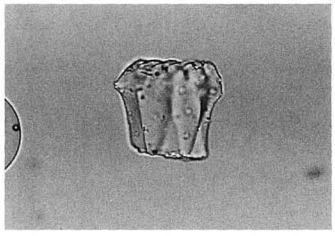

3

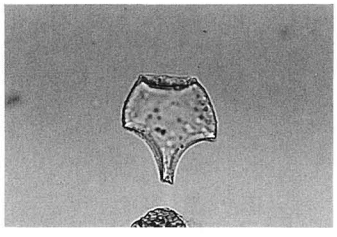

6

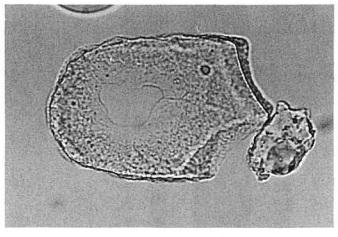

9

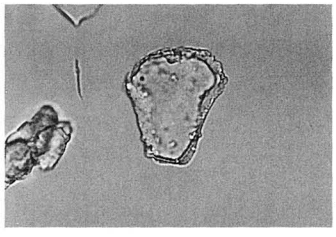

10

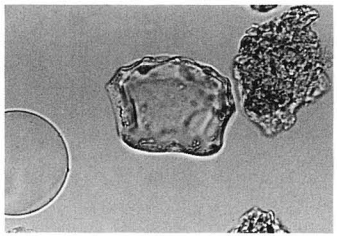

13

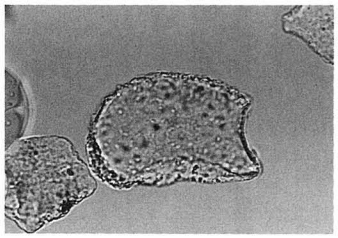

16

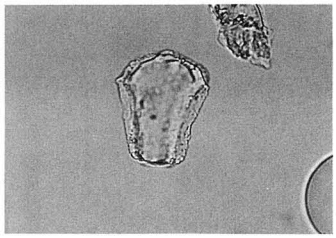

11


14


17


12


15


18

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

No.	分類群	地点	試料名	No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	95次，東壁	4b層	10	シバ族	98次	2層
2	イネ	96次，南壁	10層	11	シバ族	98次	3層
3	イネ	97次，A地点	4層	12	ジュズダマ属	99次，III区北壁	14層
4	イネ	97次，C地点	7a層	13	ヨシ族	95次，東壁	6層
5	イネ	98次	4層	14	ヨシ族	97次，A地点	8層
6	イネ	99次，III区北壁	12層	15	ヨシ族	99次，III区北壁	10b層
7	ウシクサ族（ススキ属）	95次，東壁	6層	16	タケ亜科	95次，東壁	8b層
8	ウシクサ族（ススキ属）	97次，A地点	9層	17	タケ亜科	97次，E地点	7a層
9	ウシクサ族（ススキ属）	97次，D地点	7b層	18	タケ亜科	99次，III区北壁	10b層

遺物集計表、引用・参考文献

富沢95次出土遺物集計表

層	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	不明土器	陶器	磁器	石器	礫	種子
1						2	4	1			
2			2		1			1			
3							1				
4			2								
5		1	1			1					
6		15				12					
7	1										
12	2								1		8
15	2										
16										1	
18									1		
SD01			1	1							1
SD08						1					
河川跡									2		1
計	5	16	6	1	1	16	5	2	4	1	10

富沢96・97次出土置場集計表

層	土師器	須恵器	不明	陶器	磁器	古銭
2	2	2	2	2	2	1
3				2	2	
計	2	2	2	4	4	1

層	縄文土器	弥生土器	土師器	須恵器	不明	陶器	磁器	石器	石製品	礫石器	金属	杭
1			2				2					
2			7	1	2	2			1	1	1	1
3			1									
4		1	6	1								
5			18	1								
6			1					1				
7a		1							1	3		1
10								1				
16	53							2		2		
SX01								1				
計	53	2	35	3	2	2	2	5	1	6	1	2

98次

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	陶器	磁器	燻瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	木製品	種子・昆虫	その他
1					1			9	6	1				2			
1b								2	1								
2			1					8	6								
3						1											
21																	球果・葉・枝
22																	球果・葉・枝
SD01														1			
SD02														1			
計			1		1	1		19	13	1				4			

99次Ⅰ区

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	瓦質土器	陶器	磁器	燻瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	木製品	種子	その他
1							1	3								
2								1								
6			10													
7		1	6													
8		1	4（非ロクロ）													
10a		1												杭1		
11		6	1（混入？）				1（混入）				1					
12		85														
13		9									1					
14		26									6					
16		1														
SD2		6														
34																針葉樹林
35																針葉樹林
36																針葉樹林
側溝			4													
壁切							1	3								
カクラン							1	3								
計		136	20				3	10			8			1		

99次II区

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	瓦質土器	その他の土器	陶器	磁器	燻瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	木製品	種子	その他
10a												1					
13												1					
14		1										1					
側溝									1								
カクラン						1	1	10(中世2)	3	2				2	4		
計		1				1	1	10	4	2		3		2	4		

99次III区

遺構・層位	縄文土器	弥生土器	土師器	赤焼土器	須恵器	土師質土器	瓦質土器	陶器	磁器	燻瓦	土製品	石器	石製品	金属製品	木製品	種子	その他
1			5	1		3	1	51(中世1)	32(中世2)	3	1(人形)		2(砥石)	2	2		
3			1	1	1												
4			5														
6		1	5														
7			4														
14																1	
31	1											3					
34																	針葉樹葉
35												1					
36																	
37																	針葉樹葉
38																3	
側溝										1	1						
カクラン						1		10	21					1			
計	1	1	20	2	1	4	1	10	53	4	2	4	2	3	2	4	

引用・参考文献

相原淳一　1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心として」『考古学雑誌』76－1　PP 1～65　日本考古学会

五十嵐康洋　1992「第2章第1節　富沢遺跡第70次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（4）』仙台市文化財報告書第163集

太田昭夫他　1991『富沢遺跡－第30次調査報告書第I分冊　縄文～近世編』仙台市文化財報告書第149集

工藤哲司　1984『富沢水田遺跡　第1冊－病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書』仙台市文化財報告書第67集

佐藤　淳　1991「第2章第8節　富沢遺跡第64次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財報告書第152集

佐藤甲二　1989「第2章第6節富沢遺跡第41次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財報告書第128集

佐藤甲二　1990a「第2章第6節富沢遺跡第55次調査」『富沢・泉崎崎・山口遺跡（2）』仙台市文化財報告書第135集

佐藤甲二　1990b「富沢遺跡第49次」『富沢遺跡第49次・東幸寺遺跡第3次・青葉山A遺跡』仙台市文化財報告書第142集

佐藤甲二　1991「第4章　富沢地区基本層序案・層位対応関係案」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財報告書第152集

佐藤甲二　1993『下ノ内浦遺跡－第4次調査報告書』仙台市文化財報告書第119集

篠原信彦・吉岡恭兵　1989『富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書I－』仙台市文化財報告書第126集

主浜光朗　1988『泉崎浦遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財報告書第119集

田中則和他　1984『山口遺跡II』仙台市文化財報告書第61集

中富　洋　1989「第2章第4節　富沢遺跡第39次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡』仙台市文化財報告書第128集

平間亮輔　1991『富沢遺跡－第35次調査報告書』仙台市文化財報告書第150集

渡邊　誠　1986「富沢水田遺跡　泉崎浦地区」『年報7』仙台市文化財報告書第94集

須藤　隆　1990「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論功』PP243～322 伊東信雄先生追悼論文集刊行会

佐藤甲二　1997『富沢・泉崎浦・山口遺跡（10）－富沢遺跡第86次調査報告書－』仙台市文化財報告書第220集

東北特殊鋼株式会社　1957『東北特殊鋼二十年史』

庄子貞夫・山田一郎　1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰似ついて」『多賀城－昭和54年度発掘調査報告書概報－』宮城県多賀城跡調査研究所

町田他　1981「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51

町田他　1996「湖底堆積物から見た10世紀白頭山大噴火の発生時代」『日本第4紀学会講演要旨集』日本第4紀学会

調査参加者

相沢あい子、相沢かほる、青木　吉次、赤川　千広、阿部あき子、阿部みのる、阿部美代寿、壱岐　豊子、板橋　　実、伊藤　清子、入間川きみ、岩井レイ子、遠藤いな子、大泉テイ子、大沼みさほ、小野つや子、小畑　和子、加崎みえ子、加藤けい子、金沢沙知子、熊沢　とも、小林　斎美、斎藤由美子、佐々木瑞枝、佐々木洋介、佐藤　幸司、佐藤　静子、佐藤とき子、佐藤よしゑ、佐野たみえ、島津レチ子、庄子かつえ、庄子　弘子、菅井　清子、菅井　民子、菅田みき子、菅田わくり、菅谷　裕子、菅原　　弘、鈴木　いし、鈴木　峰子、鈴木　由美、鈴木善しゑ、高橋たづよ、千田タイ子、千葉　恭子、對馬　悦子、富田　　是、冨田美輪子、畠中真知子、早坂みつえ、本郷　　正、三浦たか子、三浦つよの、三浦　陽子、宮崎　　都、森　ミヨノ、鑓水　芳子、横尾由記子、吉田　公治、米倉　節子、渡辺イチ子、渡辺　節子、渡辺　洋子

報告書抄録

ふりがな	とみざわ　いずみさきうら　やまぐちいせき
書名	富沢・泉崎浦・山口遺跡
副書名	富沢遺跡第95次～99次・101次調査
巻次	11
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第221集
編著者名	五十嵐康洋・吉岡恭平・佐藤洋・我妻仁・伊藤孝行
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-91　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７－１　TEL022-214-8893～4
発行年月日	1997年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
富沢遺跡 第95次調査	宮城県仙台市太白区 泉崎一丁目21-8	041009	01369	38°13′04″	140°52′22″	1996.04.10 ～1996.06.14	252	共同住宅建設に伴う事前調査
富沢遺跡 第96次調査	宮城県仙台市太白区 長町南三丁目15-3・4・5・6	041009	01369	38°13′08″	140°52′53″	1996.06.26 ～1996.08.07	133	共同住宅建設に伴う事前調査
富沢遺跡 第97次調査	宮城県仙台市太白区 泉崎一丁目20-2	041009	01369	38°13′02″	140°52′28″	1996.09.05 ～1996.11.26	240	共同住宅建設に伴う事前調査
富沢遺跡 第98次調査	宮城県仙台市太白区 長町七丁目211	041009	01369	38°13′17″	140°52′38″	1996.06.19 ～1996.07.24	102	ビル建設に伴う事前調査
富沢遺跡 第99次調査	宮城県仙台市太白区 長町七丁目401	041009	01369	38°13′18″	140°52′43″	1996.08.19 ～1996.12.18	1,026	道路建設に伴う事前調査
富沢遺跡 第101次調査	宮城県仙台市太白区 長町五丁目10-46	041009	01369	38°13′23″	140°53′08″	1996.08.01 ～1996.08.02	125	共同住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富沢遺跡 第95次調査	水田跡	現代～縄文	畠跡(中世・平安)、溝跡(弥生) 掘立柱建物跡（近世以降）	陶器・磁器・土師器 弥生土器・縄文土器・石器	
富沢遺跡 第96次調査	水田跡	現代～弥生	水田跡（現在～弥生）	陶器・磁器・古銭	
富沢遺跡 第97次調査	水田跡 散布地	現代～弥生・縄文	水田跡（現在～弥生）	陶器・磁器・木製品・石器 石製品・礫石器・弥生土器・縄文土器	
富沢遺跡 第98次調査	水田跡	現代～弥生	水田跡（現在～弥生）	陶器・磁器・金層製品	
富沢遺跡 第99次調査	水田跡	現代～後期旧石器	水田跡（現在～弥生）	陶器・磁器・土師器・弥生土器・縄文土器 石器・礫石器・木製品・金層製品	
富沢遺跡 第101次調査	水田跡	現代～弥生	水田土壌（現在～弥生） 溝跡（近世以降）		

仙台市文化財調査報告書第221集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(11)

――富沢遺跡第95～99・101発掘調査報告書――

平成10年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24－24